岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第137集

馬場遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

馬場遺跡発掘調査報告書

国道４号金田ーバイパス関連遺跡発掘調査

序

広大な面積を有する本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えてゆくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備事業は産業経済開発の動脈として、多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和ある施策も今日的課題であり、岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の二戸市馬場遺跡は、国道4号金田一バイパス建設に関連して、昭和62・63年度の発掘調査によって縄文時代の狩場跡や奈良・平安時代、そして中世の集落跡であることが明らかになりました。

この報告書が、研究者のみならず一般に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸です。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、二戸市教育委員をはじめとする関係各位に感謝申し上げます。

平成元年9月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　中　村　　直

例　言

1．本報告は、岩手県二戸市金田一字馬場50-1ほかに所在する馬場遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、国道４号金田一バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。発掘調査は、建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会へとの協議を経て記録保存を目的として財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．岩手県教育委員会事務局遺跡台帳の登載番号はＩＦ80－0086、調査における略号はＢＢ－8788である。

4．発掘調査は、昭和62年度と昭和63年度の２年度にわたって実施した。各々の調査期間、調査面積および調査担当者は、次のとおりである。

昭和62年度　６月１日～９月19日　調査担当者：工藤利幸　光井文行　調査面積：6,000㎡

昭和63年度　４月11日～５月７日　調査担当者：工藤利幸　佐藤　隆　調査面積：2,000㎡

5．２年度にわたる調査で確認された遺跡の種類、数は次のとおりである。

縄文時代の土坑５基、古代の竪穴住居址14棟中世の竪穴住居址１棟時代不明の土坑６基

6．本報告書の作成は工藤利幸が担当した。

7．本報告書に掲載した実測図の凡例については、Ⅱ、調査経過および調査方法等を参照のとおりである。写真図版の縮尺率は不同である。

8．鑑定、分析は、次の方々に依頼した。（敬称略）

・岩質同定　佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）

・炭化材等の樹種同定　早坂松次郎（社団法人岩手県木炭協会）

・炭化種子の同定　パリノ・サーブェイ株式会社

9．調査に際して次の機関・諸氏から御指導、御協力をいただいている。（敬称略）

二戸市教育委員会、建設省岩手工事事務所、関　豊（二戸市教育委員会）、桐生正一・高橋亜貴子（滝沢村教育委員会）、工藤竹久（八戸市教育委員会）、三宅徹也（青森県立埋蔵文化財調査センター）、船木義勝・柴田陽一郎（秋田県立埋蔵文化財センター）、大沼忠春・長沼孝（北海道埋蔵文化財センター）、畑　宏明（北海道教育庁文化課）

10．調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

序
例　言

〈本　文　目　次〉

Ⅰ．調査に至る経過 ---------- 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 ---------- 2
　1．遺跡の位置 ---------- 2
　2．地勢・地質の概略 ---------- 2
　3．遺跡および周辺の地形 ---------- 8
　4．調査区域の現況等 ---------- 8
　5．土層について ---------- 9
Ⅲ．調査経過および調査方法等 ----------16
　1．調査経過 ----------16
　2．調査方法について ----------16
　9．実測図版の表現について ----------17
Ⅳ．遺構と遺物について ----------22
　1．竪穴住居址 ----------22
　2．陥し穴状遺構と土坑 ---------- 113
　3．遺構外等の遺物 ---------- 129
　4．掲載石器一覧 ----------133
Ⅴ．鑑定・分析について ---------- 136

Ⅵ．ま　と　め ---------- 138
　参考・引用文献

〈実測図版目次〉

図版１：岩手県北部の河川系略図---------- 3
図版２：遺跡の位置---------- 4
図版３：遺跡の位置と周辺地形---------5～ 6
図版４：基本土層実測図(1)----------11
図版５：基本土層実測図(2)----------12
図版６：基本土層実測図(3)と遺構配置図---13
図版７：基本土層図および遺構実測図凡例18
図版８：礫石器実測図凡例----------20
図版９：土師器実測図凡例----------21
図版10：ＢⅠ－01住居址(1)----------26
図版11：ＢⅠ－01住居址(2)----------27
図版12：ＢⅠ－01住居址(3)----------28
図版13：ＢⅠ－01住居址出土遺物(1)---------29
図版14：ＢⅠ－01住居址出土遺物(2)---------30
図版15：ＢⅠ－01住居址出土遺物(3)---------31
図版16：ＢⅠ－01住居址出土遺物(4)他------32
図版17：ＢⅠ－01住居址出土遺物(5)---------33
図版18：ＣⅠ－01住居址と出土遺物---35～36
図版19：ＣⅠ－02住居址(1)----------41
図版20：ＣⅠ－02住居址(2)----------42
図版21：ＣⅠ－02住居址出土遺物(1)---------43
図版22：ＣⅠ－02住居址出土遺物(2)---------44
図版23：ＣⅠ－02住居址出土遺物(3)---------45
図版24：ＣⅠ－02住居址出土遺物(4)---------46
図版25：ＣⅠ－03住居址(1)----------50
図版26：ＣⅠ－03住居址(2)と出土遺物(1)---51
図版27：ＣⅠ－03住居址出土遺物(2)---------52
図版28：ＣⅠ－03住居址出土遺物(3)---------53
図版29：ＣⅡ－01住居址(1)----------57
図版30：ＣⅡ－01住居址(2)----------58
図版31ＣⅡ－01住居址出土遺物(1)----------59
図版32：ＣⅡ－01住居址出土遺物(2)---------60
図版33：ＤⅠ－01住居址----------62
図版34：ＤⅠ－02住居址(1)----------65
図版35：ＤⅠ－02住居址(2)----------66
図版36：ＤⅠ－02住居址出土遺物(1)---------68
図版37：ＤⅠ－02住居址出土遺物(2)---------69
図版38：ＤⅡ－01住居址(1)----------72
図版39：ＤⅡ－01住居址(2)----------73
図版40：ＤⅡ－01住居址出土遺物(1)---------75
図版29：ＤⅡ－01住居址出土遺物(2)---------76
図版42：ＤⅡ－02住居址(1)----------79
図版43：ＤⅡ－02住居址(2)----------81
図版44：ＤⅡ－02住居址出土遺物----------82
図版45：ＤⅡ－03住居址と出土遺物---------84
図版46：ＥⅡ－01住居址(1)----------87
図版47：ＥⅡ－01住居址(2)----------88
図版48：ＥⅡ－01住居址出土遺物(1)---------90
図版49：ＥⅡ－01住居址出土遺物(2)---------91
図版50：ＥⅡ－01住居址出土遺物(3)---------92
図版51：ＥⅡ－02住居址(1)----------96
図版52：ＥⅡ－02住居址(2)と出土遺物------97
図版53：ＥⅡ－03住居址(1)---------- 100
図版54：ＥⅡ－03住居址(2)---------- 101
図版55：ＥⅡ－03住居址出土遺物(1)------ 104
図版56：ＥⅡ－03住居址出土遺物(2)------ 105
図版57：ＥⅡ－03住居址出土遺物(3)------ 106
図版58：ＦⅡ－01住居址---------- 108
図版59：ＧⅠ－01住居址と出土遺物------ 111
図版60：ＤⅡ－001 陥し穴状遺構--------- 113

図版61：ＤⅡ－004 陥し穴状遺構…… 114
図版62：ＤⅠ－001 陥し穴状遺構と出土遺物
…… 115
図版63：ＢⅡ－001 土坑…… 116
図版64：ＤⅡ－003 土坑と出土遺物…… 117
図版65：ＢⅠ－001 土坑と出土遺物…… 118
図版66：ＢⅠ－002 土坑と出土遺物…… 120
図版67：ＢⅠ－004 土坑…… 121
図版68：ＢⅠ－005 土坑…… 121
図版69：ＢⅠ－006 土坑 …… 122
図版70：ＢⅠ－007 土坑…… 123
図版71：ＢⅡ－003 土坑…… 124
図版72：ＣⅡ－001 土坑と出土遺物……125
図版73：ＥⅠ－001 土址…… 126
図版74：ＣⅡ－002 土坑…… 127
図版75：ＤⅡ－002 土坑…… 127
図版76：ＮⅠ－001 土坑…… 128
図版77：遺構外等の遺物(1)…… 131
図版78：遺構外等の遺物(2)…… 132

〈写真図版目次〉

写真図版１：遺跡の位置と周辺地形(1)… 141
写真図版２：遺跡の位置と周辺地形(2)… 142
写真図版３：調査開始時の状態…… 143
写真図版４：土層堆積の状態(1)…… 144
写真図版５：土層堆積の状態(2)…… 145
写真図版６土層堆積の状態(3)…… 146
写真図版７：遺構確認作業…… 147
写真図版８遺構分布状態と調査区域全景 148
写真図版９：ＢⅠ－01住居址…… 149
写真図版10：ＢⅠ－01住居址出土遺物(1) 150
写真図版11：ＢⅠ－01住居址出土遺物(2) 151
写真図版12：ＢⅠ－01住居址出土遺物(3)と
ＣⅠ－01住居址出土遺物… 152
写真図版13：ＣⅠ－01住居址…… 153
写真図版14：ＣⅠ－02住居址…… 154
写真図版15：ＣⅠ－02住居址出土遺物(1) 155
写真図版16：ＣⅠ－02住居址出土遺物(2) 156
写真図版17：ＣⅠ－02住居址出土遺物(3) 157
写真図版18：ＣⅠ住居址(1)…… 158
写真図版19：ＣⅠ－03住居址(2)…… 159
写真図版20：ＣⅠ03住居址出土遺物(1)… 160
写真図版21：ＣⅠ－03住居址出土遺物(2) 161
写真図版22：ＣⅡ－01住居址…… 162
写真図版23：ＣⅡ－01住居址出土遺物… 163
写真図版24：ＤⅠ－01住居址…… 164
写真図版25：ＤⅠ－02住居址(1)…… 165
写真図版26：ＤⅠ－02住居址(2)…… 166
写真図版27：ＤⅠ－02住居址出土遺物… 167
写真図版28：ＤⅡ－01住居址(1)…… 168
写真図版29：ＤⅡ－01住居址(2)…… 169
写真図版30：ＤⅡ－01住居址出土遺物… 170
写真図版31：ＤⅡ－02住居址(1)…… 171
写真図版32：ＤⅡ－02住居址(2)…… 172
写真図版33：ＤⅡ－03住居址と
ＢⅠ－002 土坑 …… 173
写真図版34：ＤⅡ－02、ＤⅡ－03住居址出土
遺物…… 174
写真図版35：ＢⅡ－01住居址(1)…… 175

写真図版36：ＢⅡ－01住居址(2)と
遺物出土状態---------- 176
写真図版37：ＥⅡ－01住居址出土遺物(1)--177
写真図版38：ＥⅡ－01住居址出土遺物(2) 178
写真図版39：ＥⅡ－02住居址---------- 179
写真図版40：ＥⅡ－02住居址出土遺物---- 180
写真図版41：ＥⅡ－03住居址(1)---------- 181
写真図版42：ＥⅡ－03住居址(2)---------- 182
写真図版43：ＥⅡ－03住居址出土遺物(1) 183
写真図版44：ＥⅡ－03住居址出土遺物(2) 184
写真図版45：ＥⅡ－03住居址出土遺物(3)
とＧⅠ－03住居址出土遺物 185
写真図版46：ＦⅡ－01住居址---------- 186
写真図版47：ＧⅠ－01住居址---------- 187
写真図版48：土坑写真(1)---------- 188
写真図版49：土坑写真(2)---------- 189
写真図版50：土坑写真(3)---------- 190
写真図版51：土坑写真(4)---------- 191
写真図版52：土坑写真(5)---------- 192
写真図版53：土坑出土遺物---------- 193
写真図版54：土製品・石製品---------- 194
写真図版55：遺構外等の遺物---------- 196
写真図版56：種実拡大写真---------- 197

Ⅰ．調査に至る経過

二戸市金田一字上田面から同市金田一字段ノ越に至る総延長3,200m の一般国道4号金田一バイパスの建設は、昭和50年に計画着手され、平成５年に完了の予定である。

この間に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、昭和53年から建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との事前協議が行われた。岩手県教育委員会は建設予定地内の遺跡分布調査を実施し、上田面Ⅲ、上田面Ⅱ、荒田Ⅲ、荒田Ⅳ、八ツ長Ⅱ、沖Ⅰ、馬場Ⅱ、馬場、駒焼場、府金橋の10遺跡を確認し、工事計画に沿って発掘調査を実施することとした。すでに府金橋遺跡については昭和56・57年に、駒焼場遺跡については昭和61・62年に発掘調査を実施し、それぞれ発掘調査報告書を刊行している。

馬場遺跡については、昭和57年から岩手工事事務所と岩手県教育委員会の間で現地調査を含む協議が行われた。その間の経過は、以下のとおりである。

昭和57年10月25日付け　建東岩二工第126号　岩手工事事務所長から岩手県教育長あて
埋蔵文化財包蔵地の分布調査について依頼

昭和58年10月19～21日　岩手県教育委員会による現地調査の実施

昭和58年10月23日付け　教文第262号　岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
国道４号金田一バイパス建設に係る遺跡分布調査の結果について回答

昭和61年12月３日　岩手工事事務所、岩手県教育委員会文化課、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協議

これにより、岩手県教育委員会は馬場遺跡の調査を岩手県文化振興事業団の昭和62年度発掘調査事業に編入し、調査対象面積 8,000㎡のうち 6,000㎡について、当埋蔵文化センターが昭和62年６月１日付け委託契約により調査を実施することとなった。さらに 2,000㎡については

昭和62年８月24日付け　教文第289号　岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
昭和63年度における埋蔵文化財関連土木工事等の調査について照会

昭和62年９月10日付け　建東岩二工第78号　岩手工事事務所長から岩手県教育長あて同回答

昭和62年12月９日　岩手工事事務所、岩手県教育委員会文化課、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協議

昭和63年２月25日付け　建東岩二工第21号　岩手工事事務所長から岩手県教育長あて
昭和63年度直轄道路事業等の施行に係る埋蔵文化財の調査について依頼

の経過を経て、昭和63年４月１日付け契約により調査に着手することとなったものである。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

馬場遺跡は、岩手県二戸市金田一字馬場50―１ほか地内で、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南東600～900m 付近に所在する。地形図上では、国土地理院発行の地形図１：25,000「陸奥福岡」ＮＫ―54―18―11―３（八戸11―３），および１：50,000「一戸」ＮＫ―54―18―11（八戸11号）図幅中の北緯40度18分57秒、東径141度18分43秒付近に位置している。

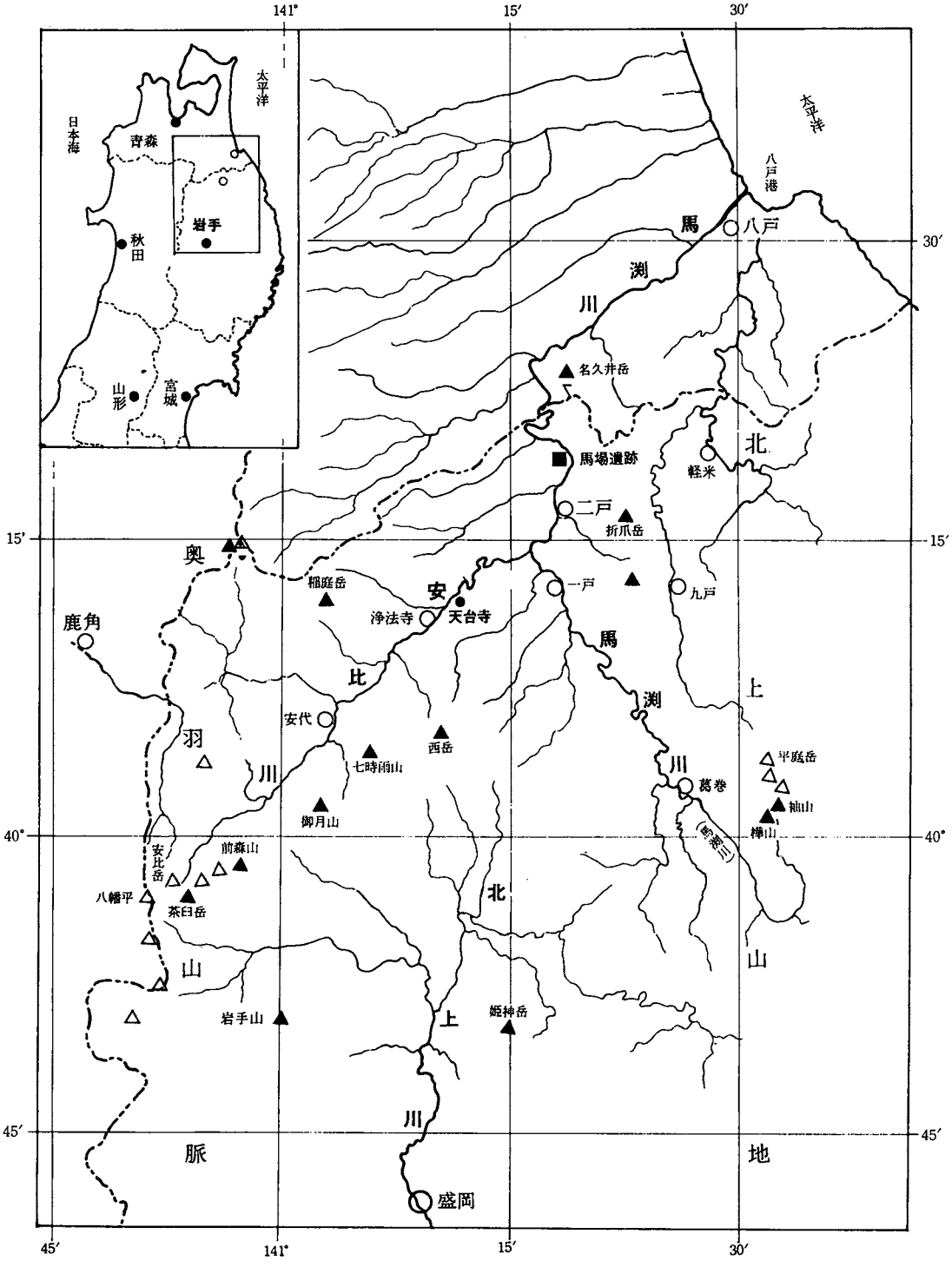
遺跡は、二戸市内を北流する馬渕川によってその左岸に形成された完新世段丘の段丘縁に沿って広がっており、調査対象区域はこの段丘の北々西縁から南々東の段丘内部約 300m までの範囲にあり、段丘縁周辺を除けばほぼ平坦である。その調査対象区域の標高は82～85m 、馬渕川との比高は12～15m である。調査対象区域の地目現況は、畑地および水田である。

本遺跡が所在する二戸市は、岩手県の北端部に位置し、青森県に接するとともに北上山地、および奥羽山脈に挟まれた馬渕川水系中流域に形成された岩手県で最も新しい市政都市である（1972年市政施行）。市境の北縁から西縁は、青森県三戸郡名川町・三戸町・田子町、そして岩手県浄法寺町に接し、東縁から南縁は岩手県軽米町・九戸村・一戸町に接している。その市域は、馬渕川とその支流である安比川・白鳥川・十文字川・長川・海上川流域にあたる238㎢余で、岩手郡葛巻町の袖山に源を発し八戸湾に注ぐ馬渕川が市の中心部を北流している。

２．地勢・地質の概略

岩手県の地勢は、岩手県北部の安代町と西根町との境に位置する七時雨山山麓に源を発し、県中央部を南流して宮城県に達する北上川水系、および葛巻町袖山に源を発し、葛巻町・一戸町･二戸市､そして青森県三戸町などを経て八戸市で太平洋にそそぐ馬渕川水系の河谷低地帯をはさみ、西に奥羽山脈、東に北上山地が各々南北に伸びている。北上山地の東縁は太平洋に面する陸中海岸地帯となっている。このような大勢の中で、二戸市の地形は馬渕川以東の非火山性山地、馬渕川流域、そして馬渕川以西の火山性丘陵地の３つの区域に大別される。

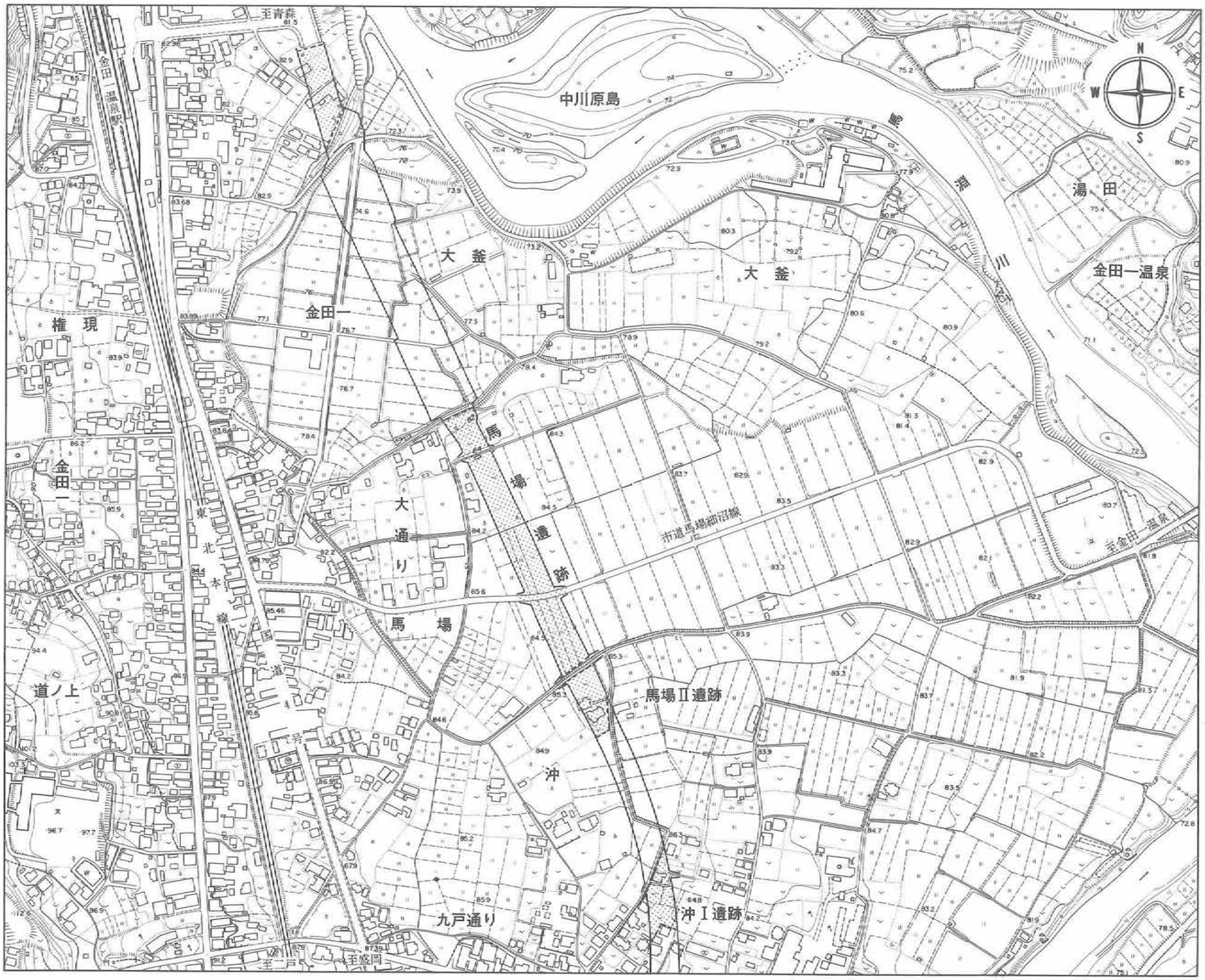
北上山地は、南は宮城県牡鹿半島から北は青森県八戸市に至る南北250km､東西最大幅80km弱の紡錘状平面形に発達した非火山性山地であり、内陸部と沿岸部（三陸海岸地帯）との気象境界としての位置を占めている。山地全体は谷密度が高く、高度は定高性のある尾根、隆起準平源によって1,200～1,000m 、900～800m 、600～500m の３面群に大別され、その標高は早地峰



図版１：岩手県北部の河川系と遺跡の位置略図

1：25,000 地形図むつふくおか NK-54-18-11-3 国土地理院

図版２：馬場遺跡位置図



※本地形図は、岩手県二戸市都市計画図（14～3・14～4　二、五〇〇分の一）の一部分を複製・縮小したものである。

図版3：遺跡の位置と周辺地形（S＝1：5,000）

山（1,941m）を最高峰とする山地中央付近が高く、南および北に行くに従って次第に低くなっている。馬渕川以東の二戸市域と軽米町・九戸村との境界は、折瓜岳（852.2m）、小倉岳（652.3 m）などの山群に限られている。また、山群の西側斜面には多数の沢や谷が開析されており、それらから発達した小河川は北流する馬渕川に合流している。

北上山地の基盤岩類は、古生界・中生界・新生界の生成年代の幅が広く、山地の北端から西縁には新生界第三系・第四系のものが多く見られる。北上山地の北部西縁に所在する一戸町・二戸市などの馬渕川中流域では新生界第三系・第四系の地層が広がっており、山地緩斜面や丘陵平坦面、および段丘群の表層には第四紀火山噴出物が広くかつ厚く堆積している。

奥羽山脈は、本県の西部では秋田県境を南北に走る山脈であり、北は青森県夏泊半島から、南は東北地方を縦断して福島・栃木県境で帝釈山脈に合する南北約 500kmの火山性山脈である。このように奥羽山脈は、東北地方を東西に２分する形で列島を縦断していることから「奥羽脊梁山脈」とか「奥羽分水嶺山脈」とも呼ばれ、太平洋型気候と日本海型気候との境界山脈である。山脈の形成は、新第三系以降の活発な火山活動（グリーンタフ造山運動）によって原形が形づくられており、同時に那須火山帯と重なっていることなどから今日に至るまで活発な火山活動が継続し、第三紀層のしゅう曲・隆紀帯の上に新期の火山噴出物が堆積している。馬渕川流域以西の地域は、奥羽山脈北部の東側に広がる火山性丘陵地帯であり、この火山性丘陵地帯は八幡平の東側に位置する安比岳南麓付近を源とし、馬渕川最大の支流である安比川によって南北に２分されている。安比川の北側は、稲庭岳（1,078m）を中心とした火山性の山麓丘陵（稲庭岳山麓丘陵）で東に向かって次第に高度を下げ、その東端縁は馬渕川西岸に達している。また南側は、八幡平から東～北東に茶臼岳・大黒森山・前森山・七時雨山・西岳などの火山地が並び、北側と同様に火山性丘陵が広がっており、七時雨山(1,060m)を代表とするところから「七時雨山山麓丘陵」と呼ばれている。七時雨山山麓丘陵もまた北側と同様にその東～北東端が馬渕川西岸に達している。

以上の火山性丘陵は、安山岩質岩類を主な基盤岩としているが、丘陵の北東縁の馬渕川西岸付近には新第三紀の末ノ松山層や門ノ沢層と呼ばれる凝灰岩質角礫岩や砂岩などが分布し、その上を第四紀の火山噴出物などが覆っている。

一方、前述の奥羽山脈北部を北上山地北部との間を北流すると共に、二戸市中心部を北流する馬渕川には、二戸市内で安比川・白鳥川・沢内川・十文字川・長川・海上川などの小河川が合流しており、これらの流域には数段の更新世・完新世の段丘が形成されている。

3．遺跡、および周辺の地形

二戸市域の段丘地形の区分は、大池、中川他による馬渕川流域研究の業績が大であり、かつ基本となっている（大池、中川他 1966）。それによれば、低位から高位へ、堀野段丘・米沢段丘・福岡段丘・仁左平段丘に区分されている。しかし、その後の遺跡調査などから一部地域について疑問がもたれていたが（関　豊　1978）、松山力により大池・中川他の米沢段丘は高位と低位とに二分され、前者は中町段丘と命名、後者は大池・中川他の堀野段丘に包括されるものとして報告している（松山　1981）。また、同報告の中では、米沢段丘と福岡段丘の間に長嶺段丘が存在すること、更に堀野段丘の下位に中層根段丘の存在を報告している。

馬場遺跡をのせる段丘は、馬渕川左岸に形成された完新世段丘の一つであり、大池・中川他（1966）の米沢段丘低位部に、そして松山（1981）の堀野段丘に相当する地形面である。調査区域の標高は82～85m にあり、馬渕川との比高は12～15m である。なお、調査区域は段丘縁辺から段丘内へ約 300m までの範囲である。段丘面傾斜はゆるやかでその前面崖は急傾斜で直に近い区域も見られる。

段丘の基盤岩は凝灰岩質角礫や凝灰岩質砂岩などで構成される門の沢層と呼ばれる地層で、その上位には３～５ｍの段丘構成層（礫層および砂層）が堆積している。

4．調査区域の現況等

遺跡の現況は、畑地・水田・果樹園、あるいは宅地として利用されているが調査対象区域は畑地・水田・果樹園として利用されていた。遺跡および周辺区域は、昭和40年代前半に構造改善事業および区画整理事業等が行われており、一部の地形が変化している。

調査対象区域では、Ａ～Ｆ区域までは大きな変化が見られないが、Ｇ～Ｐ区域までは地形面の起伏を改善するため削平、埋め立てが行われて水田造成がなされている。このためＧ～Ｐ区域の大部分は中掘浮石層（Ⅳｕ層）までが削平された後、改めて耕作土層が盛土されているが、Ｋ区域の一部からＮ区域の一部までは埋め立てによる水田造成が行われている。この埋め立てされた区域は、段丘形成の前後に浸蝕形成されたと考えられる浸蝕溝が確認された区域である（土層断面図６参照）。

Ａ区域からＢ区域の一部にかけては、桜桃・桃・梅の果樹園として利用され、地籍界にはブドウ・アスパラガスなどが栽培されている。桜桃・梅・ブドウ・アスパラガスは、Ａ～Ｂ区に限らずその他の区域でも地籍界に栽培されており、それらの根や耕作痕は遺構の確認面に大きな影響を与えている。

Ｂ～Ｃ区域は、一部でアスパラガスの栽培が行われているが、大部分は水稲や果菜類の販売用苗作りが長年にわたって行われていることから耕作土の減少をきたし、遺構確認面であるⅢℓ～Ⅳｕ層までの深さが25～30cmと浅くなっている。

Ｄ～Ｆ区域は、古くには長薯・牛蒡などの根菜類が栽培されていたが、昭和40年代後半からバイパス用地買収時まではビニールハウスによる果菜類の促成栽培が行われていた。これらの栽培により現地表面から50～60cmまでの深さが完全に攪乱され、一部では 100m の深さにまで耕作痕が観察される。

Ｇ～Ｐ区域にかけては、構造改善事業後水田となっていたが、その後の減反政策等からタバコ、豆類、あるいは野菜などの畑地へと転換された区域もある。調査直前まで水田として利用されていた区域では耕作土の下部から直下にかけて結核状、あるいは糸根状斑鉄を含む酸化鉄の集積層が観察される。

5、土層について

馬場遺跡をのせる段丘は、前述のように門ノ沢層を基盤岩とし、その上位に礫層などの段丘構成層が堆積している。更に上位には、南部浮石をはじめとする数種の火山砕屑物や腐植土質黒色土などが堆積している。

岩手県北部に分布堆積する完新世の火山砕屑物は、下位から二ノ倉火山灰、南部浮石、中掘浮石、十和田ｂ浮石、十和田ａ火山灰の５種類である。これは何れも十和田火山（カルデラ）を噴出源とするものである。その他十和田ａ火山灰の上位に堆積するものとして、朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国との国境に位置する白頭山噴出の火山灰（苫小牧火山灰）が数遺跡で確認されている。

上記の火山灰砕屑物のうち本遺跡で確認したものは、下位から南部浮石、中掘浮石、十和田ｂ浮石、十和田ａ火山灰、の４種である。平安時代の住居址で、十和田ａ火山灰の上位から苫小牧火山灰と思われるものが確認されたが、分析の結果十和田ａ火山灰であることが判明した。

以下に基本的な堆積土層の性状・特色等を説明するが、十和田ａ火山灰については耕作等との関係から自然凹地や住居址などの凹部からしか確認されていないため、一連の層記号を附与していない。なお、一連の層記号は上位から附している。

〈基本土層の記録〉

Ⅰ　層：黒色～黒褐色土(10ＹＲ2／1～2／2)を中心とするが、耕地整理、耕作物などの関係から、地点によって色調はもとより構成物・混在物の種類、状態も異なっている。また、層厚は耕作物の種類や整地との関係から20～50cm、所によっては70～100cmと幅がある。

Ⅱ　層：十和田ｂ浮石を主体とした黒色土（10ＹＲ1.7／1）で、上部ほど浮石含有率が高く、下部ほど低い。また、地点によって青灰白色～灰白色を呈する火山ガラスのブロックが散見される。粘性なく、締りは普通である。層厚は、上位の耕作土形成との関係から欠失している地点もあり、０～30cmである。

Ⅲ　層：中掫浮石を５％前後含む有機質黒色土（10ＹＲ2／1）を主体とするが、Ｂ区域やＫ～Ｎ区域の自然凹地等では10ＹＲ1.7／1～2／1を呈し、部分的には10ＹＲ1.85／1 を呈する所もある。また下部では下位のⅣ層のつきあげその他による浮石の混入率が高い。多くの地点で果樹の木根が広がっている層である。層厚は、20～70cmと地点による変化が大きい。

Ⅳ　層：本層は、上部の極暗褐色～褐色（7.5ＹＲ2／3～3／3、10ＹＲ4／4～4／6）層部（Ⅳｕ層）と、下部の黄褐色浮石（10ＹＲ7／8）層部（Ⅳ１層）とに大別される。

上部は中掫浮石の風化および土壌化層で同浮石層（Ⅳｕ層）の攪乱部とも言える。なお本層中には密に固結した火山砂レンズ状層（色調は10ＹＲ4／4）が散見される。層厚は10～20cmである。

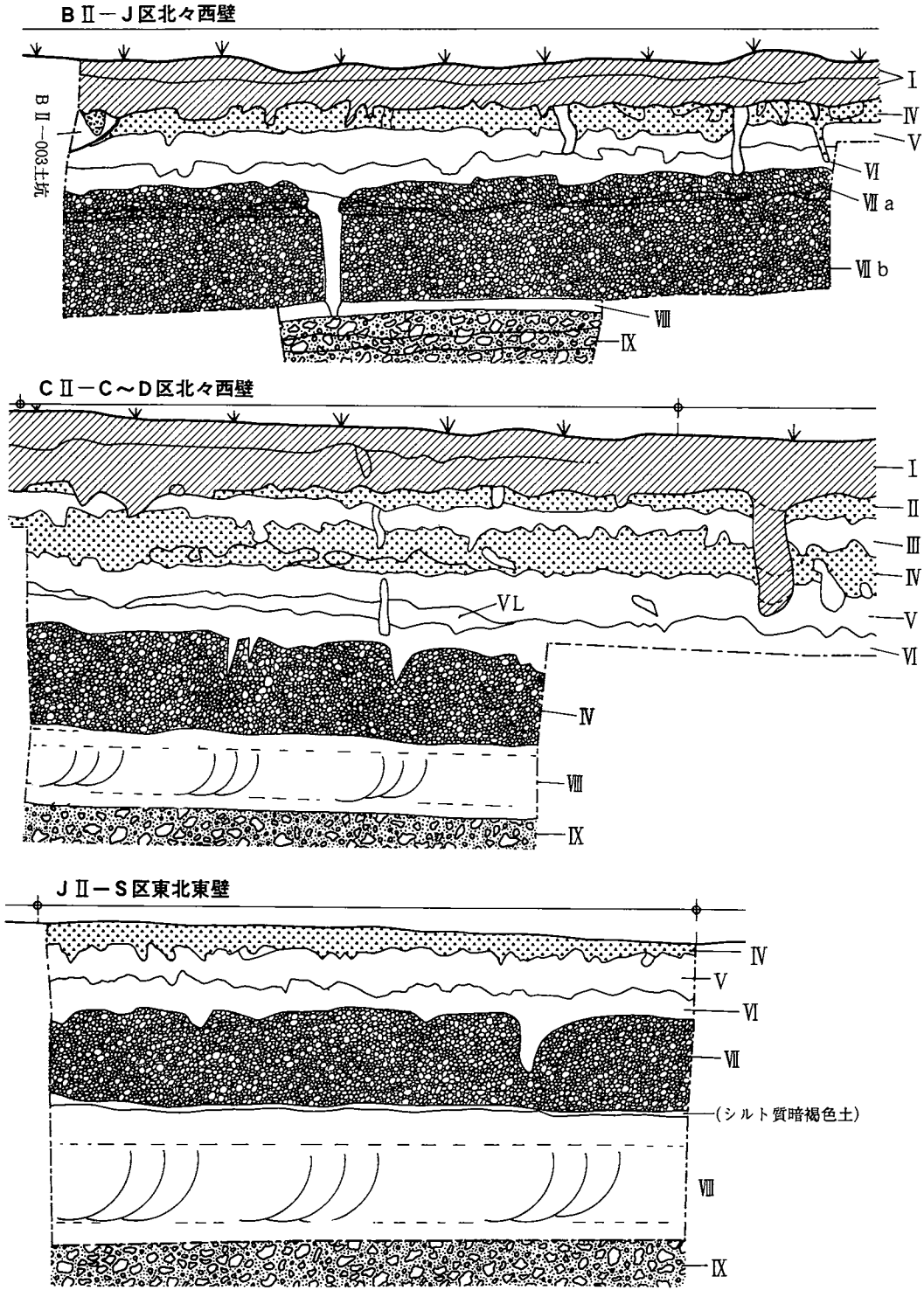
下部は中掫浮石の純粋層で、その粒径は２～５mmである。乾燥状態では浅黄橙色～黄橙色（10ＹＲ8／4～8／6）を呈し、浮石間隙を火山砂が埋めている所も見られるが、下部では下位Ｖ層の黒色土（10ＹＲ1.7／1）のつきあげも見られる。層厚は10～25cmである。

Ｖ　層：本層は色調、構成とも区域による差が大きく、特にＤ区域からＩ区域では間層が介在して分化する。しかし、段丘縁のＢ区域ではこの間層が消失する。また、Ｉ区からＮ区の自然の浸蝕溝周辺では、本層とⅥ層の区別が判然としない部分や明瞭に区別できる部分など変化が大きい。色調は地点による差が大であるが黒色（10ＹＲ 1.7／1、7.5Y.R 1.7／1）を主体とし、退色した南部浮石を含んでいる。

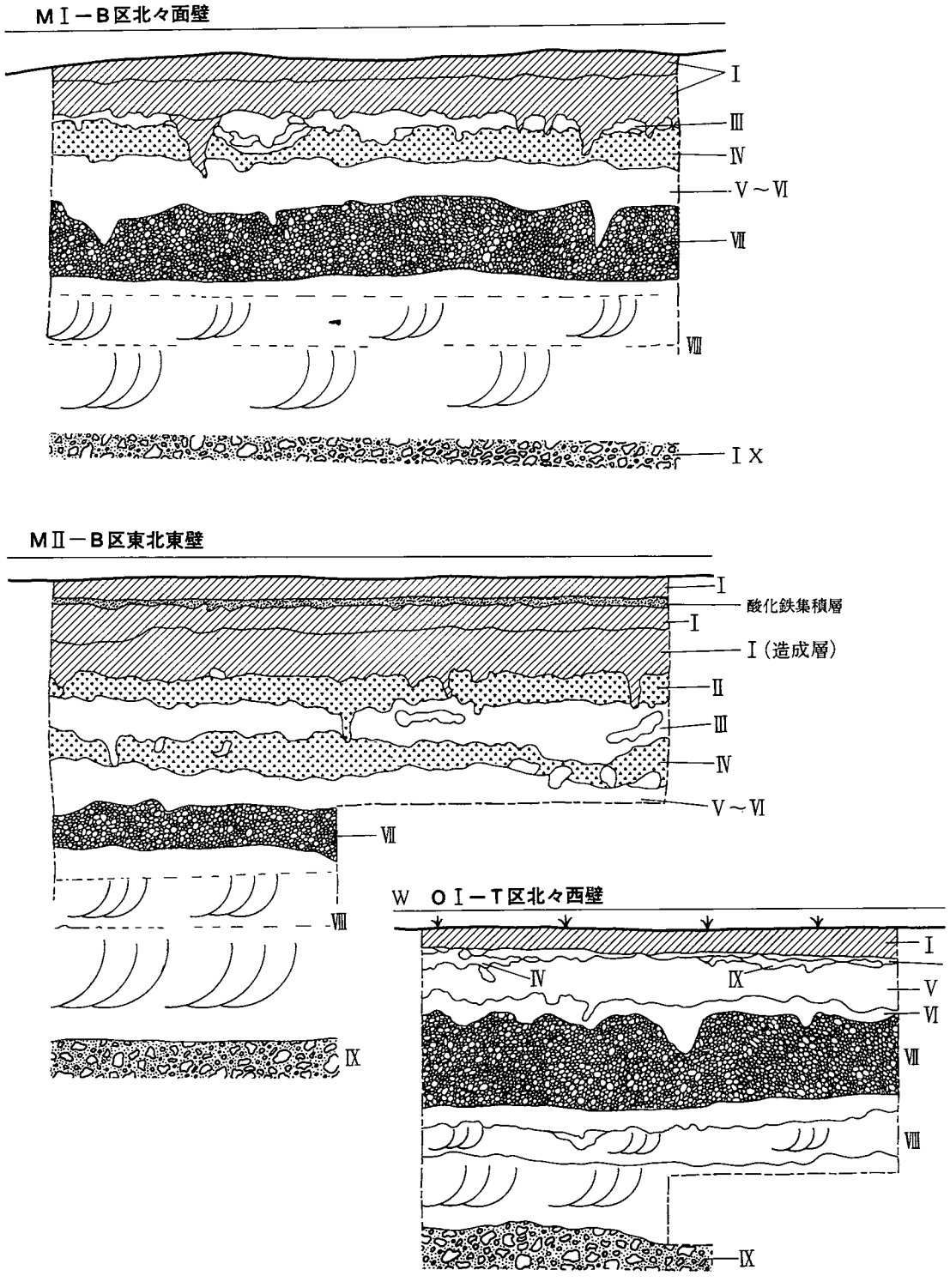
Ｖｕ：腐植土質黒色土（10ＹＲ1.7／1）で下部には退色した南部浮石を５％前後含む。地点によっては黒褐色～暗褐色を呈する。Ｌ区からＮ区にかけての区域では、Ｖｕ～Ｖ１の色調変化は漸移傾向が強い。また、Ｉ区付近からＤ区にかけては、Ｖｕ～Ｖ１の境界が波うっている。層厚は10～40cmである。

Ｖ１：Ｖ１層は、Ｌ区からＮ区にかけての区域では黒色（10ＹＲ2／1）を呈し、変色した南部浮石を10％前後含む。Ｉ区からＤ区にかけてはＶｕとの境が波うっており、一部で消失する。なお、Ｉ区～Ｄ区では色調が暗褐色（10ＹＲ3／2～3／4）から褐色（7.5ＹＲ 4／3～4／4）へと漸変し、粘性が強く南部浮石の含有率も高くなる層厚は０～25cmである。

また、Ｋ区から段丘縁方向にかけてのＶｕ・Ｖ１の層界にはシルト～細砂質の褐色土

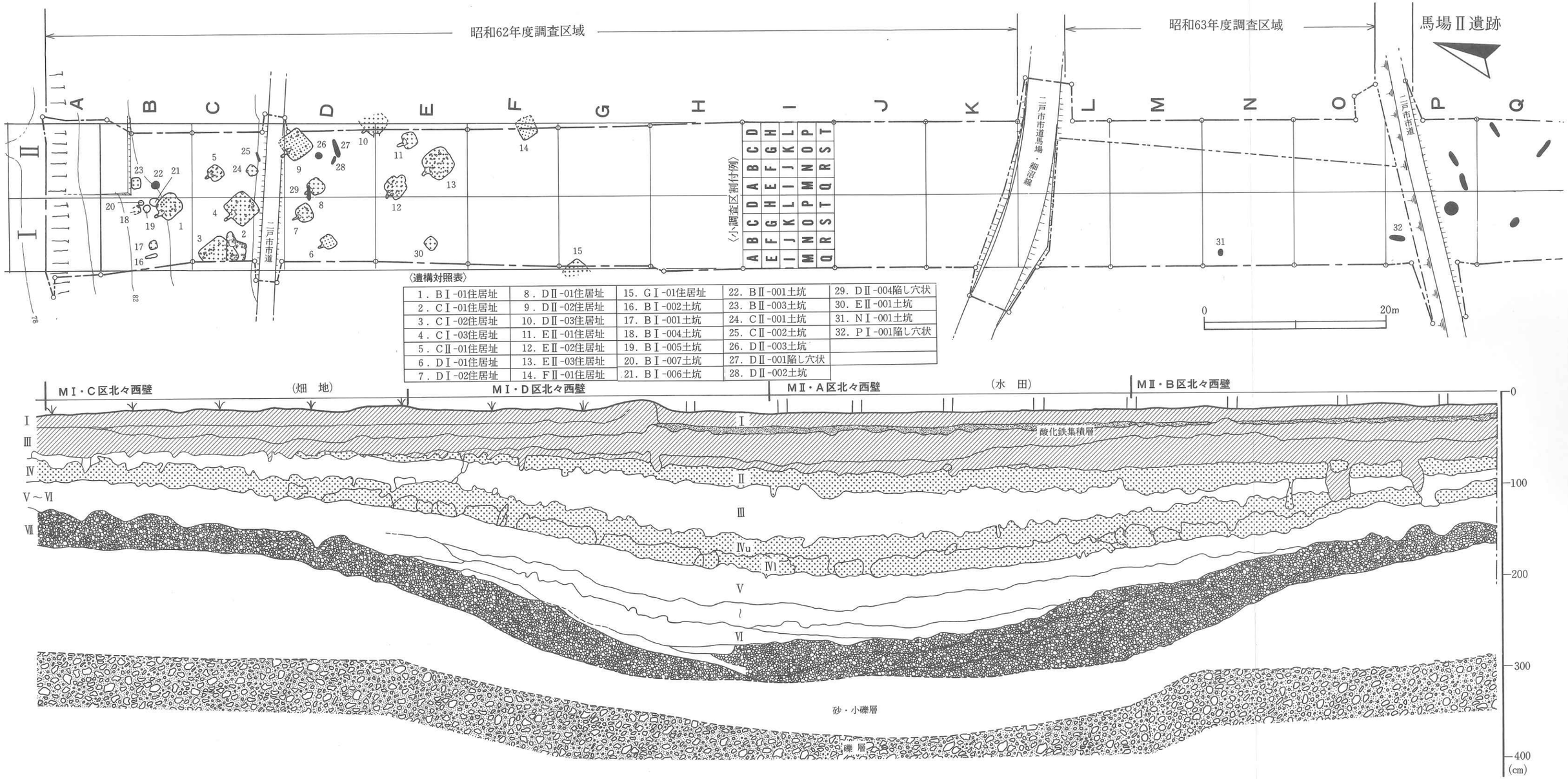


図版４：基本土層断面図 (1)



図版５：基本土層実測図　(2)

〈 馬 場 遺 跡 〉



1．BⅠ-01住居址	8．DⅡ-01住居址	15．GⅠ-01住居址	22．BⅡ-001土坑	29．DⅡ-004陥し穴状
2．CⅠ-01住居址	9．DⅡ-02住居址	16．BⅠ-002土坑	23．BⅡ-003土坑	30．EⅡ-001土坑
3．CⅠ-02住居址	10．DⅡ-03住居址	17．BⅠ-001土坑	24．CⅡ-001土坑	31．NⅠ-001土坑
4．CⅠ-03住居址	11．EⅡ-01住居址	18．BⅠ-004土坑	25．CⅡ-002土坑	32．PⅠ-001陥し穴状
5．CⅡ-01住居址	12．EⅡ-02住居址	19．BⅠ-005土坑	26．DⅡ-003土坑	
6．DⅠ-01住居址	13．EⅡ-03住居址	20．BⅠ-007土坑	27．DⅡ-001陥し穴状	
7．DⅠ-02住居址	14．FⅡ-01住居址	21．BⅠ-006土坑	28．DⅡ-002土坑	

図版6：基本土層実測図(3)と遺構配置図

の薄い層が不連続に介在する。

Ⅵ　層：本層も上部、下部に細別され、各々の色調・構成物等性状は地点によって変化が見られる。変化の傾向は、段丘内から段丘縁にかけて漸移的変化である。また、L・M・N区で確認した浸蝕溝周辺からP区にかけては本層が消失している。

Ⅵu：で腐植質の黒褐色～暗褐色（10YR3/2～3/3）でやや粘性があり、締りは普通～良好である。V層と同様に段丘縁方向に移行するに従って褐色へと変化し、上部と下部に南部浮石10～15%を含むようになる。層厚は、0～20cmである。

Ⅵl：浮石質の暗褐色土（10YR3/4）で南部浮石の風化物を主体とするが浸蝕溝周辺とO区・P区ではⅥuと同様に消失する。また、段丘縁辺方向に移行するに従って中～粗砂粒状の破砕浮石を主体とした褐色の風化層へと変化すると共に、上部には退色した浮石そのものを含む。層厚は0～20cmである。

Ⅶ　層：南部浮石層であるが、2次層が堆積する区域もあることからⅦaとⅦbに区分した。また、湛水面との関係から退色している部分もあるが、これらについては特に区分していない。

Ⅶa：本層はD区域からB区域にかけて観察され、Ⅶb層との層界部に火山砂？や同浮石の風化・破砕層（層厚3～7mm）が介在する。本層の色調は表面色調が褐色～黄褐色（10YR4/4～4/6、5/6）、内部が明黄褐色～黄橙色（10YR7/6～7/8）を呈する。層厚は10～20cmである。浮石粒径は10～25mmを主体とする。

Ⅶb：2次的な移動堆積の見られない南部浮石の純粋層であるが、湛水との関係から下部が退色している。また、浸蝕溝や退色の強い地点での最下部は風化等による灰白色～浅黄色の粘土化層（10YR8/2～8/4）が形成されている。層厚は50～70cmで、浮石粒径は10～50mmを主体とし、中下部ほど30～50mmの浮石が多く50mmをこえるものも含まれる。色調は黄橙色（10YR7/8）で、退色部は浅黄色（YR8/3～8/4）を呈する。

Ⅷ　層：クロスラミナの発達した中砂～極粗砂で、破線部や最上部に腐植土質のシルト質暗褐色土等が観察されるが特に細分はしていない。層厚等は地点による差が大きく、段丘縁は薄くなる。層厚は10～90cmである。

Ⅸ　層：段丘礫層である。全体的に50～150mmの極円礫で構成されるが、基盤岩に近いレベルでは200～300mmの偏平な円礫が多くなる。用地中心に沿った礫層面の平均傾斜は 250m で40cm下がる傾斜である。

Ⅲ．調査経過、および調査方法等

1．調査の経過

馬場遺跡に対する発掘調査は、第１次調査が昭和62年度、第２次調査が同63年度の２年度にわたって実施した。

昭和62年度は６月１日から９月21日まで行っており、その調査対象区域は北西の段丘縁から市道「馬場・細沼線」までの6,000㎡である。本調査開始前の分布調査や範囲確認調査から予想されていた遺跡の時代内容は、縄文時代、奈良時代、平安時代の集落、および関連遺構であった。結果として、縄文時代の陥し穴状遺構２基、貯蔵穴、墓坑と考えられる土坑２基。奈良、平安時代では、竪穴住居址14棟、土坑５基、中世および時代不明の竪穴住居址１棟、土坑６基を確認している。出土遺物としては、縄文時代後期、晩期の土器片・石匙・摩製石斧・奈良・平安時代の土師器・鉄製品・礫石器・石製品、中世の鉄製品・穀物等の種子である。

昭和63年度の調査は、４月11日から５月７日まで行っており、その対象区域は市道「馬場・細沼線」の南東側から馬場Ⅱ遺跡に接する区域までの2,000㎡である。調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構１基、性格不明の土坑１基を確認調査した。出土遺物としては、耕作土から土師器や縄文土器の破片数点、陥し穴状遺構から石鏃１点が出土しただけである。

2．調査方法について

(1) 調査区割付と基準点について

調査区割付の基準点および基準線は、建設省岩手工事事務所設置の道路中心杭の中から№96と№101の２点を選定し、この２点間の延長線を基準線とした。更に№96杭を基点として20.000m毎に直交線を設置し、基準線方向20.000m、直交線方向16.000mの長方形区画を調査上の大調査区として割り付けた。さらに大調査区を１辺 4.000mの正方形で20区画に細分し、小調査区とした。なお、２点の基準点については昭和62年度の調査中に、測量業者に依頼して各々の平面直角座標値等の測量計算を行っている。各点の成果値は次のとおりである。

基準点の平面直角座標	①№96	X＝35169.23	Y＝40721.54	H＝85.16
（第Ｘ系座標）	②№101	X＝35259.72	Y＝40679.00	H＝84.58

(2) 調査区の名称

20.000×16.000mの大調査区に対しては、北西の段丘崖側から基準線の方向にアルファベット大文字（A～P）を各々に附与し、基準線と直交する方向には、基準線の南西側をⅠ区、同北東側をⅡ区とし、これらの組み合わせて大調査区の名称とした。（例、AⅠ…BⅠ…、AⅡ……さらに各々の大調査区は20の小調査区に細分し、各々の小調査区にアルファベットA～Tを附与し、大調査名との組み合せから小調査区名とした。（例、AⅠ・A、BⅠ・B、…GⅡ・E、…）具体的な位置関係については、遺構配置図の割付を参照されたい。

(3) 遺構の名称と調査方法

確認した遺構に対しては、大きく住居址と土坑類(方形土坑・円筒形土坑、陥し穴状遺構等)とに区別し、各々の遺構種は大調査区毎に通し番号を附与した。大調査区名と通し番号との組み合わせで遺構名とした。住居址にはアラビア数字2桁を、土坑類にはアラビア数字3桁を附与し、下例のような表記方法をとった。

住居址……BⅠ・01、　CⅡ・01、　土坑類……B·Ⅱ・001 、　PⅠ・001 、

精査の方法は、住居址、カマドおよび大型の土坑に対しては四分法を基本とし、小型の土坑や陥し穴状遺構に対しては二分法をとっている。しかし、口径の大きい土坑と考えられたものでも深いものについては調査途中から二分法に変更している。

(4) 遺構の図化

各遺構の図化は、小調査区割付の測量杭にもとずいて 1.000m 毎の図化基準線を設け、これからの支距離法によって計測・図化している。縮尺率については、住居址細部や小遺構を除いて縮尺20分の1で図化し、細部については縮尺10分の1で図化している。

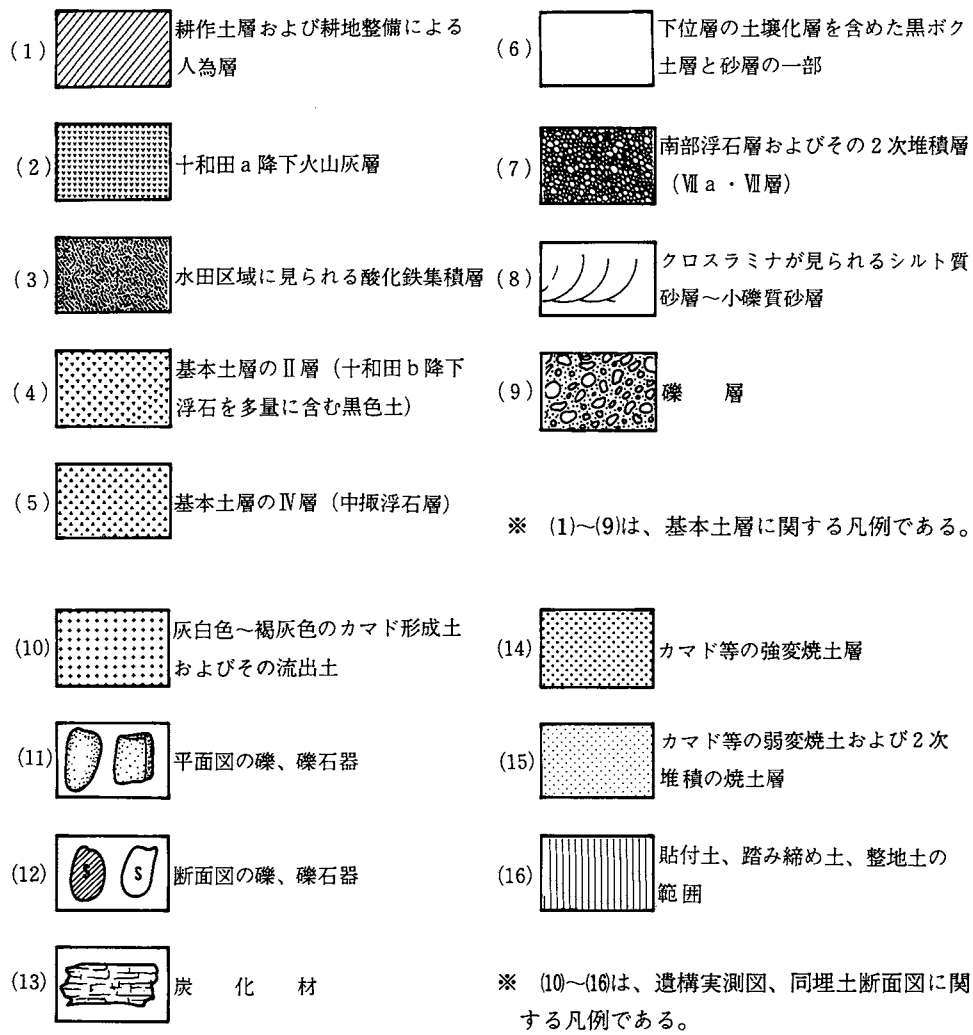
3．実測図版の表現について

本報告書における遺構、遺物の実測図に用いたスクリーン・トーン等による表現は、図版78に示した種類および内容である。また、各図版の縮尺率についてはスケールを入れ、模式図凡例を除いて特に表示のない遺構図は縮尺40分の1とし、遺構図の中でもカマドなどの細部実測図は縮尺20分の1となるようにしている。

遺物については、種類によって大小様々であることから、各図版中にスケールあるいは文章等で縮尺率を表示している。

(1) 基本土層図・遺構実測図

遺構実測図における表現方法は、図版7の他に、遺構断面図中における基本土層部は、遺構の確認面、形成層位が判るように基本土層図（図版3～5）と同一の表現をとっている。しかし、観察記録が不十分であったものについては、層区分線やスクリーン・トーンは用いていない。人為作用の加わったと判断される埋土については各々の本文中で説明し、特に表示していない。



図版７：土層断面図および遺構実測図凡例

(2) 遺物実測図について

①出土した土器は、奈良・平安時代のクロク不使用の土師器がほとんどで、平安時代のロクロ使用土師器と縄文時代の土器は非常に少ない。

土師器の器面調整には、ヘラナデ、ヘラケズリ、ハケメ、ヘラミガキなどの方法が見られる。しかし、個体によっては調整時の乾燥度の差異や2次火熱を受けたことにより、ヘラケズりともヘラナデとも断定できない調整やミガキかヘラナデかの断定が困難な調整も見られる。

成形段階における輪積痕あるいは巻き上げ痕については、器内外面および断口面で明瞭に観察される部分について図化している。

土師器の拓影は、底面の木葉痕、砂目、回転糸切り痕を採取し、縄文土器は3個体分を除いて拓影で図示した。

実測した土器は、完形品、接合復元できたもので円周の4分の1以上遺存し反転実測できたものである。また、底部周辺や口縁部破片でもその出土状態から当該遺構と直接関係するものは反転実測している。

実測図のうち調整痕の図化範囲、内外面部分の各2分の1程度とし、器面に黒色処理が施されているものについては、2分の1程度の範囲をスクリーン・トーンで表現した。なお、明らかに須恵器と断定されるものでは出土していないので、断面部の塗りつぶしはない。

縄文土器の地文は外面表現部全面を図化、内面については顕著な調整痕を2分の1ほど図化している。

土製品では、一部の資料で破断面や欠損部に逆ハッチングの表現を用いている。

②遺物実測図のうち擦石・磨石・くぼみ石・敲石などの礫石器、そして台石などに見られる使用痕跡（作用痕跡）については図版に示した6種類について、その範囲にスクリーン・トーンを貼付している。くぼみ石の敲打痕集中部やくぼみ部、あるいは擦痕についてはドットの集中線で表現している。磨製石斧・砥石については、研磨面・磨滅面の区別と擦痕の方向を線で示しているが、磨製石斧の研磨面小単位は図示していない。

〈凡例説明〉

イ）荒敲打面……ペッキング状の敲打痕跡および敲打による荒い潰れ面で、擦敲打面や緻密敲打面に比較して平滑さがない。また使用面の周辺には破砕、剝離を伴っているものが多い。

ロ）緻密敲打面……比較的平滑な面をなしている。敲打作用面で、ペッキング状敲打痕も散在する。しかし、擦る作用で生じる擦痕は認められない面である。

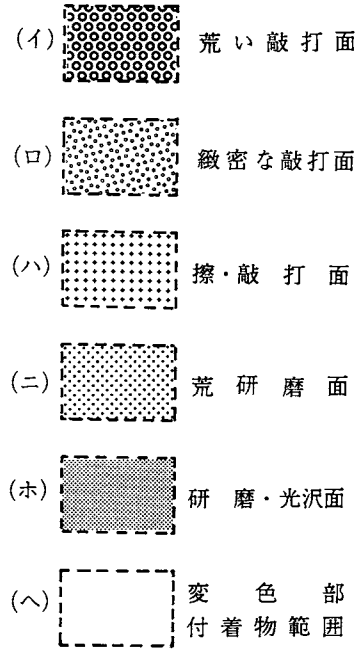
ハ）擦・敲打面……面形成の主たる要因が敲打作用と考えられるが、その面は比較的平滑で線条痕を伴うことから擦る作用が伴っていると考えられる面である。

ニ）荒研磨面……面形成の主たる要因が、擦る、擦られる作用であると考えられる粗い線状痕が観察される平滑な面で、光沢はもたない。

ホ）研磨・光沢面…光沢をもつか、あるいは光沢をもたないまでも非常に滑沢な面で、細く小さな線条痕を伴っている。

へ）変色部・付着物範囲…破線で区画された白ぬきの範囲は、火熱等による変色・炭素付着、あるいはその他の付着物の範囲である。また、同範囲の中にペッキ グ痕が散在しているものについても同様の方法をとっている。これらの区別については、本文および各図の説明を参照していただきたい。

ト） イ）からへ）の他に、敲打作用による剝離ではあるが、使用結果か加工かの区別がつきがたい剝離の範囲に |→ ←| 印を附している。

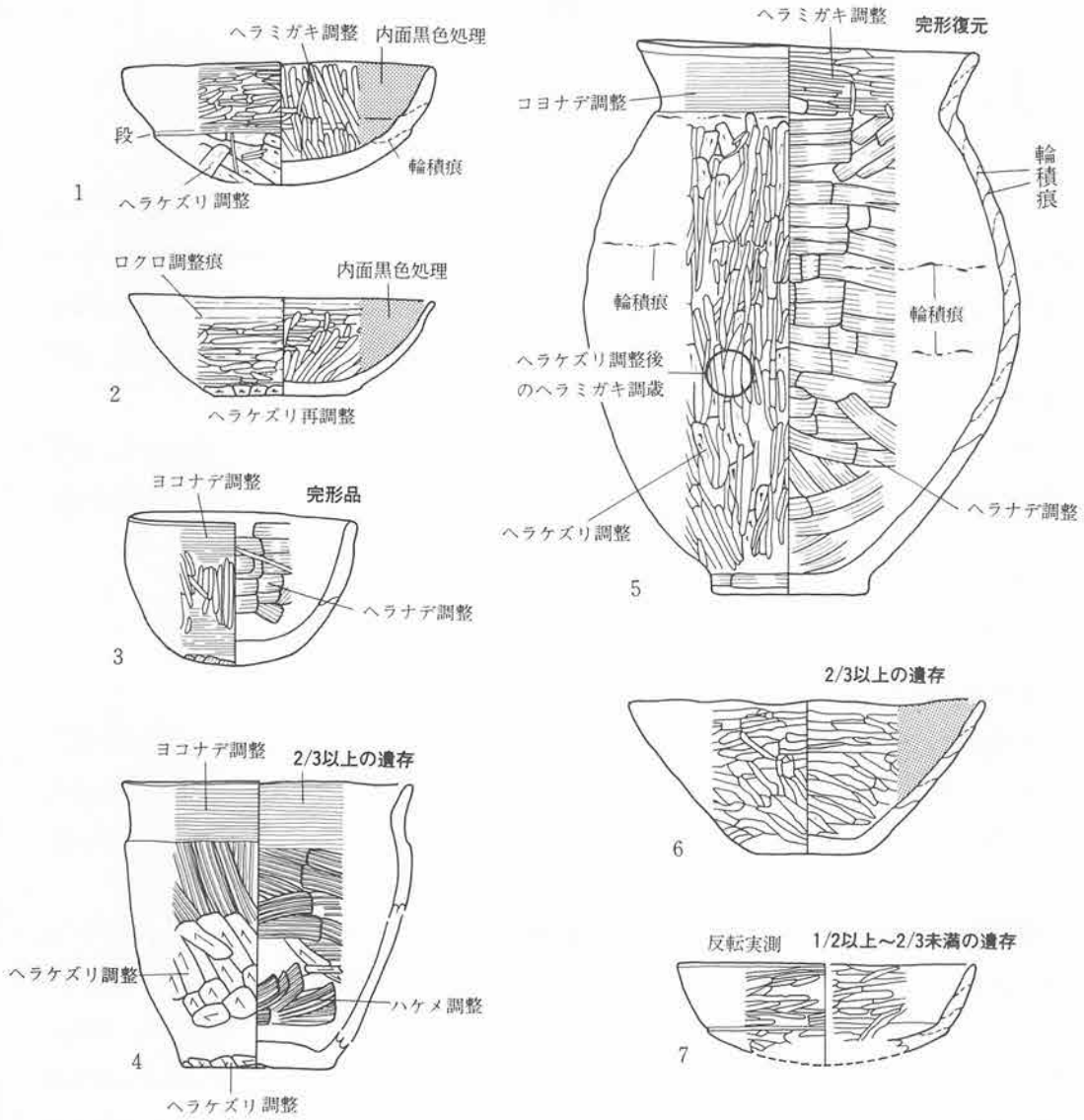


図版８：礫石器凡例

チ）明らかに荒敲打作用面であるが、図示しがたい範囲に ├──┤ 印を附しており、この作用痕の周辺には破砕剝離が見られる。

リ）敲打作用の結果として生じた破砕剝離面であるが、イ）ロ）等のような敲打作用面が形成されていないない範囲に ├－－┤ 印を附している。これらト）～リ）は、偏平礫の側縁や頂端に見られる。

以上の９種の使用痕跡、加工痕跡については、各々の作用の対象、作用程度、および素材岩石の種類などによって、同程度の用作用でも異なることが考えられる。



・実測した土器は接合復元できたもののほかに、4分の1以上遺存し反転実測可能なものである。これらは、完形品および略完形復元品、3分2以上の遺存品、2分の1以上で3分の2未満の遺存品、2分の1未満の遺存品に大別し、図化方法は各図に示したとおりである。
・器面調整にはヘラナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ハケメの各調整方法と掌・指によるナデ調整が存在するがこのナデ調整はヨコナデ調整として表現した。また、坏形土器のほとんどに内面を黒色処理したものがある。この黒色処理の有無はスクリーン・トーンを貼りつけている。

※　2はロクロ使用の土器、他はロクロ不使用の土器である。

図版9：土師器実測図凡例

Ⅳ．遺構と遺物について

本章では、古代の住居址14棟、中世の住居址１棟、縄文時代と考えられる土坑や陥し穴状遺構５基、古代の土坑５基、および所属年代の不明な数種の土坑６基、の遺構形態・埋土・出土遺物について記述する。。記述の順序は大きく住居址と土坑等に区分し、住居址は時代に係わらず大調査区の順に進め、土坑等については縄文時代に属すると考えられるものを先に、古代ならびに時代不明の土坑等については大調査区の順に進めることとする。

出土遺物のうち明らかに当該遺構の時代と異なる土器については、遺構外の遺物と共に項を改めて略記する。また、各遺構から採取した土壌資料の分析結果については章を改めている。

１．竪穴住居址について

(1) ＢⅠ－01住居址　　(図版10～17、写真図版９～12)

本遺構は、ＢⅠ－Ｌ区を中心とした区域に位置しており、住居址の中では最も北端に位置している。確認状況・層位は、耕作土を除去した段階のⅢ層下部からⅣｕ層であるが、埋土上部や壁上部などが、耕作や新期の土坑によって攪乱、破壊を受けていた。特に埋土の最上位にある十和田ａ火山灰層は、攪乱を受けているため層として記録できるのは極一部である。

平面形は、一部が新期土坑の重複によって破壊されているものの各コーナーが円くなっており、各辺は外方に若干膨んでいる。また、東コーナー部の上端が突出しているものの方形を基調とした形状である。カマドは、北西辺の中央部よりやや北東よりに設けられており、主軸方向は西偏62度前後である。規模は主軸上端 520cm・同下端 462cm、直交軸上端 490cm・同下端 460 cmで、壁高は南西辺が45～50cm、南東辺51～58、北東辺35～40cm、そしてカマドのある北西辺35～43cmである。壁の外傾度は、北東辺・南西辺とも20～25度で、南東辺は突出部を除いた範囲が30度前後である。また、カマド周辺は30～35度である。

埋土は、耕作痕部を除いて大別８層に区分した。１層を更に４層に細分しているが、何れも基本土層のⅡ～Ⅴ層の崩壊土でブロック構成となっている。２層は、南コーナー付近から北東辺に逆Ｌ字状に分布堆積する層で、その上部～上位に包含する。分布する遺物群と同様の分布を呈している。性状は、焼土ブロック・炭化物を不規則に含んだにぶい黄褐色～褐色土 (10ＹＲ4／3～4／4) を主とするが、黒褐色土・中掫浮石・南部浮石などの大ブロックを不規則に含む。３層は、小粒浮石質の暗褐色土(10ＹＲ3／2～3／4)が主体であるが、黒褐色土や褐色土の大ブロックが不規則に散在することから色調は一定しない。本層下位から床面には、栗材・笹竹、

カヤなどの炭化材・炭化材小片が散在し、明瞭な分布区域は北東～北側である。なお、小破片遺物は本層中に多い。4層は、小中粒浮石質の褐色土（10YR4/4～4/6）を主体とし、その中に中掫浮石・南部浮石あるいは黒褐色土などの中～大ブロックが混在し、全体としては斑となっている（相対的に4aのブロックが大きく、4bはブロックが小さくなる）。5a層は、腐植質の黒褐色土（10YR2/2～2/3）にカマド形成土、焼土ブロック、炭化材小片が混在する。5b層はカマド形成土が混在せず、焼土ブロックが5a層より多い他は、同様の性状である。なお、5層はカマド週辺から北東側に分布し、南東辺から南西辺側には分布せず、主要な遺物包含層となっている。6層は、小～大粒の浮石を15～20%含んだ黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/2）を主体とするが、浮石の含有量が極度に多い6b層やほとんど含まない所などがあり、層全体としては不均質な分布を示している。また、南東～南側では南部浮石の混じる暗褐色土（10YR3/3～3/4）や褐色土（10YR4/4～4/6）のブロックが散在する。7層は、基本層のⅢ層に類似する黒色～黒褐色土で浮石の分布はほぼ均一である。7bとした所以外は十和田a火山灰のブロックが混在する。十和田a火山灰層は、木根その他による撹乱を受けて大～巨大ブロック状を呈するが、未撹乱部の最大層厚は15cmで、その分布は中央付近だけである。なお、土層の構成物・性状等から2・4～6層は、人為的作用が大きく働いている土層と考えられる。

床は、基本土層のⅥ層中に形成されており、全体的にゆるやかな起伏をもって北側へ傾斜している。特にカマドの北東部である北コーナー付近が低く、南コーナー付近が高くなっており、そのレベル差は 500cmで13cmの高低差をもっている。床は基本土層のⅥ層中に形成され、その上部に炭化物・焼土粒、あるいは不規則に黒褐色土ブロック等を含んだ薄い汚損土層が分布するが、特に貼床を行った形跡は認められず、またカマドの前庭部も除いて特別に踏みしめられた形跡も認められない。なお、汚損土層の下位に掘り方痕と考えられる凹凸は認められない。床面等で確認した施設・構造等としては、カマドの他に柱穴および柱穴様の小穴16穴、壁下端に沿って分布する周溝や小穴5穴である。

カマドは、北西壁の中央に設けられている。カマド本体は、天井石の移動は認められるが良好な遺存状態で、袖芯材・天井材の礫が良く残っている。袖部の最大幅は91cm、左袖の幅28cm同右30cm、天井部の前後75cmで、袖部は左右ともに偏平礫2個を芯材として直列させ、前側の天井部は凝灰岩礫を削り出し整形した偏平礫をのせ、 後天井部は礫を使用していない。芯材等はガラス質中・粗砂を含んだ粘性のある灰白色土で被われている。燃焼部は袖部中心よりも手前にあり、浅く凹んでおり、その使用面は幅55cm、奥行45cmほどが強く焼土化し、焼土層の厚さは最大12cmである。煙道は掘り込み式で燃焼部奥からゆるやかに立ちあがった後、水平となり、煙り出し部下端が小土坑状となっている。煙道の規模は、上端幅が55～40cmで、長さは

145cm ほどである。煙り出し口の規模は不明であるが、深さは30cmを確認している。なお、煙り出し部の埋土中にも褐灰色～灰色の粘質土が輪状に分布していることから、煙り出し口も粘性土で形成されていたものと考えられる。

周溝は、カマド右袖脇から南東壁中央までめぐり、一旦 140cmほどで跡切れたのち南西壁下をめぐっているが左袖の脇には認められない。この範囲には径８～10cm、深さ11cm前後の５穴の小穴が並んでいる。周溝の幅は８～15cmで最大部26cm、深さは４～11cmで、その断面形は逆台形を呈する。

柱穴および柱穴様の小穴を16穴確認しており、浅い直円筒状で底面が平坦なものが多く、底部中央付近に炭化材の認められたものもあるが、その配置、規模が不整であり、何れが主柱穴となるか判断しかねる。柱穴中に存在した炭化材の樹種は何れも栗材である。

ＢⅠ－01住居址柱穴計測表　（単位cm）

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
1	(34)×20	18×14	15.0	
2	25×24	17×15	17.8	炭化材
3	14×13	10×９	8.4	
4	29×18	18×８	9.5	炭化材
5	23×22	20×16	21.5	
6	24×24	16×15	28.0	
7	43×37	36×33	19.0	炭化材
8	28×27	21×21	21.7	
9	19×18	15×13	9.2	
10	22×21	14×12	20.3	
11	20×19	5×４	11.8	
12	20×18	15×11	9.5	部木根
13	24×21	12×11	19.1	
14	20×18	16×15	20.2	炭化材
15	26×25	16×14	17.7	炭化材
16	23×18	10×９	6.5	炭化材

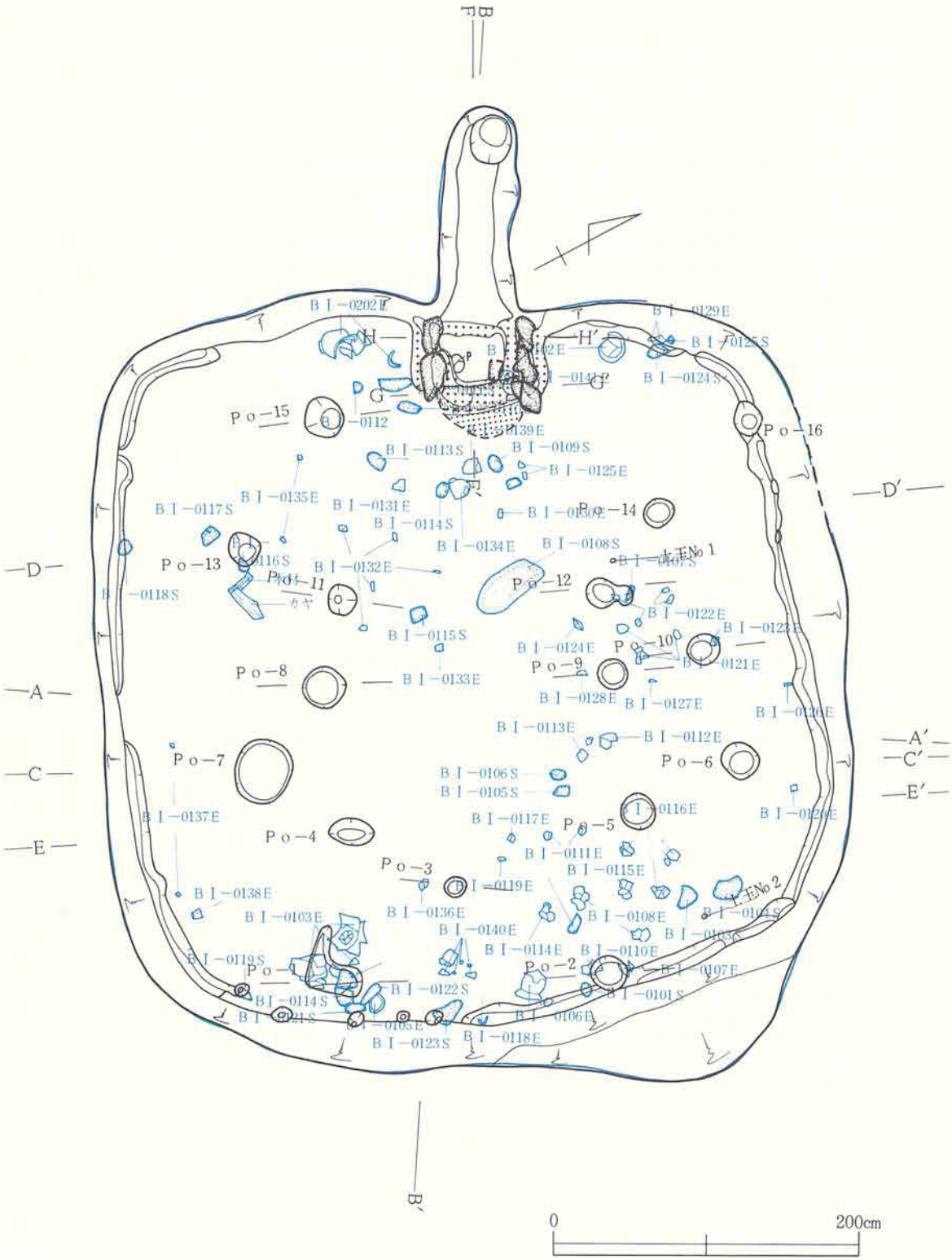
出土遺物としては、土師器坏・甕、土玉、礫および礫石器が出土しているが、須恵器・鉄製品は出土していない。これらの出土層位は、２層・３層の上部、および６層中にかけており、床およびカマド内出土の遺物は少ない。

本住居址を代表する土器、土製品は、図版13～15－１・３・５・６・14・15～18、16－３・４・５であり、他の土器は明らかに外部からの投げこみである。

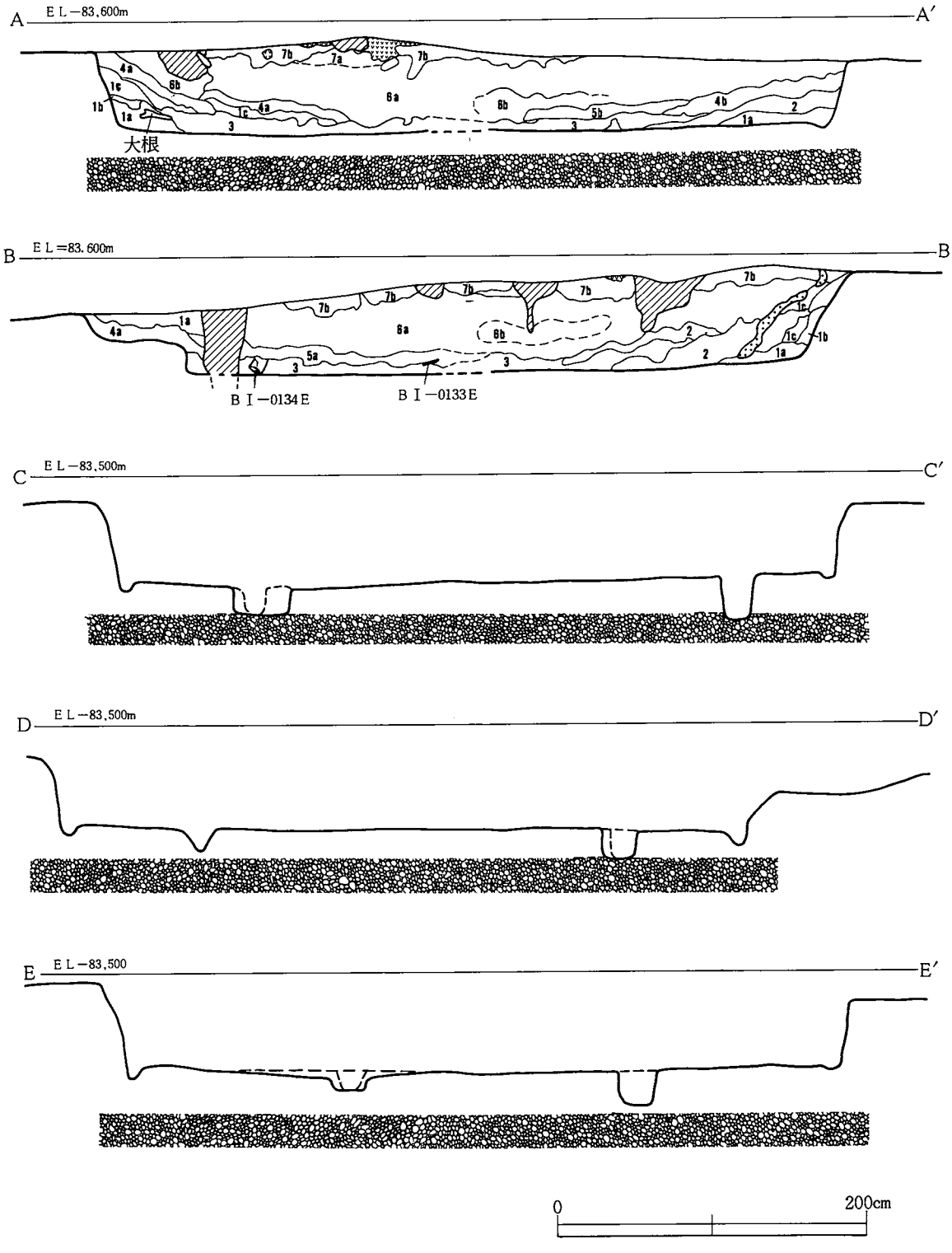
13－１・３は、体部中ほどに段をもつ丸底の坏で器面調整は、内外面ともに横位のヘラミガキ調整がなされ、更に内面は黒色処理がなされている。13－５は、床面に散在していた破片を集合して略完形に復元したもので体部破片４～５片が不足している。外面は、底部周辺から口縁部までハケメ、ヘラナデ調整の後、胴体部は丁寧なミガキ調整を施し、口縁部には横ナデ調整を施している。内面は、底部が掻きとり様のケズリ整形で、それ以上の胴体部、口縁部にヘラナデ調整が施されているが、口縁部は更に横位のミガキ調整が施されている。肩部は明瞭

な段が形成されている。 底部外縁は強く張りだしている。 図版 14 ― 9 ・10 は、 底部外縁が強く張りだす長胴形の甕で、内外面の調整はヘラナデ・ハケメ調整でミガキ調整は認められない。なお、10の張り出し部はヘラケズリで調整されている。14・18は、球胴形の甕で底部周縁がわずかに張りだし、底面には木葉痕が見られる。内外面の調整は、ヘラナデ・ハケメなどの調整が施 されている。 16は、14・18と同様に球胴形の甕であるが、 肩部から口縁部に数段の段形成が認められ、口唇部は 2 重となっている。外面胴体部の調整はハケメ調整の後、丁寧なミガキが施 されている。 口縁〜肩部はハケメ調整の後、 横位の ヘラナデ 調整が施され、 その一部に15として図化したヘラ描きの文様？が加えられている。17は、球胴形甕の口縁部と思われる 4 分の 3 程度の破片で、ハケメ調整の後に 4 段の段形成がなされている。しかし、この 4 段は 2 段一組となるようにやや離れている。口唇面には沈線状の調整が加えられ、16ほどではないが 2 重となっている。土製品として図版16― 3 ・ 4 ・ 5 の 3 点が出土し、 3 ・ 4 は平玉様の土玉で、 5 は土製勾玉破片と考えられる。

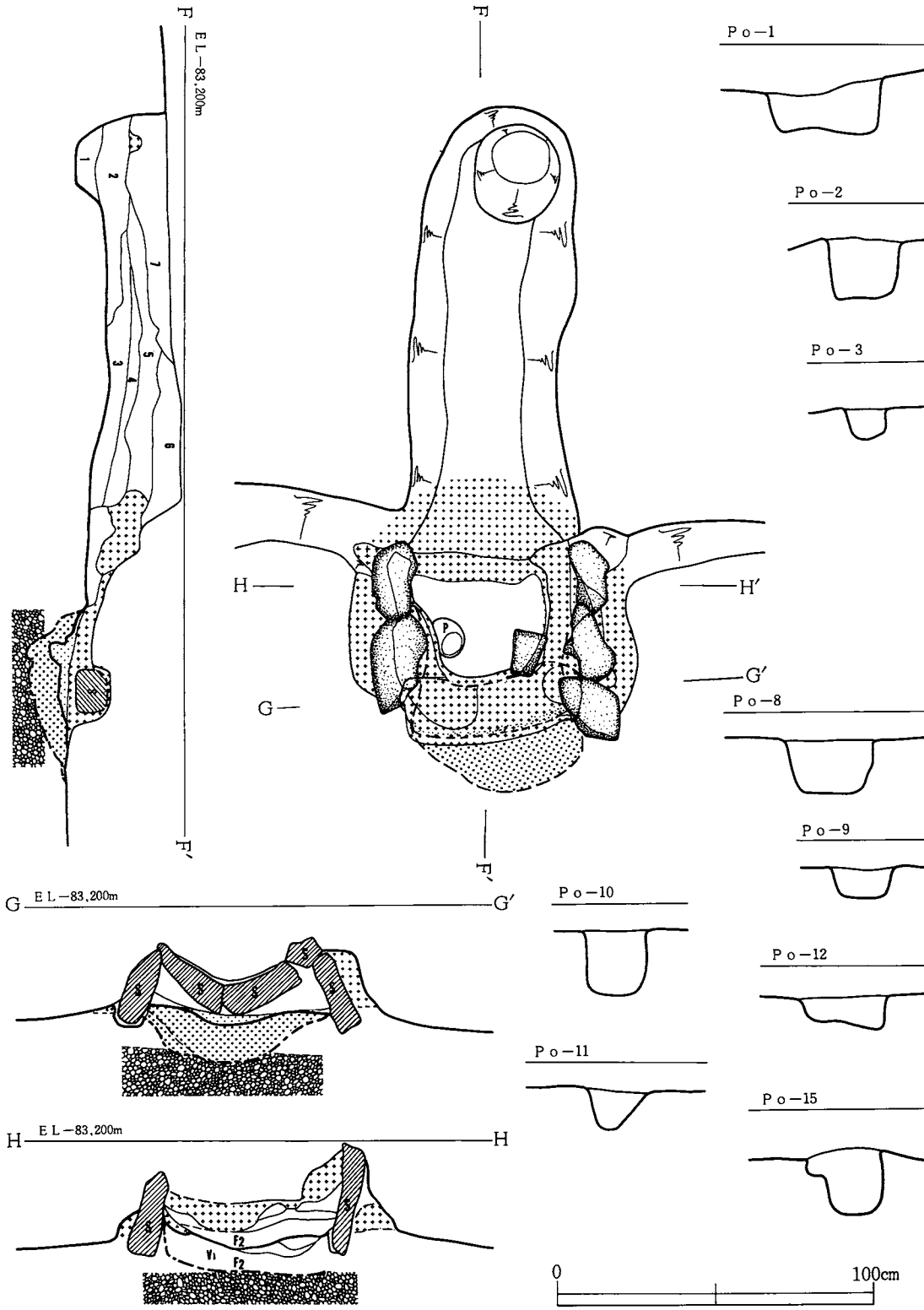
礫石器・石製品としては図版17の11点が出土しているが、他に使用痕跡等の認められない礫14点が出土している。これらの礫等は、床面出土の資料を除けば何れも投げこみのものである。



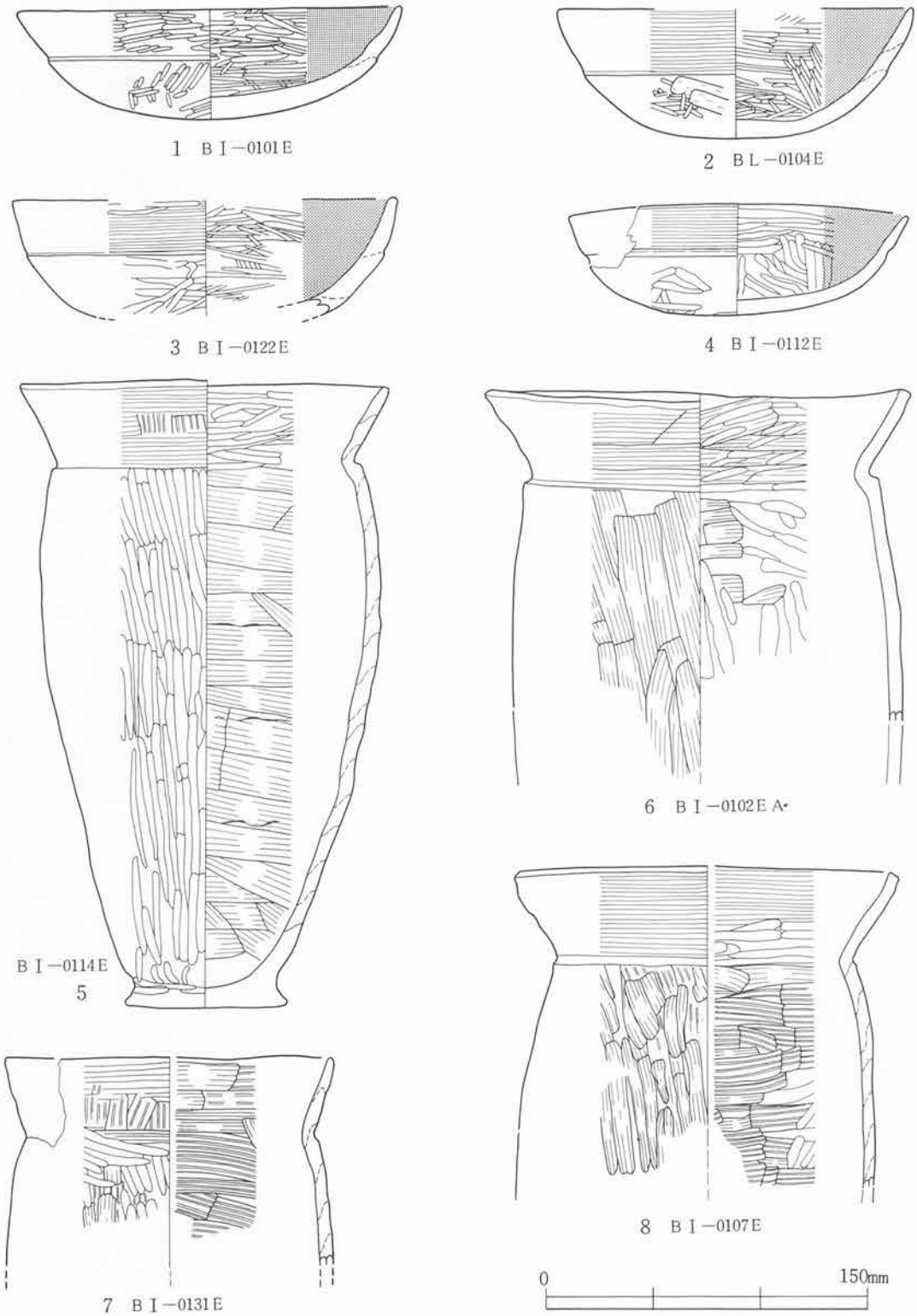
図版10：ＢＩ−01住居址 (1)



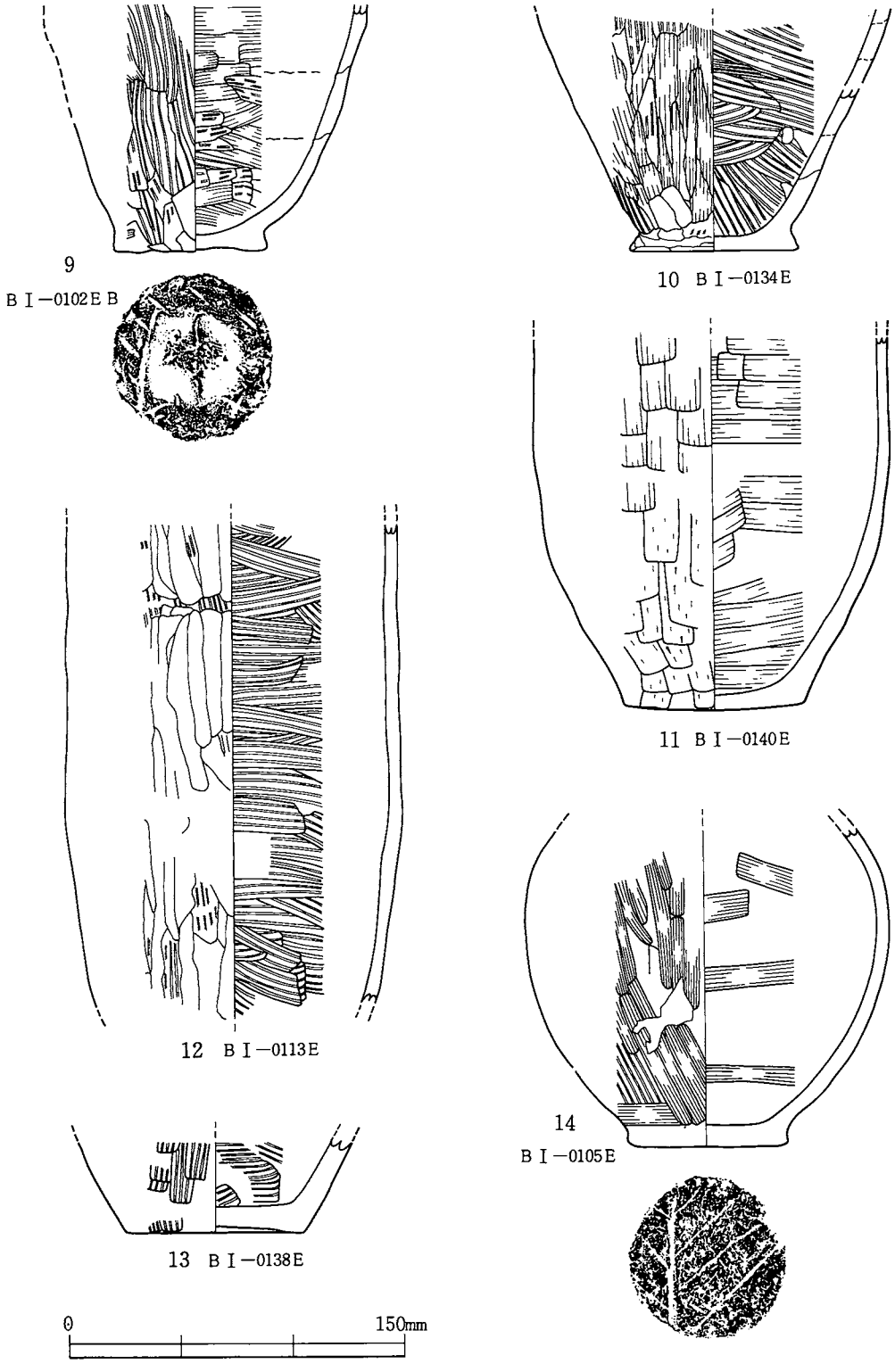
図版11：BⅠ−01住居址 (2)



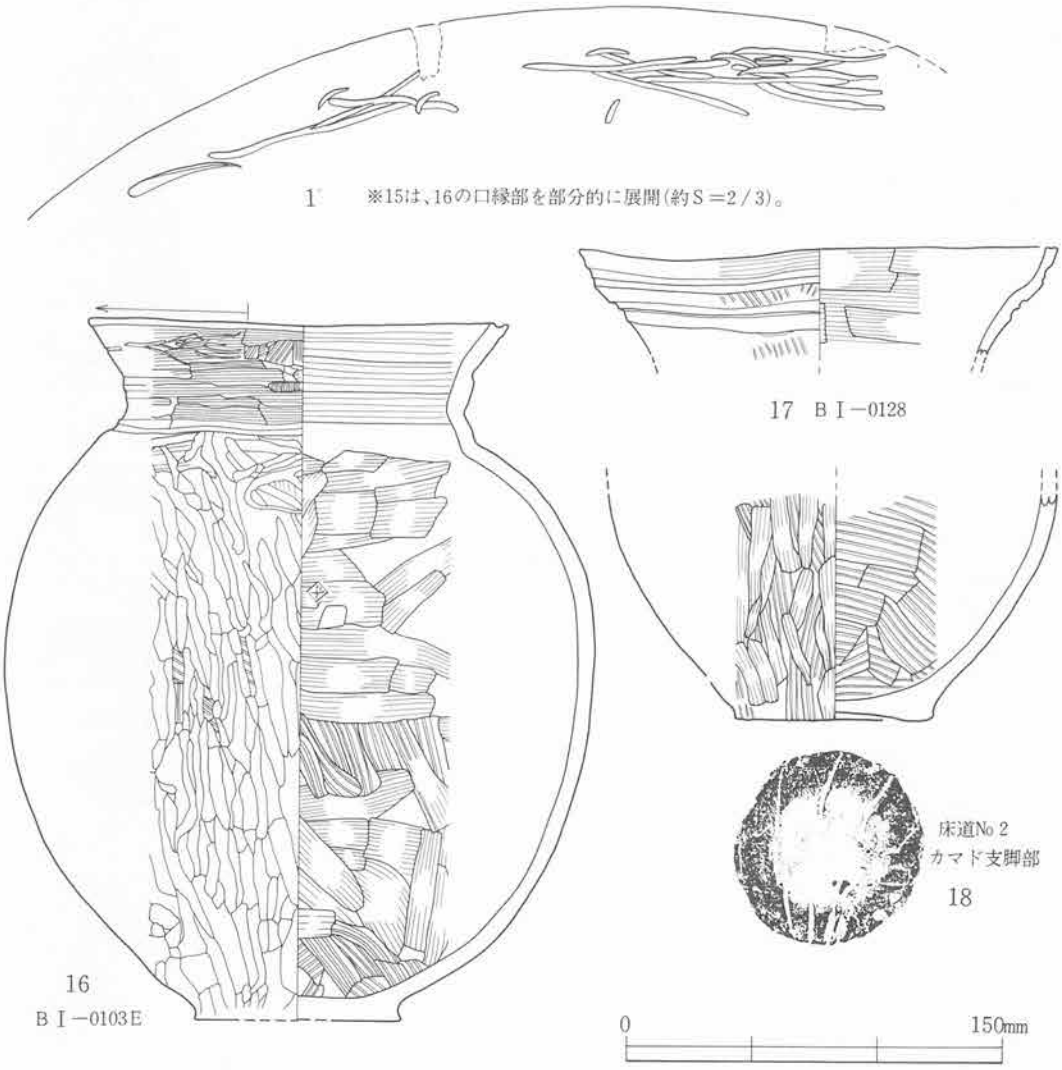
図版12：BⅠ−01住居址 (3)



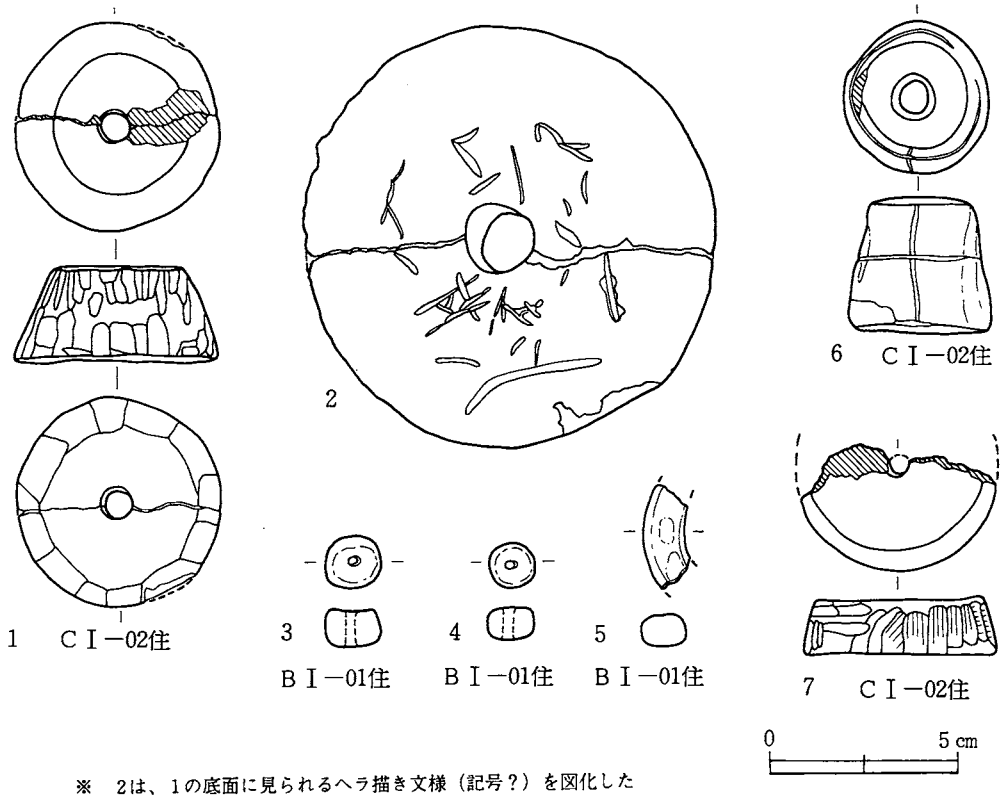
図版13：BⅠ−01住居址出土遺物 (1)



図版14：ＢＩ－01住居址出土遺物 (2)

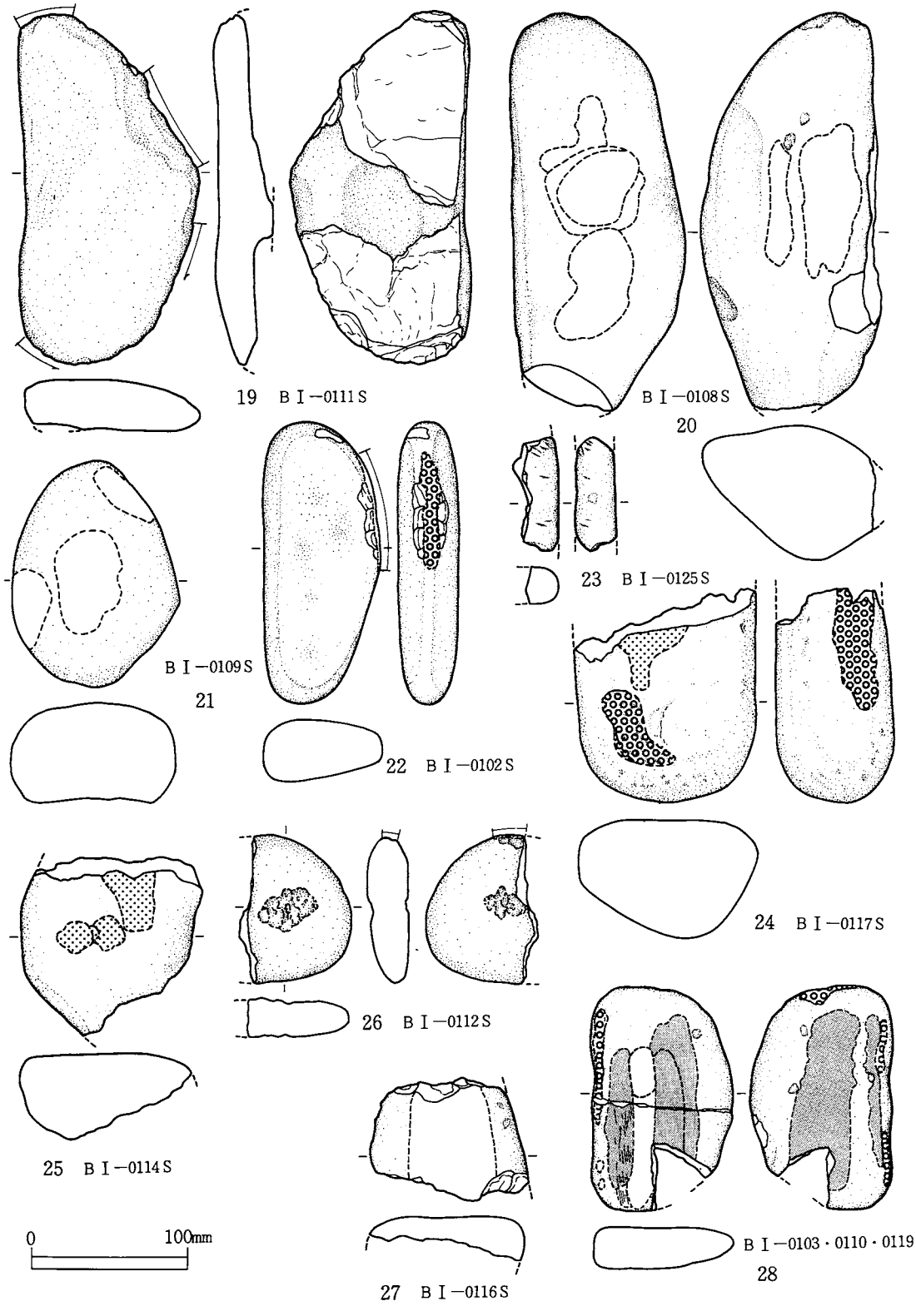


図版15：BⅠ－01住居址出土遺物 (3)



※　2は、1の底面に見られるヘラ描き文様（記号？）を図化したもので、縮尺率はスケールが10cmとなる。

図版16：ＢＩ－01住居址出土遺物(4)とＣＩ－02住出土遺物(5)



図版17：B I－01住居址出土遺物 (5)

(2) ＣＩ－01住居址　　(図版18、写真図版12～13)

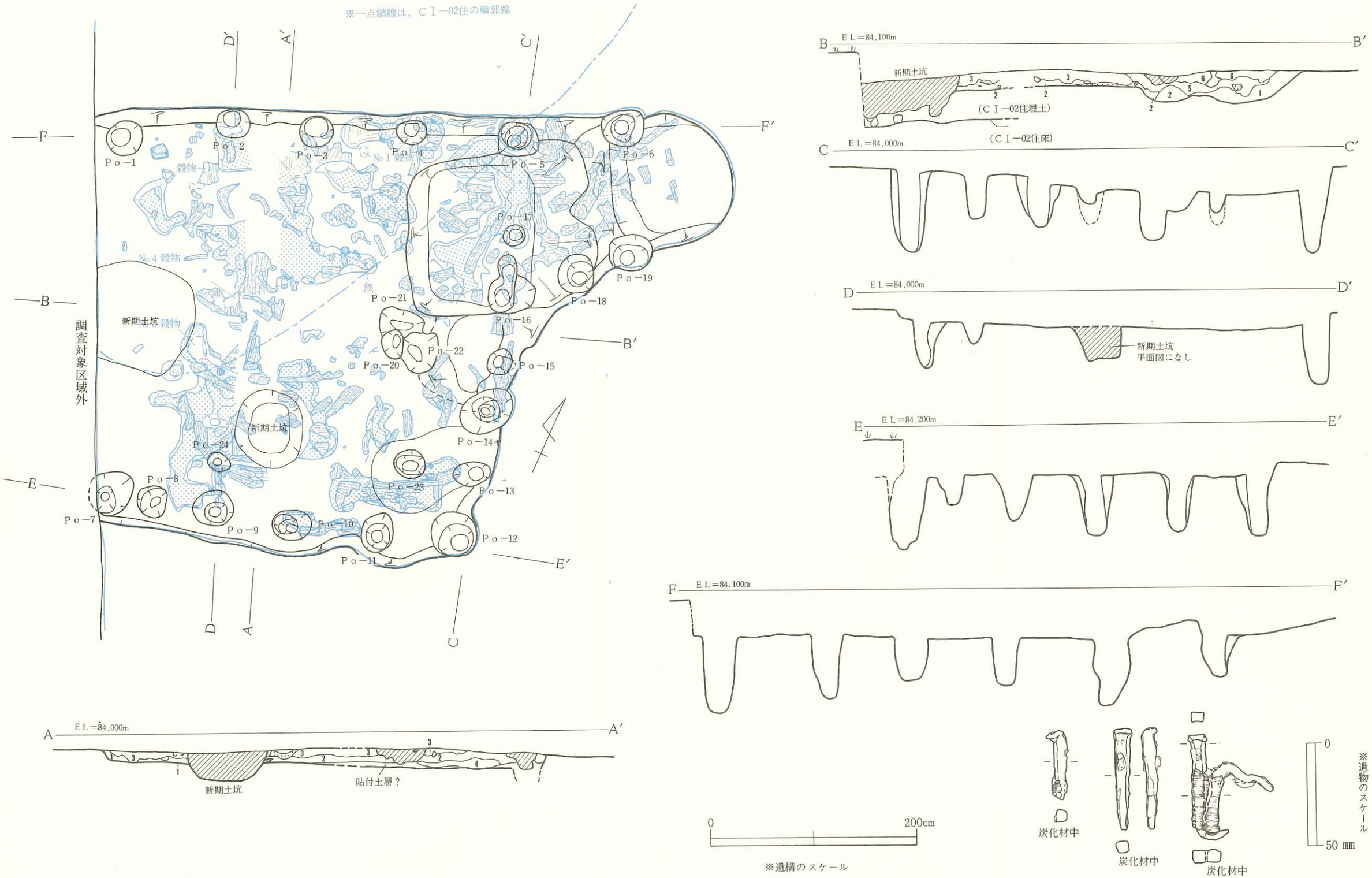
本遺構は、ＣＩ－Ｊ区とＣＩ－Ｉ区にその主体が位置しており、一部がＣＩ－Ｅ・Ｆ・Ｇ区に位置している。本遺構が確認された周辺は、果菜類や水稲の苗栽培地として利用されていたことから遺構の確認面は地表から20～25cmの深さである。確認層位・状況は、耕作土を除去した段階でⅢ１層～Ⅳｕ層が露出し、この段階で焼失炭化材・焼土が広がる竪穴平面形を確認した。しかし、所々に農薬の容器破片・ビニール等を混じえた焼土など埋土とする極新期の土坑が形成されていることや、竪穴の南西側が用地外に広がっていることから住居址全体は確認、調査ができなかった。

平面形は、竪穴の北東部に出入口と考えられる張り出しをもつ長方形であるが、南西側は前述の理由から不明である。規模はＰｏ－５とＰｏ－12を結ぶ線上の上端430cm・同下端400m、Ｐｏ－１とＰｏ－７を結ぶ線上の上端400cm・同下端368cm、Ｆ～Ｆ′線に平行し張り出し部の中心を通る線上の最大値618cm、Ｐｏ－７とＰｏ－12を通る線上の最大値 376cm、壁の高さは地点によって確認数値に幅があるが８～18cmである。なお、Ｆ～Ｆ′線が東北となす角度は東偏65度である。

埋土は、全６層に細分しているが、住居址を広く被っている層は２・３層で、１・５・６層は北東辺あるいは南東辺の壁に近い範囲に堆積している。また、４層は出入口の奥、Ｐｏ－１～Ｐｏ－３の区域の床を被っている。１層の性状等は、Ⅳｕ層に黒色土、黒褐色土、十和田ｂ浮石の混在した褐色土層（10ＹＲ4／4～4／6）を主体とするが、焼土ブロックなどが不規則に混在し、色調は一定ではない。２層は、小粒浮石質黒褐色土（10ＹＲ3／1～3／2）に焼土・炭化材片を含む。３層は、小粒浮石質黒褐色土（10ＹＲ２／2～2／３）で他は２層と同様である。４・５層は層記号は別としたが、性状は小粒浮石質の暗褐色土(10ＹＲ3／3～3／4)に焼土ブロック・炭化材・中掫浮石ブロックが混在する。４層には穀物も含まれる。６層は、黒色～黒褐色土（10ＹＲ2／1～2／2）で、中掫浮石、十和田ｂ浮石、焼土ブロック炭化物等が不規則に混在している。

床は、出入口部内側から南西奥のＰｏ－１付近までが 130cmぐらいの幅で固く締っており、この範囲は一部に貼床も見られる。また、Ｂ～Ｂ′ 線から南東の区域は、不規則な起伏が認められ、弱く焼土化しているが踏み固めや整地層等は見られない。床のほとんどは焼失炭化材や焼土によって直接破われているが、通路部（露地）と考えられる部分では炭化材が浮いている。

床で確認した施設、あるいは構造としては、出入口部、および壁際に並ぶ22の柱穴と一部の貼床である。図示した柱穴のうちＰｏ－16ａ・Ｐｏ－17・Ｐｏ－24は炭化材・焼土の上から掘りこまれていることから、本住居址とは直接関係がないものと考えられる。また、Ｐｏ－18はＥ～Ｅ′ 線上に並ぶものの上部が攪乱を受けていたことから本住居址との関係については判断



図版18：ＣＩ－01住居址と出土遺物

しかねる。

柱穴の配列は、ほとんどが壁に並行しているものの、Ｐｏ－20～Ｐｏ～23の４穴は壁から離れた位置に存在する。柱穴の間隔はＦ～Ｆ′線で80～105cm、Ｅ～Ｅ′線で80～105cm、東壁ぎわのＣ～Ｃ′線および出入口脇では70～105cmである。

ＣⅠ－01住居址柱穴計測表　（単位cm）

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
1	36×33	28×28	72	
2	34×27	26×25	59	
3	34×24	24×20	46	
4	30×25	25×23	74	
5	40×34	16×13 23×22	64	掘り方
6	43×36	14×13	52	掘り方
7	45×42	12×10	66	掘り方
8	33×28	14×11	27	
9	40×34	12×10	46	掘り方
10	40×31	18×14	58	掘り方
11	40×32	14×12	55	掘り方
12	45×44	17×16	59	掘り方
13	37×24	16×14	40	

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
14	56×39	24×20	51	掘り方、くずれ
15	26×24	13×10	22	
16a	24×18	14×13	15	新　期
16b	44×36	16×15	45	
17	22×20	12×11	31	新　期
18	37×35	15×13	53	掘り方
19	42×33	15×14	61	掘り方
20	28×22	14× 8	13	
21	40×(34)	20×11	12	
22	43× ?	22×(8)	7	
23	32×29	15×11	25	
24	24×17	8× 7	20	新　期

出入口部の構造は、屋外側が幅 130cm、奥行 118cmのカマボコ形を呈する浅い掘りこみで屋内方向に向かって下っており、その最深部は12.5cm低くなっている。屋内側にも幅 130cm、奥行き 180cm の方形の掘りこみが見られるが、この床面も屋外側と同様の傾斜をもち、両掘りこみの間には（Ｐｏ－６とＰｏ－19とを結ぶ位置）一段高い部分が見られる。内側の方形部の床面は、さらに奥の通路部（露地）より10cm低い面となっている。

炉・カマド跡と判断される焼土施設、あるいは周溝、貯蔵穴は確認していない。

炭化材・焼土の分布状態は、青色印刷で示したとおりであるが、焼土は炭化材を包む状態のものか、あるいは乗る状態にあったものを図示した。炭化木材の形状は、柱状・棰状・割板状などが認められるが、建築材としての木材形態を明確に把握できるものはない。また、建築材と考えられる炭化材は、外側が炭化し芯が木質のもの、あるいは芯が分解し炭化部が筒状に残っているものなど、全体が炭化している訳ではない。その他の炭化材や炭化植物遺体としては、豆類が出土した地点（No１穀物）から曲物の底板や側板と考えられる杉板材が出土している。その他からは、一端に切削工痕をもつムラサキシブキ、カヤ、ヤマブキ、笹竹が出土しているが、これらも一端に切断面をもつものが見られる。また、No１～No４の各地点から別章の鑑定の中で示す数種の炭化した穀物および自然草木の種子が出土している。

その他の人工遺物としては、和釘４本、砥石片１点、土師器の破片11点が出土している。釘２点は、炭化材中から打ちこまれた状態で出土しており、錆化によって一体化している。

(3) ＣⅠ－02住居址　　(図版19～24) 写真図版14～17)

本遺構は、ＣⅠ－Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｆ・Ｉ・Ｊの６調査区にわたって位置している。本遺構が確認された周辺区域は、北西の一部が平坦面から斜面へと変化する地形であるが、概ね平坦な畑地である。畑では果菜類や水稲の苗を栽培していたことから堆積土層が減少しており、耕作土層(20～30cm)を除去すると基本土層のⅢ層下部～Ⅳｕ層が露出する。この段階で、十和田ａ火山灰の分布を含めた住居址の平面形を一部確認したが、埋土上部や周辺には極新期の柱穴列やゴミ焼去等の土坑が形成されていたこと、そしてＣⅠ－01住居址が南東側の一部に重複していたことから、図示した平面形全体を確認したのはＣⅠ－01住居址の精査完了後である。

住居址平面の西コーナーより35%前後が民有地に広がっていることから住居址の平面形全体は不明である。また、カマドの位置は他の住居址例から北西壁の中央付近に設けられているものと思われるが、全く確認していない。平面形は、３箇所のコーナーとも円味をもち、北東壁・南東壁とも若干外方に膨んだ隅円の方形住居址と考えられ、確認した規模は以下のとおりである。主軸と考えられる北西～南東方向の上端 702cm・同下端 666cm、直交する南西～北東方向上端676cm、同下端641cmで、主軸と考えられる方向は真北に対して西偏60度の方向にある。

壁の高さは37～51cmの範囲にあるが、大部分の壁は43cm前後である。また、立ちあがり外傾度は、南東壁で20～30度、東コーナーから北コーナーの間では概ね垂直に立ちあがった後、30度前後で外反～外傾して上端に達している。なお、表面から床面までの深さは65～80cmである。

埋土は、ＣⅠ－01住居址部および極新期の柱穴を除いて大別７層に区分しており、下位の埋土１層はａ～ｃおよび焼土層の４層に細分している。１層は、最下位無記号層（焼土層）が多量の炭化材片、礫石器、土製品・鉄製品などを含んだ焼土を主体とした層であるが、スクリーントーンによる焼土層の表示は強変焼土部にだけ用いている。Ⅰａ層は、炭化材焼土ブロックを含んだ極暗褐色 (7.5ＹＲ2/3) や中掫浮石ブロックの混合土層、Ⅰｂ層は中掫浮石の２次堆積層、Ⅰｃは小粒炭化材片・焼土ブロックを散在的に包含した黒褐色土（10ＹＲ 2/2～2/3）である。２層は、中掫浮石ブロック・炭化材・焼土粒を含んだ黒色土 (10ＹＲ2/1) であるが、壁際では焼土粒が多くなり、黒褐色～暗褐色土 (10ＹＲ2/2～2/3) となる。なお、本層上部から上位の３層にかけては土師器・礫石器を包含し、特に北東壁よりに多く含む。３層は、南部浮石を５～10%含んだ暗褐色土（ＹＲ3/3～3/4）を主体とするが、所々に黒褐色土や南部浮石の大～巨大ブロックあるいはレンズ状堆積部が散在し、床面以外の遺物包含層となっている。４層は、中粒浮石質（十和田ｄ浮石）の黒色土 (10ＹＲ1.7/1) を主体とするが、十和田ａ火山灰の浸透、貫入により褐灰色～灰黄褐色 (10ＹＲ4/1～4/2) や黒褐色～暗褐色 (10ＹＲ3/2～3/3) を呈するなど色調が一定しない。包含遺物は、壁際に小破片が見られるが少量である。５層は、浮石質暗褐色土 (10ＹＲ3/3～3/4) に南部浮石や焼土ブロックを含

んだ層、6層は十和田a火山灰層で、層厚は15cm以上7層は十和田a火山灰の小～中ブロックを含んだ黒褐色土（10YR3/1）～3/2）で細砂様のガラス質砂を含む。

全体的に1・2層を除くと締りのない堆積状態で粘性も乏しいが、1・2層は緻密な締りで粘性も若干見られる。後述する炭化材は、2層から5層にかけて斜めに堆積しており、床面以外でも炭化材の周辺には焼土層が存在する。なお、埋土の3層は遺物の包含状態や土層の特徴から投げこみを第一要因とする土層の可能性が高い。

床は、基本土層のⅦa～Ⅶ層中に形成されており、貼りつけ土層が認められる。床面は、ゆるやかな起伏が認められ、全体的に壁際や貼り床部が高く、中央付近が低くなっている。貼り床部あるいは踏み締め等によると思われる特に固い層が南東側にコの字状に形成されており、北側や中央付近には緻密で締りのある南部浮石の圧砕層が形成されている。床面で確認した施設・構造としては、大小20の柱穴とPo－26の溝状の小土坑、東コーナー周辺から北コーナーまで形成されている周溝および周溝に沿う土堤状の高まりを確認している。土堤状の高まりは(イ)から(ロ)までの約330cmの範囲に南部浮石を破砕したものと褐色土との混合土を盛りあげ叩き固めて形成している。床からの高さは5～6cm、上端幅6～12cm、基底幅10～20cmである。周溝の幅は上端が15cm～25cm、下端が4～9cm、底面は起伏があり、深さは5～15cmと地点によって差が大きい。なお、実測図中の柱穴のうちPo－2・8・14・17・18・19と番号のないものは本住居址とは関係のない住穴である。

CL－02住居址住穴計測表

（単位cm）

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備考
1	16×16	5×9	5.2	新期
2	38×30	20×20	27.4	
3	23×20	10×8	20 8	
4	23×12	6×6	26	
5	20×18	8×7	8.5	
6	25×24	15×13	15.3	
7	28×27	14×12	69.5	新期
8	42×40	34×30	27.5	
9	27×23	14×13	18.2	
10	16×15	7×7	8.5	
11	24×21	7×6	23.5	
12	28×24	17×14	17.5	
13	26×24	12×10	18.4	

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備考
14	25×21	15×13	23.0	新期
15	35×27	16×10	14	イビツ、ヒシ
16	49×45	12×12	57.5	掘り方
17	17×16	8×7	6	新期
18	19×18	9×8	10.5	新期
19	20×13	10×5	9.3	新期
20	23×22	12×10	13	
21	23×16	8×8	7	
22	27×21	11×8	19.8	
23	38×34	13×12	44.5	
24	25×24	14×13	14	
25	26×22	8×5	10	
26	96×22	86×18	13.3	溝状

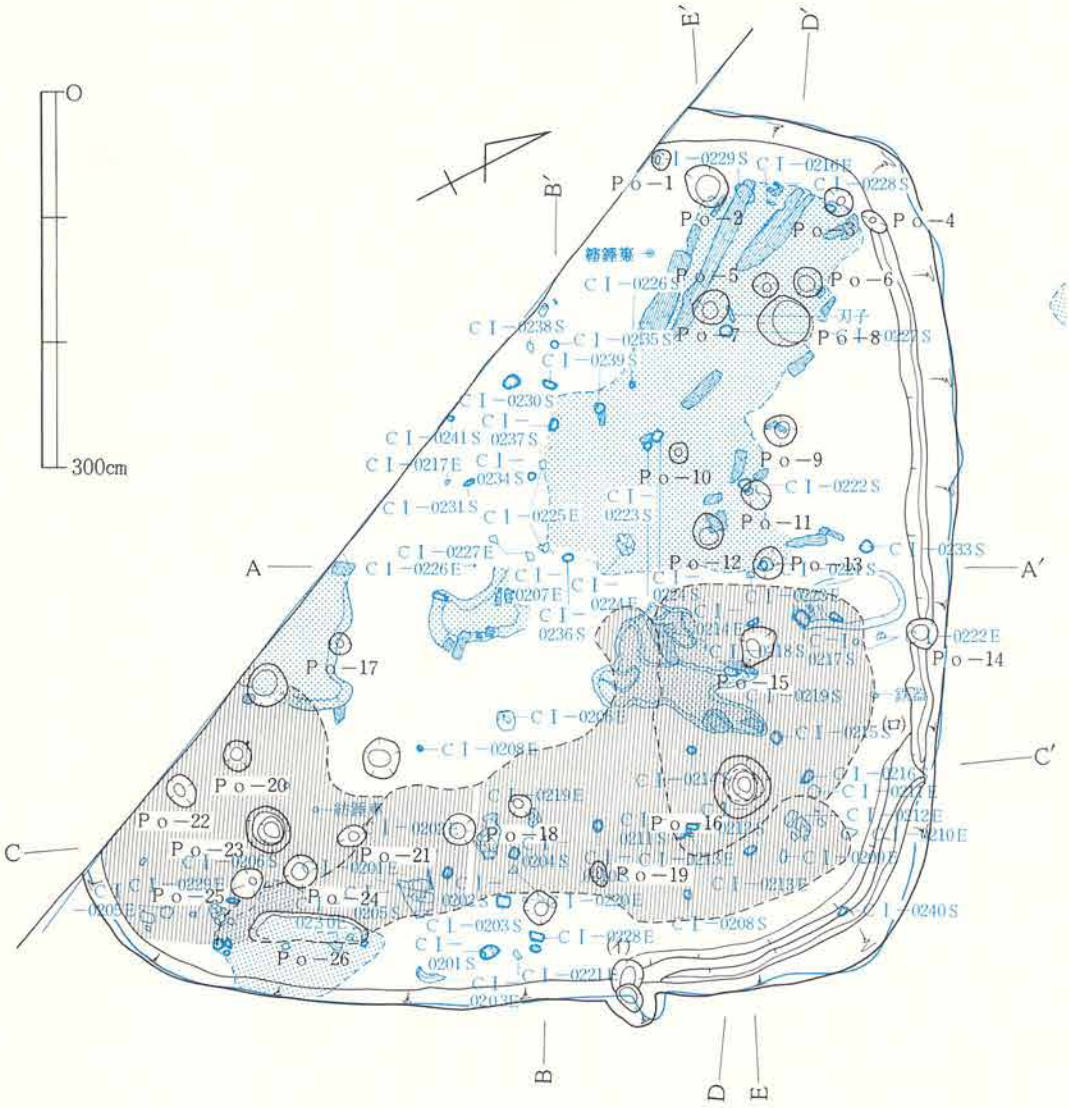
炭化材は、住居焼失によるもので柱様の形状や棰様の形状を保つものは少ないが北コーナー周辺で出土している。その他の炭化材としてはカヤ、ササ竹が床面から出土している。なお、柱様、棰様炭化材の樹種はクリ材が主で、一部にコナラ材が用いられている。

出土遺物は、図版16、21～24に示した土師器・土製品・礫石器・石製品・鉄製品などが出土しているが、埋土２層上部から３層中から出土した部位不明の小破片は割愛した。図版21の１・３・５、図版22の８・11は床面から出土した坏・甕で１を除けば何れも３分の１未満の破片である。また、図版16の１・２・６・７の土製紡垂車・石製紡垂車、図版23の15・16の鉄製品も床面から出土している。その他の礫石器は、床面～１層中出土と２層上部から３層中出土とに大別される。

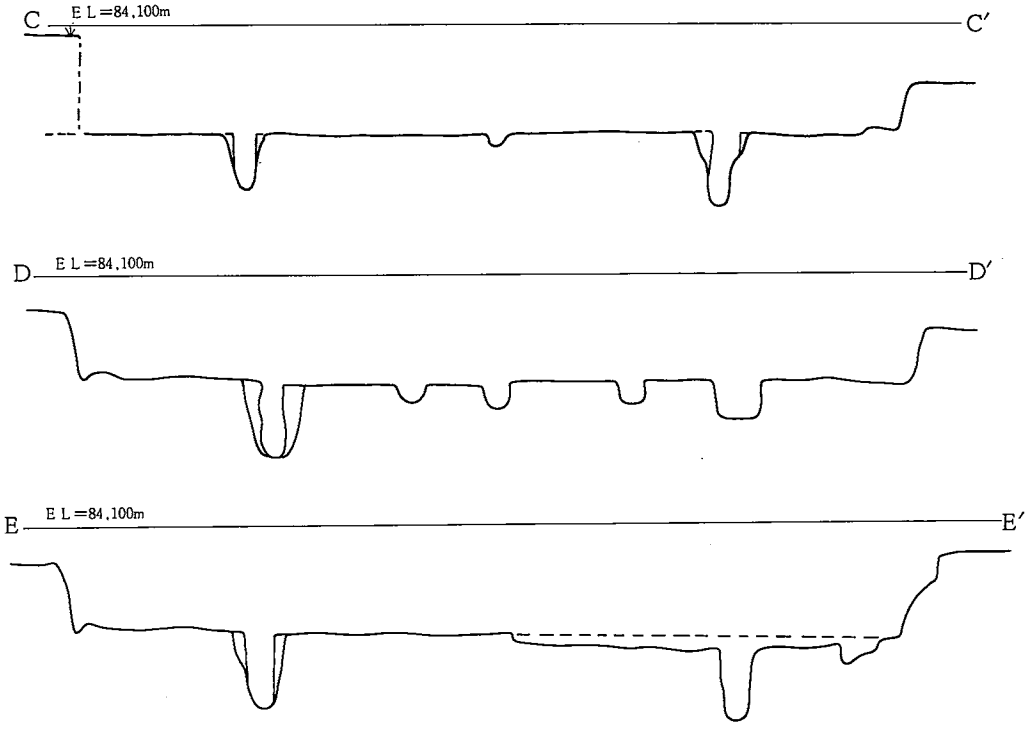
１は、４分の３よりやや多いが完形品ではない。器面調整は、内外面ともに丁寧なミガキ調製が施され、 さらに内面には黒色処理がなされている。 ３は丸底と思われるが底部他を欠失し、３分の１弱の破片である。中ほどに沈線状の段をもち、外面の調整は段の下がハケメ調整上が横ナデ調整である。内面は全体的に横位のミガキ調整であるが、２次加熟の影響を受けていることから黒色処理の有無については不明である。５は坏の底部破片で、底面調整はハケメ、内面は黒色処理が施されている。８は肩に段をもつ甕の口縁部破片で、外面の調整は体部がヘラナデ、口縁部が掌指等によるナデ調整である。内面は、体部がヘラナデ、口縁部が横ナデの調整となっている。11は、鉢形土器の破片で内外面ともハケメ調整の後にミガキ調整を施しているが、内面は口縁部付近だけである。

図版23―15・16は、刀子と種類不明の鉄製品である。15は、切先と茎部とが錆化膨れを生じ、その錆には炭化材小片を包みこんでいる。16は、図下端に爪状の突起をもつもので、図上端は欠損している。礫石器は、礫魂を分割、あるいは大まかな剝離を加えて片刃石器状にした17・18・19の３点、角礫状礫の稜に敲打面が形成され一面が荒い擦り面として利用した21、あるいは礫の縁辺や平坦面に敲打痕、研磨痕をもつものなどがある。また、礫石器か否かは不明であるが、一部に付着物・変色部をもつものもある（図版24―32、34）。これらの礫石器のうち、床面と１層から出土したものは２次火熱によると考えられる炭化物膜の付着が認められる。

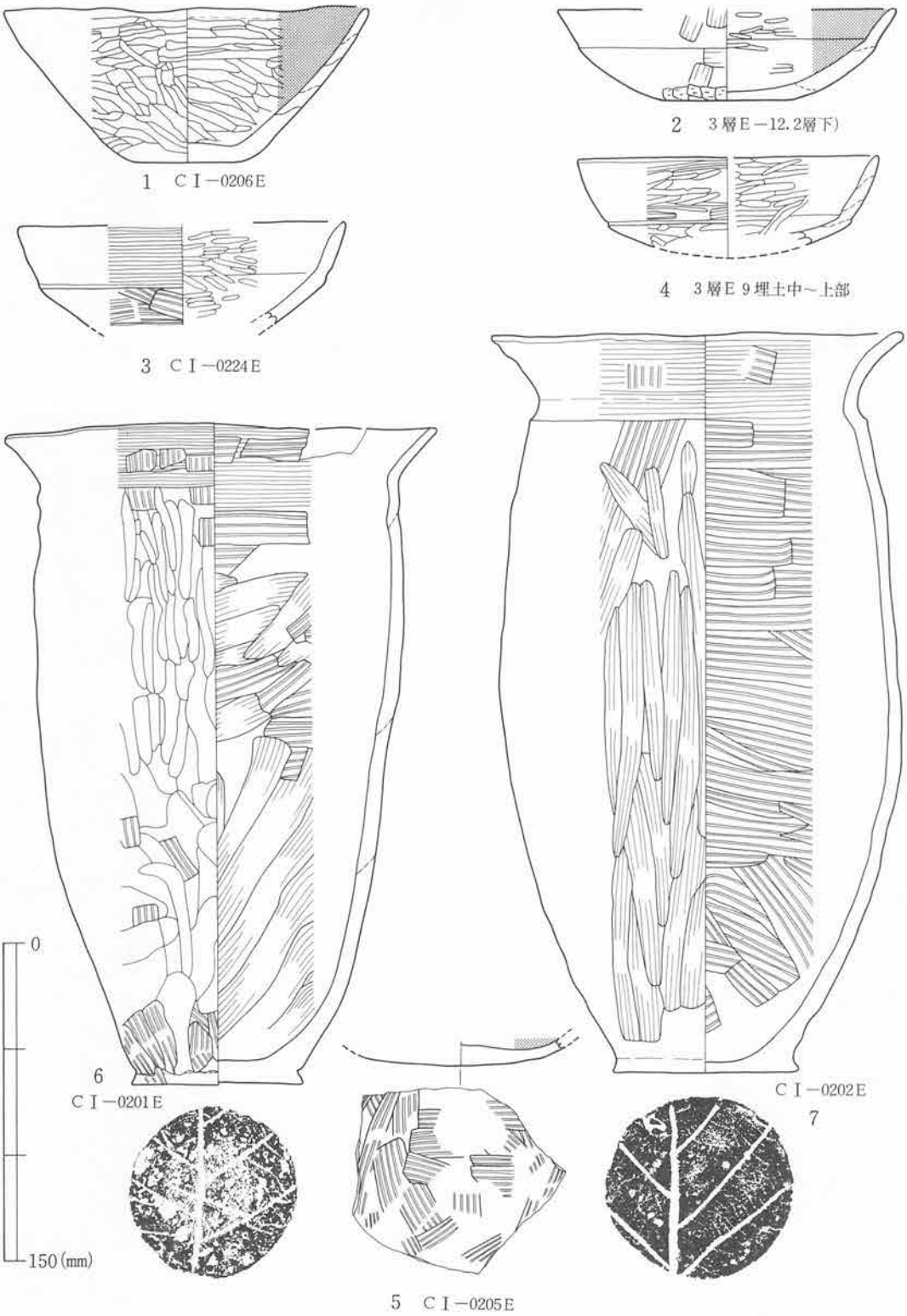
その他、 図版16―１・６・７は、床の炭化材集中部の中から出土した１・７の土製紡錘車と６の石製紡錘車である。６の底面には、ケズリ・ミガキ調整の後、傷とは考えられない線刻が施されている。７には側面に沈線が施されている。



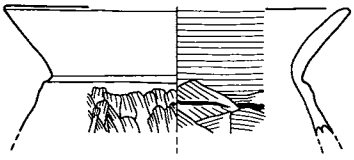
図版19：ＣＩ−02住居址 (1)



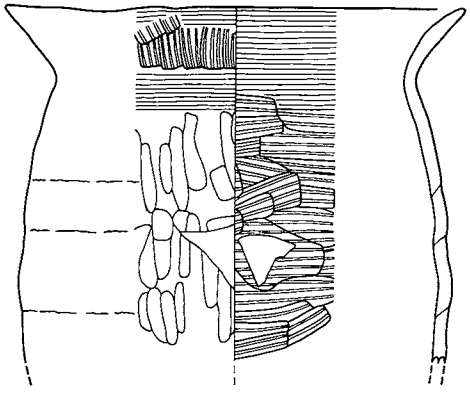
図版20：ＣⅠ－02住居址 (2)



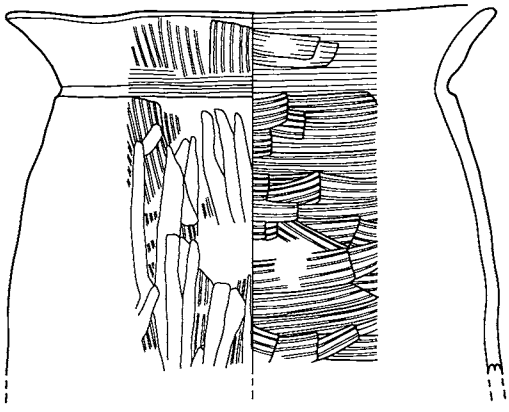
図版21：CⅠ−02住居址出土遺物 (1)



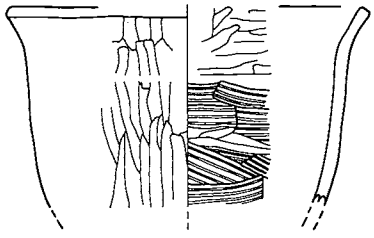
8　ＣＩ－0230Ｅ



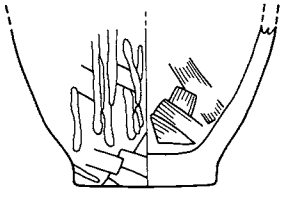
9　３層12Ｅ埋土中～上



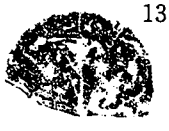
10　ＱＥ埋土中～上部

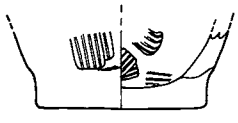


11　ＣＩ－0222Ｅ

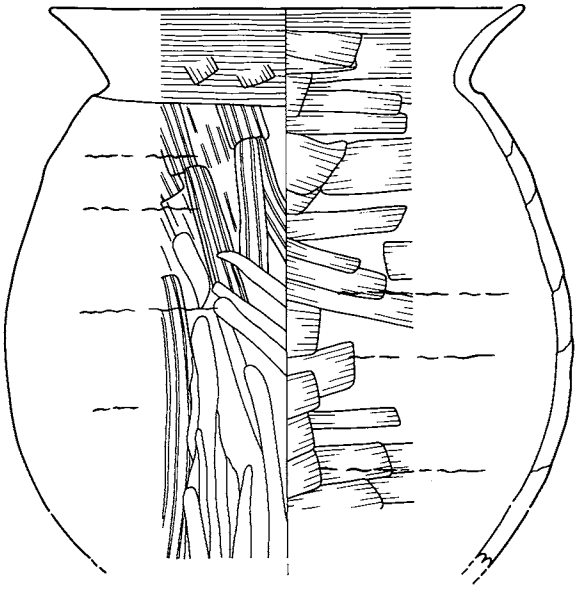


13　ＣＩ－0210Ｅ

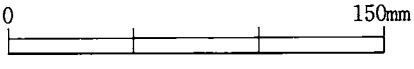




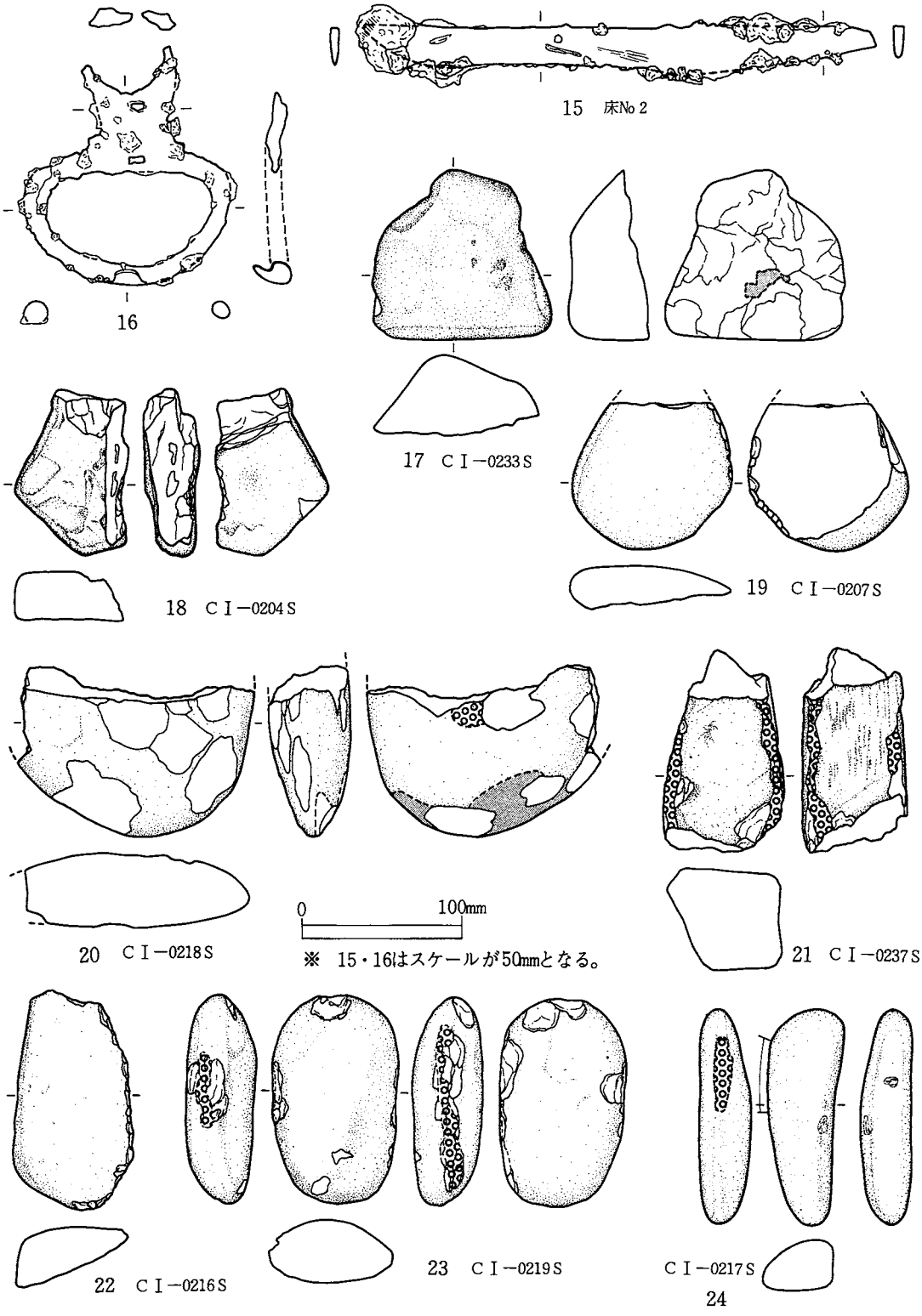
14　３層Ｅ８



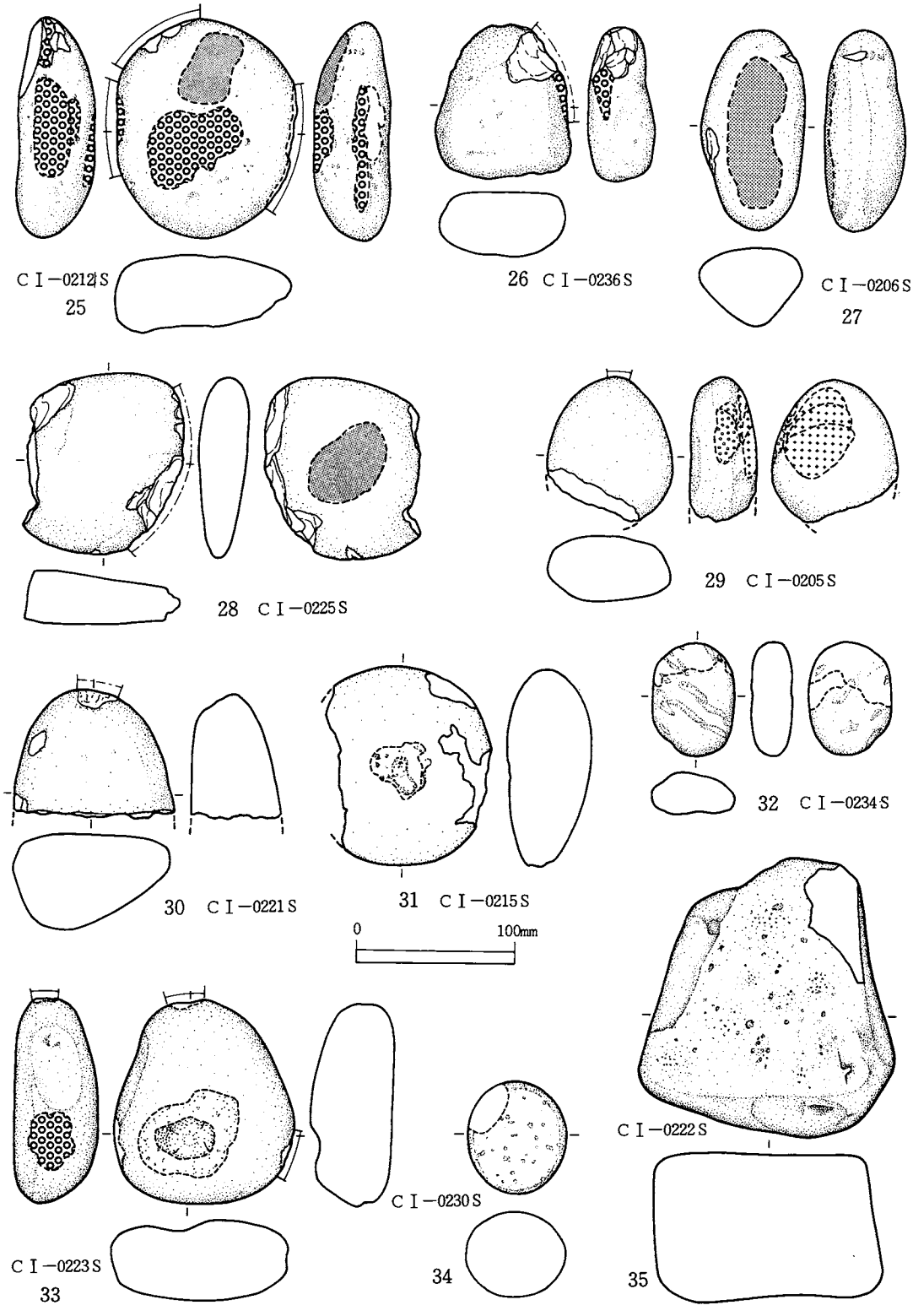
12　ＣＩ－0203Ｅ



図版22：ＣＩ－02住居址出土遺物　(2)



図版23：CⅠ−02住居址出土遺物 (3)



図版24：CⅠ−02　住居址出土遺物 (4)

(4) ＣⅠ－03住居址　　（図版25～28、写真図版18～21）

本遺構はＣⅠ－Ｋ・Ｌ・Ｐ区に大部分が位置し、東コーナーはＣⅡ－Ⅰ・Ｍ区に位置している。また、煙道部、煙り出しはＣⅠ－Ｇ区に位置している。本遺構が確認された区域は、ＣⅠ－01住居址、ＣⅠ－02住居址の北東側で、平坦な地形である。土地利用の状況はＣⅠ区域全体が同様であるが、古くには長薯、牛蒡などが栽培されていたことから遺構および埋土の一部が破壊攪乱を受けている。また、遺構の確認面もＣⅠ－01・02住居址と同様のⅢ層下部からⅣｕ層上面である。

平面形は各コーナーが円味をもち、南東壁が若干屈曲している方形である。確認した規模は、主軸上端 601cm・同下端 576cm、直交軸上端 620cm・同下端 586cmで、主軸の方向は真北に対して西偏57度の方向である。

壁の高さは40～56cmの範囲にあるが、大部分の壁は46～52cmである。また、立ちあがり外傾度は、カマドの右側から北東壁は10～40度と幅があるが、他の壁は10～20度の範囲にある。カマドの位置は北西壁の中央である。

埋土は新期の攪乱層を除いて大別７層に区分しており、更に下位の１層・３層は各々を２層に細分している。１層は、壁の崩壊土層を考えられるもので基本土層Ⅱ～Ⅶ層のブロックで構成されるが、それらの比率や混合状態でａとｂに区別した。１ａ層は小粒浮石質の黒褐色土（10ＹＲ2／2～2／3)を主体としⅣｕ・Ⅳｌの中・小ブロックが不規則に混在し、１ｂ層は小粒浮石質の黒色～黒褐色土(10ＹＲ2／1～2／2)を主体とし、Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ層の浮石が不規則に混在している。２層は、基本土層のⅤ層からⅥ層上部土を主体とする大～小ブロックの混在層で地点によって混在構成土（Ⅱ～Ⅶ層土）の種類や比率が異なる。自然流入堆積ではこのような構成層が形成されないことから人為層と判断される。また、本層上部から３層下部には投げこみと考えられる土師器、礫石器が多く見られる。３層は、十和田ｂ浮石質の黒色土（10ＹＲ1.7／1～2／1）を主体とするが、３ａでは南部浮石を25％前後、３ｂは10～15％含んでいる。また、３ａはその下部に２層と同様のⅥ層土ブロックを散在的に含んでいる。４層は、黒褐色（10ＹＲ3／2）、黄褐色土（2.5ＹＲ5／3～5／4)、あるいは十和田ｂ浮石の混合土層で色調は不定である。また、木根痕等を通じて貫入した十和田ａ火山灰のブロックが散在している。５層は十和田ａ火山灰層である。６層は、５層上部の攪乱層とも考えられる層で、十和田ａ火山灰と暗褐色土ブロックとの混合土層である。７層は、細粒浮石質の褐灰色～灰褐色土（7.5ＹＲ4／1～4／2）を主体とし、砂質褐色土（10ＹＲ4／4～4／6）や小粒浮石質黒褐色土（10ＹＲ2／2～2／3）のブロック、あるいは十和田ｂ浮石を極少量含むが、南部浮石や中掫浮石は含まない。

床は、基本土層のⅦ層中に形成されており、カマド前庭部や土坑周辺に貼付土が散在しているが、床土のほとんどが南部浮石の圧砕層２～４cmである。また、床面はゆるやかな起伏が

認められるものの極度の凹凸は認められない。床面で確認した施設構造としては、壁直下をほぼ全周する周溝、大小の柱穴および貯蔵穴と考えられる小土坑等20穴、カマド燃焼部の焼土および前庭部・柱穴周辺の貼付土である。

カマド前庭の貼付土は、灰白色土に少量の南部浮石を混合した土が叩き固められており、この貼付土はカマドの両袖部の下まで及んでいる。また、柱穴や小土坑の周辺、および土坑内壁の内張土として貼り付け土は、地点によって異なるが概ね次のとおりである。貯蔵穴と考えられる土坑の内張土はシルト～中砂質の褐色粘性土（10ＹＲ4／4)～4／6)を貼りつけ、床面にはレベルの土は南部浮石・褐色土・黒褐色土を混合したものが貼りつけられている。

周溝は壁直下に形成されており、カマド部と西コーナー部、そしてＰｏ－10のところで部分的に跡切れるがほぼ全周している。幅、深さは地点によって広狭・浅深の差が見られ、幅は上端10～20cm・下端５～15cm、深さは３～16cmの範囲にあり、その横断面形は逆台形を呈する。深さはカマドの北東側から北東壁際が９～16cmと深く、南東壁沿いからカマドの南西側までの範囲は３～９cmと浅くなっている。

柱穴および**貯蔵穴**は、床面での確認のものと圧砕層、汚損土の層を除去した段階で確認したものとに区別される。貼り床等の下から確認したものはＰｏ－１、Ｐｏ－４、Ｐｏ20、Ｐｏ11Ｐｏ－14の外周部、そしてＰｏ－16である。また、貯蔵穴と考えられる土坑で内張りされたものはＰｏ－３、Ｐｏ－４、Ｐｏ－13の３穴である。しかし、Ｐｏ－４は内張り土と同様の褐色土や南部浮石、小粒浮石質黒褐色土の混合土で埋めもどされ、その後にＰｏ－３が形成されている。柱穴配置は、Ｐｏ－５・Ｐｏ－11・Ｐｏ－１の列とＰｏ－６・Ｐｏ－７・Ｐｏ－17の列とが対応する配置にあることから、この６穴が基本的な配置と考えられる。その他、浅・深の差はあるもののＰｏ－９・Ｐｏ－10・Ｐｏ－14・Ｐｏ－15、およびＰｏ－16は直接本住居址に関係ある柱穴である。しかし、これらの柱穴が構造上どのような役割をもっていたかについては不明である。

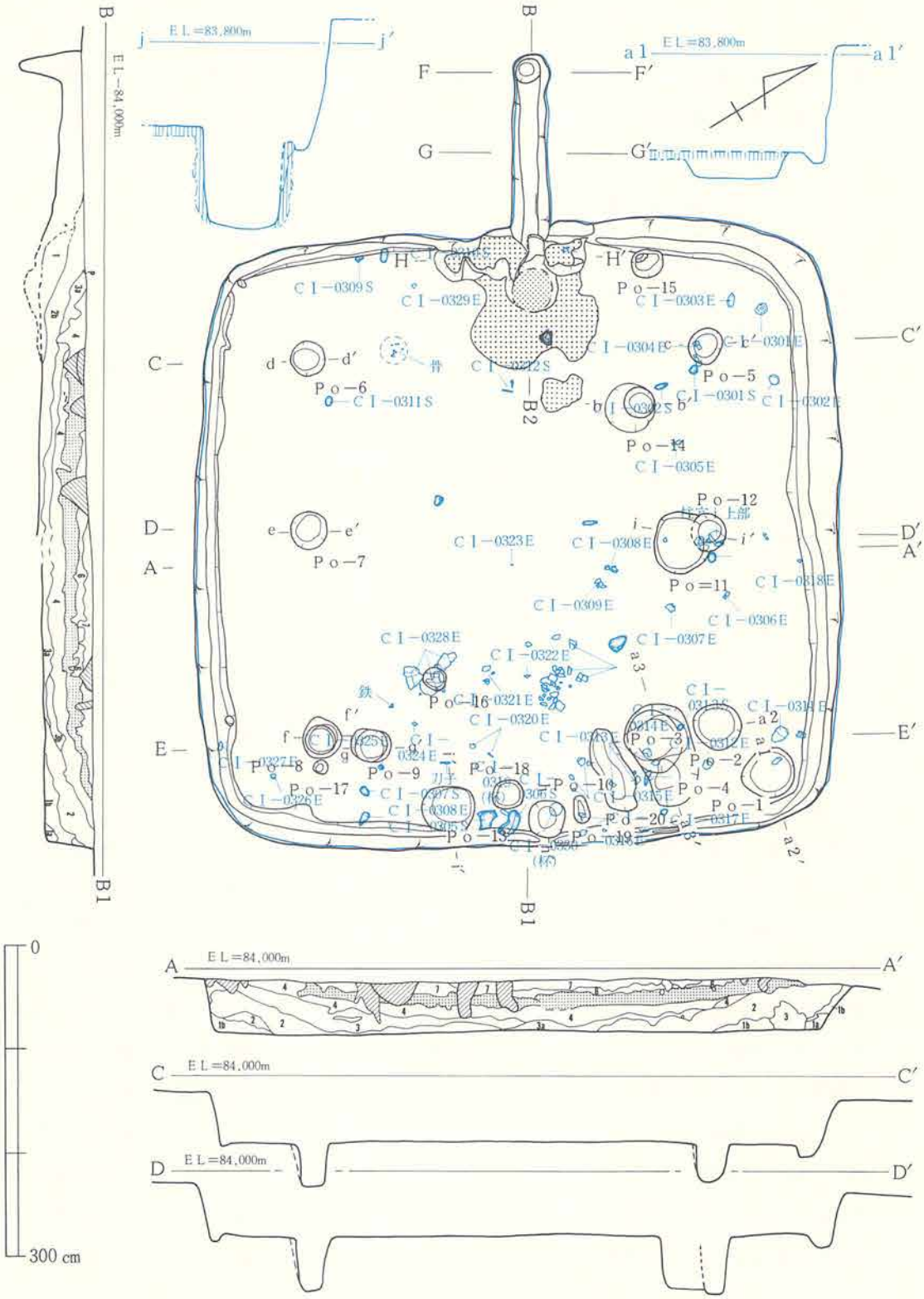
カマドは北西壁の中央に設けられているが、その遺存状態は良くない。遺存部分は、燃焼部底面、煙道よりの両袖基底部、そして煙道部である。袖や天井に用いられる礫等の芯材は全く認められず、袖部を形成する土のほとんどは崩壊流出し、本来の位置にあるものは極わずかである。現存する両袖の最大幅は52cmで、その基底は前庭の貼付土と連続している。燃焼部底面は径41×38cm、深さ６cmほどのほぼ円形にくぼんでおり、その底面の下位は、南部浮石層が６～７cm強く赤変している。なお、底面の上位には、煙道底面の焼土層に連続する焼土が堆積しているが、この焼土中には炭化物粒、獣骨片、骨粉が混在する。煙道は、燃焼部の奥から傾斜して上がり、煙り出し付近で水平となる。煙道部の長さは、煙道入口（断面図Ｈ～Ｈ′ライン付近）から 200cm外方へ、また竪穴上端から 165cm外方へ延びている。煙道口は灰白色～褐灰色の粘

性土で幅18cm、高さ13cmの楕円形に造られており、その奥は上位からの掘りこみ形成横断面形は上端幅34cm、下端幅13cmのU字状を呈する。煙り出しは、開口部が35cm前後、底部径7～5cm、深さ60cmである。

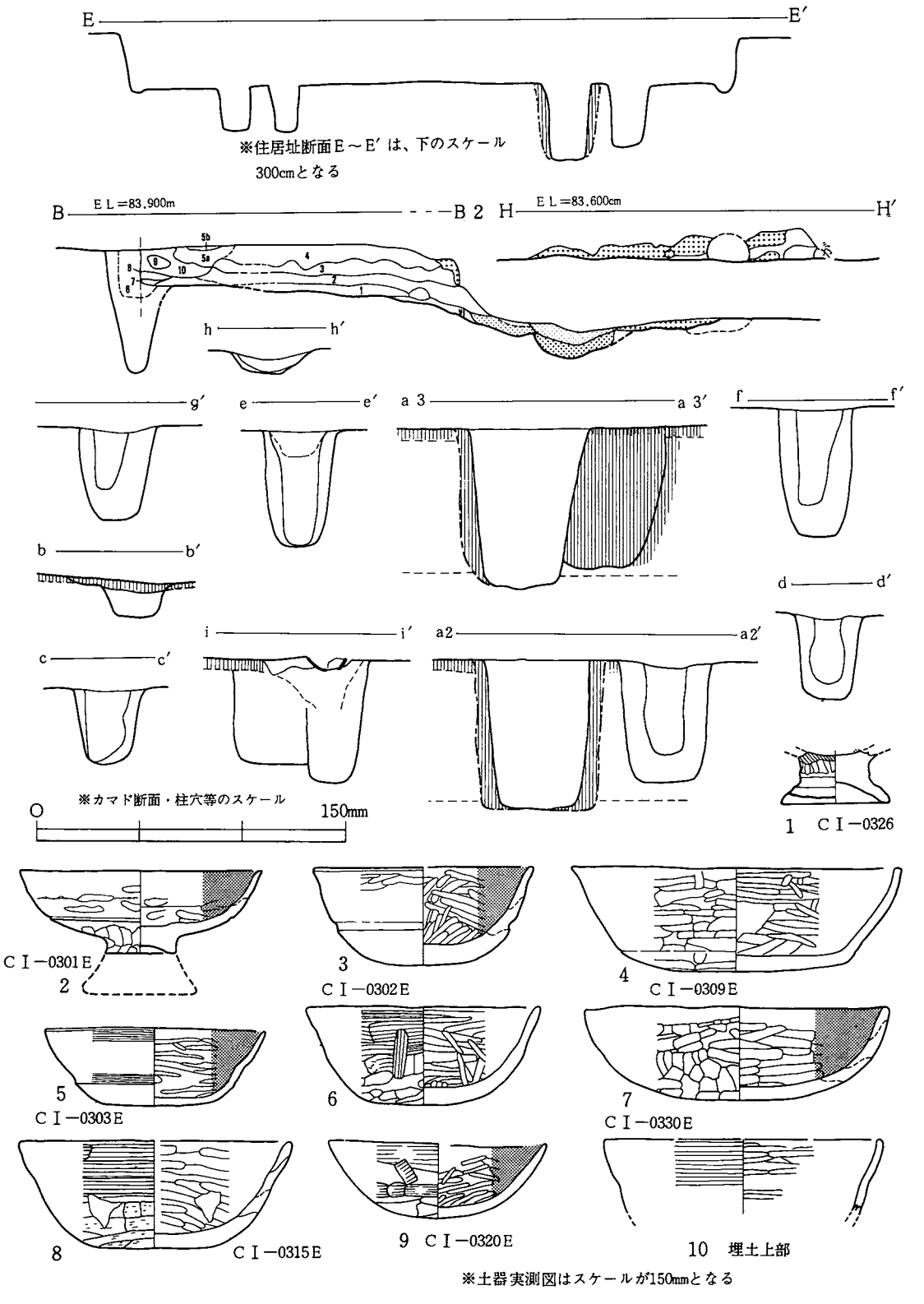
CⅠ－03　住居址柱穴計測表　(単位cm)

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備考
1	51×50	38×38	12.5	
2	47×44	34×31	60.3	
3	68×65	40×38	73.8	
4	(50)×(48)	28×22	67.5	
5	35×32	24×20	38.0	
6	34×34	25×20	40.6	
7	37×36	26×22	53.0	
8	39×38	24×23	51.2	
9	38×33	21×20	44.9	
10	36×35	20×17	9.3	
11	60×54	50×45	60.5	
12	36×(30)	23×20	52.0	
13	52×44	38×34	48.3	
14	30×28	22×20	12.0	
15	31×26	20×16	11.8	
16	23×23	18×15	12.0	
17	24×14	8× 8	10.5	
18	29×28	24×23	31.0	
19	26×16	18× 7	11.7	
20	86×32	68×15	14.9	溝

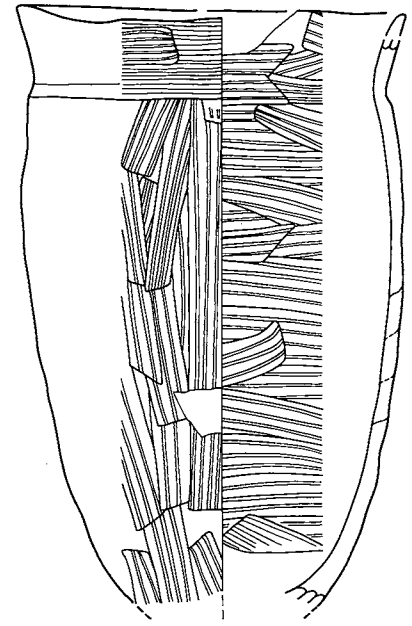
出土遺物は、大きく床面出土と投げこみ等により形成された埋土(2・3層)出土とに区別される。このような埋土との関係から住居の廃棄時により近い資料として図版26、27の2・3・4・7 11 13・14・18～20・23・24の土師器、礫石器があげられる。他の掲載資料は前述の2・3層からの出土である。図版26の2は、本来1と同様の高坏部をもつものと考えられるが、脚部を欠損しており、その欠損面を研磨によって再整形している。成形はロクロ不使用で内外面とも横位のミガキ調整が施されているが、ミガキは粗く単位は不明である。また、外面には沈線が、内面には段が認められ黒色処理が施されている。3は、内外面にミガキ調整、外面の中央より下に沈線状の段が施され、内面は黒色処理が施されている。4は底面・身とも横位のミガキ調整が施され、外面の底部よりに細い沈線が一条施されている。内面の黒色処理は不明である。7は内外面ともミガキ調整が施されているが、外底面はナデ調整とミガキ調整が重複している 11～14は、内外面ともハケメ調整あるいはヘラナデ調整が施され、ミガキ調整は認められない。15～19は敲く作用によってその作用面が形成されており、20・23は擦る・敲くによる作用面の形成、21・22は擦る、研磨の作用面をもつが20・21・23の裏面や一端には敲く敲かれた作用面も認められる。25・26は鉄製品で、26は完形の小刀子、鉄断片である。



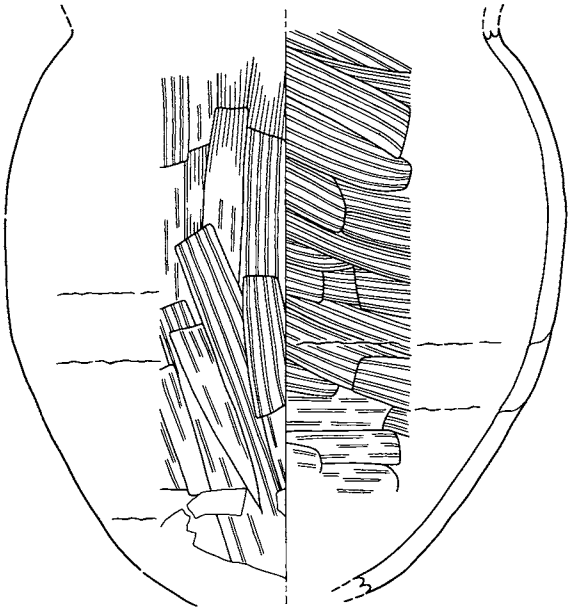
図版25：ＣＩ－03住居址 (1)



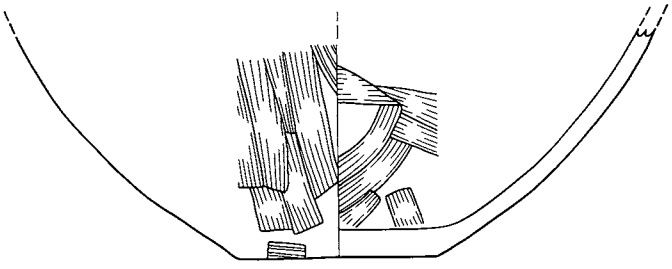
図版26：CⅠ−03住居址(2)と出土遺物(1)



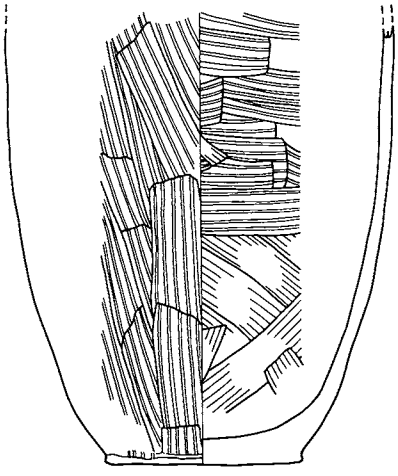
11　ＣＩ－0310Ｅ

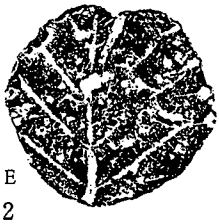


13　ＣＩ－0328Ｅ

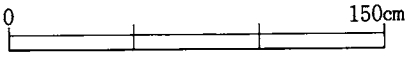


14　柱穴　ＣＩ－0332Ｅ

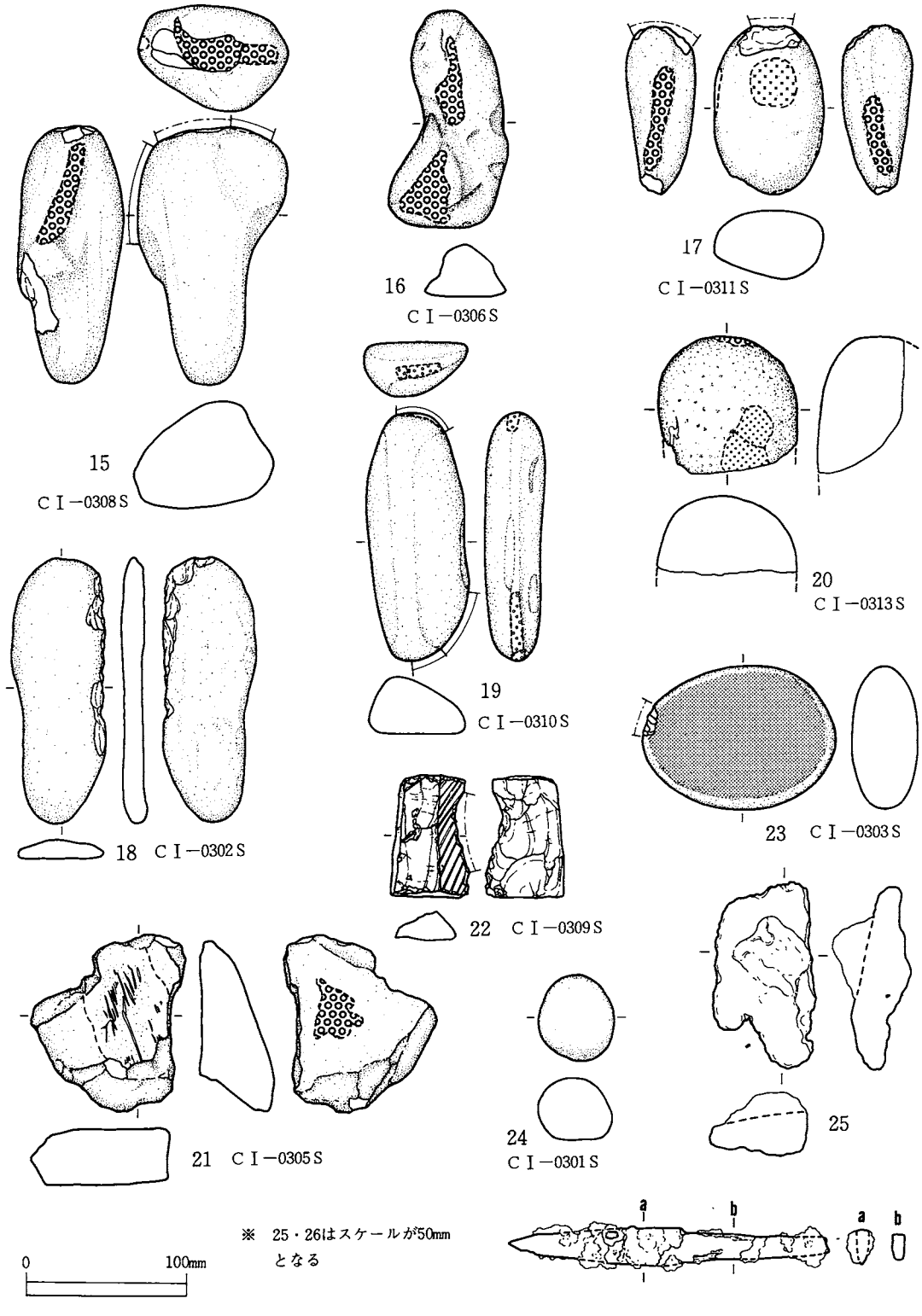




ＣＩ－0311Ｅ
12



図版27：ＣＩ－03住居址出土遺物　(2)



図版28：CⅠ−03住居址出土遺物 (3)

(5) CⅡ－01住居址　　(図版29～32、写真図版22～23)

本遺構は、CⅡ－B、E・F区にまたがっているが、その主体はCⅡ－F区である。また、煙道部はその北西壁外方のCⅡ－区に位置している。確認状況はCⅡ－001 土坑と同様の耕作土を除去した段階のⅢ層下部でその平面形を確認している。幸いに本住居址上には耕作による攪乱が少なく、更に掘り下げる必要はなかった。

平面形は、各コーナーが円味をもち、南東壁が若干外方に膨んだ左隅円の方形である。しかし、南西壁が長く北東壁が短く、長さが異なることから方形の中でも台形にふさわしい形状を呈している。確認した規模は、主軸上端 304 cm・同下端 240 cm・直交軸上端 307 cm、同下端 260cmで、主軸の方向は真北に対して西偏57度の方向である。なお、平面形が台形をなすことから、主軸方向に平行する南西壁よりの最大長は上端 304cm・同下端 247cm、最短の北東壁付近では上端 242cm・同下端 190cmとなる。

壁の高さは、全体的に南西側が高く北コーナー付近が低く、30～41cm範囲にあるが、概ね37cmである。また、立ちあがり外傾度は南東壁が30～35度で立ちあがったのち、除中から外反ぎみに立ちあがって上端に達している。南西壁および北東壁は40度前後の角度で立ちあがっている。また、北西壁のカマド部両側は若干の差が見られるものの30～35度で立ちあがった後、途中から50度前後の外傾度となっている。

埋土は、大別6層に区分しているが、2層はa・bの2つに細分している。1層は壁の大部分と床面を被う土層で、方向によって若干の差が見られる。性状等は小粒浮石質の黒褐色土(10YR2/2～2/3)で十和田b浮石を3％前後含む。また、炭化物小粒、中振浮石小ブロックが不規則かつ散在的に含まれ、北西側ではカマドの袖等を形成したにぶい黄褐色土(10YR5/3～5/4)の小ブロックがわずかに混在する。締りは床の中央付近は緻密で締りが良いが、壁際では緻密さ、締り、共に弱くなる。2層は小～中粒の十和田b浮石が15～30％混在した暗褐色土(10YR3/3～3/4)であるが、浮石の混在量は地点によって大きな差が認められる。また変色した南部浮石や中振浮石の小ブロックも散見される。2aと2bは基本的には同一であるが、2a部には小粒浮石質の黒褐色土(10YR2/2～2/3)が混在する。3層は浮石質の黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)に南部浮石が散在し、この南部浮石は特に南西側に多く見られる。なお、小～中粒浮石は十和田b浮石で混在率は15～20％である。また、本層の分布は南西側と北東側とに存在し、竪穴全体には分布していない。4層は暗褐色土(10YR3/3～3/4)を主体としたものに黒褐色土(10YR2/2～2/3)、Ⅳu層土の小～大ブロックなどが不規則に混在した層である。なお、3層上部から本層下部にかけては土師器等の細片が多く含まれる。5層は中粒浮石質の黒色土(10YR1.7/1)で、少量の黒色土(10YR2/1)ブロックを含む。浮石含有率は20～30％と多く、基本土層のⅡ層を主体とした2次層と考えられる。6層はカマ

ド部周辺にだけ形成された層で、シルト質のにぶい黄褐色土（10ＹＲ5／3～5／4）と浮石質黒褐色土（10ＹＲ2／2）～2／3）との不規則な混合土層である。このシルト質黄褐色土は、カマド形成土の一部である。

床面は、南東～北西方向では起伏が見られ、南西～北西方向では各部とも比較的平坦であるが、全体としては床の中央付近が低くなっている。なお、本住居址の床面には他の住居址で見られるような炭化材・炭化材片・焼土は認められない。また、床面Ｖ層下部からⅥ層上面にあり、中央付近が若干固く締っているが特に固いと言うほどでもなく、厚さ１～２cmの汚れた土以外には、貼床の形跡も認められない。床面で確認した施設、あるいは構造としては、柱穴と考えられるもの８穴だけで、周溝、貯蔵穴、炉は確認していない。

柱穴の特徴は、深さ19cm前後の直円筒形で底面はわずかに凹面となっている。埋土は黒色土～暗褐色土の混合土で、柱痕跡や炭化材片は認められない。また、Ｐｏ－３・４・５・７は床面で確認したものであるが、Ｐｏ－１・２・６・８は床の汚損土等を２～４cm除去した段階で確認したものである。

ＣⅡ－01　住居址住穴計測表　（単位cm）

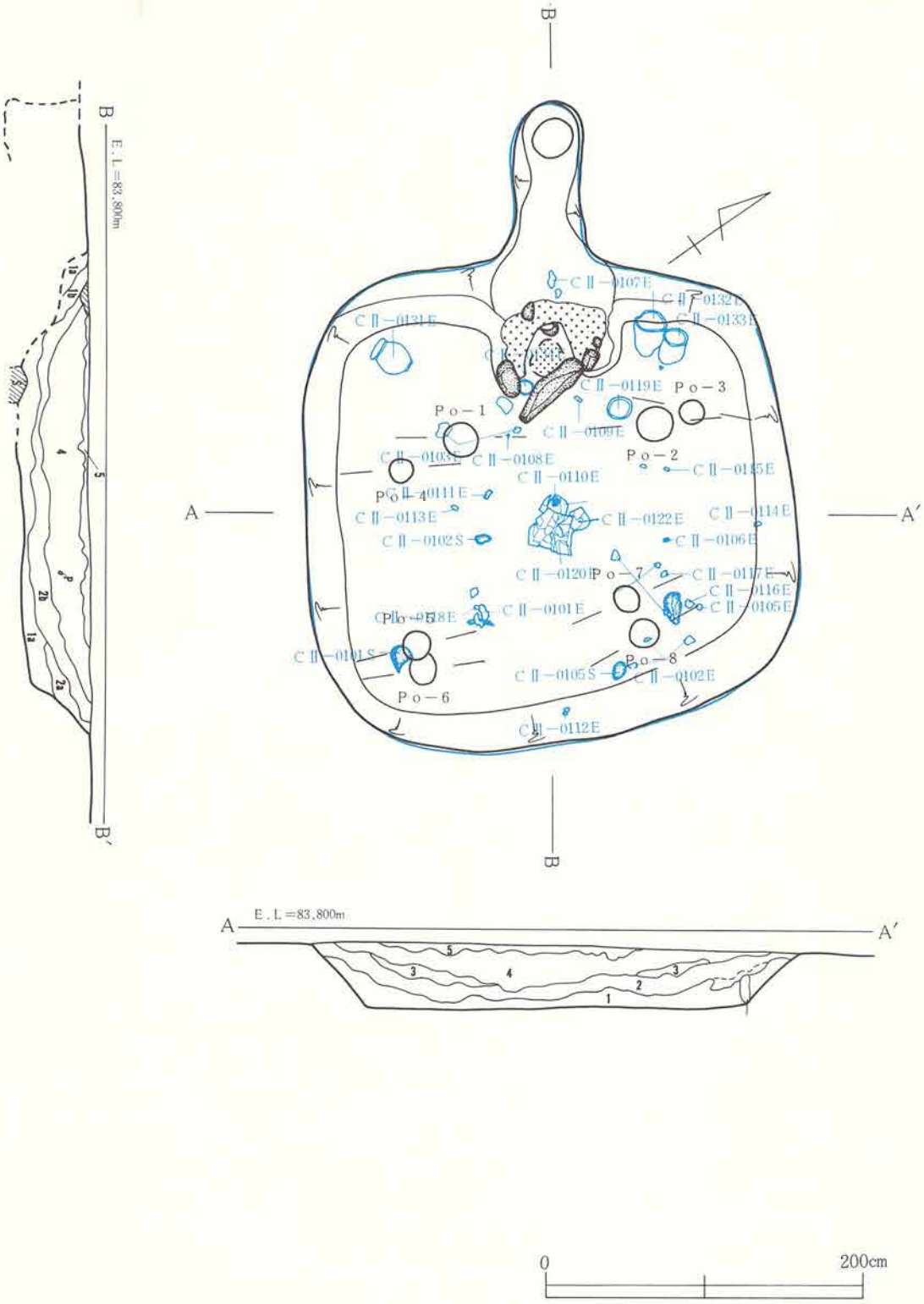
柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
1	22×20	――	19	何れも直円筒形の掘り方で柱痕跡なし、底面が略平坦へ若干凹面
2	23×22	――	19	
3	16×15	――	19.4	
4	14×14	――	18.7	
5	18×18	――	21.8	
6	(20)×16	――	12.5	
7	18×16	――	21.7	
8	18×18	――	19.8	

カマドは、前述したように北西壁の中央に設けられており、遺存状態は比較的良好である。カマド本体部は、左袖の芯材および天井材として用いられた川原石の移動が認められるが、両袖の芯材礫は本来の位置に残っている。右袖の芯材礫は３個が直列に並び、最奥の礫は袖や天井部を形成したシルト質のにぶい黄褐色土（10ＹＲ5／3～5／4）や灰白色～にぶい黄褐色土（10ＹＲ7／1～7／2）に包みこまれている。左袖部は最奥の礫以外は、移動または除去されている。カマドの形成は袖部に基本土層のⅣℓ層、Ｖ層を削り残し、焚き口側の２つの礫はその基本土層中央を穿って棒状の偏平礫を埋めこんでおり、その上に天井石をのせていたものと考えられる。最奥礫は、左右とも削り出し部の内側に穴を穿って据えつけている。そのため最奥の礫内面は火熱による変色・風化を生じている。なお、奥の天井部には、礫が使用された形跡は認められない。袖部の最大幅は98cm、奥天井端までの奥行き56cm、左袖の幅25cm、右袖部の幅27cm 燃焼部底面は概ね平坦で奥行き26cm・幅20cm、最大厚４cm焼土層が形成されている。煙道部は、燃焼部最奥から一段あがって、水平となった後、最奥部に向かって傾斜して下がっている。煙道の規模は、上端幅が40～55cm、下端幅15～25cm、奥の天井端からの長さ130 cmである。煙り出し口の規模形状は、８層中および７

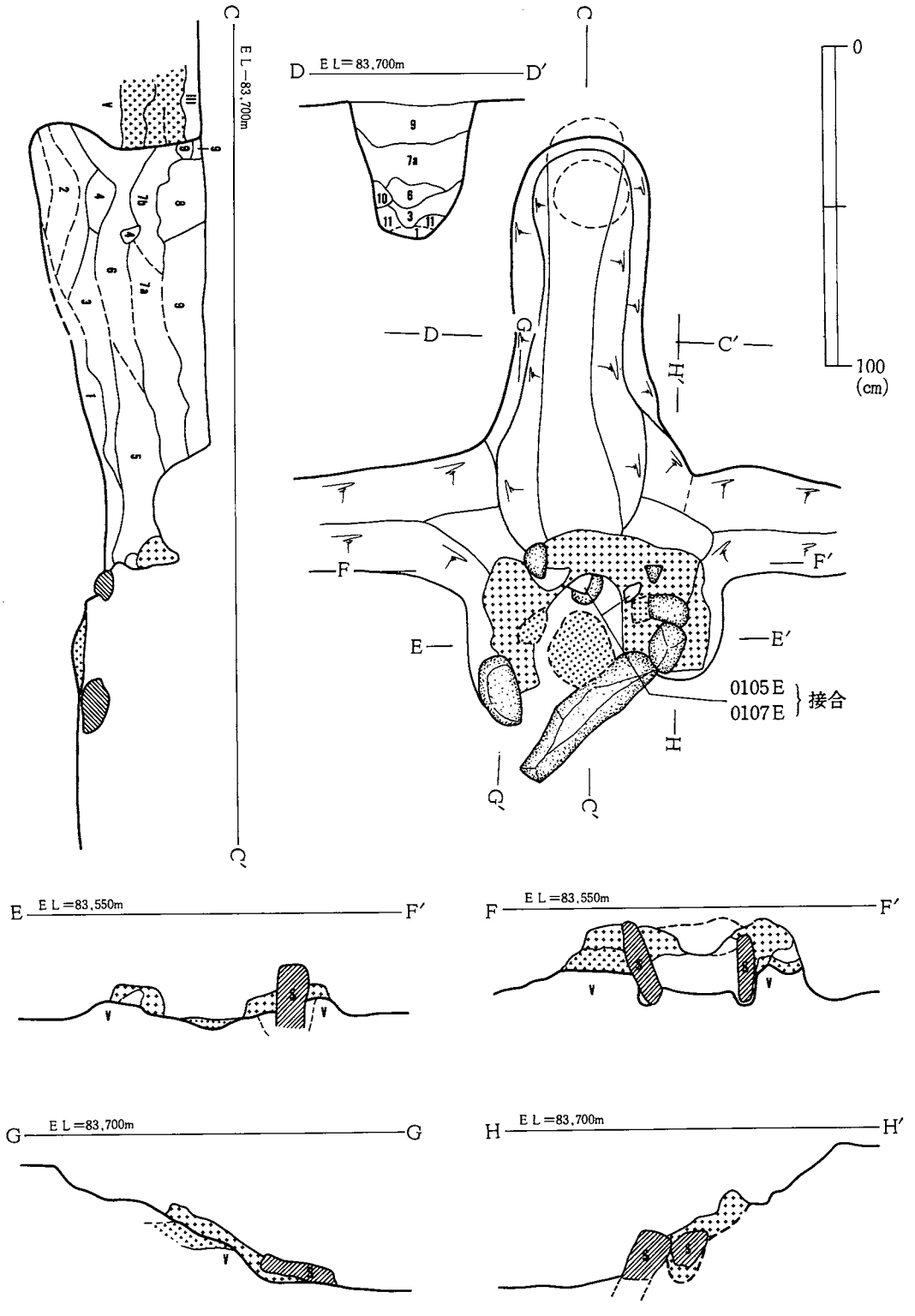
b層中に陥没していた灰白色粘性土の環状分布から23×20cmの円形と考えられる。煙り出し部の深さは53cmである。なお、煙道の形成方法は、埋土7 a層が基本土層のⅢ層であるとこから刳り貫き式煙道が陥没したものと判断される。また、埋土の最下位層と煙道底面との間には粉状の獣骨が炭化物粒、焼土粒と共に薄く堆積しており、特に燃焼部よりの平坦面には多く認められた。

出土遺物は、図版31、32（写真図版23）に示した土師器および5個の礫である。遺物の出土状態は、床に直接のるものと、埋土の3層から4層下部に包含されるものとに大別される。また、一部カマド内から出土した坏破片もあるが、これは3層から出土した破片と接合（C4、CⅡ—0105E・CⅡ—0107E）したものである。CⅡ—0131E、CⅡ—0132E、CⅡ—0133Eの甕形土器3個体は、完形状態で北西壁の西コーナー付近と北コーナー付近の床にあり、壁に立てかけた状態で出土している。CⅡ—0120EA、CⅡ—0120EB、CⅡ—0122Eの坏と甕は、他の破片とともに床面中央から出土しているがこれらは何れも完形復元には至っていない。図版32—12～16の礫は東コーナー床面から一括で出土した礫で、15の礫には弱い磨滅と変色が見られる。その他の土器は、図示した位置の床面から出土している。本住居址を代表するものとしては、CⅡ—0119E、CⅡ—0134E、CⅡ—0131E、CⅡ—0132E、CⅡ—0133Eの土器および図12～16の礫である。

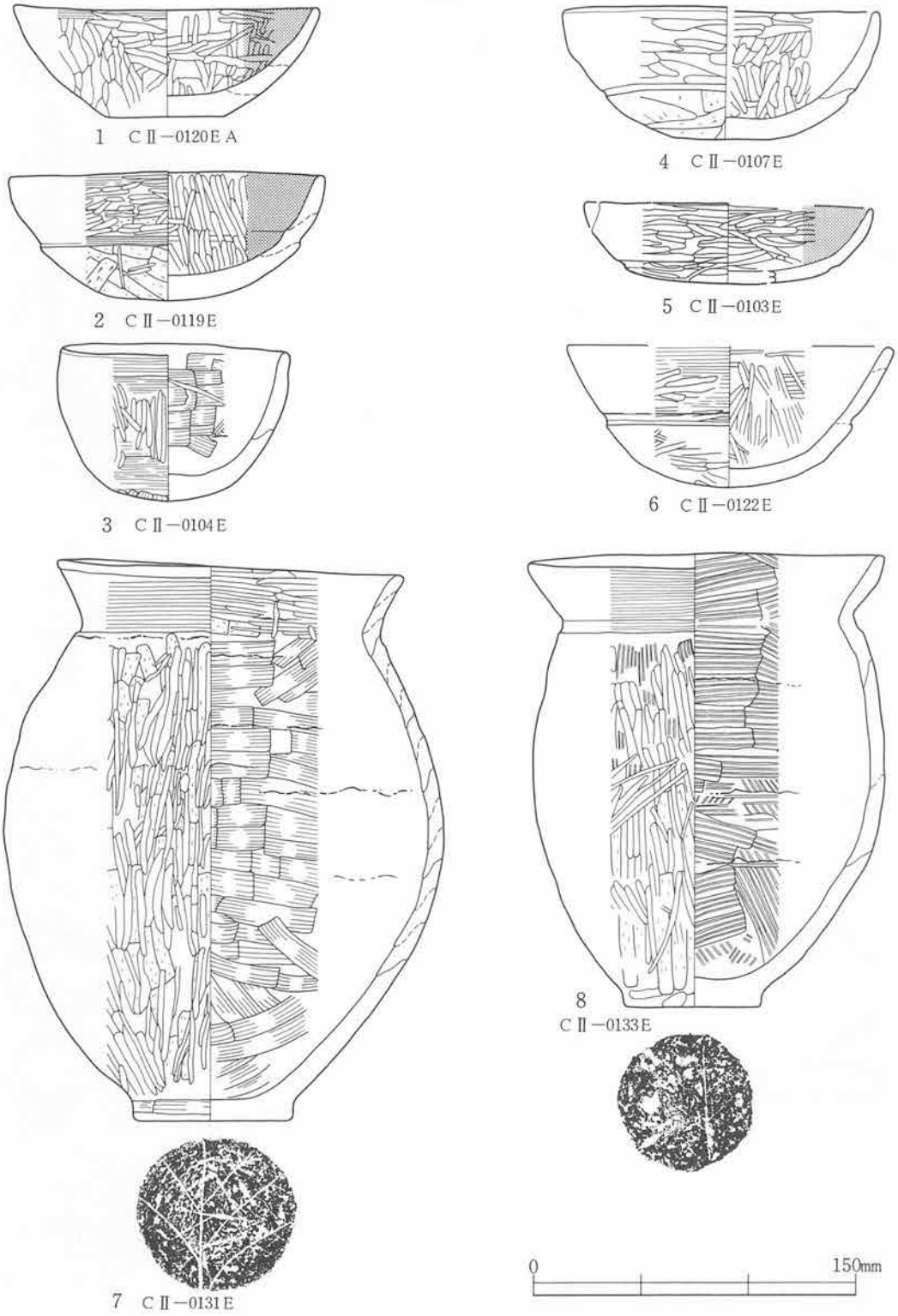
床面から出土した土器のうちCⅡ—0119E、CⅡ—0134Eは、丸底で底面調整はヘラケズリ調整、体部はヘラナデ調整の後にヘラミガキを施している。CⅡ— 0119Eの内面は、ヘラミガキおよび黒色処理が施されているが、CⅡ—0134Eでは底面から口唇部付近までヘラナデ調整が施され、黒色処理はなされていない。CⅡ—0131E、CⅡ—0133E、CⅡ—0132の甕は器形に若干の差は見られるが、何れも肩～頸部に段あるいは沈線状の弱い段をもっている。外面の器面調整は底部周縁がヘラナデ調整、胴体部はハケメ調整あるいは強いヘラナデ調整の後、ミガキ調整を施している。肩～頸部はヘラナデ調整の後、横ナデ調整をし、部分的に横位のミガキを施しているものと見られる。内面は底部から口縁部までハケメ調整あるいはヘラナデ調整で、CⅡ—0131Eでは口縁部に横位のミガキ調整を施している。この3個体の甕底面には木葉痕が見られる。



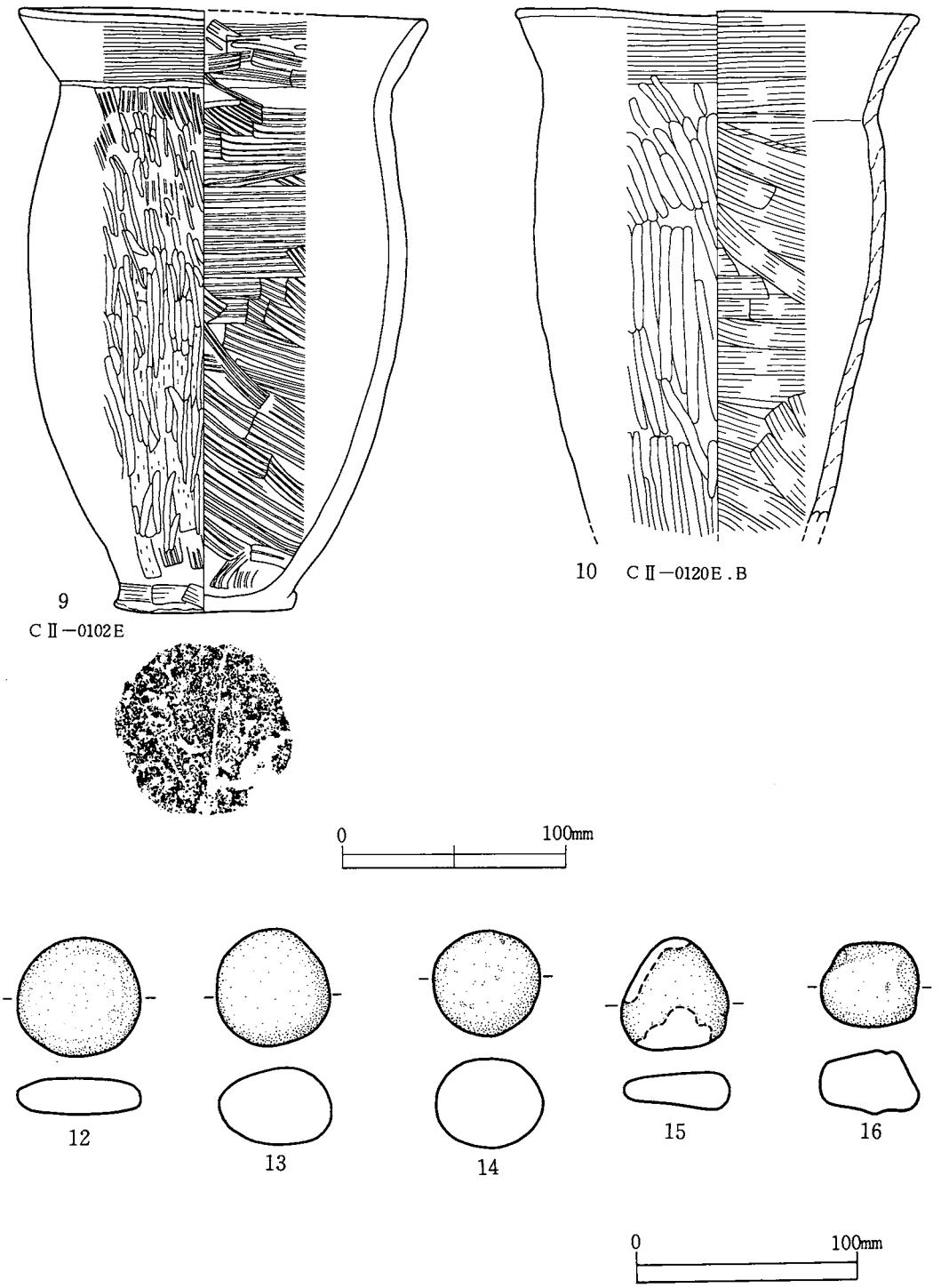
図版29：CⅡ−01住居址（1）



図版30：CⅡ−01住居址 (2)



図版31：CⅡ−01住居址出土遺物 (1)



図版32：CⅡ−01住居址出土遺物 (2)

(6) ＤＩ－01住居址　　（図版33、写真図版24）

本遺構は、ＤＩ－Ｊ区に竪穴部が位置し、煙導部がＤＩ－Ｆ区に位置している。本遺構が確認された区域は、かつて長薯、牛蒡の栽培がなされ、その後ブドウの栽培などがなされているそして調査直前まではビニール・ハウスによる果菜類の促成栽培が行われている。確認状況はⅣℓ 層上部相当レベルまでの耕作土を除去し、Ⅳℓ 層下部が薄く残る面で遺構の全体形状を確認している。しかし、住居址はこの段階でも多くの耕作痕によって攪乱されており、炭化材片や十和田ａ火山灰のブロックが散在するなど、遺存状態に危惧を感じた。

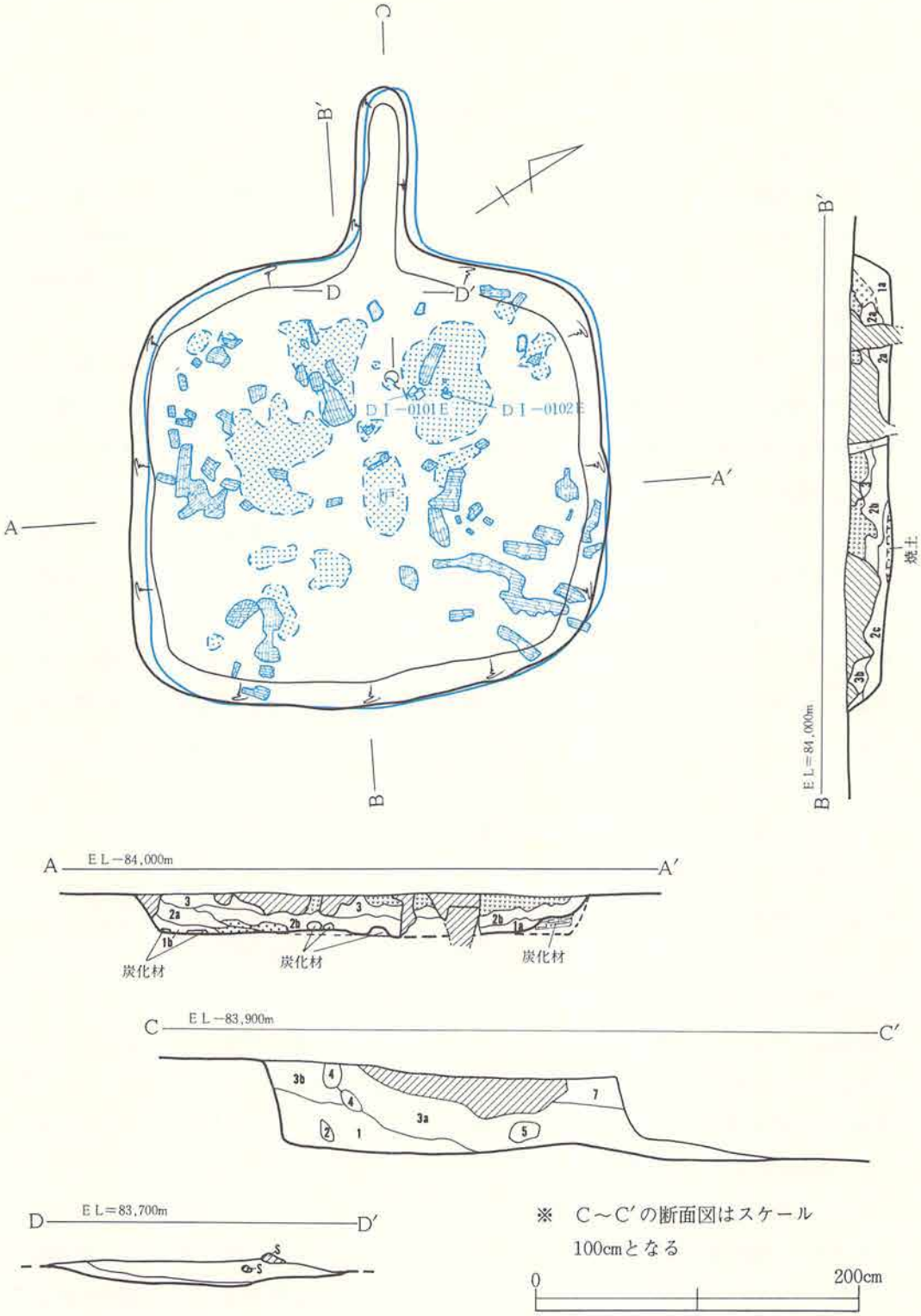
平面形は、各コーナーが円味をもち、壁も外方へ若干膨んだ隅円の方形を呈する。確認規模は、主軸上端280 cm・同下端248 cm、直交軸上端296 cm・同下端266 cmで主軸の方向は真北に対して西偏56度である。壁の高さは20～26cmで、立ちあがり外傾度は35度前後である。カマドは、北西壁の中央に設けられている。

埋土は、大別４層に区分したが更に細分した層もある。１層は中掫浮石と焼土等の混合層で炭化物が混在する。本層は床に散在する炭化材を被っており、また分布位置によって色調構成が異なる。２層は十和田ｂ浮石を多量に混じえた黒色土（10ＹＲ 1.7/、2/1）、および十和田ａ火山灰ブロックが混在する２ｂとに区分した。何れも焼土、炭化材片を含み、床に接する所では炭化材を被っている。３層は十和田ａ火山灰の中～大ブロックと暗褐色土との不規則な混合土層で、極新期の耕作によって破壊されている。４層は十和田ａ火山灰の純粋層で、層厚は最大16cmである。

床面には、多量の焼土および炭化材が分布しており、東コーナー周辺では丸木状のものが放射状に分布している。焼土は、炭化材にのる形のものと、床が焼土化したものとが見られ、壁際では壁の傾斜に沿った形で分布堆積している。また、南東～南の壁は強い焼土化が生じている。以上の炭化材・焼土層は、壁際等の一部を除けば何れも現地性のものと考えられることから、本住居址は焼失住居と判断される。

床面は、ゆるやかな起伏をもってⅥ層中に形成されており、東側が低くなっている。床を形成する土は、Ⅵ層土に十和田ｂ浮石・南部浮石が少量混在し焼土化しているが、特に貼床や整地を行った形跡は認められない。なお、床面で確認した施設、あるいは構造としては他の焼土よりも強変した部分を床の中央付近で確認したが、柱穴、土坑あるいは周溝や壁や壁柱穴列などは一切認められない。

カマドは、北西壁の中央に設けられたものと考えられる。しかし、遺存する部分は煙導部だけであり、カマドの袖部、礫などは認められない。なお、燃焼部と考えられる位置の床面は若干凹んではいるが焼土化等の変化は認められない。煙導部は、竪穴上端から外方へ104 cmほど延びており、その上端幅30～34cm、下端幅16～20cm、深さは20～26cmである。その形成方法は、



図版33：ＤⅠ−01住居址

煙導部上位からの掘りこみによるものである。炉跡かと思われる焼土層は、床面のほぼ中央に位置し、その規模は長軸42cm、短軸26cmで、床面下3cmが非常に強く赤変し、固くなっている。

出土遺物としては、土師器甕の胴体部破片が5点出土しているが、風化のために何れも詳細は不明である。出土層位は、3層および新期攪乱部である。

(7) ＤＩ－02住居址　　（図版34～37、写真図版25～27）

本遺構は、ＤＩ－Ｃ・Ｄ・Ｇ・Ｈの4区域にわたって位置しており、カマドおよび煙導部はＤＩ－Ｃ区に位置している。本遺構が確認された区域は、ＤＩ－01住居址と同様に、かつては長薯、牛蒡、ブドウなどが栽培され、調査開始前まではビニールハウスによる果菜類の促成栽培が行われている。確認状況は、Ⅳℓ 層上部相当のレベルまで除去し、Ⅵℓ 層の下部が薄く残る面で遺構の全体形状を確認している。しかし、住居址はこの段階でも多数の耕作痕によって攪乱されており、その攪乱部には土器の細片、十和田ａの小～大ブロック、炭化材片が散見された。土器片・炭化材片は、特に南東壁よりに多く見られた。

平面形は、各コーナーが円味をもつ隅円の方形で、カマドが設けられている北西壁は円弧を描くように外方に若干膨れている。確認した規模は、主軸上端350cm．同下端310cm、直交軸上端364cm・同下端322cmで、主軸の方向は概ね真北に対し西偏50度である。壁の高さは34～42cmの範囲にあり、大部分は40cmである。壁の立ちあがり外傾度は、15～30度の範囲にある。カマドは、北西壁のほぼ中央に設けられている。

埋土は、耕作による攪乱部を除いて大別4層に区分したが、各々を更に細分している。なお、層番号は必ずしも堆積順位ではない。1層は南西壁際を除いた区域に馬蹄形に分布する層で、カマド周辺を除くと、壁に沿っての堆積である。性状は中掫浮石のブロックと黒色土ブロックとの混合土で、ａ～ｃでは各々の比率に若干の差が見られる。また、Ｉｃではカマドの袖を形成した灰白色土が多く混在する。2層はａ～ｃに細分、2ａは小粒浮石質の黒褐色～暗褐色土（10YR 3/2～3/3）が主体で黒色土、中掫浮石などのブロックを含む。また、少量だが炭化材片・焼土ブロック・礫砕片・南部浮石を含む。2ｂは小粒浮石質の暗褐色土(10YR 3/3～3/4)を主体とし、黒色土・黒褐色土のブロックや南部浮石（5％前後）炭化物粒が不規則に混在する。2ｃ層は層準としては1層の一部かと思われるが、小粒浮石質の黒褐色土(10YR 3/1～3/2)に、南部浮石（15～20％)、少量の中・大粒浮石を含み2ａ層と漸移しつつ同化する層である。3層は、土器小片、南部浮石、炭化物、焼土粒を不規則に含んだ褐色土～暗褐色土でⅥ層上部に近似した土を主体とする。4層は、十和田ｂ浮石、中掫浮石、南部浮石を不規則に含んだ黒色土～黒褐色土（10YR 2/1～2/3）で、含有する浮石の種類によってａ～ｃに細分した。4ａ

層は十和田ｂ浮石が最多で→南部浮石→中掫浮石、４ｂ層は南部浮石が最大→中掫浮石→十和田ｂ浮石、４ｃ層は中掫浮石と十和田ｂがほぼ同量で南部浮石は極小量である。

埋土と遺物の関係は、南東の壁際では２ａ・３・２ｂ層中に包含され、他では２ａ上部から２ｂ層中に包含される。図元した礫器は何れも床面にあり、炭化材（カヤ、クリ材）より下位にあるが、クルミ核の破片は２ｂ層上部である。

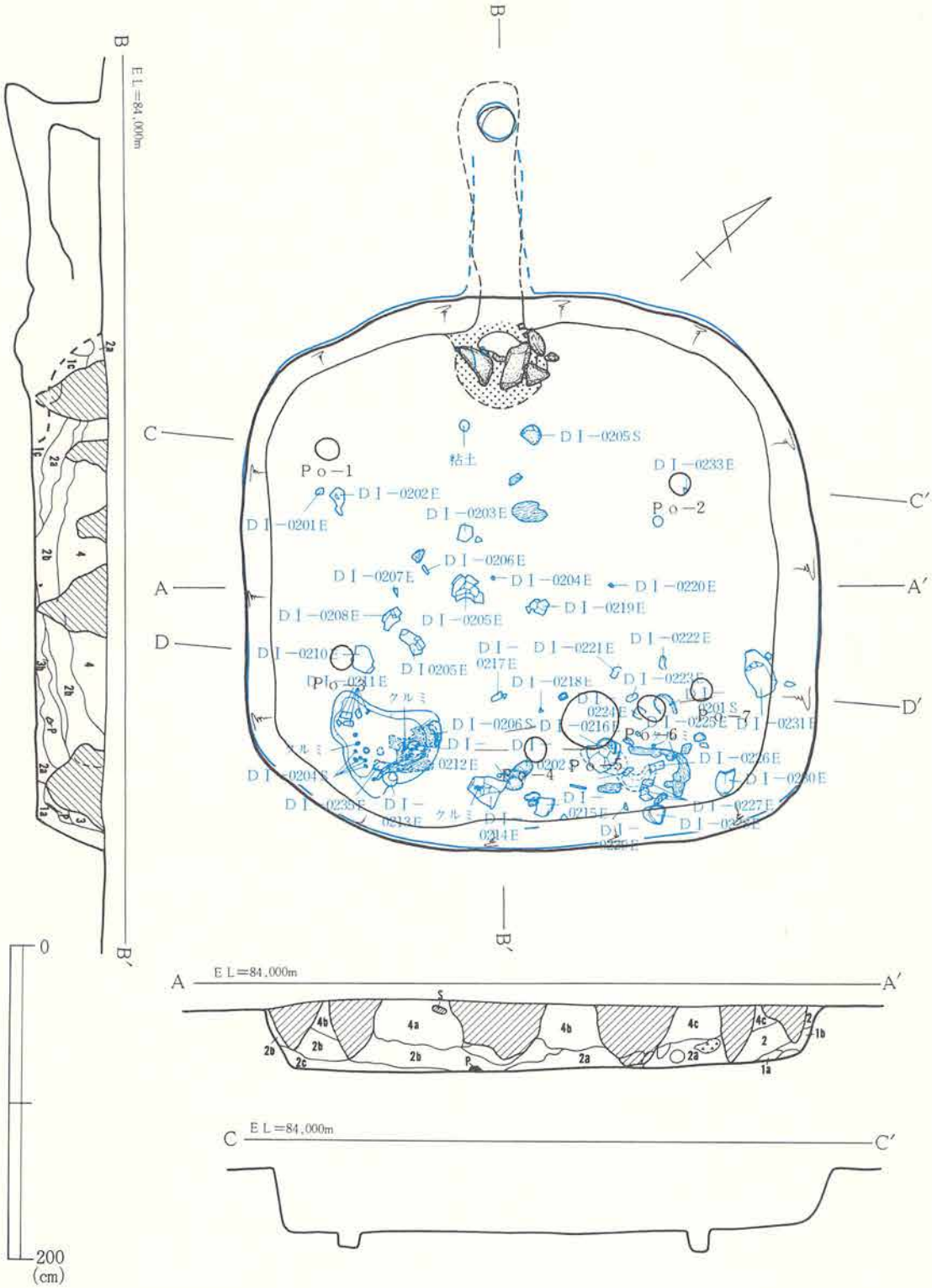
床面は、ゆるやかではあるが波うっており、カヤ、クリ材の炭化材や細片で薄く被われていることから、本住居址は焼失住居と考えられる。図示した炭化材の分布状態は形状の明確な一部である。床面の凹凸は、南西壁際で目だつが、北側は比較的平坦であり、全体的に固く締まっている。また、カマド前庭から南東壁中央を結ぶ区域が幅120 cm～150 cmが貼り床に近似した状態で特に固く締まっている。その土は、中掫浮石と黒褐色土、およびⅥ層土の混合土で厚さは１～２cmである。しかし、この貼り床状の区域と他との区別は明確ではなく図示しがたい。

床面で確認した施設、構造としては、柱穴と思われる小穴６穴と、極浅い小型の土坑１基であり、周溝、貯蔵、炉跡等は確認されていない。柱穴６穴の特徴は、比較的浅い直円筒形で、何れも浅く、また底面は平坦～弱い凹面をなしている。埋土中には炭化材片が認められたが、柱痕跡は不明である。Ｐｏ－５は上端径37×35cm、深さ５cmで、底面が凹面をなしている。その埋土は２ｂ層土である。

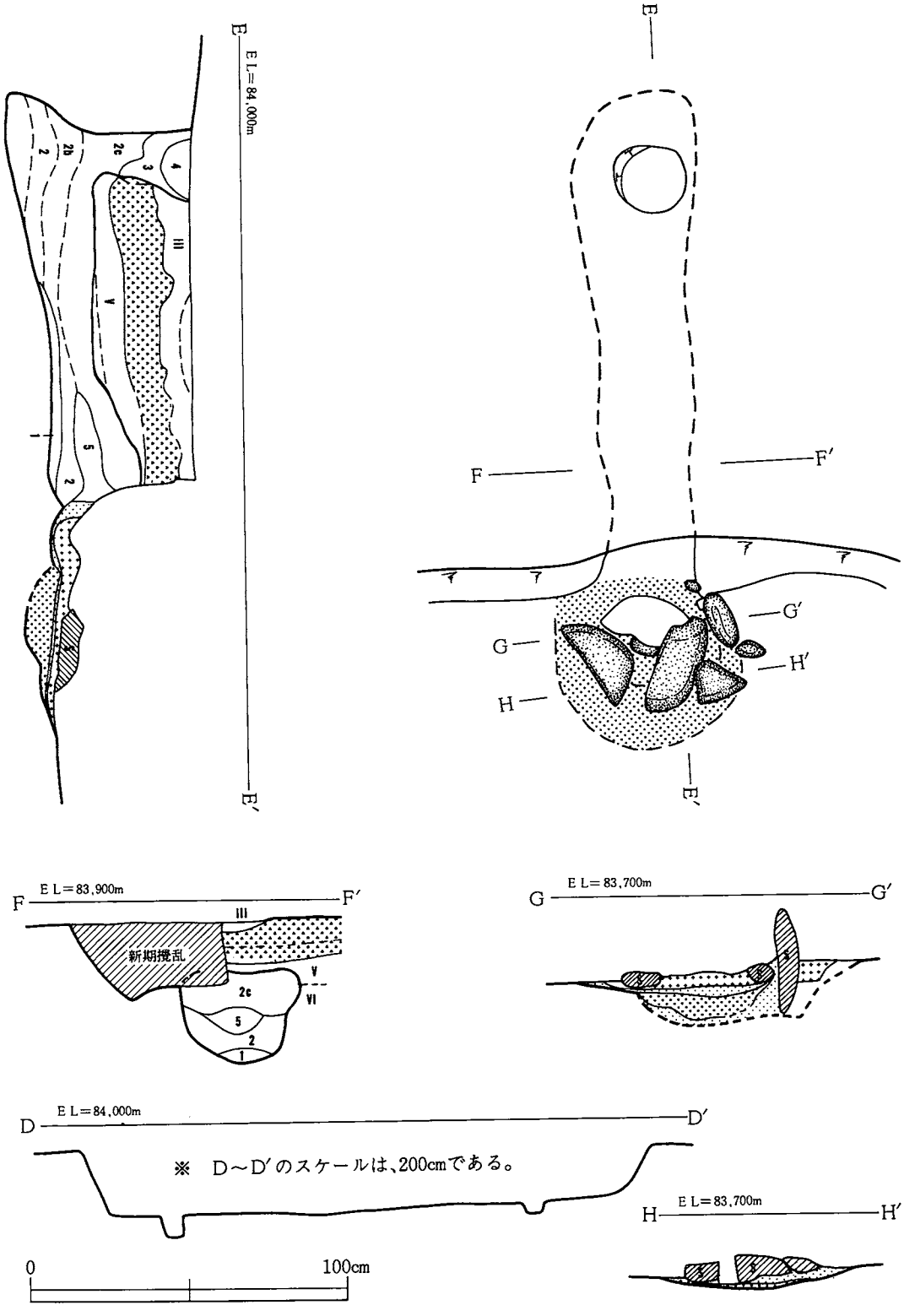
ＤⅠ－02　住居址柱穴計測表

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
1	16×13	――	15.8	
2	14×14	――	14.5	
3	14×14	――	19.0	
4	16×13	――	16.3	
5	38×34	――	4.7	
6	18×15	――	9.6	
7	14×14	――	7.3	

カマドは、前述したように北西壁のほぼ中央に設けられている。耕作等による新期の攪乱は認められないものの遺存状態は良好とは言えない。本来の位置で残っているのは袖石の一部と燃焼部の焼土層、そして煙導部である。焼土層の規模は58×54cm、厚さ８cmで、カマド形成土の灰白色の粘性土で被われている。また、袖石および他の扁平礫も灰白色粘性土に埋まっており、新期に攪乱、移動の形跡は認められない。燃焼部面は、強変した焼土層の上位に２次焼土層がうすくのり、その上位を灰白色の粘性土が被っている。この粘性土はカマド周辺だけではなく、埋土の１ｃ層と同様に住居中央よりにまで流れており、その上位を１ｃ層が被っている。煙導部は、煙出し中心部までが125 cm、最奥部までが150 cmで、煙出し部の口径は21×19cm、同深さは59cmである。煙導部の形成は、基本土層のあり方から燃焼部側からと煙出し口から刳り貫きによるものである。



図版34：ＤＩ−02住居址 (1)



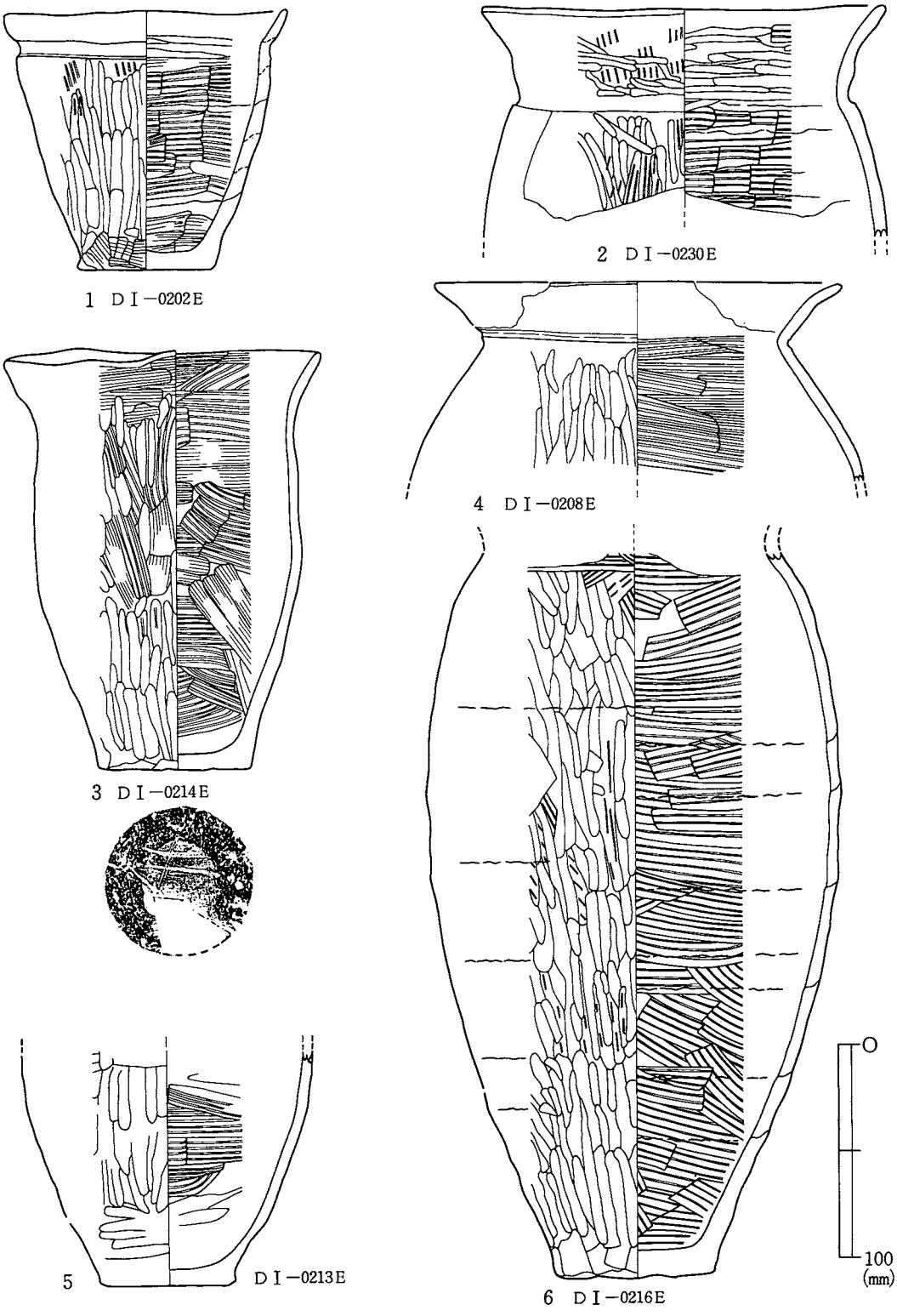
図版35：ＤⅠ－02住居址 (2)

出土遺物としては、図版36、37に示したものである。出土層位・炭化材との関係から、当住居址を代表するものは、図版36－1・3・4・5・6、図版37－7・9～13の土器・礫石器である。これらの遺物は、炭化材および焼土に被われている。

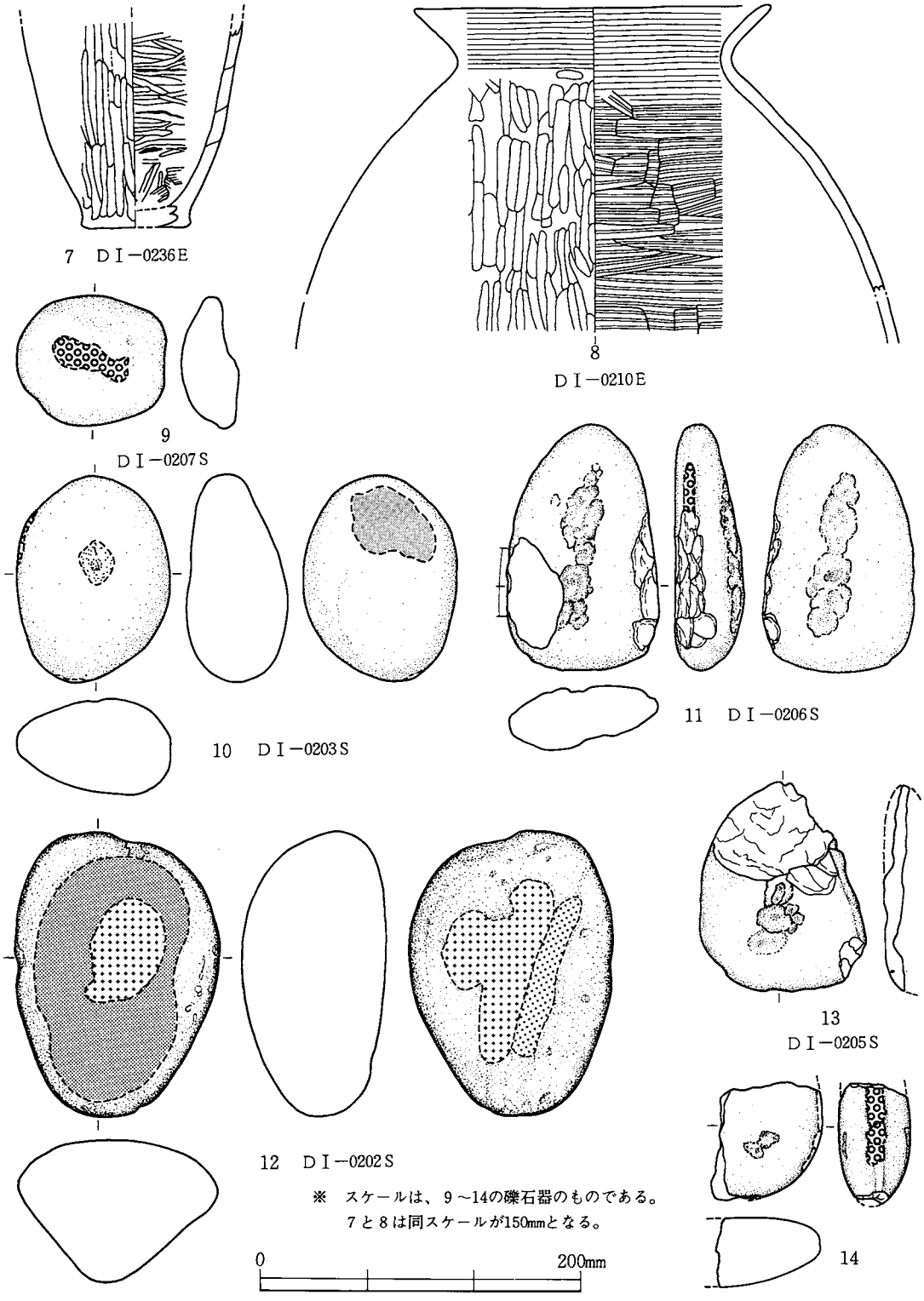
これらの土師器は、何れも甕形あるいは鉢形を呈する器形で、器外面はハケメ調整の後ヘラミガキ、ヘラナデ調整が施される。一部の底部周辺ではヘラケズリ？もなされている。1・4・6では頸部に幅の広い沈線、あるいは段が形成され、口縁部は水挽き様の横ナデである。内面は、ハケメおよびヘラナデによる調整が底部から頸部まで施され、口縁部は横ナデと一部にヘラミガキが施されているが、3では口縁部までハケメ調整である。底部は3が砂目と植物繊維束？の圧痕、他はヘラナデ調整？となっている。

図版37－7は、内外面にミガキ調整が認められるが、内底面はヘラナデ、あるいは掻きとり様のケズリ調整がなされている。同図版の8は球胴形の甕と思われるもので、外面の胴体部は一部にハケメが認められるものの、その上をミガキ調整している。内面は頸部付近まで横位のハケメ調整である。口縁部は内外面とも横ナデ調整である。

図版37－9～13は、何れも床面で炭化材等の下から出土した礫石器である。これらの礫石器の作用部の特徴については凡例を参照されたい。



図版36：DI−02住居址出土遺物 (1)



図版37：ＤＩ－02住居址出土遺物　(2)

(8) DⅡ－01住居址　　（図版39～41、写真図版28～30）

本遺構は、煙導部および竪穴部の大部分がDⅡ－E区に位置しており、南コーナー周辺の一部がDⅡ－E区に位置しており、南コーナー周辺の一部がDⅡ－Ⅰ区に位置するとともにDⅠ－02住居址の東側に近接している。本住居址が確認された区域は、DⅠ－01住居址やDⅠ－02住居址あるいはDⅡ－02住居址確認区域と同様に、かつては長薯・牛蒡・ブドウ等の栽培やビニールハウスによる果菜類の栽培が行われ、耕作による攪乱が深い所まで及んでいる。確認状況はⅣℓ 層上部まで除去し、Ⅳℓ 層が薄く残る面で遺構の全体形状を確認している。幸いに長薯栽培による溝状の攪乱はなく、ブドウ栽培の柱痕跡と張り綱用アンカーの攪乱が部分的に認められただけである。

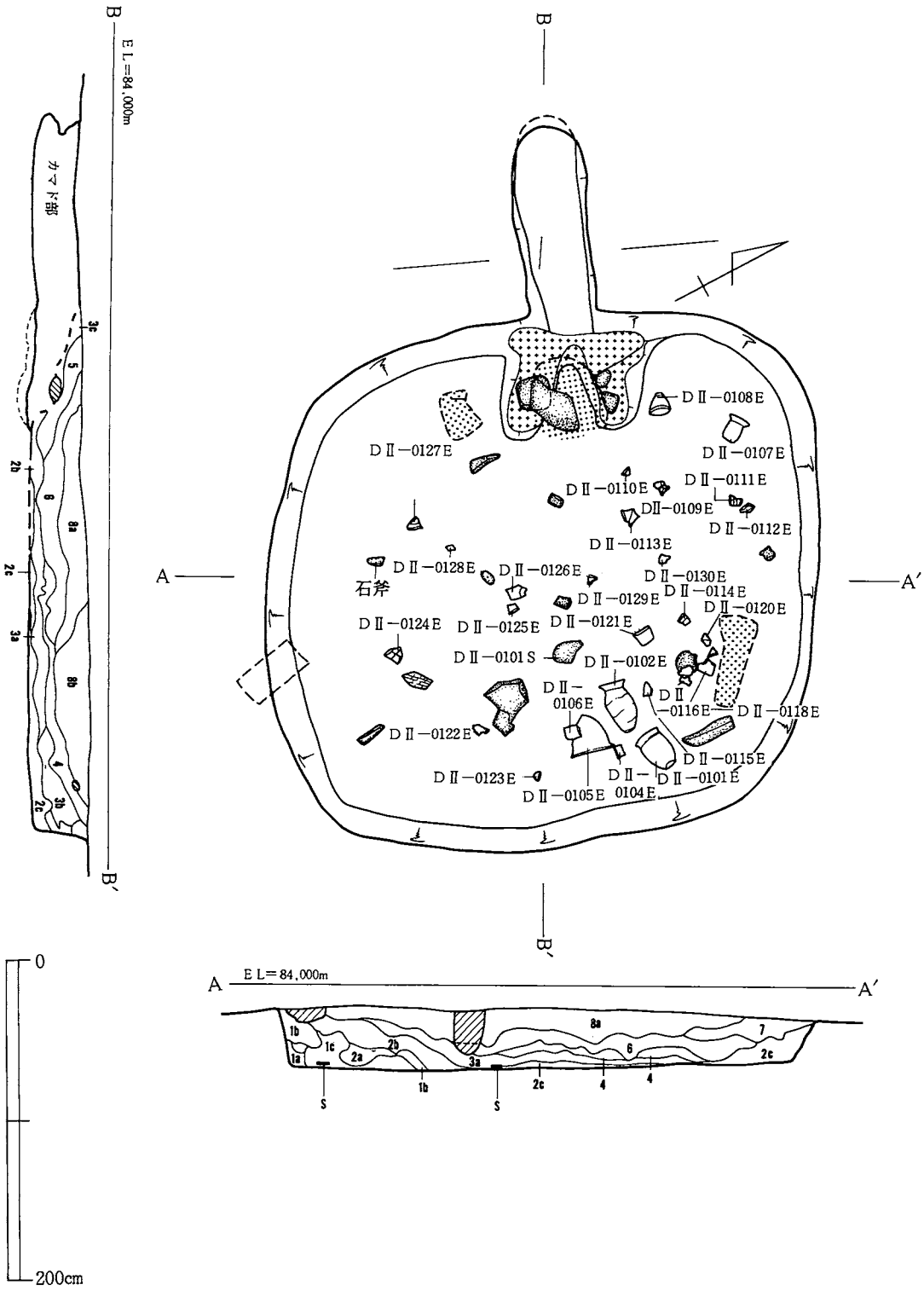
平面形は、各コーナーが円味をもち、各辺が外方へ膨れる隅円の方形をなし、カマドは北西壁の中央付近に設けられている。確認した規模は、主軸上端332 cm、同下端292 cm、直交軸上端344 cm・同下端316 cmで、主軸の方向は概ね真北に対して西偏63度である。**壁**の高さは26～36cmの範囲にあり、大部分は32cm前後である。また、壁の立ちあがり外傾度は、北西壁が25～30度、北東壁30度前後、南東壁および南西壁が12～15度である。

埋土は、耕作による攪乱部を除いて大別8層に区分したが、1～3層および8層は更に細分している。1層は、黒褐色～暗褐色土に中掫浮石が少量（5％以下）混合した層で、基本土層のⅢ層を主な供給源とした層と考えられる。本層の分布は南コーナーから南西壁にかけての約4分の1程度の範囲に限られる。近似した土層は南東壁際にも一部認められるが、層準が異なっている。また、北西側のカマド部上位に堆積する3c層も本層に近似するが、カマド形成土の黄褐色土ブロックを含むことなどから別層とした。本層は更に、細粒浮石質の黒褐色土部（10YR 2/2～2/3）1a層と、中掫浮石を少量含む黒褐色～暗褐色土(10YR 3/2～3/3)の1b層、そして1b層よりも多くの中掫浮石・同ブロックを含む1c層に細分した。2層は壁に沿ってほぼ全域に分布するが、地点によってその構成物・混在物の比率が若干異なるが、各地点間の差異は漸移的変化であることから同一層と判断した。共通する構成物は南部浮石・中掫浮石であり、その多少によってa・b・cに細分した。3層は少量の中掫浮石ブロックを含んだ黒色～黒褐色土（10YR 2/1～2/2）であるが、径5～25cmの黒色土ブロック(10YR 1.7/1)が散在する。また、木根痕等から貫入した十和田a火山灰のブロックも散見する。3bは特に十和田b浮石を含んだ黒色土ブロックが多く含まれる。なお、3b層から上位の4層中に土器が多く包含され、東コーナー付近では焼土の投げこみ層も認められる。4層は中掫浮石を多量に含んだ（40～50％）褐色土（10YR 4/4～4/6であるが、南～南西側では黒褐色土ブロック、南部浮石が散見されるなど、全体として不均一な構成・色調である。5層は中掫浮石を主体とする点では4層と同じであるが、浮石含有率が60％と圧倒的に多く、黒褐色土～暗褐色土のブロック

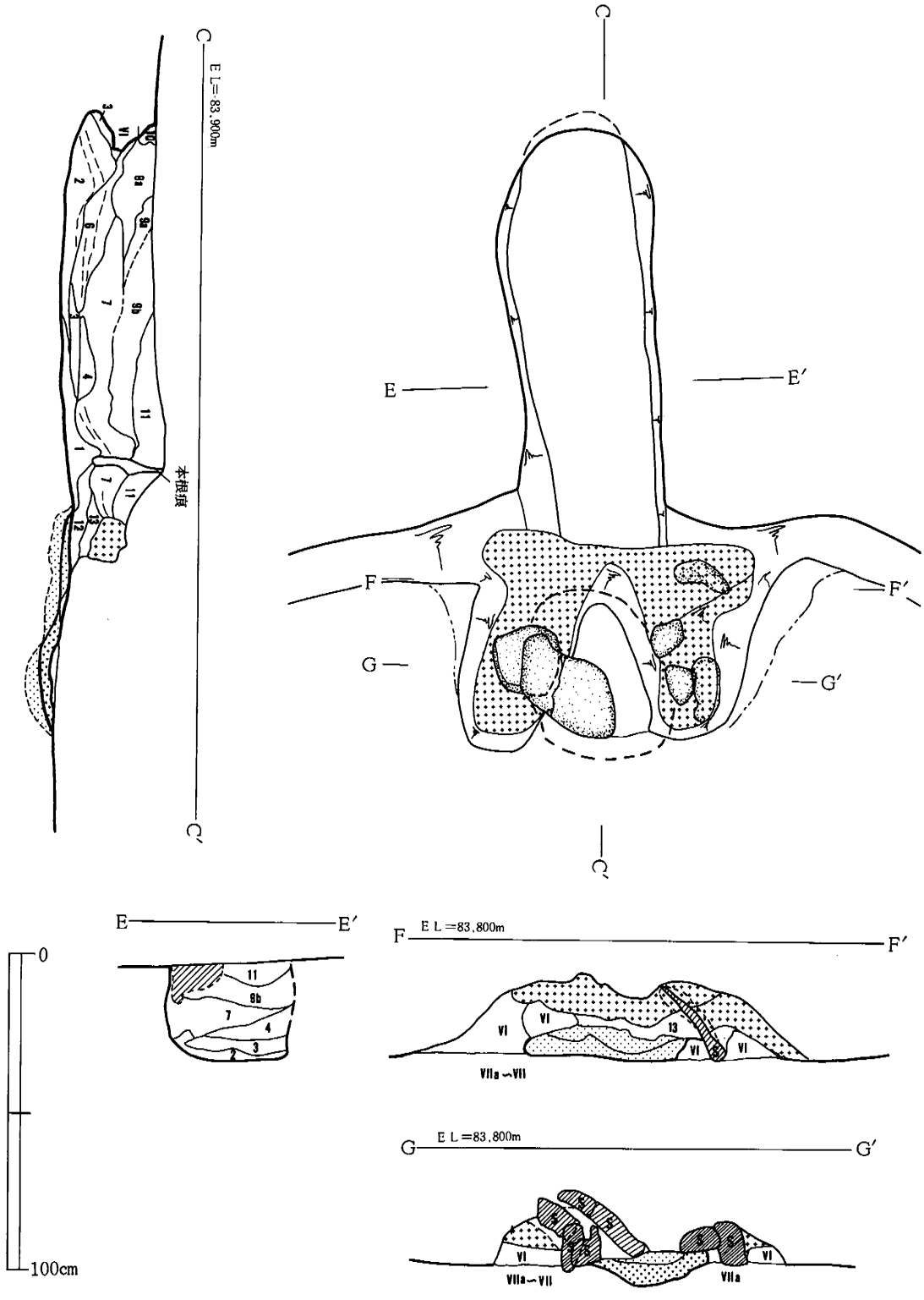
が多いため4層よりも暗色となっている（10YR4/3～4/4）。また、4層が分布しない西～北側に堆積している。6層は黒褐色～暗褐色の浮石質土に中掫ブロック、小粒炭化物が散在するが、全体的には大ブロック構成のため色調は斑に変化する（10YR 2/2～2/3、3//2～3/3その他）。本層の分布は中央付近から東～北および西側に堆積し、南側には見られない。7層は性状、構成が4層と同様で、その分布は東～北東側の壁近くに堆積している。8層は南部浮石・中掫浮石・十和田b浮石を不規則に含んだ黒色～黒褐色土（10YR 2/1～2/3）で、全体的に斑状の構成となっている。8b層は特に南部浮石の量が20%前後と多く含まれる黒褐色土（10YR 2/2～2/3）である。

床は、基本土層のⅦ層の上部に形成されており、床面は東コーナーから北東壁側が高く、小起伏が認められるものの概ね平坦な面をなしている。南西壁から南コーナー付近には南部浮石と黒褐色土との混合土層が貼りつけられているが、他は南部浮石の圧砕層である。また、南東壁下の中央付近からカマド前庭にかけて他よりもやや固く締まった部分が認められたが、その範囲は明瞭なものではない。床面で確認した施設・構造等としては、カマドおよび前述の貼り床土以外には何ら確認していない。なお、床土を除去した後、貼り床の下には掘り方痕跡が認められたが、床面と同様に柱穴・貯蔵穴等何ら確認できなかった。

カマドは、前述したように北西壁の中央付近に設けられており、遺存状態は比較的良好である。カマド本体部の両袖には手前側に各1個の礫が芯材として埋めこまれ、その天井石は本来の位置から移動して4つに割れている。奥側では右袖に薄い扁平礫が埋めこまれているが、左袖では抜きとられたものか、本来無かったものかは不明であるが確認できなかった。また、天井石も同様に存在しない。なお、袖部は左右とも基本土層のⅤℓ～Ⅵ層を削り出して造っており、その上に芯材を包むように黄褐色～灰褐色土、あるいは灰白色土を盛りつけて形成している。芯材、天井材として用いられた礫は、角礫凝灰岩および凝灰質砂岩である。左袖の長さは65cm、最大幅42cm、右袖の長さは60cm、最大幅50cmで、両袖の最大幅は115cmである。燃焼部底面は、奥行き53cm、幅41cmの楕円形にⅦ層が皿状に掘りくぼめられており、その上に強変した焼土が堆積している。また、燃焼部に続く煙導部底面も30cm前後が強く焼土化している。なお、燃焼部の焼土層中および煙導部底面には、焼土粒・炭化物粒ともに獣骨と思われる骨粉が散在する。煙導部は、燃焼部奥から140cm、竪穴上端から120cm外方へ伸びている。煙導部底面は、燃焼部奥がゆるやかに高くなった後、煙導部入口付近からゆるやかに下がって奥に向かい、煙出し下付近から急に立ちあがっている。なお、煙導部端は煙出しよりも外方に位置している。煙導部の形成は、煙導部端の状態から当初は刳り貫きによる形成であったと考えられるが、埋土の状態からは上位からの掘り込みによって形成されている。煙導部の幅は上端が43～48cm・同下端が30～34cmであり、確認面からの深さは28～32cmである。



図版38：DⅡ−01住居址 (1)

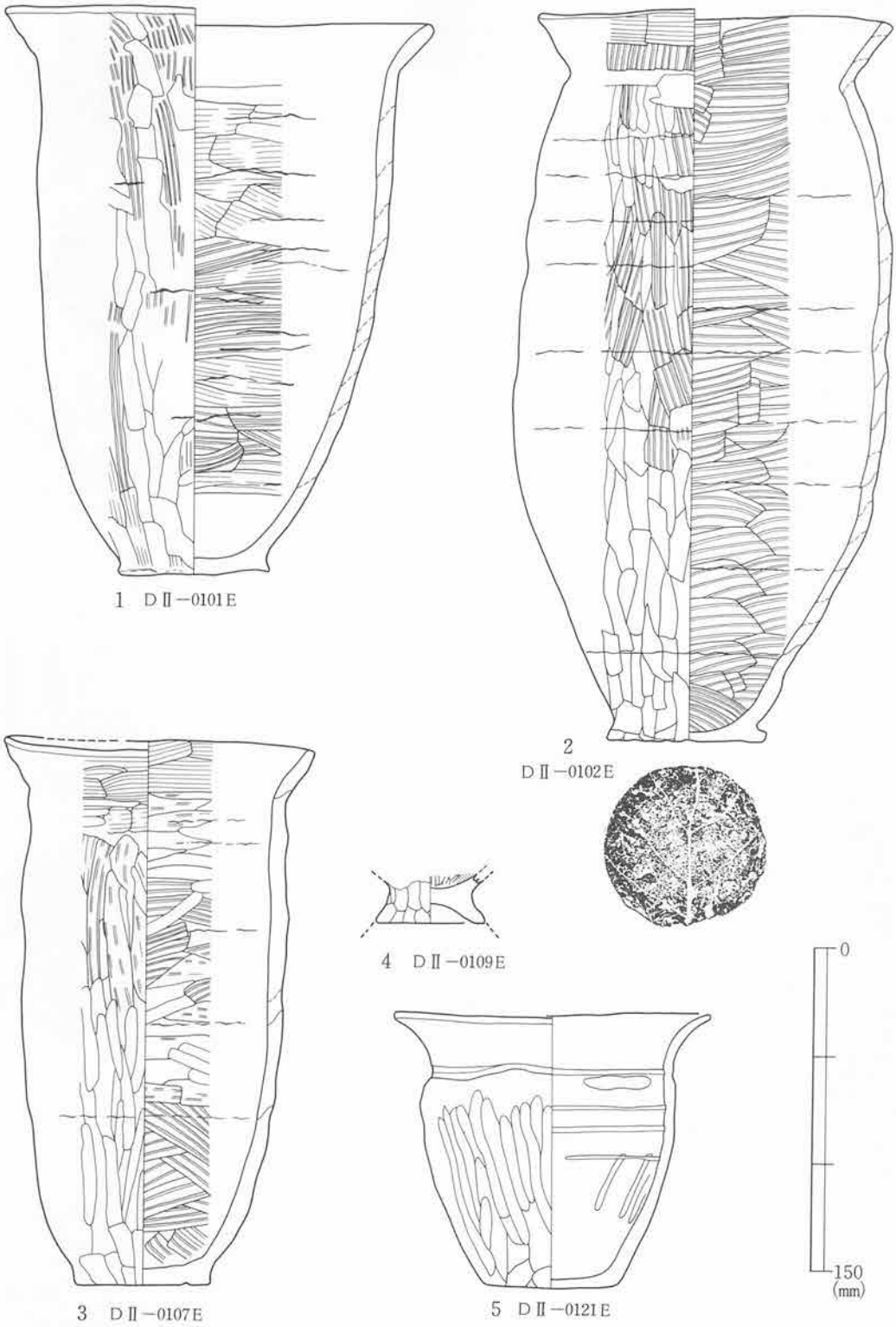


図版39：DⅡ－01住居址 (2)

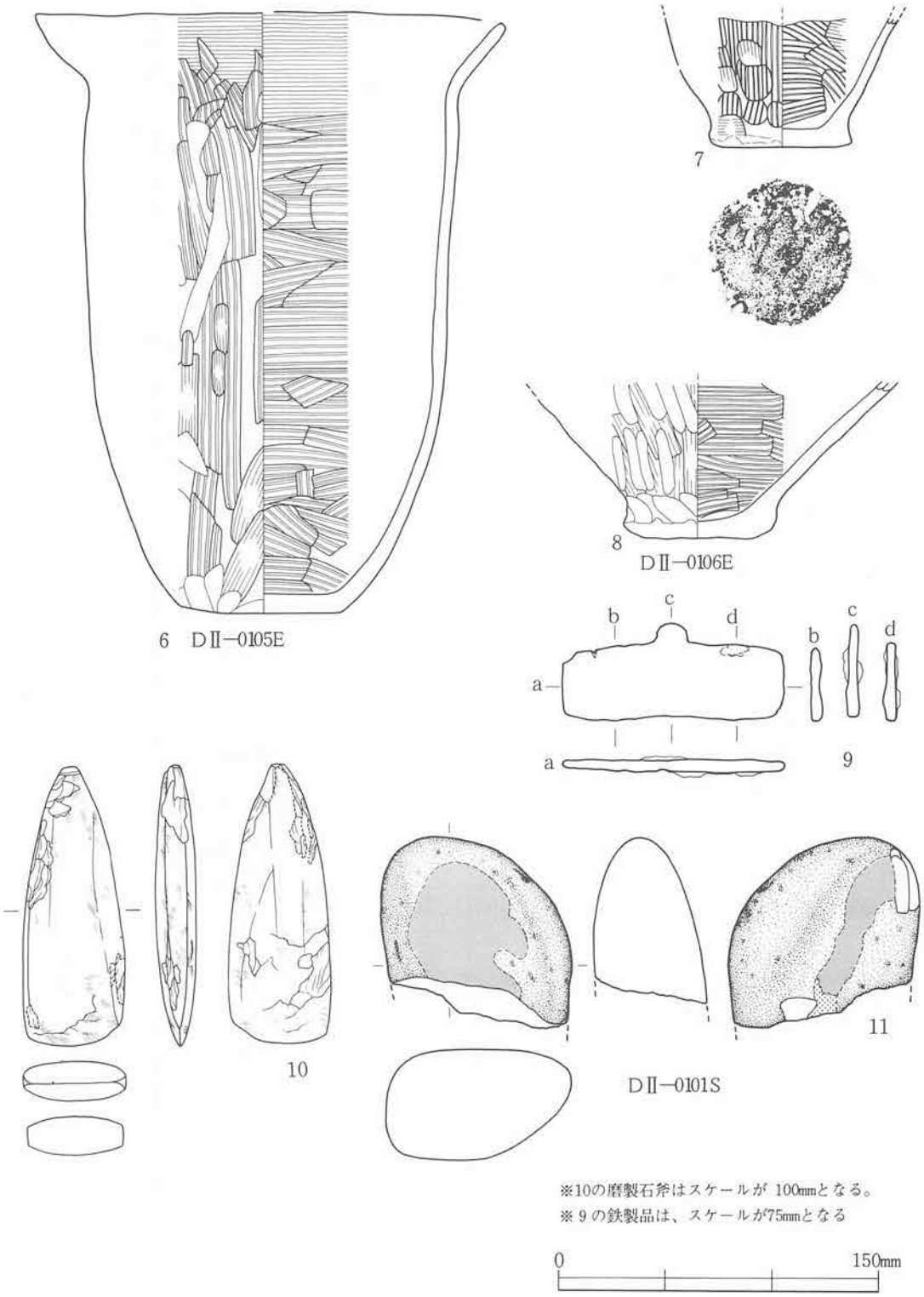
出土遺物は、図版40、41（写真図版30）に示した土師器、鉄製品、磨製石斧、礫石器の他に埋土の3層～4層出土のものがあるが、これらは割愛した。なお、鉄製品（図版41－9）は新期攪乱部からの出土で、磨製石斧（図版41－10）は床面からの出土であるが、本住居址に直接関係した遺物とは考えられない。

図の1・2・3・6の土師器甕は、何れも床～直位層にわたっていたもので、6は圧砕状態のため欠損部が生じており、1・2・3は取りあげ後の風化部を除けば完形状態にある。何れも内外面がハケメあるいはヘラナデによる調整がなされており、部分的に特に下半にはヘラミガキ調整が施されている。器形は2を除けば胴体部最大径が頸部にあり、頸部が括れることはない。口縁部はくの字状に外折し、頸部から口縁部にかけてはヘラナデ、ハケメ調整が見られるものの段の形成は認められない。2は胴体部下半に最大径があり、頸部が括れ、口縁部が強く外折する器形で、肩部～頸部の一部に段状の調整が施されているが全周するものではない。底部周辺は強いヘラナデ～ヘラケズリ調整で整形され、6以外は周辺が張りだす。なお、2の底面には木葉痕が認められる。何れの甕も強い2次火熱のため器面の荒・風化が顕著である。5は0121E0122E、0102Eの各地点からの破片を集合、かつ復元させたもので4分の3程度存在する。胴体部は縦位のミガキ調整が、内面は掌指等によるナデ調整の後、数条の沈線および沈線状のミガキ？が施されている。7は埋土の5層中から出土した甕の底部周辺である。8は底部周縁が研磨によって再整形された球胴形の甕破片と思われる。出土層位は0104Eと同地点である。4は高台付坏形土器の台部破片で、台部はヘラケズリ調整が施され、内面はミガキ調整、黒色処理が施されている。

11の礫石器は、一平坦面と一稜部に研磨面をもっており、一頂端付近には敲打作用によると思われる剝離面が認められる。



図版40：DⅡ−01住居址出土遺物 (1)



図版41：ＤⅡ−01住居址出土遺物 (2)

(9) ＤⅡ－02住居址　　（図版42～44、写真図版31～32、34）

本住居址の確認区域は、ＤⅡ－Ｃ区に主体があり、煙導部はＤⅡ－ＣからＣⅡ－Ｓ区に延びている。確認状況は、竪穴部と煙導部とで若干異なる。竪穴部は、約60cmの耕作土を除去したⅣℓ 層上部であるが、煙導部はⅣｕ層上部である。この差異は、ビニールハウスの出入口部内外による差異である。

平面形は、一部が市道の下にあることから不明であるが、各コーナーが若干円味をもつと共に西北コーナー方向に長い方形の住居址である。カマドは北西壁のほぼ中央に設けられている。確認規模は、主軸上端554 cm、同下端506 cm、直交軸上端570 cm・同下端528 cmで主軸方向は真北に対して西偏62度前後である。壁の高さは最も低い所で39cmであるが、ほぼ42～52cmの範囲にある。壁の立ちあがりは部分による差異が大きいが、下部は概ね15～25度の範囲にあり、上部は外傾度が強く20～35度前後となる。

埋土は、耕作攪乱部を除いて大別６層に区分したが、下位の１・２層は細分している。また壁際に堆積する焼土層については、層番号を附与していない。壁際に堆積する強変した焼土層は、壁の焼土化部分の崩れと思われるが、壁の強変焼土化部と固結したように接していることから焼失時に形成されたものと考えられる。１層のａ～ｄは、本来同時堆積層と考えられるが、堆積位置によって構成物・色調が異なることから細分した。各々はにぶい黄褐色土～褐色土（10YR 4/3～4/4）を主体とするが、焼土ブロック・南部浮石・中掫浮石、その他の混合率で差異が生じており、壁際に分布する炭化材を包みこむか、その下位に堆積している。２層は小粒浮石質の黒褐色土～暗褐色土で、堆積方向および混在物の種類等からａとｂに細分した。2ａ層は暗褐色土（10YR 3/3～3/4）を主体とする層で、南部浮石・十和田ｂ浮石・褐色土ブロック・焼土ブロック・炭化材片が不規則に分布する。また上部には篩分現象が認められるところもある。床中央に移行するに従って炭化材片・十和田ｂ浮石が多くなり色調は異色化し、床に分布する炭化材を包む状態となる。２ｂは小粒浮石質黒褐色土（10YR 3/1～3/2）を主体とするが、各浮石・焼土・炭化材片などの構成物が不均一な分布を示し、一部では本層と下位層との間に焼土層が認められる。２ｃは2ａの一部かと思われるが、褐色土粒が主体を占める。３層は十和田ａ火山灰層で、粗粒ガラス部、灰白色小粒浮石部、シルト～細砂状部などに細分される。下部では炭化物小粒・焼土粒を若干混じる。４層は十和田ａ火山灰と黒色土のブロックが不規則に混合した層で、十和田ａ火山灰のブロックも他土の混合によるものか灰黄褐色～にぶい黄褐色（10YR 5/2～5/3）、あるいは明黄褐色（2.5YR 7/6）など色調を示す。特に５層との間には、明黄褐色のシルト状火山灰が集積している。５層は極小～小粒の黒褐色土（10YR 2/2～2/3）に十和田ｂ浮石を均質に含む層である。

床面は、基本土層のⅦ層（南部浮石層）中にあり数カ所で4～6cmの段差をもち、各々はゆるやかな起伏をもっている。また、全体的に焼土化を生じ、炭化材が散在する。炭化材は、壁際では焼土層に沿って傾斜し、それ以外では床に密着～やや浮いた状態で放射状に、あるいはこれに直交するなどの分布状態を示している。樹種はケヤキ属（槻）の丸木と割伐が主で、一部クリ材が混在する。なお、炭化材の遺存率が低い部分や壁際の焼土層にのる炭化材周辺では炭化材の上にも焼土層が形成されている。図示した焼土層は、西コーナー付近の焼土を除いて床上に形成された焼土である。

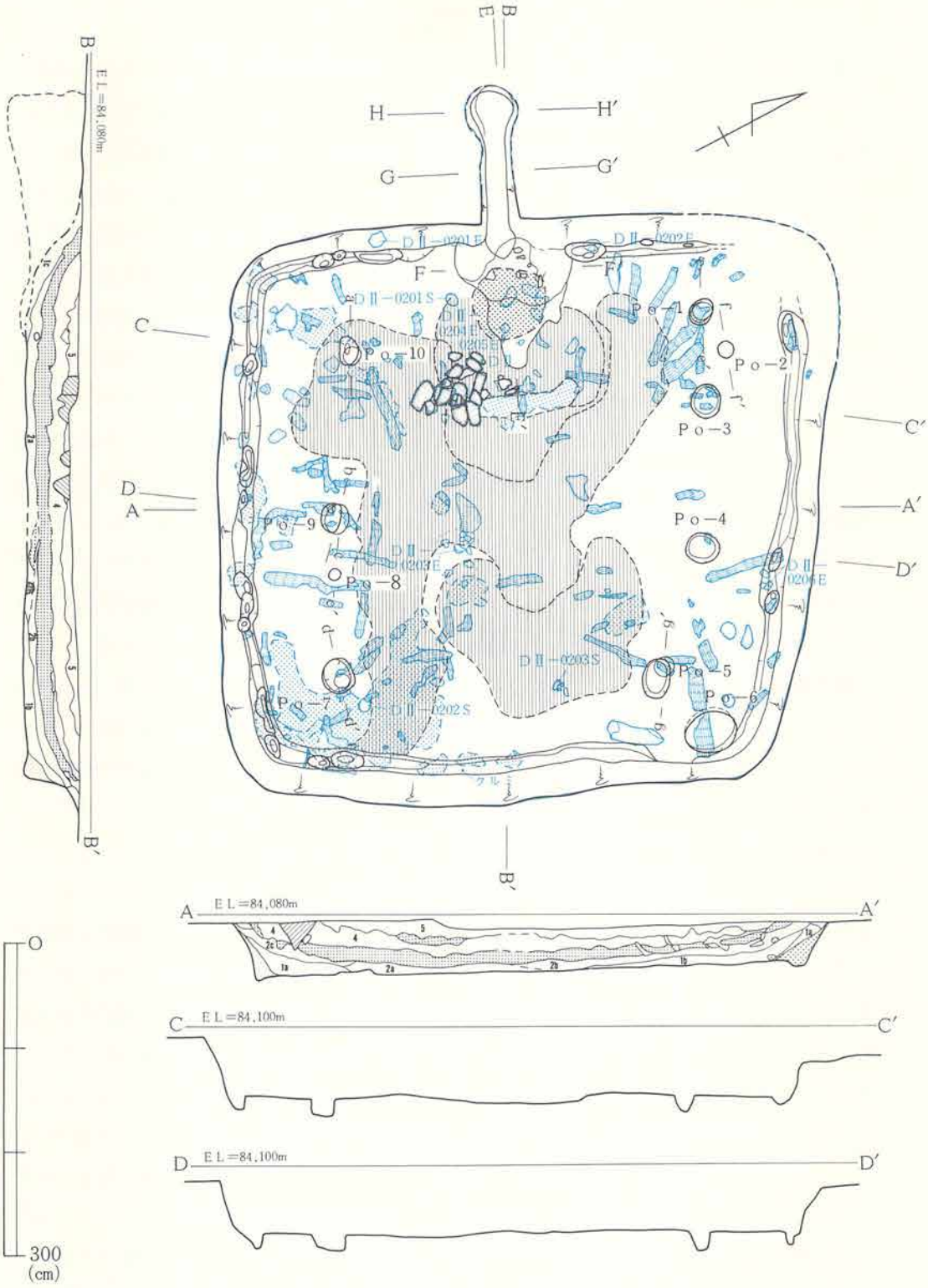
床のうちカマドの前庭部は、周辺より6～8cm低く作られ、その床はシルト質褐色土と南部浮石との混合土が叩き固められている。また、その南東側には一段高い面と同様のレベルに土堤状の叩き固め部が存在する（白ヌキ）。更に、前庭部左側には多数の凝灰岩礫が集中しているが、これらは全体が焼変・脆弱化している。なお、床面は図示した部分が特に固く締まっており、その固く締まった範囲のうち南西側は低くなり、南東壁下まで広がっている。前庭部を除けば、汚損土が薄く認められるものの貼床の形跡は認められず、固く締まった範囲以外では掘り方痕が観察される。

床面で確認した施設、構造としては、大小の柱穴および柱　状小穴9穴と小土坑、周溝、カマド燃焼部等である。柱穴は、床の南西列と北東列とが概ね対置するが、必ずしも整然とした配置ではない。また、Po－1、Po－5、Po－7、Po－9、Po－10では建替えあるいはすえ替えの痕跡と考えられる2重あるいは2段の底面をもっている。Po－6の小土坑は、極小さなフラスコ状を呈するが、調査中に開口部の一部が崩壊している。記録できた規模は、開口部径49×38cm、底部最大径50×39cm、深さ53cmで、内張り等は認められない。

DⅡ－02住居址柱穴計測表　（単位：cm）

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
1	26×20	16×16	18.5	
2	15×28	――	7	
3	32×28	26×22	13.1	
4	32×28	26×21	16.8	
6	50×40	50×40	52.6	小土坑
5a	36×25	30×20	14.0	新
5b	36×25	17×16	22.0	旧
7	34×28	15×14	13	
8	11× 9	――	3	
9a	28×24	20×20	21	旧
9b	(28)×18	8× 7	19	新
10a	18×16	――	18.5	旧
10b	26×16	10× 6	15.6	新

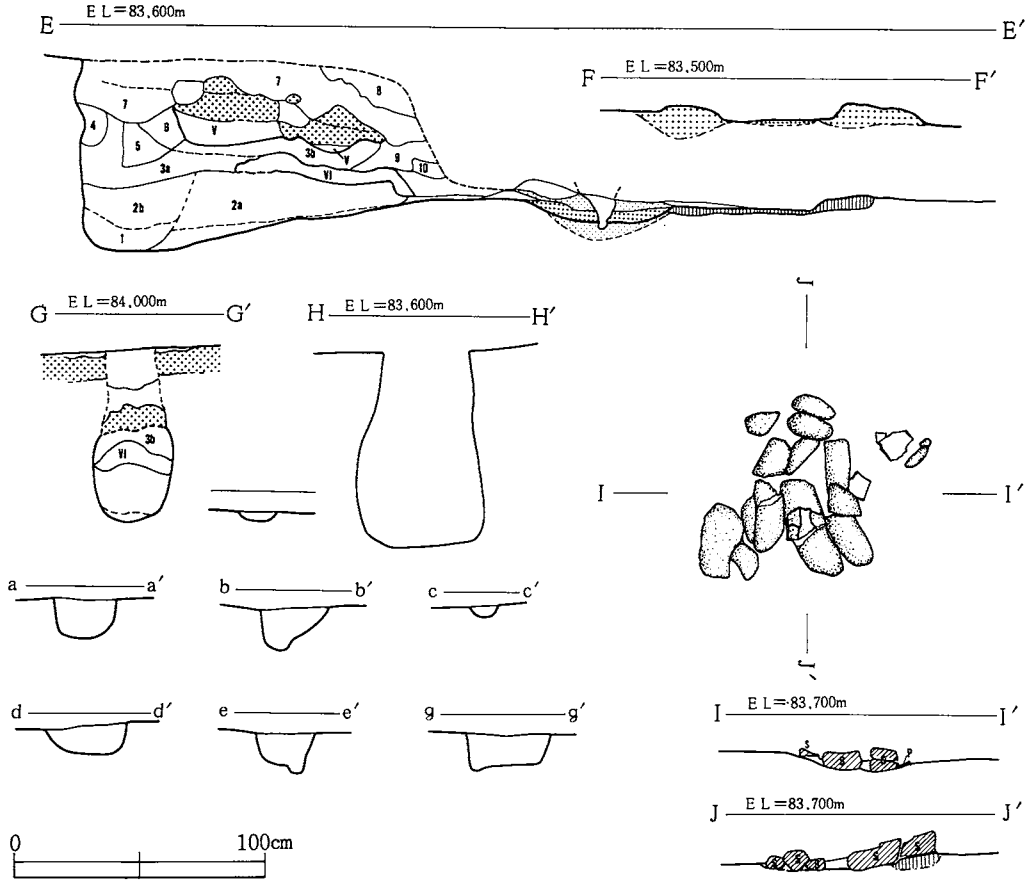
周溝は、カマドの左脇およびPo－6付近を除いて浅深の差は見られるものの、ほぼ全周している。断面形は箱薬研状やu字状で、深さは5～15cmの範囲にある。また、周溝内には不規則に小穴が形成されている。



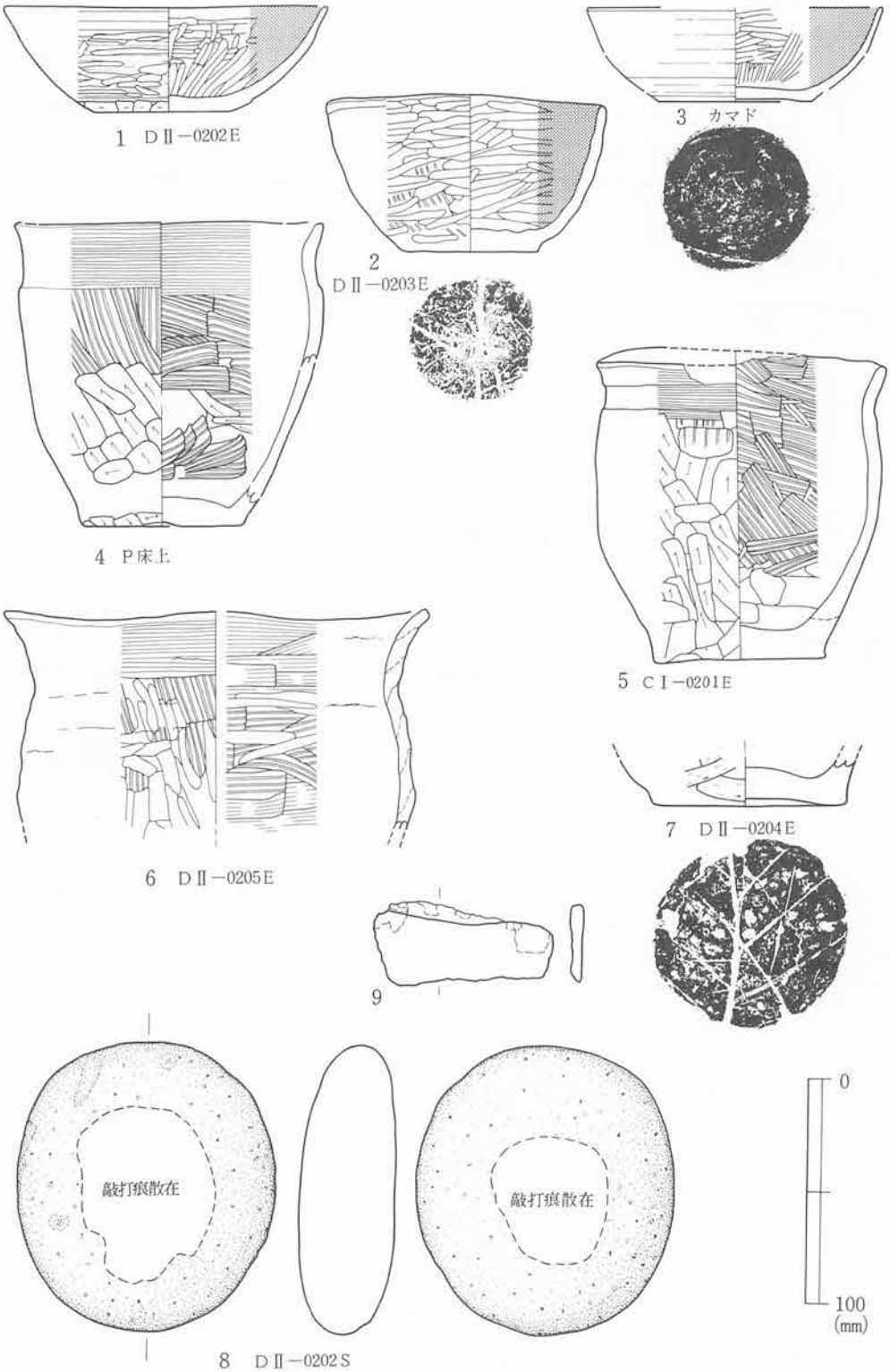
図版42：DⅡ−02住居址 (1)

カマドは、北西壁のほぼ中央に形成されているが、煙導部と燃焼部底面を除くと遺存状態は良くない。袖部は、左右ともに奥側の基底部付近が残っており、芯材・天井材は認められない。遺存する袖部は、左が26cm、右が41cmであるが、左袖の掘り込んだ基底部の幅は38cmあり、両者の最大幅は116cmである。袖部の形成は南部浮石層を5～11cm掘り込み、そこに粘性のある灰褐色～褐色のシルトを盛りあげている。これらの上部土は崩壊して燃焼部面や前庭部の一部を被っている。燃焼部は、浅い掘りこみ状の底面をなし、焼土は70×70cmの範囲に見られ、その最大厚は5cmである。燃焼部奥は、一旦やや高くなって煙導部に至るが煙導部底面は奥に向かってゆるやかに傾斜して下り、煙出しの下が最も低くなっている。煙導部は、埋土の種類状態から刳り貫き式のものが陥没したものであり、更に検討を加えた結果、使用中に作り変えたものと考えられる。第一段階は、奥側がゆるやかに傾斜して下る2a・2b・1層の下面を煙導底面とするもの、第二段階は天井部を掘りながら2a層部を埋めもどして2aとⅥ層土の境を底面とし、煙導底面が奥に行くにつれて高くなり、煙出し部の下は、第一段階と同じレベルまであるものである。この2段階を想定した根拠は、各々の底面となった面に獣骨の骨片・骨粉・極小粒の炭が分布していることである。煙導部の規模は竪穴部外方130cm（側壁確認部からは180cm）、幅55～68cm、煙出し部下の深さ76cmで、煙出しの口径は35cm前後と思われる。

出土遺物は、図版44に示した土師器の甕・坏・礫石器であり、この他にも礫数点、甕や坏の破片が出土しているが2次火熱によるハゼ、破砕を生じており、調整痕等の詳細は不明である。なお、9の資料は刀子の破片であるが、耕作痕からの出土である。1はカマド左側の壁際に堆積した焼土層下の周溝から出土、3は燃焼部から出土したもので、何れも完形品ではないがロクロ成形によるヘラ切り再調整の底部をもつ。内面は細く丁寧なミガキと内黒処理が施された坏である。2は底部周縁がヘラケズリ調整で他はヘラケズリ、ヘラナデの後、粗めのミガキが全面に施されている。内面は、ミガキ調整、内黒処理が施されている。4～7は甕形土師器および同破片で、外面は底面および底部周辺から胴体部中ほどまで荒いヘラケズリ調整が見られる。上半から頸部付近にはハケメ調整の後、粗いミガキが施され、頸部から口縁部は横ナデ調整となっている。なお、底部下端～肩部には弱い段が形成されている。内面は何れもヘラナデあるいはハケメ調整が口縁部まで認められるが、4の口縁部付近は横ナデ調整である。また、5の内底部は掻き取り様のヘラケズリである。礫石器であったと考えられる礫は、全部で5点出土したが、作用痕（使用痕）の判明するのは図示した8、DⅡ－0202Sだけで、他はハゼ等のため不明である。8は扁平な礫の2面にペッキング様敲打痕が不規則に散在している。その他、床面の土壌を採取し穀物・種子等の分析を行っているが、それによって確認されたものは種類不明のイネ科植物と科・種等が不明の2種類が少量出土している。詳細については鑑定・分析の章を参照されたい。



図版43：DⅡ－02住居址 (2)



図版44：DⅡ−02住居址出土遺物

⑽　ＤⅡ－03住居址　　（図版45、写真図版33・34）

本遺構は、ＤⅡ－Ｔ区とＥⅡ－Ｄ区にまたがって位置しており、その確認状況は基本土層のⅠ層上部を除去した段階に、不規則に分布する十和田ａ火山灰層の存在による。しかし、平面形を把握したのは更にⅠ層下部を20～15cmほど除去したⅢ層中である。確認した遺構の範囲は西コーナー周辺と煙導部で全体の15％弱であり、東側の85％以上は調査区域外に広がっている。なお、西コーナー部を試掘調査の際に破壊して いる。

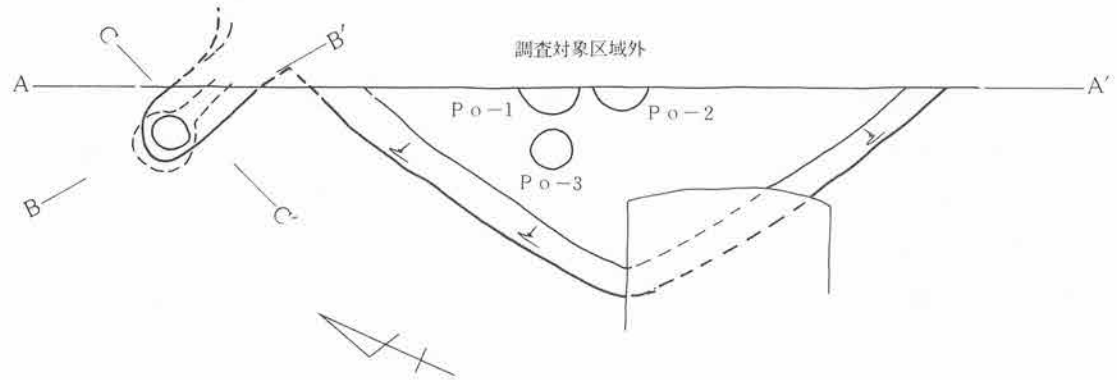
平面形は、西コーナー部を破壊しているが、コーナー部が円く各辺が外方に膨らんだ方形基調の住居と思われる。確認した規模は、北東～南西方向上端が220 cm、同下端190 cm、北西～南東方向端200 cm、同下端170 cmで、煙導部は北西辺に位置している。壁は土層断面による高さ70～65cmであるが、Ⅲ層上部までを除去していることから最終の記録は46～43cmである。壁の立ちあがりは、床から内湾ぎみに立ちあがった後、北西壁では40～45度、南西壁では15～30度の範囲で上端に達しており、各部による差異が大きい。

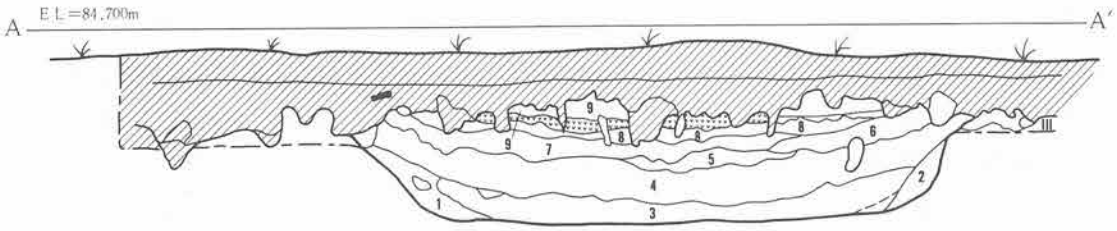
埋土は全10層に細分している。１層は中掫浮石を主体とした黒褐色～暗褐色土（10YR 3/1～3/2）に褐灰色土・焼土の小ブロックが不規則に混在し、炭化物や骨粉も混在する。粘性なく締まりは普通である。2層は１層と同様に中掫浮石を主体としているが、色調は褐色（10YR 4/3～4/4）を呈する。黒色土小ブロック・炭化物が少量混在するが骨粉は含まない。粘性なく、締まりは普通である。３層は中～大大粒の黄褐色浮石や中掫浮石ブロックが混在した小粒浮石質暗褐色土（10YR3/2～3/3）で、少量の炭化物を含む。なお、北西側の床面近くでは骨粉を少量含むが、層全体には認められない。４・５層は、小粒浮石質暗褐色土（10YR 3/3～3/4）で、４層には中～大粒浮石を多量に含むが、５層は散見する程度である。両層とも炭化物が見られる。６・７層は、腐植質の黒色～黒褐色土（10YR1.7/1、2/1～2/2）に十和田ｂ浮石を含み、７層は特に十和田ｂ浮石が多く、色調もより黒色である。８層は、小粒浮石質黒褐色土と十和田ａ火山灰とが不規則に混合した層で、色調は一定しない。また、十和田ａ火山灰は小～大ブロック状である。９層は、８層に近似した黒褐色～暗褐色土（10YR2/2、3/2～3/3）であるが、十和田ａ火山灰の混在量は非常に少い。

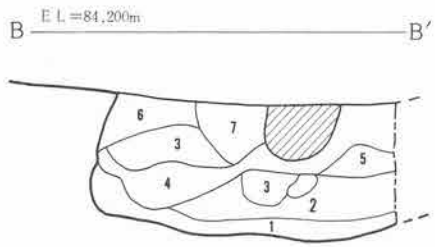
床面は、耕作土表面から95～92cmの基本土層Ⅵℓ ～Ⅶ層に形成されており、若干の起伏が見られる。しかし、確認した床の面積が小さいことから全体的傾向は不明である。また、黒褐色土や南部浮石の散在的分布は認められたが、明らかに貼り床と言える状態ではない。

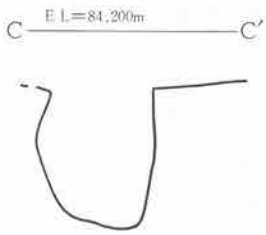
床面で確認した施設・構造としては、浅い小穴３カ所であるが、柱穴と言えるほどのものではない。また、北西壁外方で煙導部を検出しているが、カマドの燃焼部・袖部、あるいは周溝、貯蔵穴等は確認していない。

カマドの煙導部は、幅30～32cmで煙出し部の深さ35cm、竪穴上端から90cmほど外方へ延びて









※　平面図および断面図A～A′はスケールガ 200cm。
断面図B～B′ C～C′はスケールが 100cmとなる。
また、遺物はスケールが 150mmとなる。

0　200cm

図版45：DⅡ－03住居址と出土遺物

おり、その底面はカマド側が高くなっている。埋土の1層は、炭化物、骨粉・焼土粒が混在しており、2層はⅣ層・Ⅴ層などの不規則な混合土層で、3層はⅣℓ 層の純粋層である。4層はⅢ層およびⅣu層であるが図左側へ崩れて、炭化物等を含む。

出土遺物としては、甕形土師器の底部破片1点が出土している。内外面ともヘラナデ調整が認められ、外底面には木葉痕が見られる。

(11) EⅡ－01住居址　　（図版46～50、写真図版35～38）

本遺構は、EⅡ－G・H・K・L区にわたって位置しているが、その大部分はEⅡ－G・H区にある。本遺構が確認された区域は、調査直前までビニールハウスによる果菜類の栽培が行われており、その耕作および土壌改良のため地表面からⅣu層上面までの50～60cmが攪乱されている。確認状況は、Ⅳu層上面までの耕作土を除去したところ煙出し部の褐灰白色～灰白色の砂質粘性土（10YR6/1～7/3）の輪状分布と埋土の10層を確認した。しかし、埋土上部に攪乱部が多く、更に数cm削平して住居址の平面形を把握した。

平面形は、各コーナーが円味をもち、特に東コーナーは円弧をなす方形基調の住居址であるが、南西壁辺と北西壁辺が長く、北東壁辺と南東壁辺が短いことから、方形の中でも台形と呼ぶにふさわしい形状を呈している。確認した規模は、主軸上端314 cm・同下端266 cm、直交軸上端318 cm・同下端278 cmで、主軸の方向は真北に対して西偏51度前後の方向にある。なお、平面形が台形をなすことから各壁の長さが異なる主軸方向に平行する南西壁よりの最大値は上端302 cm・同下端266 cm、カマドのある北西壁よりの最大部上端332cm・同下端292cmである。

壁の高さは、全体的に北西壁および北東壁の北コーナー付近が20～24cmと低い。北西壁の高さ21～30cm、北東壁20～29cm、南東壁28～32cm、南西壁29～32cmで、高い所と低い所との差は12cmである。また、壁の立ちあがり外傾度は北西壁が43～46度、北東壁20～25度、南東壁20～22度で、南西壁は35度前後で立ちあがった後、壁半ばから外反して上端に達する。

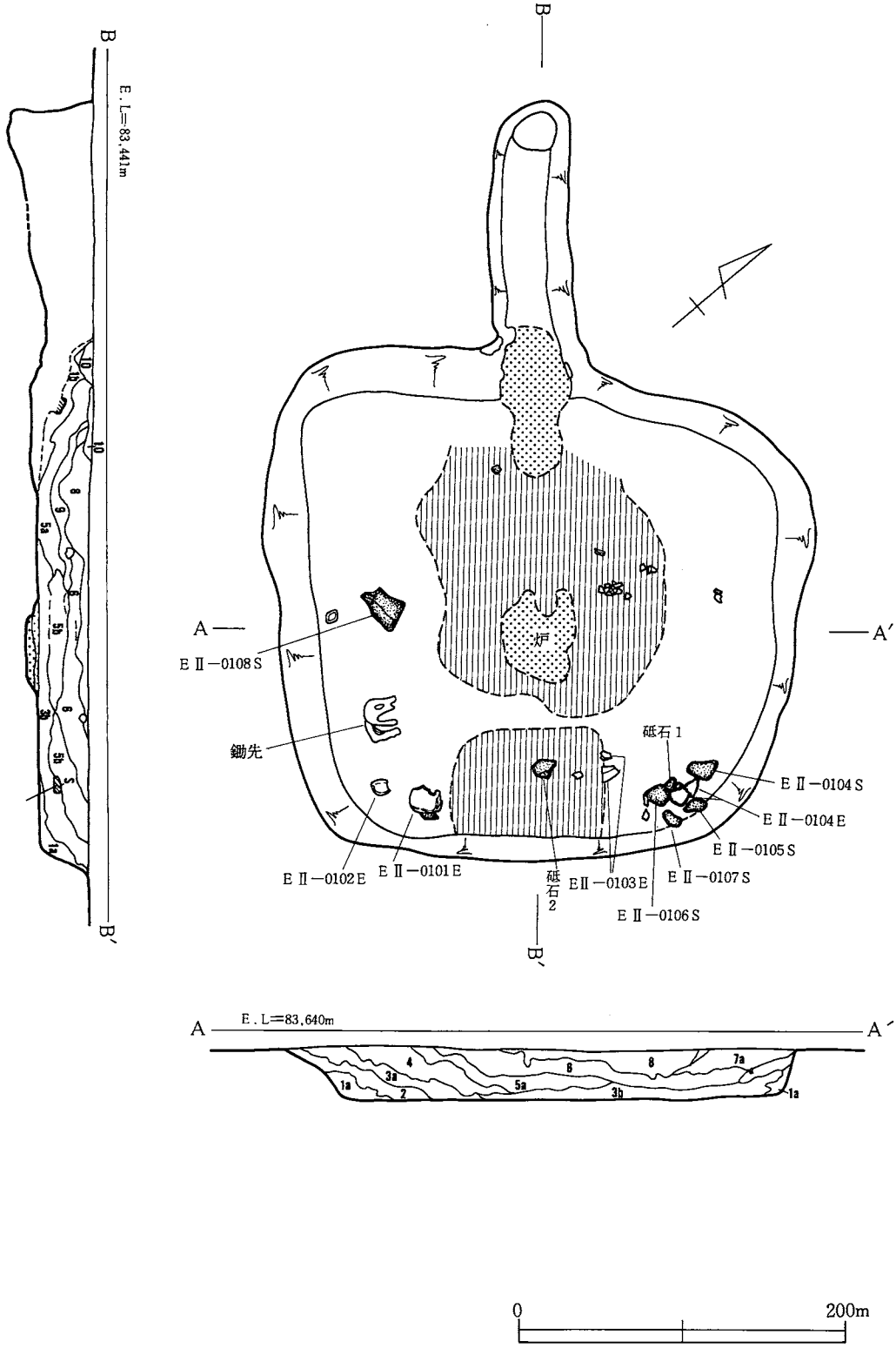
埋土は、大別10層に区分しているが1～3層と5層は細分している。また、最上位の10層は新期攪乱ではあるが十和田a火山灰のブロックを含むことから層番号を附与した。1層は細粒～小粒浮石質の黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/2）であるが、Ⅰaには中掫浮石や黒色土（10YR1.7/1）の小ブロックが不規則に混在し、Ⅰb層ではシルト質明褐色土（7.5YR5/6～5/8）や黒色土の小ブロックが混在する。また、Ⅰb層中には中掫浮石のブロックはほとんど混在しない。2層は基本土層のⅢ～Ⅳu層の崩壊土層で、小粒～細粒浮石質の暗褐色土層（10YR 3/3～3/4）である。また、黒色～黒褐色土（10YR 2/1～2/2）の小ブロックが散在する。3層は小粒～細粒浮石質の暗褐色土（10YR 3/2～3/3）で、十和田b浮石を不規則に含む（5％）層である。3a層は南西から北～北東に馬蹄形状に分布、3b層は中掫浮石のブロックが散在し、

北東壁半ばから南西壁にかけて分布する。南東壁近くでは3b層上部から4層にかけて遺物包含する。4層は南部浮石を多量に（20～30％）混じえた中～大粒浮石質の暗褐色土（10YR3/3～3/4）を中心とし、黒褐色土や中掫浮石のブロックが不規則に混在する。なお、本層の分布は南西壁よりに限られる。5層は小～中粒浮石質の暗褐色土（10YR3/3～3/4）を主体とするが、黒色～黒褐色土ブロックや中掫浮石ブロック、そして大粒浮石が不規則に混在する。5a層は中掫浮石のブロックが少く、大粒浮石が多い。5b層は小～中粒浮石が大部分で、大粒浮石は散見する程度である。6層は南部浮石・中掫浮石を混じえる黒褐色土～暗褐色土（10YR3/2～3/3）、細粒浮石質暗褐色（10YR3/4）、あるいは十和田b浮石を混じえた黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/2）などの不規則なブロック混合土層である。本層は、カマド周辺を除いた範囲に馬蹄形に分布する。7層は細粒浮石質の黒褐色土（10YR2/2～2/3）で、東コーナーから北東壁の近くにだけ堆積・分布する。8層は十和田b浮石と思われる青灰白色の小～中粒浮石を10～15％含む黒褐色土（10YR3/1～3/2）で、浮石を均一に含む。9層は小粒浮石質の黒色土（10YR1.7/1、7.5YR1.7/1）で、上部には十和田b浮石が含まれる。本層の分布は、カマド周辺に限られる。10層は中掫浮石ブロックと十和田a火山灰のブロックが混在した層で、新期の攪乱層である。

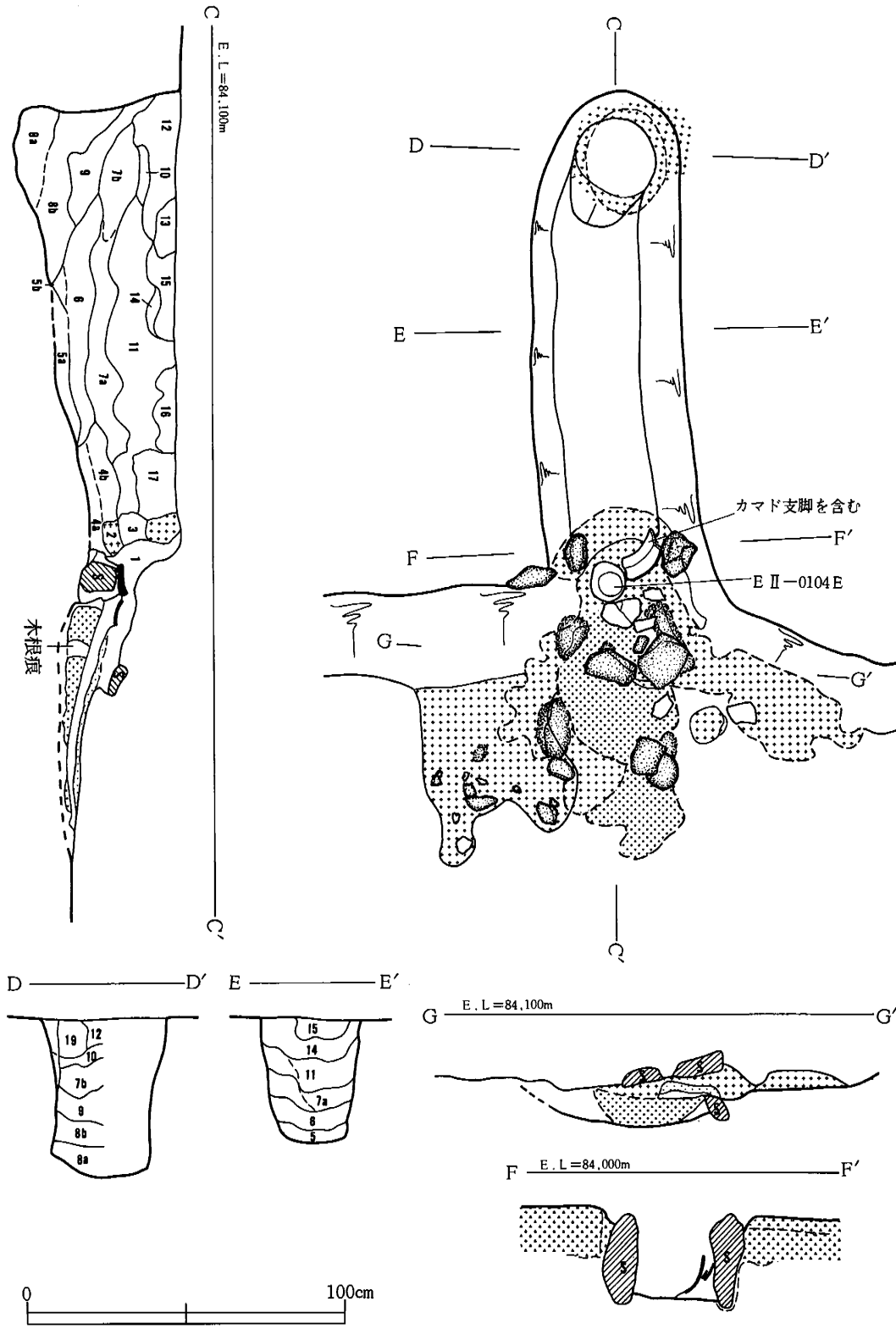
以上の埋土のうち、4層～6層は人為的堆積作用が大きく働いている層で、3層上部から6層下部に土師器・礫石器が包含されている。

床面はⅦ層上部にあり、北側が高く南側が低くなっており、全体的に小起伏が認められる。また、床面は全体的に固く締まっているが、特にカマド前庭部から炉（焼土表示）の周辺と南東壁付近は南部浮石の圧砕層（叩き固めた部分か）が形成され、非常に固い床となっている。この範囲は明確に区別される。床面で確認した施設・構造は、カマドの燃焼部、住居中央にある炉だけで、柱穴・貯蔵穴・周溝は確認できなかった。

カマドは、北西壁のほぼ中央に設けられているが、遺存状態は良くない。袖は凝灰質砂岩等の礫を芯材としてやや粘性のある灰白色～にぶい黄褐色土で形成されたものであり、壁部分（G～Gの右側）を除けば崩壊流出の形状を止めていない。これらのカマド形成土は図版46に示したような流出分布をなし、その下などに土器片や天井石の砕片が散在する。また、煙導部内のF～F′ラインとその手前には、扁平な礫が壁に接して存在し、礫の面は焼土と同様に赤変している。これらの礫の配置、および燃焼面と考えられる焼土の分布からカマドは1～2度の造り替えがなされたものと考えられ、最終的には竪穴に挟まれた部分を燃焼部としている。燃焼部底面は、奥に向かって上がっており、煙導部口手前にある埋めこみ礫まで強く焼土化している。礫の上には支脚と思われるカメの底部周辺が被さるように置かれ、2次火熱による変色を生じている。煙導部はF～F′ラインからゆるやかに傾斜して下り、煙出しの下が最も深くなってい



図版46：EⅡ−01住居址 (1)



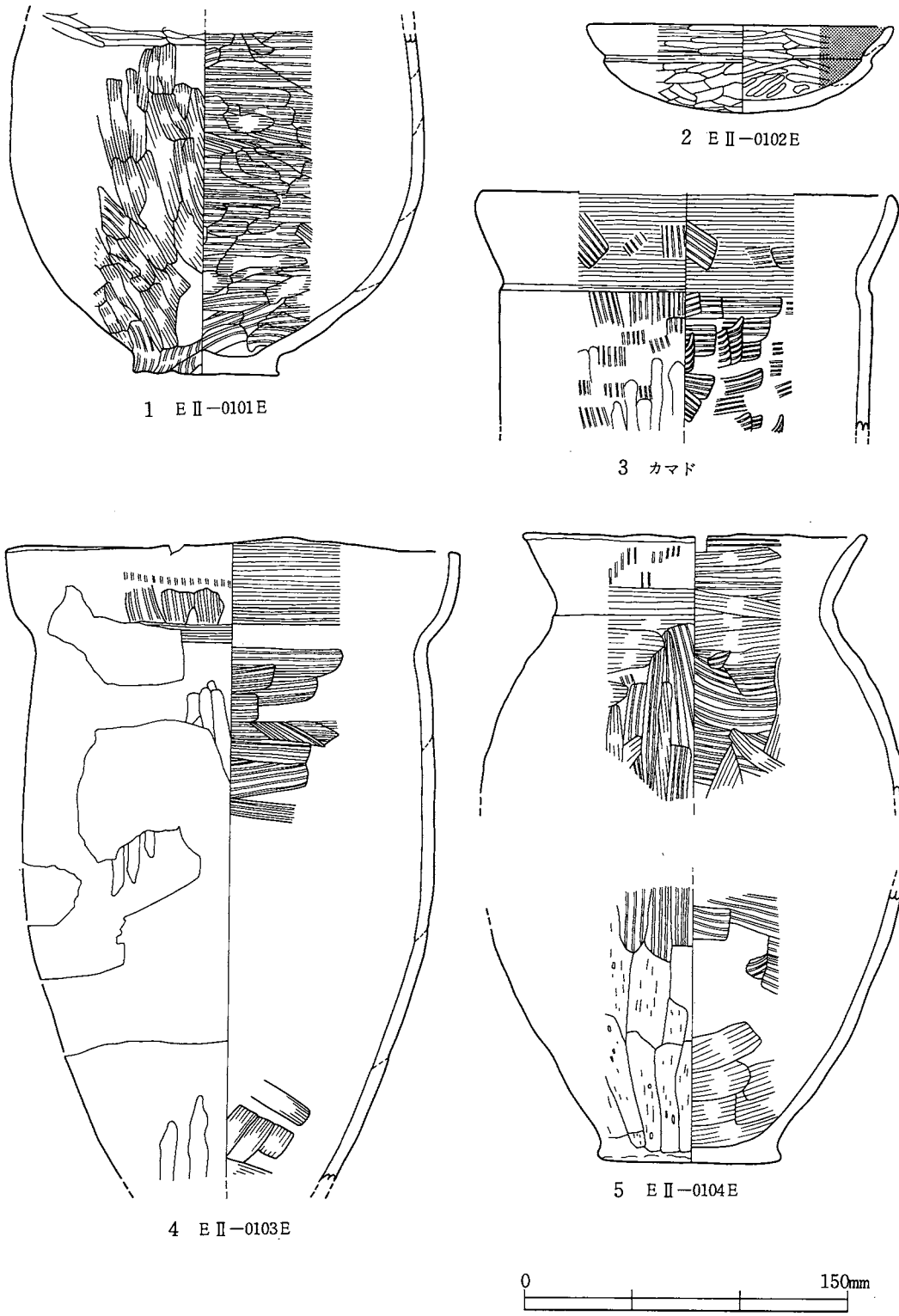
図版47：EⅡ−01住居址 (2)

る。煙導部の幅は、46～48cmで、深さは28～52cm、その横断面形はU字状を呈する。煙導部の長さは、竪穴上端からは155 cm、灰白色土貼りつけ部から140 cmである。煙出しの形状・規模は明瞭ではないが、12層上部に分布する灰白色土の形状から20×25cm前後の楕円形で、灰白色粘性土によって形成されていたものと考えられる。

炉は、住居中央の床を不整な円形に掘りくぼめて炉床としており、炉床下のⅦ層は強く焼土化している。炉床上位には、炭化物・骨粉を混じえた焼土が5～6 cm堆積している。炉の掘り下げ部の規模は40×45cmの楕円形で深さ4 cmである。炉床上の焼土は炉穴の外周にも堆積しその分布規模は60×45cmの範囲である。

出土遺物は、図版48～50に示した土師器、鉄製の鋤先、砥石などの礫石器である。遺物の出土状態は、床面にのるものと、埋土の3b層から6層の間に包含されるもの、そしてカマド内に散乱するものとに大別される。床から出土したものとしては図版48－5 aの一部、図版49－6・7の鋤先2点、図版49－8・9・10の砥石3点である。カマド内に、あるいは周辺に散乱していた資料は図版48－3・5a・5bの土師器で、他の土師器および礫石器は埋土の1a層と3b層から6層中の出土である。しかし、図版50－8・11～14は、東コーナーから他の土師器片とともに積み重なるように出土している。8は床に接し、その上に土師器片・礫石器と重なっている。これらの状態は、当初から積み重なっていたものか、埋設過程で流れこんだものかの判断はできかねる。

1の甕は4層から5b層に包含されていたもので、口縁部全周と体部上半の3分の1程度を欠損したものである。外面調整は底部周縁から肩部までハケメ→ヘラナデの調整が施され、肩部には横位のヘラミガキが施されている。内面は、全面にハケメ調整が施され、部分的にはヘラナデも見られる。2は丸底の坏で、内外面の中ほどより上に明瞭な段が形成されている。外面の調整は、段より下がヘラケズリおよびヘラナデ、段より上が横位のヘラミガキおよびナデ調整である。内面は、横位・斜位のヘラミガキ調整、そして黒色処理が施されている。3はカマドの奥（煙導部）からの出土で肩部に段をもつ甕の大破片である。胴体部は内外面ともハケメ調整が施され、外面では下部にミガキ調整も加えられている。口縁部は、内外面ともにハケメ調整の後、横ナデ調整が施されている。4は、5・6層に散乱していた破片を集合して復元したものである。内外面とも2次火熟による器面の風化が強く、調整痕は明瞭でない。胴体部外面はハケメ調整の後、縦位のミガキ調整が、口縁部はハケメ調整の後横ナデ調整が施されている。胴体部内面は、下半がヘラナデ、上半がハケメ調整で、口縁部は横位のハケメ調整の後、横位のナデ調整を加えている。5a、5bは底部がカマドの支脚として用いられたもので、口縁よりは燃焼部に散乱していたものである。これらは接合しないが、同一個体と考えられる。胴体部外面は、ハケメ調整の後、底部周辺にはケズリ調整が加えられ、頸部付近ではヘラナデ調

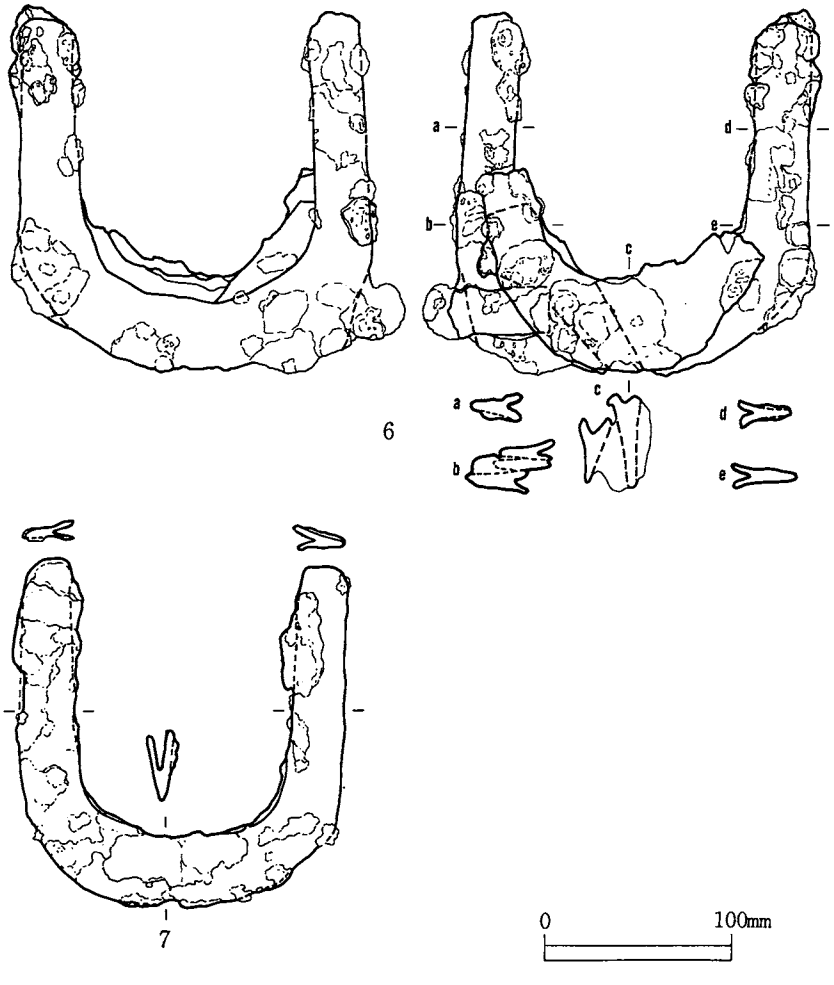


図版48：EⅡ−01住居址出土遺物 (1)

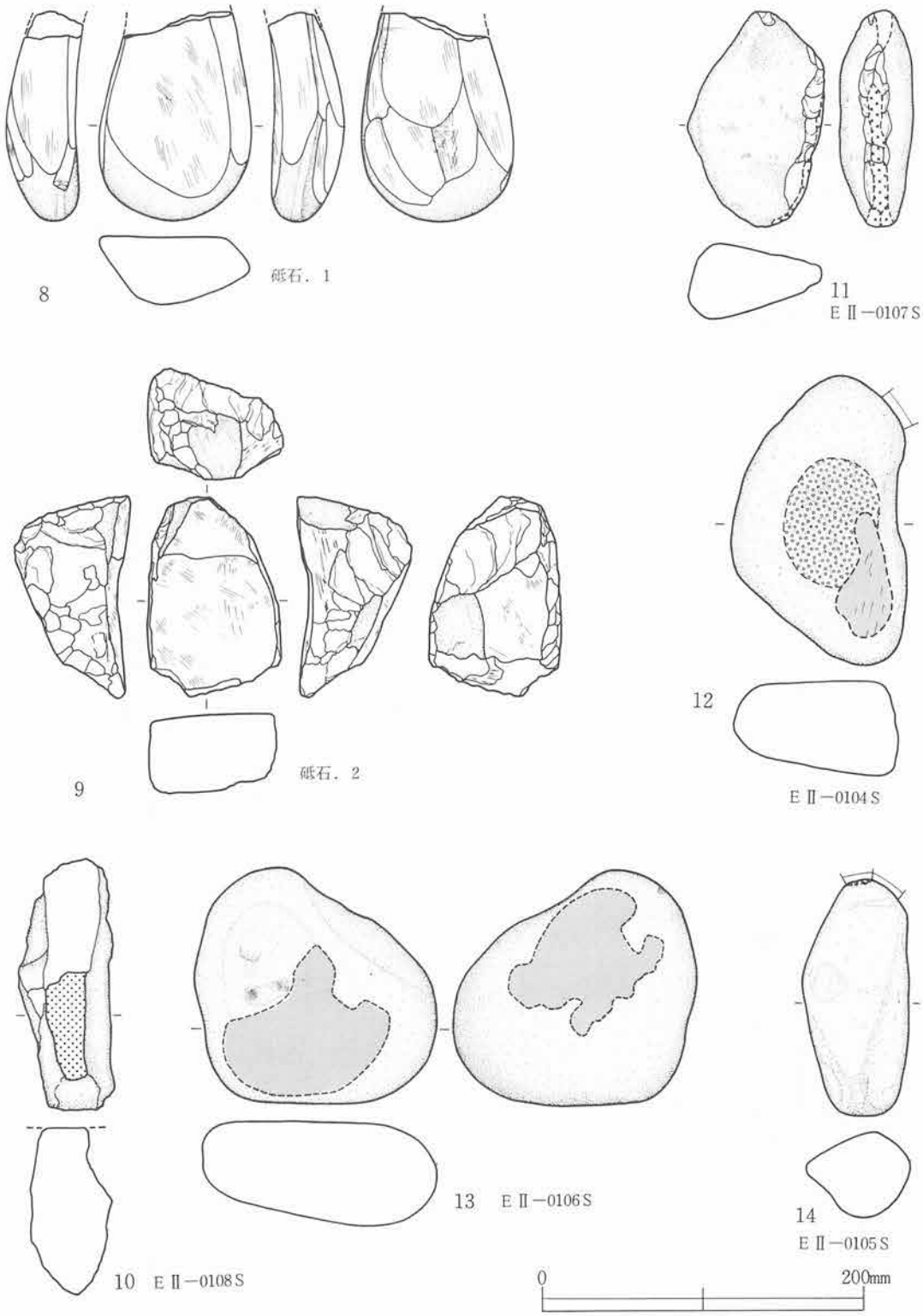
整が加えられている。口縁部は、ハケメ調整の後に横ナデ（ヘラナデ様？）が部分的に加えられている。内面は、底部周辺がヘラナデ、それより上位は口縁部までハケメ・ヘラナデ調整が交互に重複して施されている。

図版49－6・7の鋤先は同一地点から出土したもので、少なくても3点の略完形品・破片が錆化結合したものである。錆落としの後、6と7とに分離したが、6には更に別個体の破片が結合している。6の法量は、最大幅185㎜、最大長195㎜で略完形品で、先端が磨滅によるものか否かは不明であるが、欠落している。7は最大幅170㎜、最大長182㎜で先端が磨滅によるものか欠損によるものかは不明であるが、欠落・変形している。

礫石器、砥石については、作用痕跡の凡例を参照していただきたい。



図版49：EⅡ－01住居址出土遺物　(2)



図版50：E Ⅱ－01住居址出土遺物 (3)

(12) ＥⅡ－02住居址　（図版51・52、写真図版39・40）

本遺構は、ＥⅡ－Ａ・Ｅ区に主体があり、煙導部・西コーナーはＥⅠ－Ｄ・Ｅ区に位置している。確認状況は、深耕作土の大部分を除去した所煙導部を含めた住居址の概略平面形を確認したが、北西～南東方向に延びる深耕の跡が密に並列しており、北東壁辺と南西壁辺が不明であった。そのため更に数10cmほど掘り下げて平面全体を確認した。なお、並列する深耕底部および未攪乱部には、十和田ａ火山灰の小中ブロックや極薄い層が存在したが住居址埋土として記録した土層中には同火山灰層は存在しない。

平面形は、各コーナーおよび各辺が円く、隅円の方形を基調としているが、南東辺には出入口部と考えられる張り出しをもち、西コーナー部が突出している。確認した規模は出入口部と考えられる張り出しを加えた主軸上端486 cm・同上端435 cm、出入口状張り出し部を除外した竪穴の主軸方向上端420 cm・同下端380 cmである。また、西コーナーの突出部を加えると上端504 cm・同上端480 cmである。直交軸の上端434 cm・同下端394 cmである。出入口状張り出し部の中央とカマド中央を通る主軸の方向は真北に対して西偏72度前後である。

壁の高さは全体的に北・西壁および北東壁が高い。各壁の高さは北西壁のカマド左が25～31 cm・同右が36～38cm、北東壁は28～37cm、南東の出入口状張り出し部周辺で21～28cm、南西壁21～25cmの範囲にある。また立ちあがり外傾度は、北西壁が30度前後、北東壁は部分的に45～50度のところもあるが大部分は35度前後、南西壁が35～40度である。また、出入口状張り出し部の壁は30～35度の範囲にある。

埋土は、新期柱穴部を除いて大別３層に区分した下部の１層を４層に細別、更に２層を３層に細分した。１ａ層は、小粒～細粒浮石質の暗褐色～褐色土（10YR3/3～3/4）を主体とするが、不規則に粘性の強い褐色土小ブロック（10YR4/4～4/6）も多量に含まれる。締まりは疎密、あるいは軟・硬と差が大きく、褐色土ブロックの多い所は固く締まっている。本層の分布範囲は、南～南東部と北東部の一部に分布し、確認当初は壁の貼付土と誤認していた。乾燥するとガリガリになり板状に剝離する。１ｂ層は数種の浮石を10％前後含んだ黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2）を主体とするが、南西側では中掫浮石の小ブロックが15％前後と多く暗褐色ぎみの色調となる。本層は南西壁よりと北東壁よりに堆積し、カマド周辺と出入口状張り出し部付近には堆積していない。締まりは疎く、粘性は非常に弱い。１ｃ層は中掫浮石と粘性のある暗褐色土～褐色土（10YR4/4～4/6、3/3～3/4）の大小ブロックの混合土層で炭化物・南部浮石・十和田ｂ浮石も散在する。また、同様の小ブロックは１ｂ層中にも多く混在する。粘性の強弱、締まりは地点によって差があり、床面に分布する本層は炭化物粒が多く粘性の高い暗褐色土（10YR3/3～3/4）を主体としサンクラックが発達しており、土師器の坏や甕の破片を含む。また乾燥するとガリガリになることから一時床の貼付土と誤認していた。１ｄ層は、数種類の

土層ブロックが混合した層で、色調・組成に大きな差異があり、本層上部から上位の2層中に多くの遺物が含まれる。色調は10YR2/1～2/2、同3/2 ～3/4あるいは10YR4/3～4/4などが不規則に分布し、構成・混在する浮石も南部浮石・中掫浮石・十和田b浮石で、何れも不規則に分布する。2層は各種浮石を不規則に混じえた（5～45%）暗褐色土～褐色土を主体とする層であるが、浮石含有率と主体となる色調で細分した。2a層は中掫浮石・南部浮石あるいは黒色土小ブロックを不規則に混じえた（5～25%）暗褐色土（7.5YR3/3～3/4）を中心とするが、特に浮石の多い所は褐色（7.5YR4/4～4/6）やにぶい黄褐色～黄褐色（10YR5/4～5/6）などの色調となる。2b層は大粒の南部浮石は少なく、小～中粒の浮石を15～45%も含むにぶい黄褐色～褐色（10YR4/3～4/6）を主体とした土層で、基本土層のⅣ～Ⅵ層土が混在したものと考えられる。出土遺物の多くは本層からの出土である。3層は基本土層のⅡ層とは色調が異なるが十和田b浮石を中心とした浮石質の黒色土（10YR2/2～2/3）で他に南部浮石大粒や土器細片・礫砕片を含む。また、十和田a火山灰のブロックが散見される。

以上の埋土のうち1d・2a・2bの各層は、各々数種のブロック土から構成されたことや、遺物の包含状態から人為形成による埋土と考えられる。

床は、基本土層のⅦa層下部およびⅦ層上部に形成されている。床面は北西壁～北コーナーよりが高く、南コーナーよりが低く、その高低差は約4cmである。しかし、床面全体としてはゆるやかな小起伏が認められるもののほぼ平坦である。床土は住居中心付近南西壁よりおよび北東壁よりを除いて固く締まっており、その層はⅦ層の南部浮石層間隙を中掫浮石質の暗褐色土や砂質の褐色土が埋めているが、その層厚は極うすい。なお、他の住居址で認められた南部浮石の圧砕層は形成されていない。

出入口と考えられる張り出し部は、北北東～南南西方向の最大195cm、直交方向48cmで、その床面には粘性のある暗褐色土と南部浮石との混合土を2～4cmの厚さで貼りつけてあり、非常に固くなっている。レベルは他の床と同じかやや低い部分も認められる。なお、出入口部の床面の左右両端付近には礫石器（EⅡ－0251S）と礫が各々に1個ずつ置かれたような状態で出土し、更に貼付土を除去したところPo－16の小穴が確認された。小穴の規模は、上端径24×22cm・同下端径10×5cm、深さ14.7cmである。埋土は、底面付近の2cm位が黒色土で他は南部浮石と暗褐色土との混合土である。

床面で確認した施設・構造としては、出入口部にある小穴を含めて柱穴および柱穴状の小穴16穴を確認したが、周溝・炉・貯蔵穴は確認していない。また、床面に小粒炭化物は散在するが、他の住居址で認められたような炭化材は一切確認していない。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられているが、遺存状態は良くない。遺存する部分は、左右の袖の一部と煙導部、そして支脚として利用された甕の底部周辺である。燃焼部底面は極浅

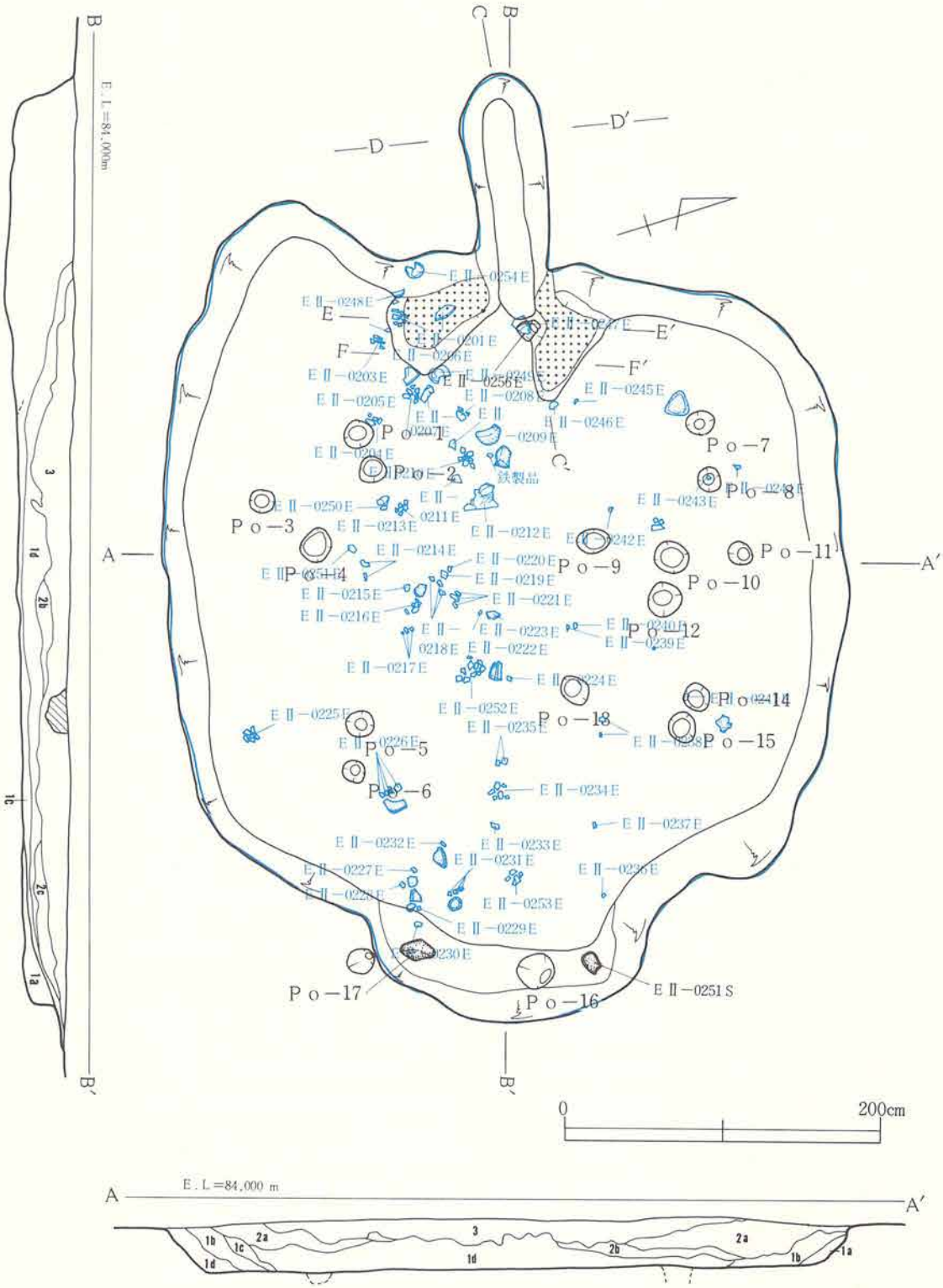
E Ⅱ－02住居址柱穴計測表　　（単位：cm）

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
1	17×18	10× 8	14	
2	16×16	10×10	20	
3	15×15	8× 8	22	
4	21×18	18×14	20	
5	18×16	8× 7	30.2	
6	14×14	8× 6	25.0	
7	19×16	8× 6	18.0	
8	16×14	8× 7	25.8	

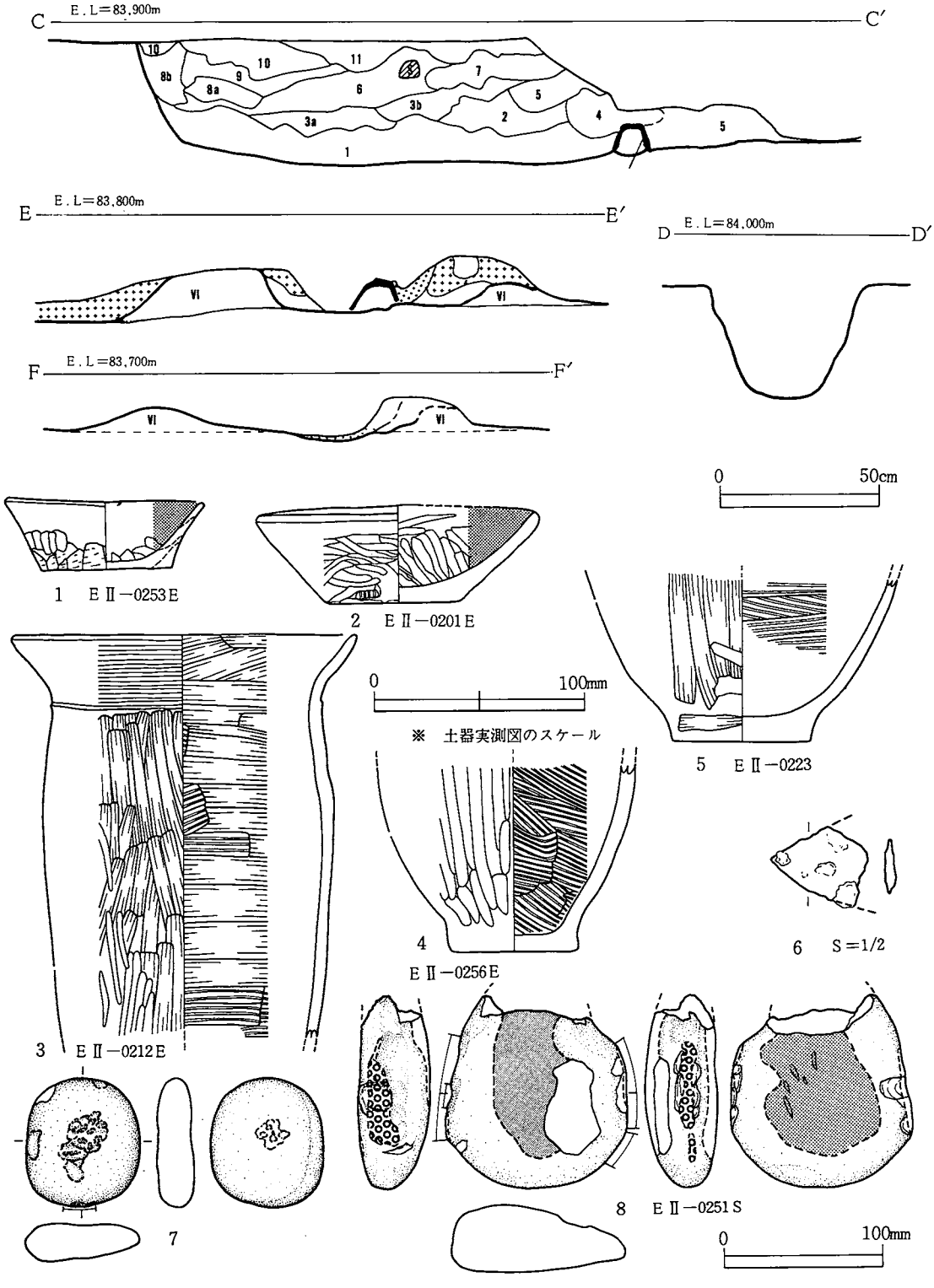
柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備　考
9	21×16	12×10	23.9	
10	22×19	14×12	22.0	
11	16×14	8× 7	23.7	
12	22×20	13× 9	22.3	
13	22×18	11×11	30	
14	20×18	12×10	27.0	
15	20×18	12×10	31	
16	24×22	10× 5	14.7	柱穴とはやや異なる
17	16×16	5× 5	33.3	竪穴外

いくぼみで、底面の焼土化は非常に弱く、その範囲は不明瞭である。また燃焼部底面は煙導に向かってゆるやかに下がっており、支脚の後方が急に落ちて煙導部に至っている。袖の形成は基本土層のⅥ層・Ⅶa層を削り残した造りだしで、その上位に粗砂質の灰白色土を貼りつけているが、芯材や天井材として用いられた礫は全く存在しない。両袖遺存部の最大幅は145cm、同左袖60cm、同右袖40cmで、奥行きは左袖50cm、右袖55cmである。煙導部底面は支脚と考えられる土器の後方が一段と低く、その後概ね水平に煙導部端に向かうが煙導部端の手前50cmぐらいから次第に高くなる。煙り出しは煙導部底面よりも外方にあり、形状規模は不明である。なお、煙導部全体は、上位からの掘りこみによる形成で、各部の横断面形は実測図D～D′に示した形状であり、上端幅43～56cm、同上端幅12～28cm、支脚の後から煙導部端までの長さ156cm、竪穴上端からの長さ120cmである。深さは竪穴部上端付近で40cm、煙出し付近で33cmである。

出土遺物の多くは、埋土中からの出土であり、本遺構の所属時期等を示す資料としてはカマド部の支脚として用いられていた図版52－4（E Ⅱ－0256E）の甕、左袖の灰白色から出土した坏（図版52－2、E Ⅱ－0201E）の2点で、他に床から出土したものとしては図版52－6(大刀子の破片？）と同7・8の礫石器があげられる。他の遺物は1b層から2層にかけての出土である。坏は、何れも平底である。1は外面にヘラケズリとミガキの調整が施されているが、上半は2次火熱のため不明、内面はヘラミガキ調整の後、黒色処理を施しているが上半は外面と同様に不明であり、底面もミガキ調整である。2は外面がハケメ調整の後、粗いミガキ調整、内面はミガキ調整と黒色処理が施されている。また底面はヘラナデ・ミガキの調整が重複している。3・4・5の甕は胴体部外面がヘラナデあるいはヘラミガキ調整が施され、同内面には



図版51：ＥⅡ−02住居址



図版52：EⅡ−02住居址と出土遺物

ハケメ調整やヘラナデ調整が施される。口縁部のある3では肩部に段が形成され、口縁部外面は横ナデ、内面はヘラナデの調整である。なお、底面は4がハケメ調整、5は木葉痕が認められるが2次火熱による風化や胎土を構成する砂礫の脱粒で不明瞭な状態である。礫石器の7は2平坦面にくぼみ石状の集中敲打痕、側縁の一部にも敲打痕をもっている。8は2平坦面が滑沢な面をなし、わずかに線条痕を伴う。側縁の相対する部分に粗い敲打作用面が形成され、図の左側縁には断面が半円をなす樋状のくぼみが形成されている。

⒀E Ⅱ－03住居址　　（図版52～56、写真図版41～45）

本遺構は、E Ⅱ－J・K・N・O他にわたって位置しているが、その大部分はE Ⅱ－N区に位置し、煙導部は北西壁の外方でE Ⅱ－J区に位置している。確認状況はE Ⅱ－02住居址やE Ⅱ－01住居址とほぼ同様である。確認状況は、耕作土層を約50cmほどを除去した所、十和田a火山灰を含む耕作土の下部が現われ、住居址の存在を確認した。しかし、この段階では平面形状が不明であったため更に10cmほど掘り下げて写真図版41－1に示す状態を確認した。確認層位はⅣu層上部である。

平面形は、北西壁の中央に煙導部が張り出し各コーナーが円味をもつ隅円の方形であるが、南西壁・北西壁・北東壁の各辺が外方に膨れており、南東壁はほぼ直線である。確認した規模は、主軸上端606cm・同下端552cm、直交軸上端618cm・同下端548cmで、主軸の方向は真北に対して西偏60度の方向である。

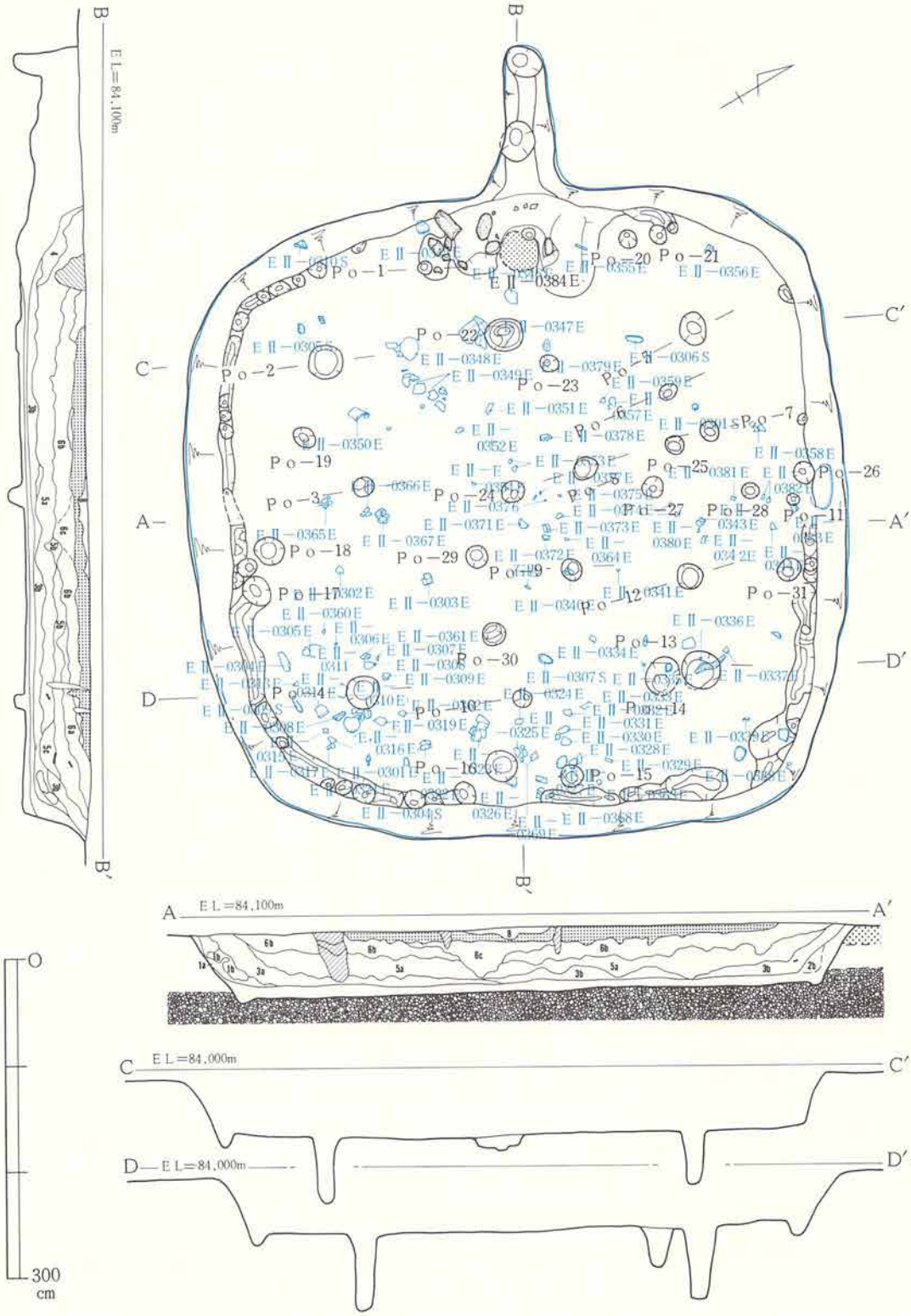
壁の高さは、遺構確認面の起伏および床面の起伏との関係から同一辺の壁でも高低差が見られるが、各壁は以下の範囲にある。カマドが設けられている北西壁は49～58cm、北東壁57～48cm、南東壁45～58cm、南西壁49～54cmである。また、立ちあがり角度は北西壁が24～30度、北東壁15～20度、南東壁15～20度、南西壁20～25度であるが、各壁とも壁の中ほどから外反ぎみになって上端に達している部分が多いことから、上記の外傾角は更に大きくなる。

埋土は、大別8層に区分しており、1層から6層は各々を更に細分している。1層は、炭化物粒（3～10mm)、焼土粒（2～5mm)、南部浮石を多量に含んだ粘土質の暗褐色土(7.5YR3/3～3/4）で、全面にサンクラック痕が認められ、そのクラックに上位の2a層が入っている。壁ぎわなどに砂質土ブロックや中掫浮石の小・中ブロックが散見され、乾燥するとガリガリに固くなる。2a層は中掫浮石質のにぶい黄褐色～褐色土（10YR4/3～4/6）で粘性がある。1層よりは少いが炭化物を含み、全体的に中掫浮石の小ブロックが散在する。おな、壁際には中掫浮石の2次層や大ブロックが見られる。1層と同様にサンクラックが発達しており、そのクラックを1a層の黒色－黒褐色土（10YR2/1～2/2）が埋めている。1a層は黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2）で、1b層は小粒浮石質の黒褐色～暗褐色土（10YR2/2～2/3）で少量の十和

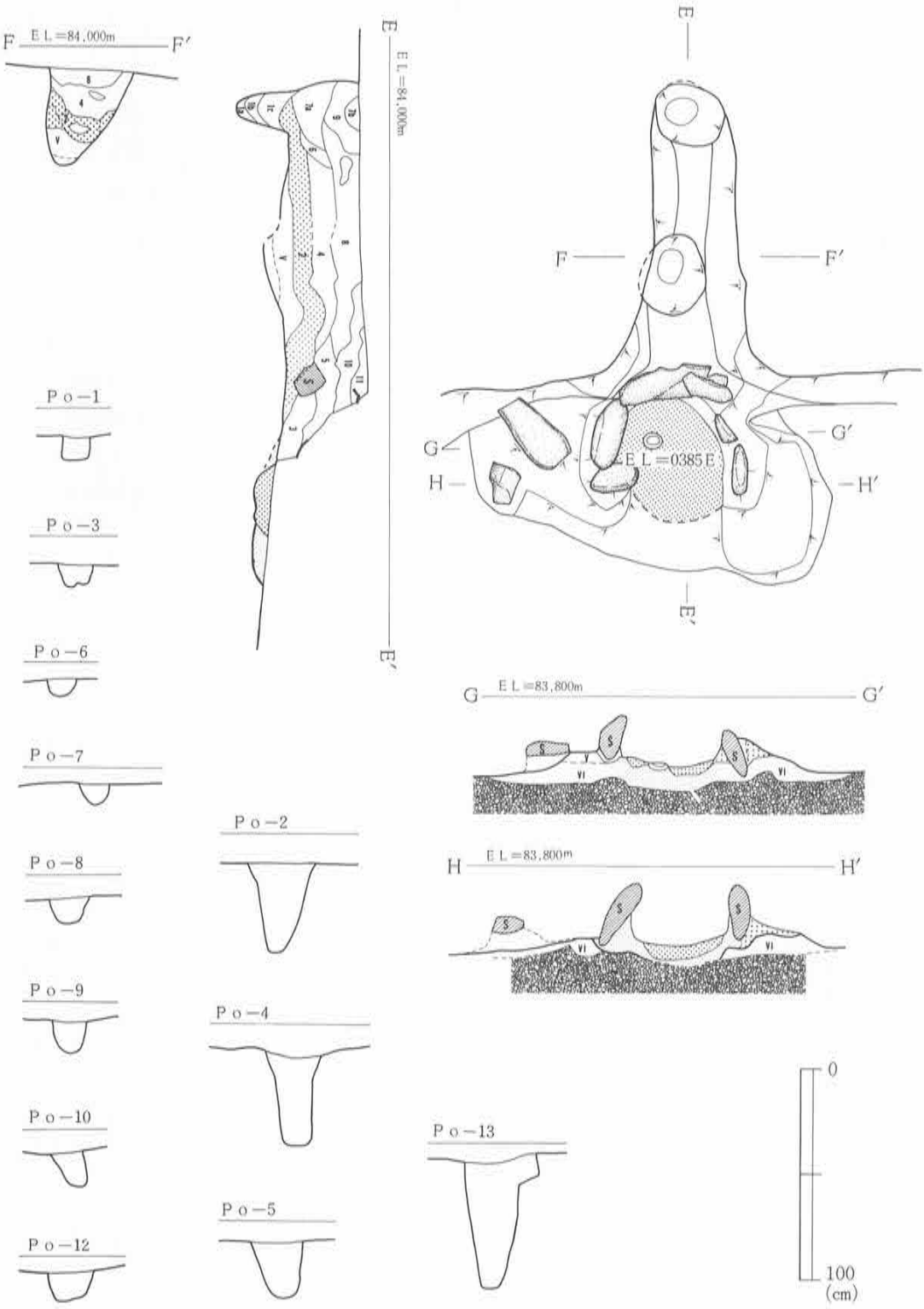
田ｂ浮石・中掫浮石が混在する。粘性はなく、締まりは一様でない。１ａ・１ｂの分布範囲は、南南東からカマドの左側までの壁に沿った範囲に堆積している。３ａ層は、小～中粒浮石質の（15～20％含む）暗褐色土（10YR3/3 3/4）で南部浮石・十和田ｂ浮石粒が散在するが、浮石量は住居址中心よりに移行するにつれて少く、かつ小粒となる。３ｂ層は基本的には２ａと同様であるが、南部浮石・十和田ｂ浮石はほとんど含まず、中掫浮石が25％近く含まれる。南東壁際では中掫浮石の中～大ブロックが散在する。また、カマド周辺などの２ａ層と接する範囲では、小粒炭化物カマド形成土小粒を含み、色調も部分的に変化する（10YR2/3、3/1、4/3～4/4）°３ａ・３ｂとも粘性がない。４層は基本的な構成・色調は３層に酷似するが、炭化物小粒が多く全体的に光沢をもち、暗色に見えるが、色調は10YR3/3～3/4を呈する。５層は小～中粒浮石質の黒色～黒褐色土（10YR2/2～2/1）を主体とし、全体的にブロック土構成のため中掫浮石・南部浮石の混合状態によって色調が大きく異なる部分もある。５ａ層は南部浮石・十和田ｂ浮石が15～20％含まれ、上位の６層との境付近には５㎜前後の炭化物粒を含む。５ｂ層は基本構成・色調は５ａ層と同じであるが、炭化物（３～15㎜）を10％、３～５㎜の焼土粒を５％前後含む。５ｃ層は中・大粒浮石・炭化物が多く含まれ、不規則に３～10㎜の焼土粒も含む。なお、５層全体としては粘性がなく、締まりは一様ではない。６層は全体的に十和田ｂ浮石を多量に含んだ黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/2）を主体とするが、部分的には10YR1.7/1の黒色土や草木根痕等を伝わった十和田ａ火山灰のブロックが散在している。６ａ層は前述の特徴に南部浮石・少量の炭化物・中掫浮石ブロックが散在し、６ｂ層は前述の基本構成・色調のとおりである。６ｃ層は木根痕によるものか、あるいはその他の原因によるものかは不明であるが十和田ａ火山灰堆積前に攪乱を受けた部分である。また６ａ・６ｂに比べて木根痕を通じての十和田ａ火山灰ブロックが多く、更に５ｂ層のブロックも混在し、全体的に軟らかい。７層は十和田ａ火山灰層、８層は十和田ａ火山灰のブロック構成部で攪乱部と考えられる。しかし、他のブロック土を含まないことから７層の堆積直後に攪乱されたものと考えられる。なお、以上の埋土のうち３～５層は、土師器等の遺物を包含する。

床は、大部分がⅦ層に形成されているが、カマド付近や東コーナー付近はⅦａ層中に形成されている。床土は南部浮石の間隙をやや粘性のある暗褐色砂質土が埋めた状態にあり、わずかに固く締まっている。なお、中央付近の南部浮石は圧砕されており、壁近くの床や周溝部を埋める土層は前述の構成土が整地された程度の締まりとなっており、特に固く締まってはいない。床土の厚さは、部分による差が大きく20～50㎜の範囲にある。床面は、全体的にゆるやかな小起伏が認められ、北コーナー周辺や東半分が高く、西側が低くなっている。

床面で確認した施設・構造としては、柱穴（Ｐｏ－１～Ｐｏ－13）と西コーナーの周溝、小穴列であるが、床土である整地層および汚損土を除去した段でＰｏ－14～Ｐｏ－30、および他の周



図版53：ＥⅡ－03住居址（1）



図版54：ＥⅡ－03住居址 (2)

溝・小穴を確認した。これ以外の貯蔵穴、炉は確認していない。床面で確認した柱穴のうち、Po－1はカマドの袖形成土の2次層を切っていることから住居址よりも新期と考えられる。Po－2、Po－4、Po－5、Po－13の4穴は、位置および配列が竪穴全体と調和がとれていることから主なる柱穴と考えられる。また、床下で確認した柱穴は、その配列状態から全てが本住居址と関係するものとは考えにくいが、柱穴以外に他の遺構の重複を示すものはない。

E Ⅱ－03住居址柱穴計測表　　（単位：cm）

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備考
1	12×12	7× 6	10	左袖の面
2	33×31	26×22	65	
3	19×16	10× 8 10× 6	17 13	底に2穴あり
4	32×30	18×17	70.7	
5	30×24	16×12	51.7	
6	17×13	8× 5	10.8	
7	20×18	10× 7	13.2	
8	24×20	17×15	22.6	
9	22×18	12×11	16.4	
10	18×16	6× 5	15.8	
11	12×10	5× 5	16.0	
12	25×24	18×16	16.9	
13	36×34	29×26	70.2	
14	38×30	18×15	32	
15	22×20	10×10	9	

柱穴番号	上端径 長径×短径	下端径 長径×短径	深さ	備考
16	29×28	16×15	8	
17	29×23	14× 8	7.1	
18	28×24	16×15	10	
19	24×18	10× 8	7.6	
20	16×16	5× 5	7.0	
21	18×15	6× 5	7.8	
22	37×30	15×10	8.6	
23	19×16	7× 6	3	
24	22×20	10× 6	12	
25	18×16	13× 8	25.8	
26	20×19	7× 6	8.8	
27	20×20	6× 6	8.5	
28	16×16	8× 6	5.8	
29	22×19	11×10	12.8	
30	22×22	14× 6	14.9	底が偏在段あり
31	22×19	10× 9	19.7	

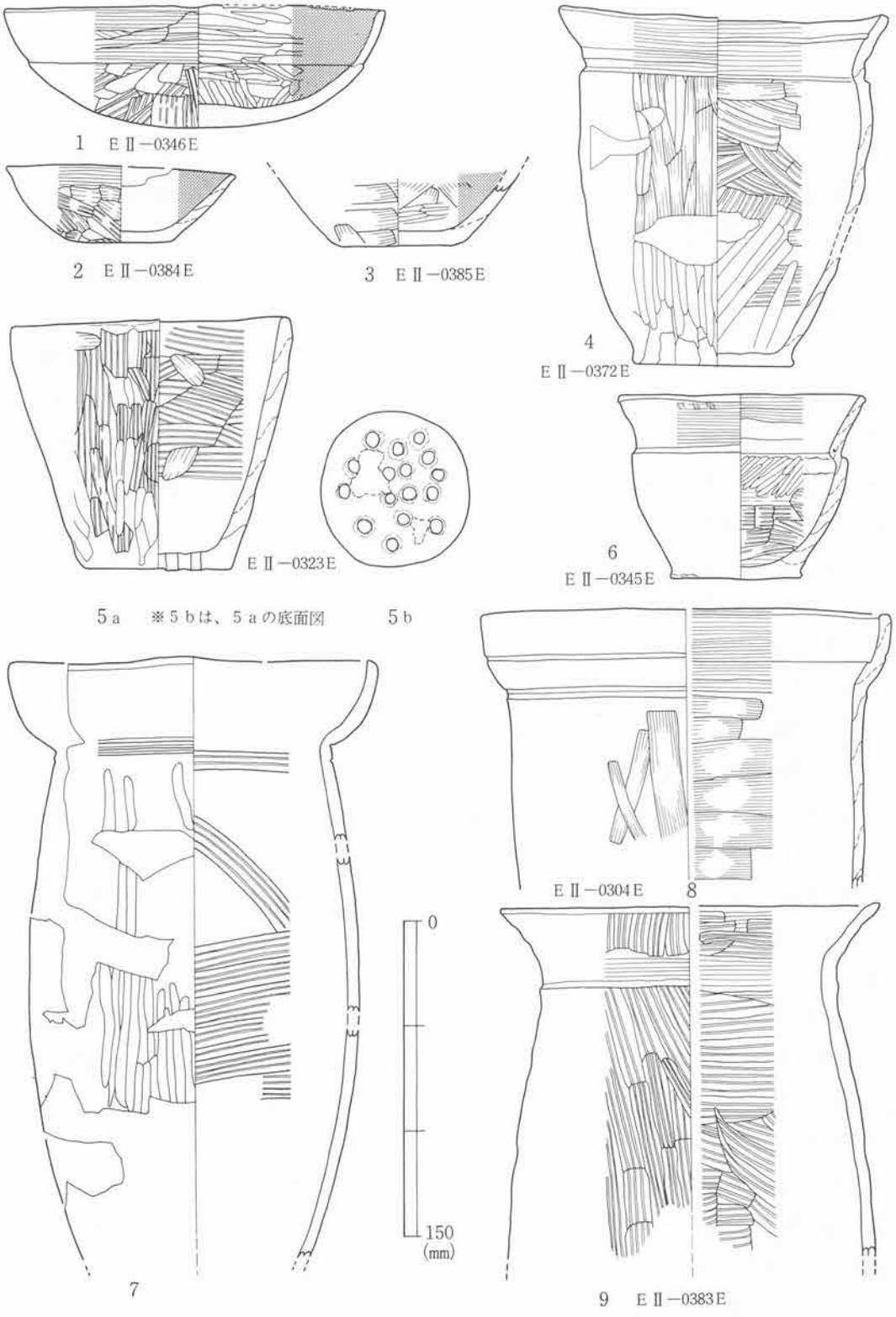
周溝および周溝に重複する小穴は、カマドの西側、および北コーナー周辺では存在しないか不明瞭である。また、南東壁下のほぼ中央（Po－16の脇）で26cmほど切れている。周溝の底面は、小穴が重複していることから凹凸が強く、周溝の底面なのか小穴の底面なのか区別しがたい所も存在する。周溝の上端幅は10～22cm、深さは5～10cmで小穴の深い所でも20cmをこえない。

カマドは、前述したように北西壁の中央に設けられており、その遺存状態は比較的良好である。カマド本体の両袖は、被覆土の流失は見られるものの基底部と袖芯材として埋めこまれた

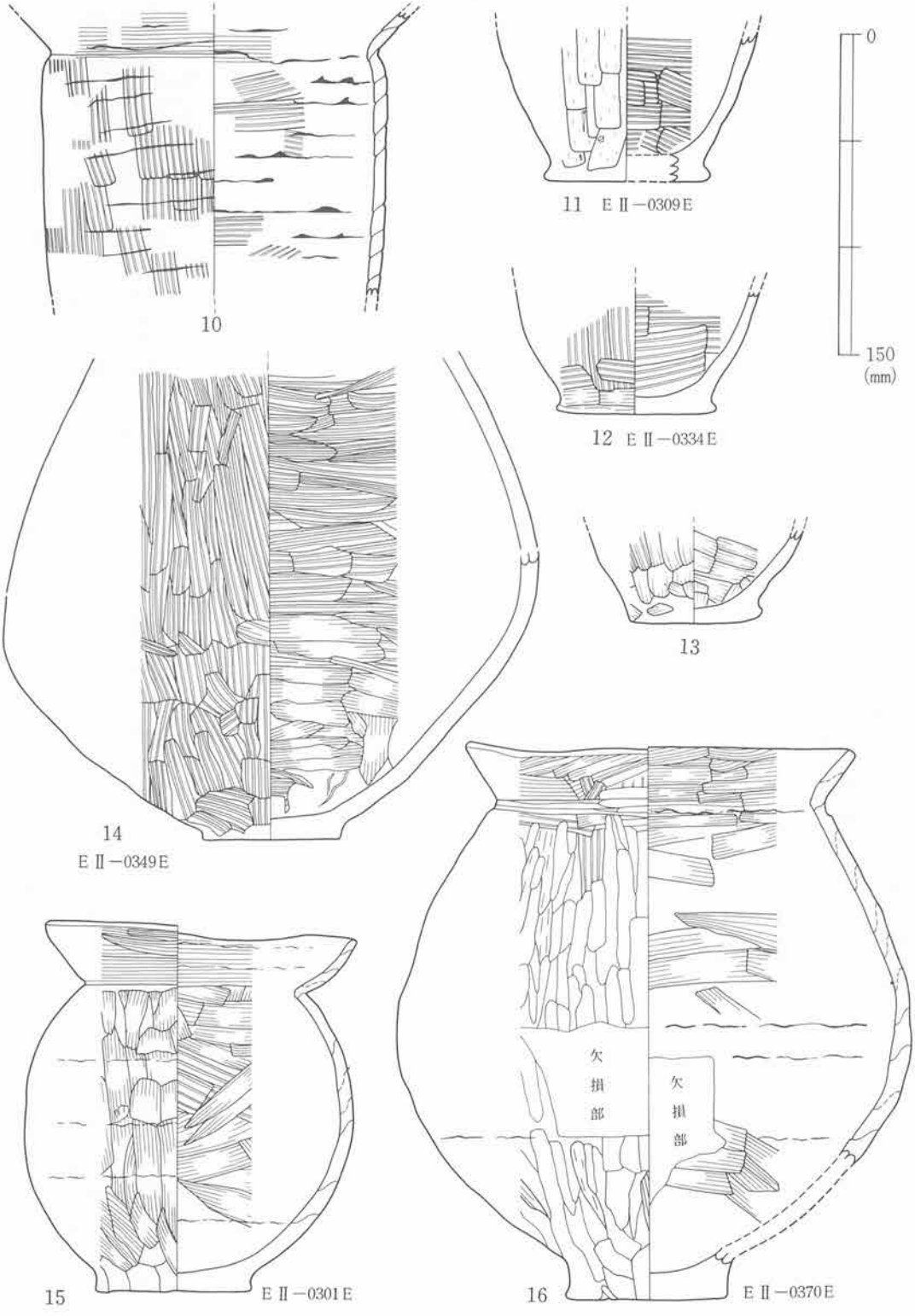
河原石（扁平円礫）各２個が残っている。また、天井石は本来の位置から移動しているが奥側では３つに割れたものが煙導部よりに位置している。また手前側の天井石と考えられるものは、カマド左側に２つに割れた状態で存在する。これら天井石、あるいは天井石と考えられる礫は、何れも凝灰質破岩を削り整形したもので、一面が強く焼けている。なお、袖の形成は基本土層のⅥ層・Ⅴ層を削り出しており、更にその削り出し部に芯材を埋め、粘土質の黄橙色～明黄褐色土（10YR7/3～7/6）を盛り上げ被覆形成している。被覆土は黒褐色の細粒浮石質土や褐色土のブロックが混在した中砂質～粗砂質土である。左袖の基底幅40cm・奥行き55cm、右袖の基底幅50cm・奥行き55cm、両袖の最大幅は約140cmである。燃焼面は、基本土層のⅥ層～Ⅶ層が奥行き85cm・幅50cmの楕円形に焼土化しているが、奥側の55×50cmの範囲が強変した焼土層となっている。最大層厚は９cmである。また、燃焼面は焚き口側が低く、煙導部よりが高い傾斜面となっており、その傾斜度は80cmで10cm高くなっている。煙導部底面は、燃焼面の奥側に続いてやや上がりぎみになって小穴状の手前まで続くが、小穴状のくぼみ部をすぎると概ね平坦となる。煙出しの下は径20×25cmの掘りこみとなっている。煙導部の規模は、竪穴上端から外方へ140cm延びており、その上端幅は60～35cm・同下端幅は30～15cmで何れも燃焼部側が広い。深さは40～30cmで、煙出し部の深さは58cmである。なお、小穴状部は焚き口側からの掘り込みと考えられるもので、その部分の深さは40cmである。

煙導部の埋土は、スクリーントーン貼付部が基本土層のⅣℓ 層で、その下位はⅥ層である。しかし、Ⅳℓ 層部は部分によっては大ブロック状をなし、層準が本来の位置よりも20cmほど低い所に堆積していることから煙導部天井が陥没したものと判断される。これらのことから、煙導部の形成は、焚き口側からの刳り貫きによるものと考えられる。

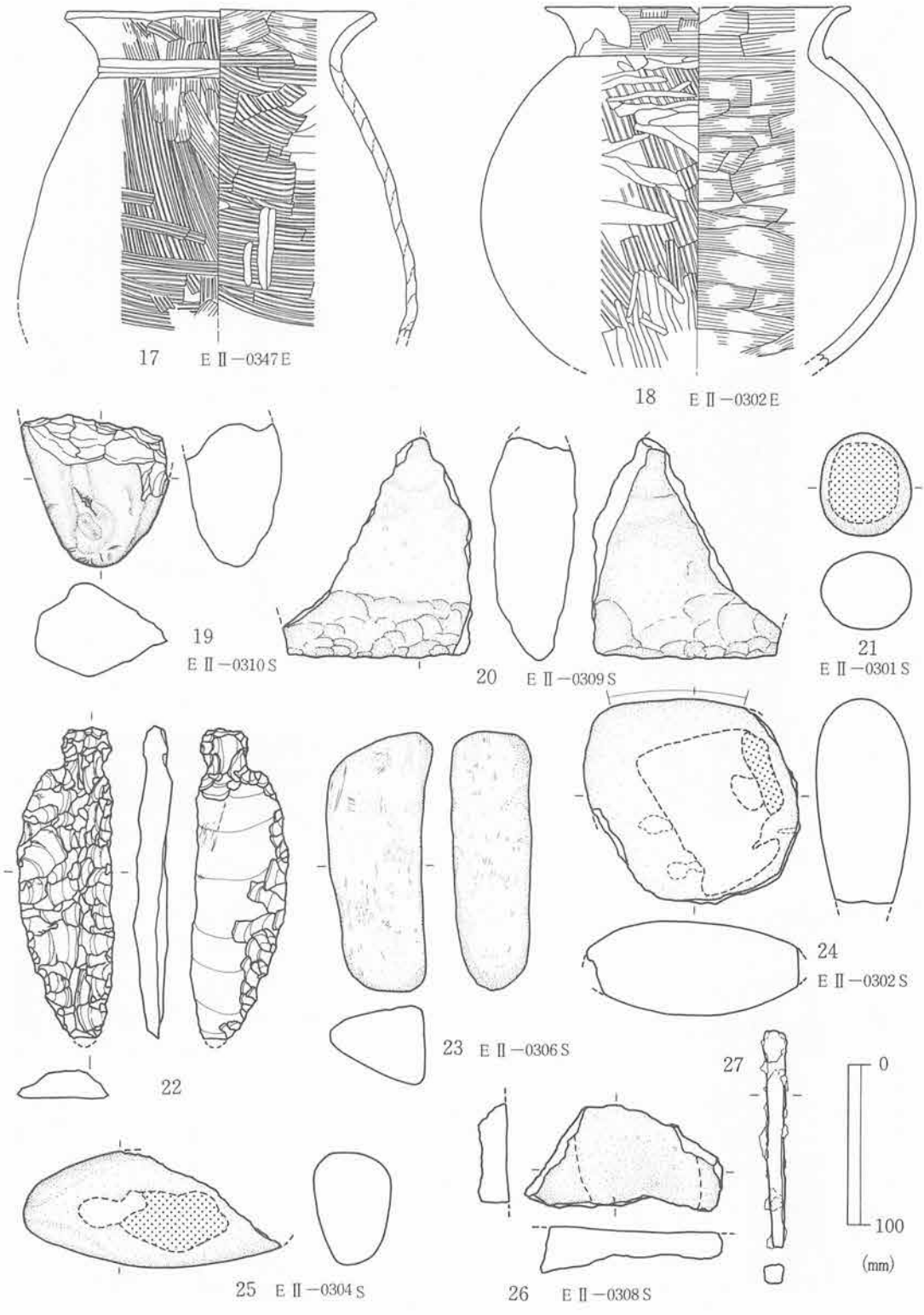
出土遺物は、図版55～57に示した各種器形の土師器・石器・鉄製品、そして縄文土器片などであるが、縄文土器片は別項で扱っている。出土遺物の大半は南コーナーから南東壁に寄った埋土の３a・３b・５a層からの出土であり、床上および２a層に包含される資料やカマド内外からのものは少い。図版55の１・２・３および図版56－13はカマド内の出土で、13はその出土状態、２次火熱の状態から支脚として用いられた可能性が高い。図版55－５は内外面ハケメ調整の多孔式甑で、部分的にナデ調整が見られる。これは半ば２a層に埋もれる状態で出土した。同図の６はカマド左袖の流出土中から出土したもので、外面は底部周辺にヘラケズリ調整を、胴体部およぶ口頸部をハケメ調整した後、各々に掌指等によるナデ調整を施している。なお、肩部相当部は明瞭な段となっている。内面は一底面から頸部までハケメ調整が施されており、その頸部付近に掻きとり様のケズリ調整がなされている。底面はハケメ調整である。図版56－13（ＥⅡ－0384ＥＢ）は、図版55－２（ＥⅡ－0384ＥＡ）と同様に燃焼部から出土したもので支脚と考えられる甕の底部周辺である。器面調整は、底部周辺が部分的にケズリ調整が施され83,900



図版55：E Ⅱ－03住居址出土遺物 (1)



図版56：E Ⅱ－03住居址出土遺物 (2)



図版57：E Ⅱ－03住居址出土遺物 (3)

体部は内外面ともヘラナデ調整である。その他、床に接するが大部分の破片が2ａ層中にあった。図版56—14・15、図版56—17・18の球胴形の甕および壺形土器がある。これらは18を除いて何れも使用によると考えられる２次火熱の痕跡が強く認められる。器面調整はヘラナデあるいはハケメ調整が内外面に施され、底部周辺には部分的にヘラケズリ調整も認められる。

石器・石製品としては、図版57—19～26が出土している。他にも多くの礫塊が出土しているが、使用等の痕跡が不明なものが多い。床面～２ａ層中から出土したものとして21の磨石、23・26の砥石が存在する。また、22の石匙はＰｏ—29の東側の整地層中からの出土である。その他の礫石器・鉄製品は埋土の３ａ層および５層からの出土で、投げこみによるものと考えられる。

⑭ ＦⅡ—01住居址　（図版58、写真図版46）

本遺構は、ＦⅡ—Ｐ区およびＦⅡ—Ｌ区にわたって位置しているが、その主体はＦⅡ—Ｐ区にある。確認層位は、一部が耕作土表面から40～45cmのⅡ層中であるものの、長薯・牛蒡等を栽培した溝状の耕作痕（深さ60～115 cm）が並行しているため図示した全体形状を確認したのはⅢ層下部からⅣu層上部である。確認した遺構の範囲は、以下に述べる確認規模の状態から西側の40～45％と考えられ、東側の大部分は調査区域外に広がっている。

平面形は、コーナーが若干円味をもつが、各辺は直線の方形住居と考えられる。確認規模は北西～南東方向の上端390 cm・同下端365 cm、南西～北東方向の上端250 cm・同下端235 cmである。壁高は、土層断面による確認値は最大50cmであるが、平面形確認後は20～25cmである。また、塾の立ち上がり外傾度は25～30度の範囲にあり、南コーナー周辺では上部が外反状に立ち上がっている。

埋土は耕作土層を除いて全６層に区分し、床面にのる十和田ａ火山灰や３ａ層上部にある同火山灰の大ブロックには層記号を植字していない。１・２層は十和田ａ火山灰である。床に直接のる火山灰は細砂～中砂質の火山ガラスを含むもので南コーナーに堆積している。上部の十和田ａ火山灰は、ガラス分が少く粗砂状の非常に軟らかい浮石を含み、その分布は平面図の同種記号範囲である。３層は十和田ｂ浮石を多く含んだ黒褐色～暗褐色土（7.5YR3/2～3/3）で、十和田ａブロックや炭化物を含む。３ｂ層は十和田ｂ浮石・炭化物が特に集積した層である。４層は、十和田ｂ浮石や明褐色浮石、炭化物を不規則に、かつ多量（20～30％）に含んだ暗褐色土（7.5YR3/3～3/4）を主体とするが、その他の色調部分も見られ、全体としては斑で一定しない。５層は、十和田ｂ浮石や炭化物を含むが４層より少く、作物根・木根などの未分解質が多く認められる。色調は黒色～黒褐色（10YR2/1～2/2）を主体とするが、浮石の多い部分は黒色でも10YR1.7/1を呈するなど一定ではない。６層は小・中粒浮石をわずかに含む黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/2）で５層よりも一定した色調である。埋土全体の締まりは普通

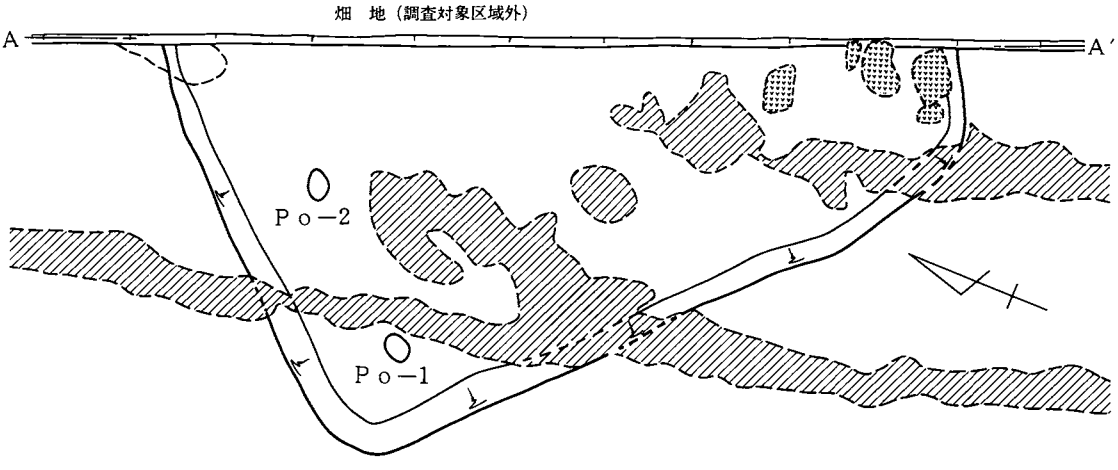
～やや軟らかく、粘性はほとんど見られない。

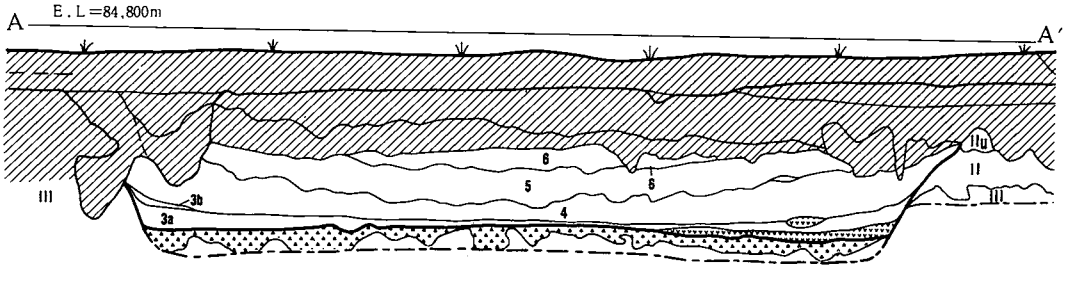
床は耕作土表面から92～90cmの深さにあり、基本土層のⅣℓ 層に形成されている。一部に踏み固めと考えられる部分や貼床と考えられる部分が認められるが、焼土化等は認められず一部の区域では十和田ａ火山灰が直接床面を覆っている。床面は耕作による破壊が広がっているが、全体的に小規模な起伏が見られ、中央付近が若干高くなっている。

床面で確認した施設、構造としては、北西壁に沿った位置に浅い柱穴状の小穴２穴を確認しているが、この小穴は非常に浅いものである。これ以外のカマド、炉・焼土、あるいは周溝や土坑等は確認していない。

ＦⅡ－01住居址柱穴計測表　（単位：cm）

遺物は、耕作による溝状の攪乱部から縄文土器片をとりあげているが、床面および埋土中からは何ら出土していない。





図版58：ＦⅡ－01住居址

⑮ＧⅠ－01住居址　　（図版59．写真図版47、45）

本遺構は、ＧⅠ－Ａ区およびＧⅠ－Ｅ区にわたって位置しており、その確認層位は基本土層のⅠ層（耕作土層）を除去した段階のⅡ層上面で、耕作土表面から22～30cmの深さである。しかし、長長薯アスパラガス等の栽培痕が溝状に重複していることから平面形状を明確にしたのはⅢℓ 層～Ⅳｕ層上面である。確認した遺構の範囲は、東コーナー周辺で全体の20％未満であり、西側の大部分が調査区域外に広がっている。

平面形はコーナー部が円くなっており、各辺は外方に膨らんでいるが、方形を基調とした形状と考えられる。確認した規模は、北東～南西方向（南東辺）の上端最大240cm、北西南東方向（北東辺）の上端最大290cmである。壁は土層断面による高さは70～72cmであるが、Ⅱ層等を20～25cm除去したことから最終の記録は48～53cmである。また、壁の立ちあがり外傾度は30～32度の範囲にある。断面図中右側の６層および左側の７層端部の状態は、浸触によるものか、竪穴形成時からのものかは不明であるが、段差をもっている。また、この段差は断面図作成区域で確認したものであり、竪穴全周にあったものかどうかは不明である。

埋土は12層に細分した。１層は中掻浮石ブロック（Ⅳ層）と焼土ブロックとの混合土で、中掫浮石のブロックも弱い焼土化を炭素吸着が見られ、その分布は壁直下の床に散在する。２層は焼土ブロック、炭化材、炭化材片を含んだ褐色土　（7.5ＹＲ4／4～4／6）で炭化材は上部に分布する。３層は、灰褐色～褐色土（7.5ＹＲ4／2～4／3）で焼土ブロック、炭化材片等が含まれるが、２層よりは少量である。また、炭化材は壁際では本層上部に含まれる。4.5層は焼土の大ブロックである。６層は小粒浮石質の暗褐色土（10ＹＲ3／3～3／4）と中粒浮石質黒色土（10ＹＲ1.7／1）との不規則な混合土層で焼土粒・炭化物粒を少量含み、締りがなく指痕がつきやすい。７層は中粒～小粒浮石質黒色土（10ＹＲ1.7／1）で締りは良好である。浮石含有率は、全体的に20％前後で上部ほど中粒が多く、下部は小粒が多い。８層は中掫浮石が40％前後の黒色土（19ＹＲ1.7／1）で７層土の上部に近似する。９層は十和田ａ火山灰層である。層厚は中心寄りが15cm前後で、周辺部が急に薄くなっている。10層は９層の上部を攪乱しつつ形成された黒褐色土層で、色調、締りは一定していない。また、上部に水成の篩い分け現象が散見される。11層は小粒浮石質の黒色～黒褐色土（10ＹＲ2／1～2／2）で、多湿時には光沢が見られる。締りは普通か、やや軟らかい、12層は腐植土質褐色土（10ＹＲ3／1～3／2）であるが中央付近の上部は黒色～黒褐色（10ＹＲ2／1～2／2）へと漸移する。床は、基本土層のⅥ層中に形成されている。床を形成する土は、大粒浮石（南部浮石）を含む砂質の暗褐色～褐色土（10ＹＲ3／2～3／3）である。床面は一部に焼土化が認められ、炭化材片・焼土塊などが散在し、黒褐色を呈するが、特に貼床を行った形跡は認められない。

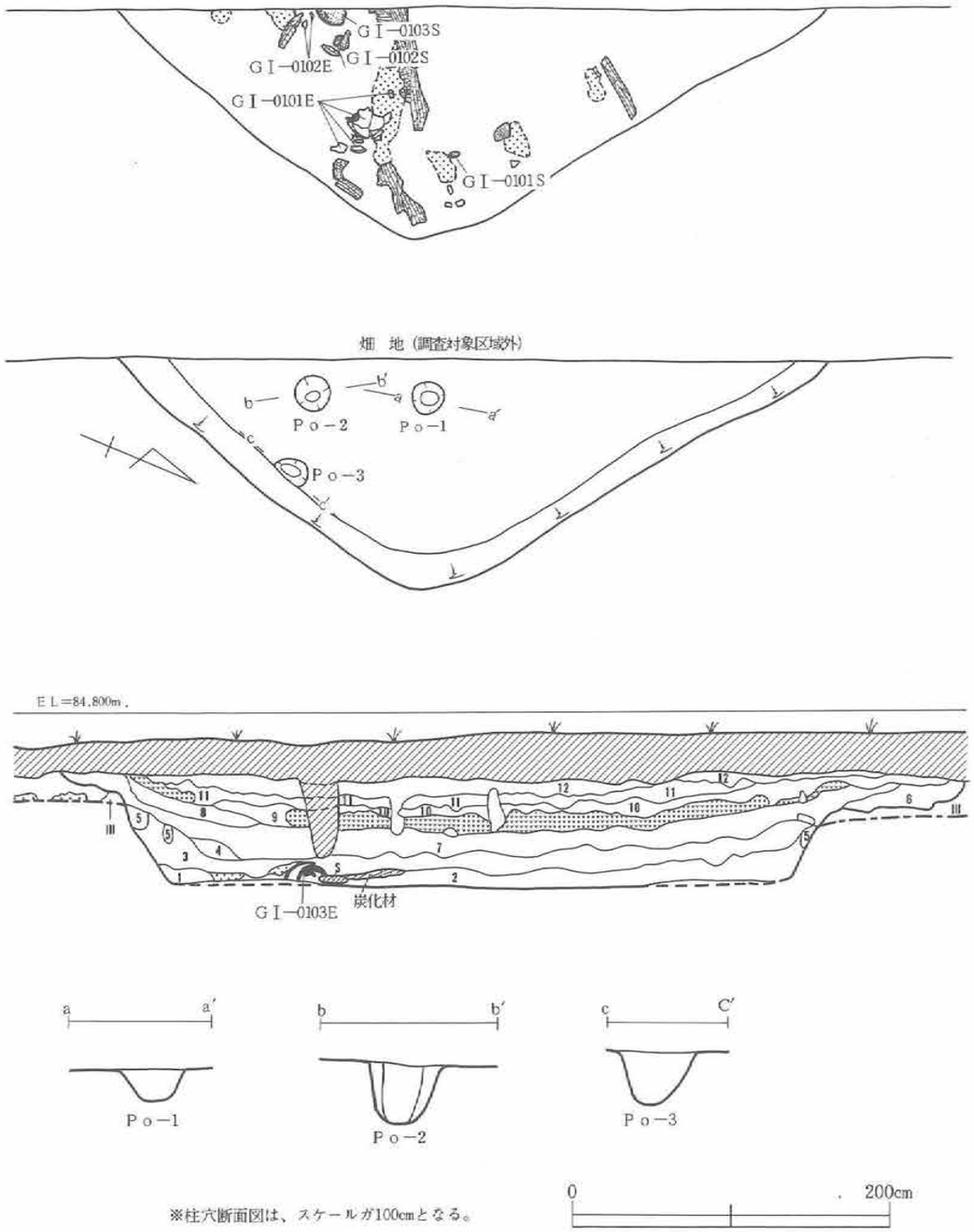
床面で確認した施設・構造としては、柱穴と考えられる小穴３穴であり、カマド・炉・周溝、

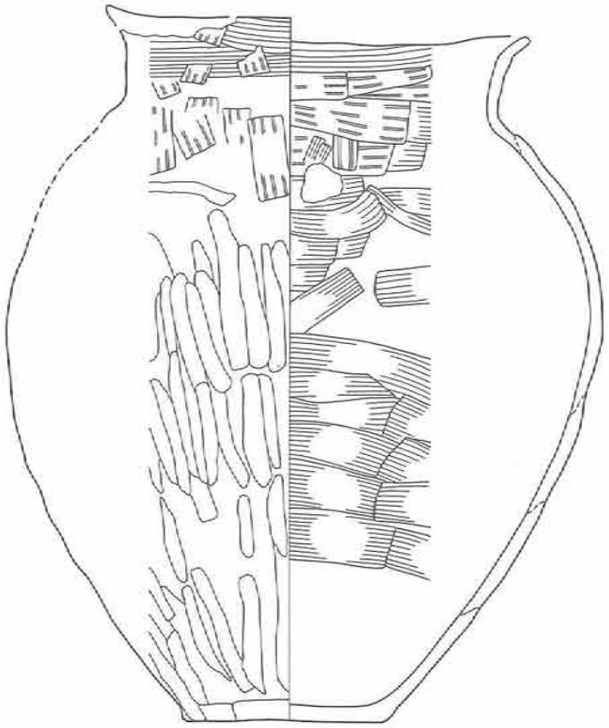
あるいは付属する土坑は確認していない。Ｐｏ－２は柱痕跡をもつ小穴で埋土上部に炭化材片が認められ、他の２穴は、Ｐｏ－２より浅くまた単一の埋土で柱痕跡・炭化材片は認められない。

柱穴番号	上端径	下端径	深さ	備　考
P_{σ}-1	20×21	――	10	
P_{σ}-2	22×23	――	21	柱痕跡・炭化材
P_{σ}-3	16×22	――	14	

出土遺物としては、図版59、の土師器甕形土器と大礫３個（ＧＩ－0101Ｓ～ＧＩ－0103Ｓ）が出土している。甕形土器は、ＧＩ－0101Ｅ～ＧＩ－0103Ｅの３カ所に分散した状態で出土した破片群が接合したものである。ＧＩ－0101Ｅは床面から30 cmほど上位の炭化材および焼土層にのった状態で埋土の７層中に包含されている。ＧＩ－0102Ｅは床からおよそ10cm上位の３層中にそしてＧＩ－0103Ｅは一部が床に接する状態で、２・３層に包含されている。土器は２次火熱による炭素吸着や吹っきれ、あるいは変色を生じている。完全復元にはいたっていないが、器形は十分把握できる状態にある。

器形は胴体部の最大径が上半にある球胴型の甕形土器で、口頸部は垂直ぎみに立ちあがった後、外反している。外面の調整は、口縁周辺がハケメ調整の後に横ナデ調整を、胴体部はハケメ調整の後、縦位のヘラナデおよびヘラミガキによる調整となっており、底部周縁はヘラケズり調整が施されている。内面は口縁付近がハケメ調整の後、横ナデ調整が施され、胴体部は横位のヘラナデ調整が施されている。なお、底部付近はヘラナデ調整の前に指頭等によるナデ調整がなされている。





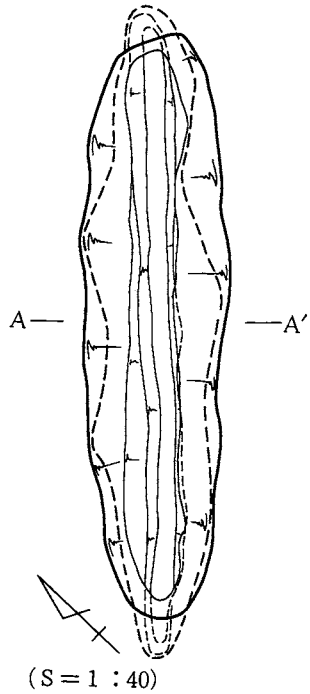
図版59：GⅠ−01住居址と出土遺物

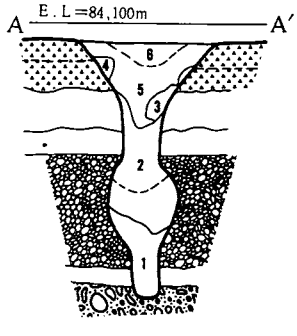
2．陥し穴状遺構および土坑

(1)DⅡ－001陥し穴状遺構　（図版60　○　写真図版52－1・4・5）　○

本遺構はDⅡ－K区にその主体があり、南々西端の一部がDⅡ－N区位置している。確認層位は、Ⅳu層上面～上部である。

遺構の形態は、溝状遺構とかTピットなどと呼ばれるもので、平面形は上端形状、下端形上ともに細長い土坑である。横断面形（短軸）は南部浮石層部が崩壊して外方に膨み、開口部付近のⅣu・ℓ 層部がY字状に開いている。また、長軸方向両端は南部浮石層部から底面までが上端形よりも外方へ張りだしている。規模は、長軸上端 306cm・同下端327cm、最大突出部345cm。短軸上端77cm・同下端14cm前後であり、崩壊部は30～60cmである。深さは南西 121cm、北東 137cmである。なお、底面は礫層上部に形成されており、起伏が見られる。





図版60：DⅡ－001陥し穴状遺構

埋土は、全6層に区分したが、2層はわずかな差異から更に細分可能であり、5層と6層との層界は色調構成物等が漸移的で不明確である。1層は、南部浮石に黒色土・褐色土のブロックが少量混在した層である。2層は小粒浮石質の黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/2）、細砂質暗褐色土（10YR2/3、10YR3/3）、南部浮石などの大小ブロックが不規則に混合した層で破線より下部は南部浮石の量が15%前後、上部は3～5%の混合率である。また、中掘浮石のブロックが本層の上部と下部（1層および5層に接する付近）に多く見られる。3層はⅣu層と黒色～黒褐色土の混合土層4層はⅣ層のブロック、5層から6層は黒褐色土（10YR2/2～2/3）から次第に10YR2/1～10YR1.7/1～へと色調が漸移し、6層上部は中粒浮石質の黒色土（10YR1.7/1：Ⅱ層）となる。

遺物は何ら出土していない。

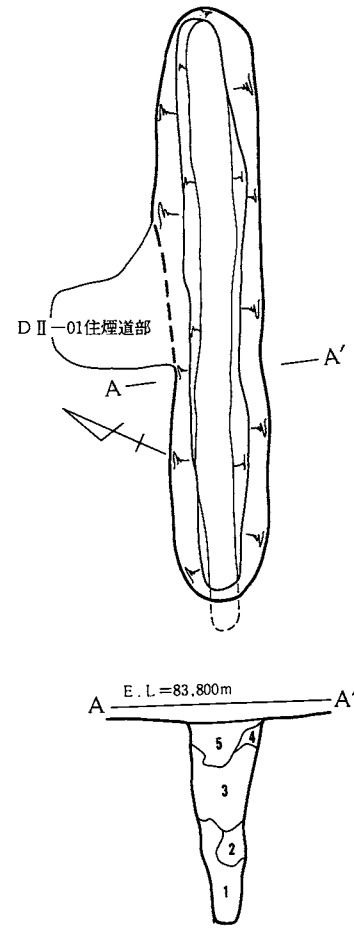
(2)DⅡ—004陥し穴状遺構　　（図版61、写真図版52—6・7）

本遺構は、DⅡ—01住居址のカマド部周辺で確認したもので、その位置はDⅡ—E区に主体があり、一部がDⅡ—01区に位置している。確認層位は一部がⅣu層下部からⅣℓ上面で、一部はカマドの下位および住居の床面である。

基本的な**平面形**はDⅡ—001と同様であるが、側壁の立ちあがり方が直線的で、壁の崩壊がわずかである。また、長軸端下部の外方への張りだしは西南西端側だけである。規模は、長軸上端316cm、同下端326cm、短軸上端50～52cm：同下端16～21cm、深さは112～116cmである。

埋土は5層に区分した。1層は南部浮石を主体とした層で、小粒浮石質黒褐色土や中掘浮石、あるいはⅥ層と思われる砂質の褐色土等が不規則に混合し、粘性・締りがない。2層は、南部浮石を15%程含んだ暗褐色土や褐色土（10YR3/3～3/4、4/4～4/6）のブロック混合土層である。粘性がややある。締りは軟らかい。3層は小粒浮石質の黒褐色（10YR2/2～2/3）で、下部には糊部浮石を5%程含み、中～上部には中掘浮石の小～中ブロック及び炭化物が散在する。粘性がなく、締りは普通である。4層は3層の主体土と同じであるが、中掘浮石ブロック、炭化物を含まず堆積範囲が南東壁ぎわに限られる。5層は小・中粒浮石質の黒褐色土を主体とするが、上部は黒色（10YR2/～1.7/1）へと漸移する。

遺物は何ら出土していない。



（S＝1：40）

図版61：DⅡ—004陥し穴状遺構

(3)PⅠ—001陥し穴状遺構　　（図版62、写真図版52—8・9）

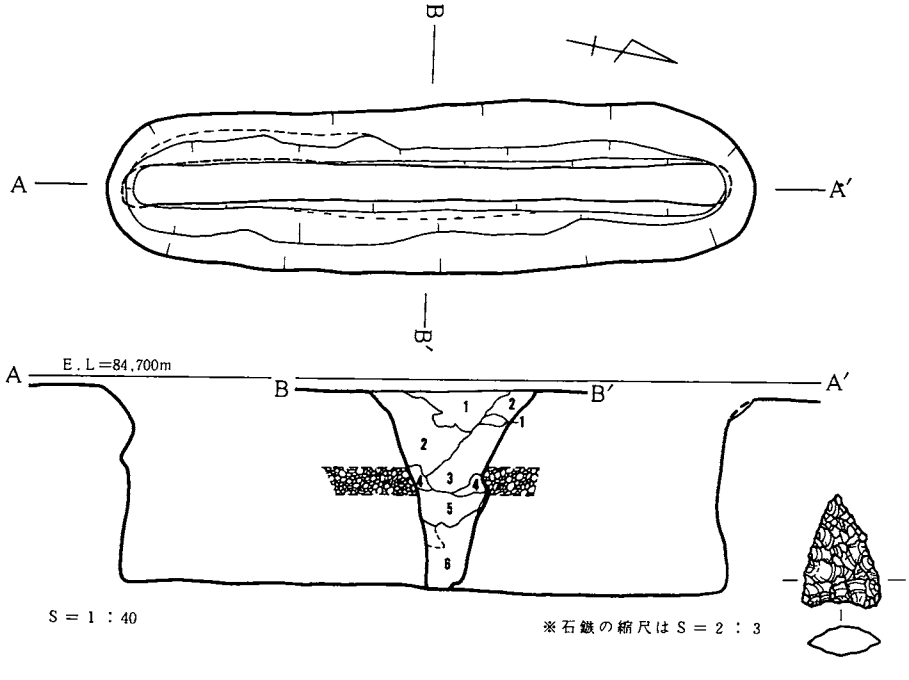
本遺構の確認区域は、PⅠ—Bであり、一部がPⅠ—Fにある。確認層位は、水田造成層を除去した段階で、Ⅳℓ層がわずかに残るⅤ層上面である。

平面形は、上端形および下端形とも溝状とか葉巻形などと呼ばれる細長いもので、横断面形

は下端が狭く、上端が広くなっているＶ字状を呈する。規模は、長軸上端345cm、同下端323 cm短軸上端80～85cm・同下端16～22cmで両端が若干広くなっている。また、南部浮石層およびその下位で壁の崩壊が見られ、壁が外方へ入りこんでいる部分も認められる。底面は礫層上部に形成されており、若干の起伏が認められる。深さは南々東端106cm、北北西端114cmと差が認められる。

埋土は全６層に区分した。６層は南部浮石（Ⅶ層の２次層）に黒色～黒褐色土のブロックが混合した層である。５層および２層は、南部浮石、十和田ｂ浮石を10～５％含むシルト質黒色土（10ＹＲ1.7／1）で、粘性がわずかに見られる。４層は南部浮石のブロック、３層は黄橙色の中小粒浮石を含む黒褐色土（10ＹＲ2／2）、１層は中掫浮石に富む黒褐色土（10ＹＲ2／2）で、わずかに南部浮石も含む。粘性はほとんど見られないが密に締っている。

出土遺物は、図示した鏃１点が３層から出土しただけである。両面とも全面調整が施された凹基無茎の石鏃で、法量は長さ15cm最大幅11mm重量２g である。



図版62：ＰＩ－001陥し穴状遺構と出土遺物

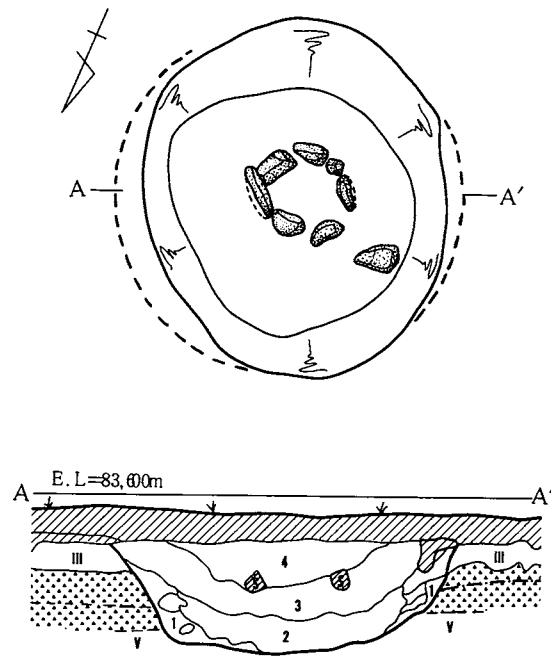
(4)BⅡ－001土坑　　（図版63、写真図版51－1・2・3・53～10）

本土坑はBⅡ－Ⅰ区とBⅡ－M区とに、またがった状態で確認している。本土坑を確認した地点は、地籍界付近で、地籍界に沿って桜桃・梅・ブドウなどの果樹植栽されている。確認状況は、BⅡ－Ⅰ区の試掘調査中に、果樹の木根を除去したところⅢℓ～Ⅳu層上面で黒色～黒褐色土の落ちこみと大礫5点を確認、更に調査区の南東壁を清浄し断面を観察したところ、Ⅲ層上部からの掘りこみであることを確認した。

平面形はほぼ円形と思われるが、掘りすぎのため不整な楕円形となっている。底面も不整楕円形で、かつ凹面状をなし、一部では底面と壁との変換点が不明である。上端径は192cm×165cm、下端径132cm×120cm、最大深43cmであるが、断面での確認値は上端径192cm×184cm、深さ59cmである。

礫は3層上部から3層上面に8個の亜円礫が存在し、このうち7個は石囲炉状に配置されている。しかし、石囲炉状に配置された礫および礫の周辺には火熱痕はもとより、焼土、炭化物が全く認められない。

埋土は全4層に区分したが、北西側の1～3層は木根の影響により色調がより暗色となっており、また攪乱されている。1層はⅤ層およびⅣ層の大小ブロックの混合土層で、色調は一定しない。2層は小粒～細粒浮石質の黒褐色～暗褐色土（10YR2/2～2/3）であるが、他のブロック土が不規則に混在する。3層は黒色～黒褐色あるいは暗褐色と色調幅があり一定ではない。



図版63：BⅡ－001土坑（S＝1：40）

中振浮石の小ブロックが不規則に散在。

4層は、極小粒浮石～中砂質の黒色～黒褐色土（10YR2/1～2/3）で、層中にラミナ様沈泥質の簿い層が介在するが4層を区分するような状態ではない。なお、各層とも十和田b浮石と判断される浮石はまったく含まない。

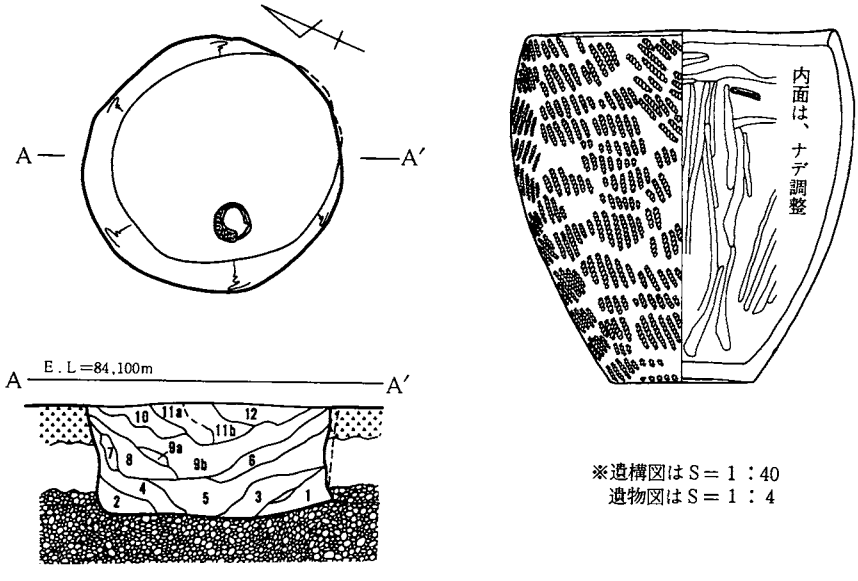
遺物は、上記の礫以外には何ら出土していない。

(5)DⅡ－003土坑　　（図版64、写真図版52－２・３・53－７）

本土坑の確認区域は、DⅡ－G区およびDⅡ－K区にかけてであるがその主体はDⅡ－Gにあり、確認層位は基本土層のⅣu層中である。**平面形**は、上端形、下端形ともにほぼ円形を呈し、南東側一部を除いて上部がやや開く円筒形を呈する。底面は南部浮石層中にあり、起伏が見られる。規模は、上端径140×132cm、下端径124×113cm、深さは52～60cmである。

埋土は12層に細分したが、１層から４層は中振浮石および同浮石混合の黒褐色土～暗褐色土ブロックを主体とする浮石質土で、色調は一定しない。なお１層と２層、および３層と４層は異方向からの同時堆積層と考えられる。５層～９層では南部浮石が急に増加し、各層とも土坑中心寄りの含有率が15～20％と高くなる黒色～黒褐色、あるいは暗褐色を呈するが、同一層でも色調が一定していない。10～12層も南部浮石含有率が高い黒褐色～暗褐色土で北西側から南東側への堆積順を示している。なお、５層上面は自然によるか、人為かは不明であるが平坦化作用を受けている。

出土遺物は、図示した完形の縄文土器が土坑底面から出土している。器形は胴体部上半に最大径をもち、文様は縄文（ＲＬℓ）だけの深鉢形土器である。法量は、口径 163mm、最大径184mm底径76mm、器高 186mmである。なお、土器の一部を欠失している。



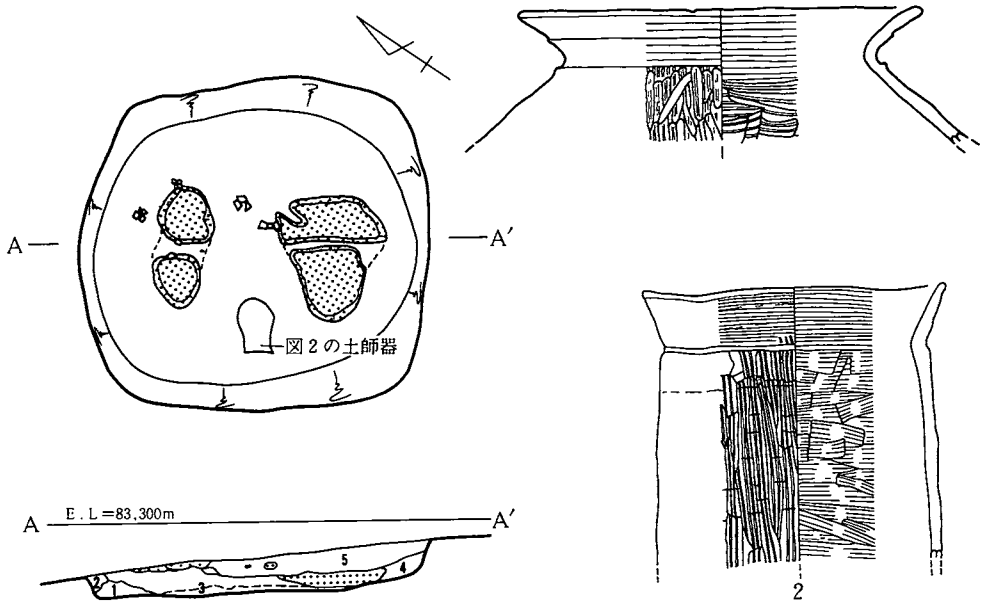
図版64：DⅡ－003土坑と出土遺物

(6)BⅠ—001土坑　　（図版65、写真図版48—1～3、53—1・3）

本土坑の確認区域は、BⅠ—002土坑と同様の傾面部であり、その主体はBⅠ—F区に位置している。確認状況は、耕作土層を除去した段階のⅢ層上部であるが、土坑平面形を確認する前にⅡ層およびⅢ層の2次層と思われる埋土5層上部から土師器甕形土器の一部をとりあげている（図版65—2）。

平面形は、上端規模が187×178cmの隅円の方形で、下端規模は174×148cmの楕円形を呈している。深さは傾面上方が23cm、同下方が14cmと差が見られるものの、底面傾斜は基本土層の堆積傾斜よりも緩やかである。底面はⅣℓ 層中にあり、起伏が見られる。

埋土は、焼土層2層を含めて7層に区分している。埋土1・2層は、十和田b浮石を混じえた小粒浮石質の黒褐色～暗褐色土（10YR3/2～3/4）で色調に幅が見られる。粘性・締りは見られない。3層、4層は小・中粒浮石質の黒色土～黒褐色土（10YR2/1～2/2、10YR1.7/1)の混合土層で、特に4層は黒色の度合が強い。5層は中粒質の十和田b浮石を混じえた小粒浮石質黒色土（10YR1.7/1～2/1）で、下部にクリ・コナラの炭化材小片や焼土粒を含み下位の焼土層に連続する。



（遺構図S＝1：40、遺物図S＝1：4）

図版65：BⅠ—001土坑と出土遺物

Ｆ１層は、小粒浮石質の焼土で特に攪攪乱が認められず、上部にはクリ･コナラの炭化材小片が混在している。Ｆ２層も特に攪乱は認められないが、土坑の平面形を確認する段階で上部を削平していることから炭化材片等の存在は不明である。

出土遺物は図版65―１・２に示した土師器甕形土器２個体分の破片が出土しているが、何れの土器も全体形状を把握する状態には復元されていない。これらの出土層位はＦ１の上面から５層中であり、特に図版65―２は５層上部からまとまって出土している。

図版65―１は、球胴、あるいは胴体部最大径が上部にある甕形土器で、口縁部がくの字状に強く外折する。頸部・口縁部の器面調整は指頭等による横ナデ調整と段が見られる。また、頸部下位は内面が横位のハケメ調整、外面がハケメ調整→ヘラナデ調整が見られる。この土器は、胴体部が円筒状の甕形土器で、復元できたのは上半の３分の２程度である。口縁部はくの字状に外折し、頸部に沈線状の段が見られる。外面の調整は横位のハケメ→横位ヘラナデおよび指頭等によるナデ、胴体部は縦位のハケメ→ヘラナデ（ミガキ？）によって調整されている。内面は、口縁部が横ナデ、胴体部は横位のヘラナデによって調整されている。

(7)ＢＩ―002土坑　　（図版66、写真図版33―３・４・55―２）

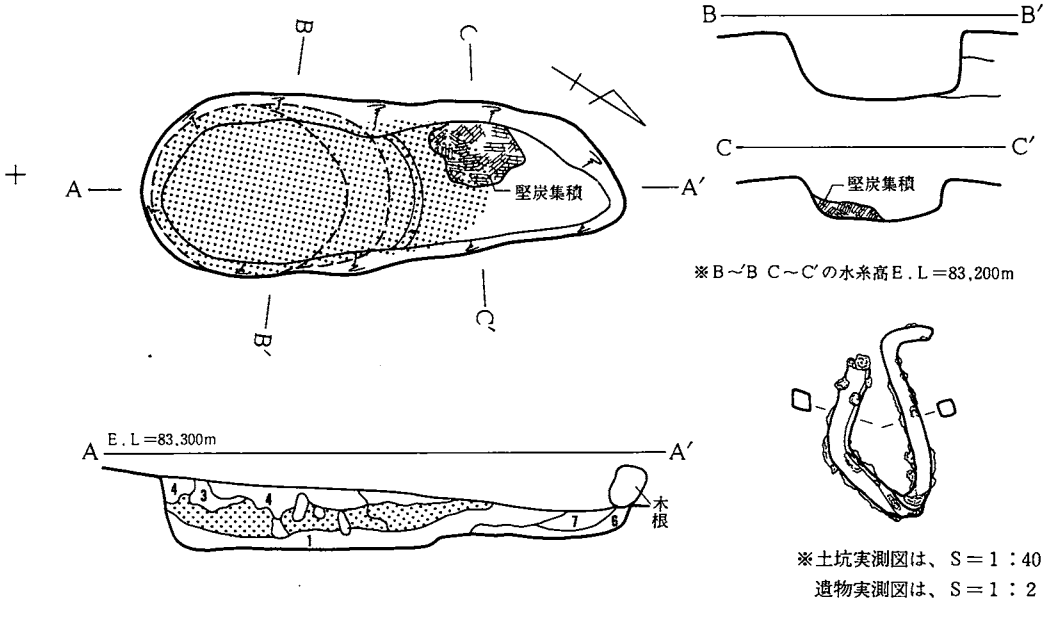
確認した区域は、ＢＩ―Ｅ区とＢＩ―Ｉ区とにまたがった傾面であるが、その主体はＢＩ―Ｅ区にある。確認状況はＢＩ―001土坑と同様に耕作土を除去した段階のⅡ層下部一部を確認しているが、全体形状を把握したのは木根を除去したⅢ層上部である。

平面形は、長軸方向南東～北西方向が傾面の傾斜方向と同様の不整楕円形で、底面は２段に分かれている。その規模は、長軸長上端256cm・同下端238cm、短軸長最大部（Ｂ～Ｂ′）の上端98cm、同下端74cm、最大深38cmである。Ｃ～Ｃ′の短軸長上端80cm・同下端62cmで、深さは16cmである。Ｂ～Ｂ′よりの底面は若干の起伏が見られるもののほぼ平坦かつ水平で、長軸長およそ128cmである。また、Ｃ～Ｃ′側の一役高い底面は起伏が大きい。底面には他の構造は認められなかったが、全体的に炭化材小片や炭粉が多く、特に一段高い底面のＣ寄りには、堅炭様の炭が集中している。

埋土は、全７層に細分したが、埋土の２層は焼土層でＦ１とＦ２に細分し、３・５層は木根痕であり、層名を植字していない。なお、焼土層の一部については平面図の記録に不備がある。埋土の１層は、やや粘性のある暗褐色～褐色土（10ＹＲ3／3～3／4）に多量の岩化物片（５～８mmを面積比で50～45%）少量の焼土粒を含む混合土層で、２層（焼土層）との境付近には径15～20mm、長さ50～100mmの炭が散在する。２層は一部が木根によって攪乱されているが、いづれも現地性の焼土でＦ１とＦ２とでは構成物粒子に差が見られる。Ｆ１は、中・小粒浮石を主体としたものにガラス質中砂の混じったものが焼土化しており、径10～15mm、長さ10～25の

炭を多く含む（平面比20～15%）。色調は明赤褐色（５ＹＲ５／６～５／８）を主とするが炭粒の含み方によって部分的な差が大きい。Ｆ２はシルト状ガラス質砂を主体としたものの焼土層でにぶい赤褐色（５ＹＲ５／３～５／４）を呈するが、浅黄色部や橙色部も見られ炭粒（径５～10mm）をＦ１と同様に含む。４層は小粒浮石質の黒褐色土（7.5ＹＲ３／１～３／２）に径５～10mmの炭粒、灰褐色土粒（５～８mm）が混在した層で、全体的な締り、粘性はない。６層は炭粉を多量に含んだ黒色土で、７層は中掫浮石と黒色土・炭粉が不規則に混じった層であるが、木根等の末分解質分が多くやや不明瞭な層である。なお、各層に含まれる炭あるいは炭化物の樹種は、クリ・コナラが主体を占め、棒状に見られるものは笹竹の幹である。

出土遺物は、炭化物以外に図に示した鉄製品１点が出土している。鉄製品の形状は、折れ曲がってはいるものの各部の横断面形が菱形～正方形を呈し、図左上から（６×６mm）右上（３×３mm）と移行するに従って細くなり、右先端が尖っている。長さはほぼ98mmである。



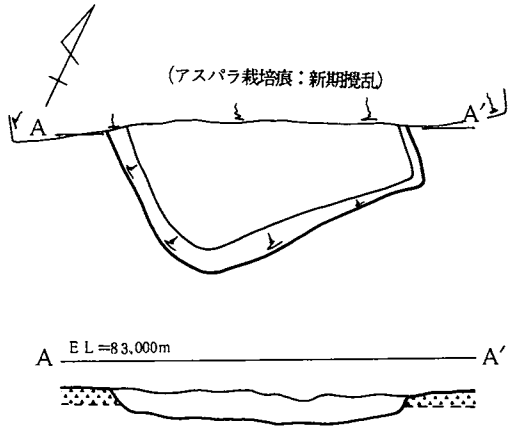
図版66：ＢⅠ－002土坑と出土遺物

(8)ＢⅠ－004土坑　　（図版67）

確認区域は、ＢⅠ－01住居址の北側ＢⅠ－Ｌ区に位置している。本土坑周辺ではブドウ、アスパラガス等の栽培が行なわれており、土坑の大半はアスパラガス栽培で破壊されている。確認層位は、耕作土およびアスパラガスの株根等を除去した段階のⅣℓ 層上部である。

平面形は、ほぼ方形と考えられるが全体形状を確認していないので不明である。確認規模は、北東～南西方向上端 146cm 同下端 132cm、北西～南東方向の最大部上端92cm、同下端78cm、最深部16cmである。底面は若干の起伏をもってⅤ層中に形成されており、全体的に凹面をなして中心付近が最も深くなっている。なお、底面には木根痕以外の構造、施設は確認されていない。

埋土は、中掫浮石、十和田ｂ浮石混じりの黒色土の不規則なブロック混合土層の単層で、上部には木根痕を通じての十和田ａ火山灰のブロックが散在している。



(S＝1：40)

図版67：ＢⅠ－004土坑

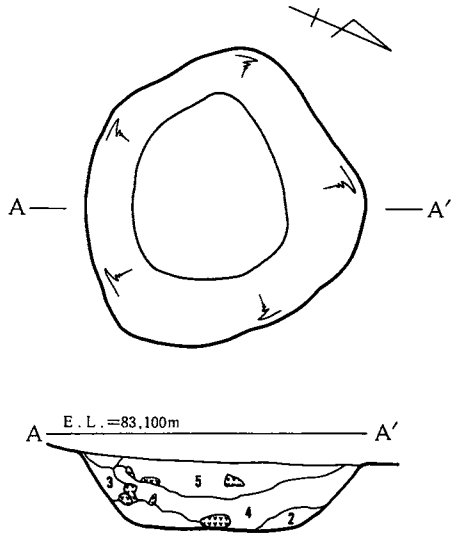
(9)ＢⅠ－005土坑

(図版68、写真図版51－４)

本土坑は、ＢⅠ－004土坑ＢⅠ－006土坑との間にあり、その区域はＢⅠ－Ｌ区である。確認状況は土坑の一部をⅢ層下部で確認していないが、木根を除去する段階でⅣｕ層も除去したためⅣℓ 層上部が全体形状の確認層位である。

平面形は、上端形状、下端形状ともに不整な楕円形である。底面は若干の起伏が見られるが概ね平坦で、壁は内湾ぎみに外傾して立ちあがっている。壁の外傾度は、部分による差が見られるが50～55°である。規模は長軸（東～西）上端 164 cm、同下端 102cm、直交軸上端 148cm、同下端86cm、深さは36cmである。

埋土は、６層に区分したが、十和田ａ火山灰については層番号を付けていない。



(S＝1：40)

図版68：ＢⅠ－005土坑

1層は黒色～黒褐色土（10ＹＲ2／1～2／2）に少量のＶ層土ブロックが混在し、2層は小粒浮石質黒褐色土（10ＹＲ2／2～2／3）に中振浮石のブロックが少量混在する。3層はⅣｕ・ℓ層、Ｖ層Ⅵ層土のブロック混合土層で色調は不定、4層は小粒浮石質黒褐色土（10ＹＲ3／1～3／2Ⅳｕ層、Ｖ層、Ⅵｕ層、あるいは十和田ａ火山灰のブロックが混在、5層は小粒浮石質黒色土～黒褐色（10ＹＲ2／1／～2／2）にＶ層土の小ブロックが散在し、また木根や木根痕も多く見られる。なお、3層から5層中に存在する十和田ａ火山灰の大ブロックについては、スクリーントーンで示してある。

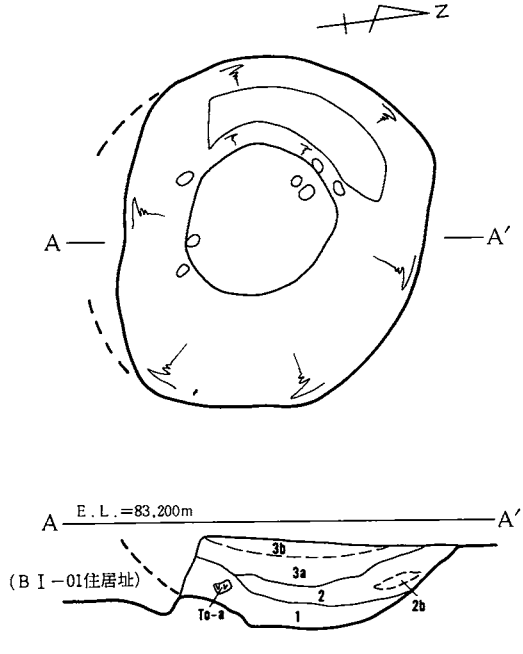
遺物は、何ら出土していない。

⑽ＢⅠ－006土坑　　（図版69、写真図版51－6々7）

本土坑は、ＢⅠ－Ｌ区とＢⅠ－Ｐ区とにまたがって位置している。確認状況は、ＢⅠ－01住居址と同様に耕作土を除去した段階のⅢ層中である。なお、ＢⅠ－006土坑はＢⅠ－01住居址を切っている土坑であるが、調査手順を誤りＢⅠ－01住居址にかかる部分が不明である。

検出時の**平面形**は、やや不整な円形であるが記録した形状は上端形・下端形状ともに不整楕円形である。底面には起伏や木根痕と考えられる小穴があり、北西側の壁には段が見られる。規模は、長軸上端 192cm、同下端80cm、短軸上端 160cm・同下端75cm、深さ58～60cmである。

埋土は、大別3層、細別5層に区分したが、2ｂ層は中振浮石の2次層である。1層は中振浮石・十和田ｂ浮石が不規則に混じった黒色～黒褐色土層（10ＹＲ2／1～2／2）である。しかし、各プロックの混じり方によって全体的な色調は一定していない。2層はⅡ層土、Ⅲ層土他のブロック混合土層であるが、圧倒的にⅡ層土が多い。3層は、十和田ａ火山灰、Ⅱ層からＶ層などのブロック混合土層で、色調等一定していない。なお、2ｂ層は中振浮石の2次層である。3層は十和田



図版69：ＢⅠ－006土坑（S＝1／40）

a火山灰、Ⅱ～Ⅴ層のブロック混合土層で、色調は一定しない。3a層は十和田a火山灰のブロックが大きく、3b層は同ブロックが小さい。

出土遺物としては、土師器甕・坏の小破片が2～3層から数点出土している。

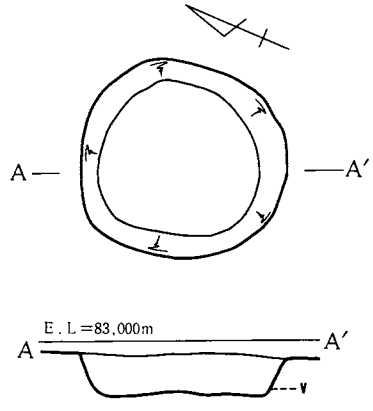
(11)BⅠ－007土坑　　(図版70、写真図版51－7)

本土坑の確認区域はBⅠ－L区で、BⅠ－004土坑の東側に近接している。確認状況は、BⅠ－004土坑やBⅠ－006土坑などと同様に、木根等を除去したⅢℓ～Ⅳu層中である。

平面形は、上端・下端ともにほぼ円形を呈し、底面はⅤ層上部にあり起伏が強い。断面形は、ほぼ逆台形を呈する。規模は、上端径110×105cm、下端径85×81cm、深さはほぼ21cmである。

埋土は、黒褐色～暗褐(10YR3/2～3/3)に中掫浮石のブロックが不規則に混在した単層である。

遺物は、何ら出土していない。



(S＝1：40)

図版70：BⅠ－007土坑(S＝1/4)

(12)BⅡ－003土坑　　(図版71、写真図版48－4～6、53－4・9)

確認区域はBⅡ－E区とBⅡ－I区で、一部がBⅡ－F区とBⅡ－J区とに位置している。確認状況は、BⅡ－J区の試堀調査中に中掫浮石および南部浮石の採取破壊を受け、試掘溝壁に土坑の一部が露出したものである。全体的な確認層位は、耕作土除去した段階のⅣu層上面である。

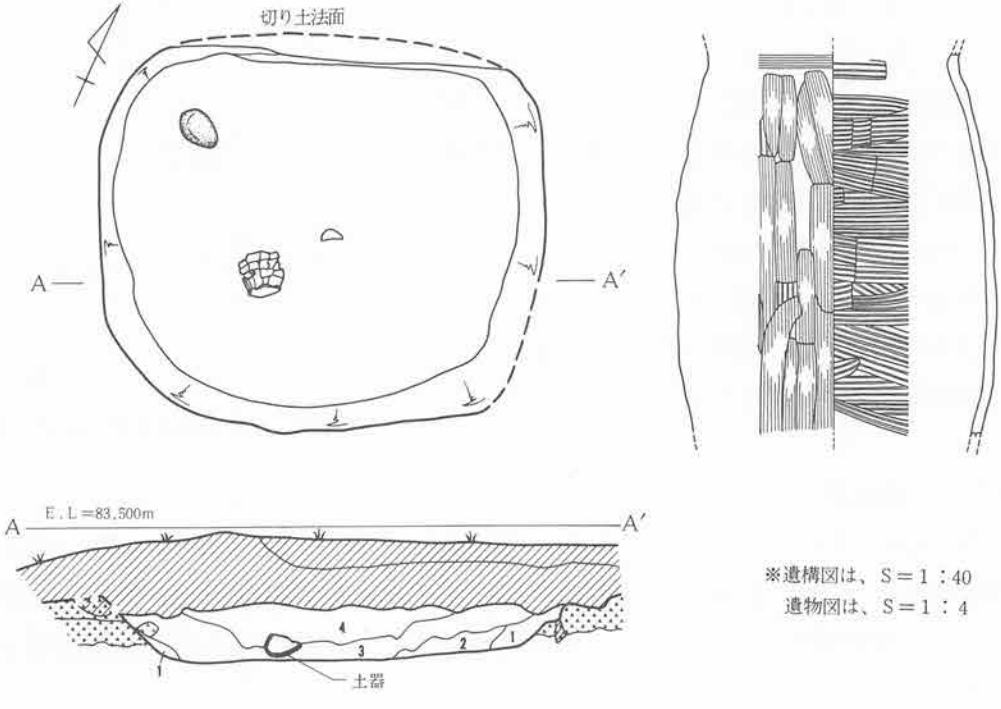
なお、土坑の北西辺側は切り土面となっているから土坑の上端形状の一部は確認できなかった。

平面形は、南東辺が特に円弧を描くものの、全体的に各辺が外方へ膨む隅円の長方形を呈する。規模は長軸上端240cm、短軸上端206cm、同下端180cm、最大の深さは26cm、であったが、強雨によりⅣu層が流出したことから最終的な深さの記録は10～12cmとなっている。土坑の底部はⅤ層中に形成され、底面は全体的に緩やかな起伏が見られる。

埋土は、全4層に区分したが、全体的に浮石質の締りのない黒色～黒褐色土で、基本土層のⅡ層～Ⅳu層に由来するものである。1層は中～小粒の十和田b浮石を含んだ黒色土(10YR1.7/1)でⅡ層の崩壊土である。2層は中掫浮石を多量に含んだ黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/2)で炭化物粒が散見される。3層は中～小粒浮石(十和田b浮石)質の緻密な黒色～黒

褐色土（10ＹＲ2／1～2／2）が主体で、わずかに中掫浮石様の浮石ブロックを含む。４層は小粒浮石質の黒褐色土（10ＹＲ2／2～2／3）で上部に十和田ｂ浮石が散在し、炭化物は含まない。

出土遺物は、図に示した土師器の甕形土器と北西隅の床から使用痕不明の巨礫１点である。甕形土器は一部が土坑底面に接しているが３層４層に包含されており、口縁部および底部周辺を欠損している。器面調整は外面がハケメ調整の後ヘラナデ調整が施され、頸部には横ナデが見られる。内面は、底部よりから頸部にいたるまで横位ないし傾位のハケメ調整が施されている。



図版71：ＢⅡ－003土坑と出土遺物

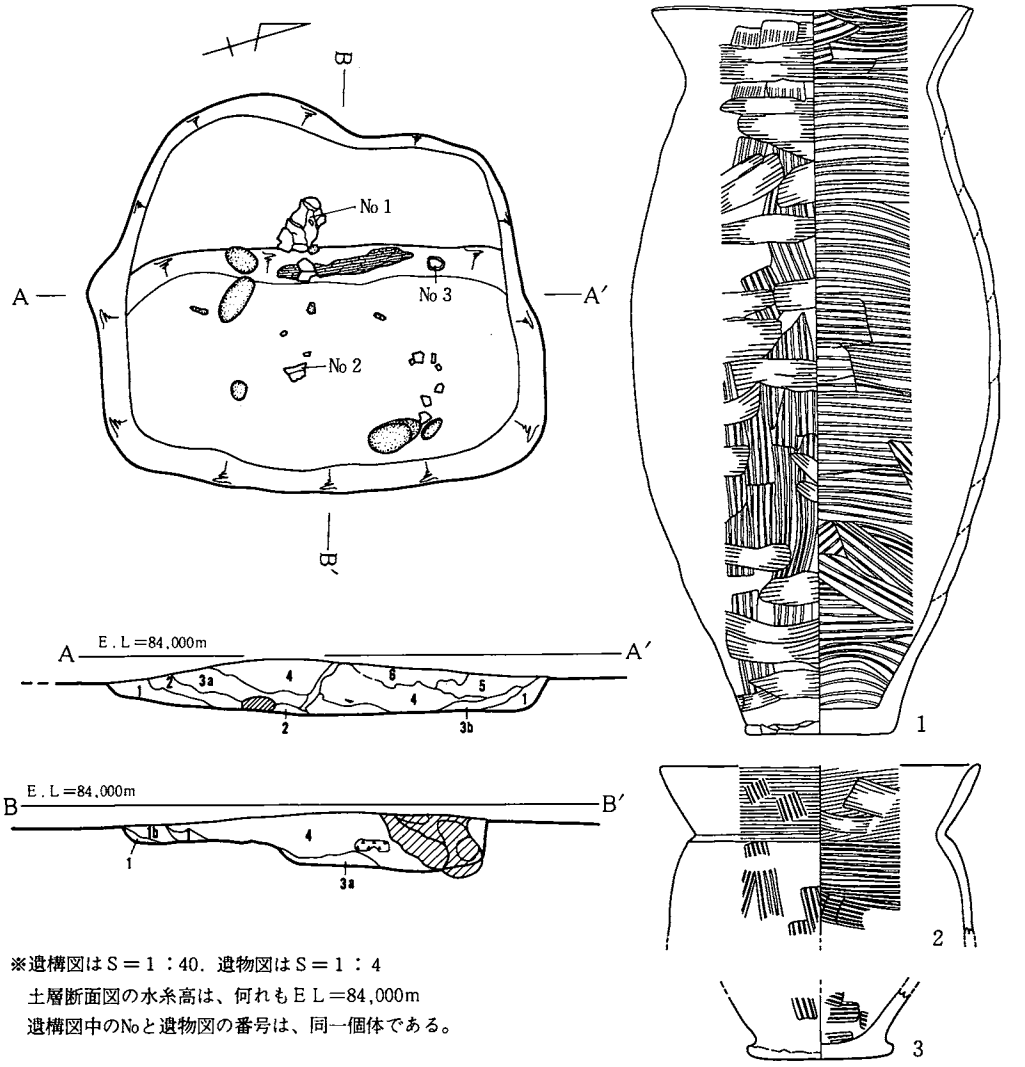
⑬ＣⅡ－001土坑　　（図版72、写真図版49－１～４、53－５・６・８）

確認区域はＣⅡ－Ｎ区であるが、北西隅の極一部がＣⅡ－Ｊ区に位置している。確認状況は耕作土を除去した段階のⅢ層下部で埋土４層とそれに包含される土器片、炭化材片の分布を確認したが、耕作による攪乱が広く認められたことから４層周辺を更に掘り下げたⅣℓ層上部で土坑全体の平面形を確認した。

平面形は、不整な隅円の台形で南東辺が外方に膨んでいる。底面は２段になっており、高い面はⅤ層上面に、低い面はⅤ層中にあり、何れの面も起伏が見られる規模は、南々西～北々東

の上端最大240cm・同下端205cm、西北西～東南東の上端最大209cm・同下端184cm、深さは上位面が８～10cm、下位面が18～24cmである。

埋土は、全６層に細分したが、全体的に西～南西側からの自然流入堆積の様相を呈し、１・５・６層はブロック土構成となっている。また、東南東壁近くには極新期の攪乱が存在する。１層は、小粒浮石質の褐色土（10ＹＲ４／４～４／６）に黒褐色土ブロックが散在する。１ｂ層は基本的には１層と同様であるが、黒色土・黒褐色土のブロックが多く、十和田ｂ浮石、中掫浮石ブロックも観察される。２層は十和田ｂ浮石が散在する黒褐色土（10ＹＲ２／２～２／３）、３ａ・３ｂ層は本来同一層と考えられるが、十和田ｂ浮石、中掫浮石のブロックが不規則に混在



図版72：ＣⅡ－001土坑と出土遺物（Ｓ＝1／40）

することから色調は一定でない。また、３ａ層から４層には炭化材が包含される。４層は十和田ｂ浮石、中掫浮石ブロックを均一に含む黒褐色土（10ＹＲ2／2～2／3）で、遺物の包含層である。５・６層は、暗褐色土で黒褐色土で、その分布は北東区域に限られている。

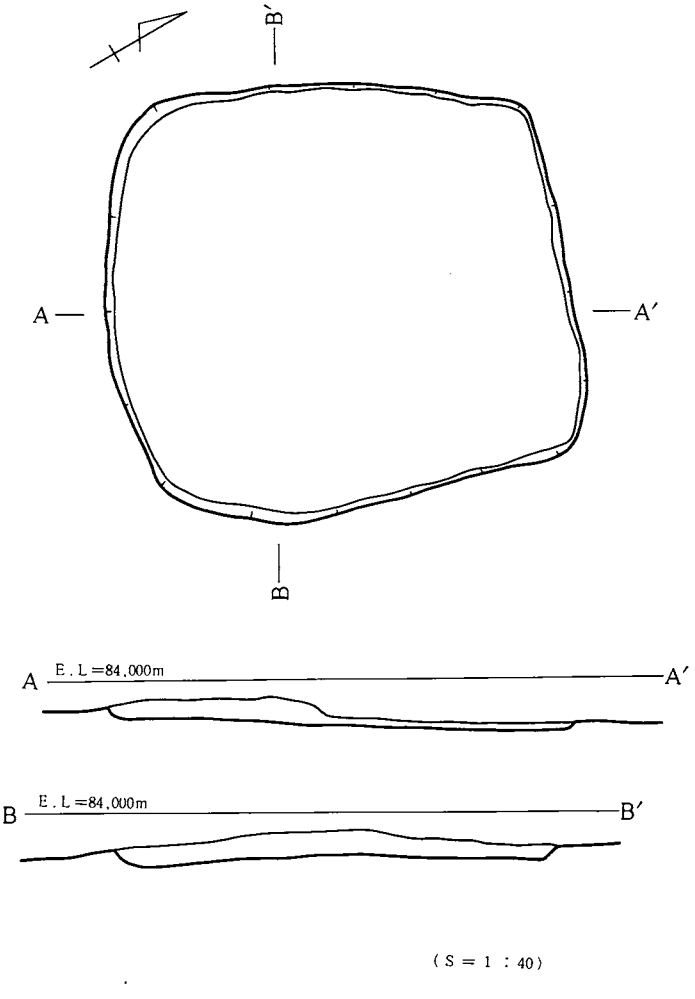
出土遺物は図版72―１・２に示した３点の土器、およびこれらの破片である（遺構図の番号と遺物図の番号は同一）。１は胴体部破片が若干欠失しているものの全体形をうかがえる程度に復元された。外面の調整は、口縁部から底部付近まで縦位のハケメ調整→横位ヘラナデ調整が施されているが、ヘラナデ調整はまばらである。内面は口縁部から底部までハケメ調整が施されている。２は頸部に沈線状の段を有する甕形土器の破片（４分１弱）である。調整は、口縁部外面はハケメ→横ナデの調整が、内面は横ナデ、ヘラナデが不規則に施されている。同体部は、内外面ともにハケメ調整が施されている。３は内外面ともにハケメ調整が施された底部周辺である。

⑭ＥⅠ―001土坑

（図版73、写真図版50―1.2）

確認区域は、住居址群から離れたＥⅠ―Ｊ区・ＥⅠ―Ｎ区とに位置している。確認層位は、本土坑周辺の耕作による攪乱がⅣｕ層まで及んでいることや、土取りが行われていたことなどから大部分がⅣℓ 層上部である。

平面形は、やや不整な隅円の方形で南東辺および南西辺が若干外方へ膨んでいる。底面はⅤ層上部に形成され、緩るやかに波うっており、全体的に南西側が高く、北東コーナ付近が低くなっている。規模は、南西～北東軸（長軸）の最大部



図版73：ＥⅠ―001土坑（S＝1／40）

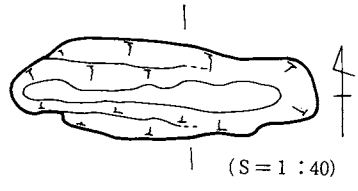
上端254cm・同下端245cm、直交方向の最大部上端232cm・同下端224cm、である。深さは、確認層位および底面の起伏から６～12cmと変化がある。なお、底面および土坑周辺には柱穴等は見られない。

埋土は、上部が小・中粒浮石質の黒色～黒褐色土（10ＹＲ2／1～2／2）に中掫浮石の小ブロックが混在し、下部の床近くでは中掫浮石のブロックが次第に大きくなり、色調も暗褐色～褐色（10ＹＲ3／2～3／3）へ漸移する。

出土遺物は、何ら認められない。

⒂ＣⅡ－002土坑　（図版74、写真図版52―10）

土坑の大部分はＣⅡ－Ｏ区に位置し、一部がＣⅡ－Ｎ区に位置している。本土坑が位置する周辺は、Ⅲ層下部まで耕作による攪乱が認められ、確認層位はⅣℓ層上部である。



図版74：ＣⅡ－002土坑

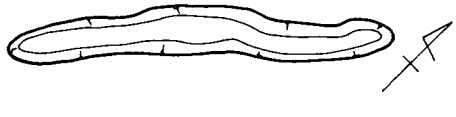
平面形は、若干屈曲した溝状を呈し、断面形は逆台形を呈する。その規模は、長軸上端106cm、同下端92cm、短軸上端16～25cm・同下端８～15cmで、平面中ほどの幅が広くなっている。底面はⅤ層上面にあり、深さは６～８cmで底面が起伏している。

埋土は、土坑の中央付近が炭化物片（５～８cm）を不規則に含んだ中粒浮石質の黒色土（10ＹＲ1.7／1）で下部の炭化物粒は小粒となる。また、土坑両端に移行するに従って浮石粒・炭化物の粒径が小さくなり、色調も青黒色ぎみとなる。

出土遺物は、10mm未満の土師器甕の破片と思われる土器片が数点出土しているが、調整痕等は不明である。

⒃ＤⅡ－002土坑　（図版75、写真図版52―１）

本土坑は、ＣⅡ－002土坑と同様に浅い溝状を呈する土坑であるが、ＣⅡ－002 土坑より幅が広くかつ短いものである。また、強雨のため全体形の記録ができなかったものである。確認区域はＤⅡ－Ｊ区からＤⅡ－Ｋ区にかけてであり、ＤⅡ－001 陥し穴状遺構の西側に接接している。



図版75：ＤⅡ－002土坑

平面形は、長軸上端 163cm・同下端 136cm 短軸上端34～52cm・同下端６～15cmで、平面

の中ほどが広い。底面はⅤ層上部に形成され、深さは中央付近が13cm、両端が15～17cmである。

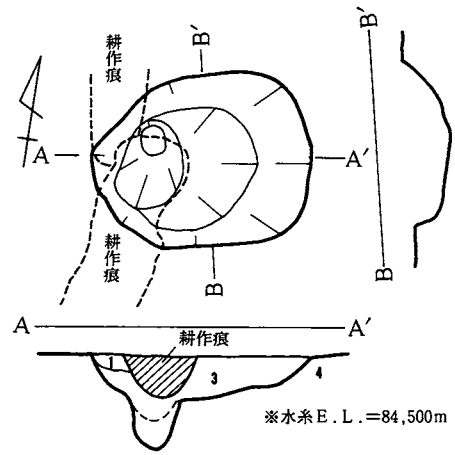
埋土は、中小粒浮石質の黒色土（10ＹＲ1.7／1）の単層で、埋土の下部および長軸両端に炭化物が散在する。

遺物は、何ら出土していない。

(17)ＮⅠ－001土坑　（図版76、写真図版51－５・６）

確認区域は、ＮⅠ－Ａ区およびＮⅠ－Ｅ区であり、各々の区域にほぼ半々の割で位置している。確認層位は水田造成層を除去した段階で、Ⅳℓ 層がわずかに残るⅤ層面上面である。

平面形は、ほぼ東西に長軸方向をもつ楕円形であるが、西側の一部を耕作によって破壊されていることからやや不整となっている。規模は長軸上端116cm・同下端70cm・短軸上端96cm・同下端63cmであり、底面西側に一段と落ちこむ柱穴様の穴がある。この穴の規模は、上端径48cm×32cm、深さ26cmである。底面は、全体的に凹面となっている



図版76：ＮⅠ－001土坑（Ｓ＝１：40）

埋土は全３層に区分したが、２層は耕作痕である。３層は、土坑主体部と柱穴様の部分を埋める破線の下位とでは若干異なっている。１層は、中掫浮石のブロックであることからⅣ層の２次層、３層は基本土層のⅡ・Ⅲ・Ⅳ層の混合した黒色土（10ＹＲ1.7／1～2／1）で上部は十和田ｂ浮石が多く、下部で中掫浮石が多く十和田ｂ浮石は少量が散在する。

出土遺物は、２層から土師器甕形土器の小破片が出土しているだけで、他には何ら出土していない。甕形土器の破片は、外面にケズリ調整が、内面にハケメ調整が施されている。

3．遺構外等の遺物

本項でとりあげる遺物は、遺構で基本土層のⅡ～Ｖｕ層から出土した縄文式土器、礫石器、および出土遺構の時代、時期とは明らかに異なる縄文式土器の破片、そして基本土層のⅡ層上部や住居址の埋土最上位（攪乱部）から出土した錆化物である。

なお、出土した縄文式土器の砂片は細片を含めて60余点出土しているが、図版77、78（写真図版55）に掲載した資料は31点である。

(1) 縄文式土器　縄文式土器は文様・器形・胎土等から、以下のような特徴がある。

①頸部付近と思われる位置に一周する１条の沈線が施され、その下位に沈線手法による曲線区画文の外側を磨消したり、また磨消部に沈線文を施したりする１群。これらの充填縄文はＰＬℓ、およびＬＲℓの２種類が見られる。器種は、深鉢形土器と考えられる。（図版77－１・３・４、写真図版55－１・３・４）

②無文地に沈線手法による、曲線文の組み合わせで文様を施文・構成する１群。これらには縄文の施文は認められない。器種は、深鉢形土器と考えられる。（図版77－２・５、写真図版55－２・５）。

③頸部に２条の、あるいはそれ以上の沈線をめぐらし、胴体部にはＲＬℓの縄文が施された小型壺形土器の破片。（図版77－14、写真図版55－15）

④口縁に並行する縄文希、あるいは無文帯が沈線によって区画される１群。口縁部形態は、山形あるいはゆるやかな波状を呈する。用いられている縄文は、ＲＬℓとＬＲℓの２種が存在するが、同一破片中に２種類が用いられたものはない。器形は、何れも深鉢形土器と思われる。（図版77－６～10、写真図版55－６～10）

⑤横位に平行する沈線間に狭い無文帯と無文帯より広い縄文帯とが交互に配置され、部分的に入組状の構成をなしているが、明確ではない。縄文帯の充填縄文はＬＲℓである。また、刺突文、貼瘤等の加飾は確認できない。器形は、胴部にくびれをもつ深鉢形土器と思われる。（図版77－11～13写真図版55－11・12・14）

⑥横位に平行する沈線間に狭い無文帯とやや広い縄文帯とが交互に配置され、部分的に入組文を構成し、その接触部の沈線が三又状をなす。器形は⑤と同様と考えられるが、口縁部形態は不明である。充填縄文はＬＲℓである。また、その他の手法による加飾も認められない。（未掲載）

⑦胎土の特徴は、①～③と同様の粗製深鉢形土器の破片で、用いられている縄文はＬＲℓ、ＬＲℓの２種が存在するが、整然とした施文ではない。（図版77－15・16・18・21、写真図版55－15・16・18～21。

⑧胎胎土の特徴は④～⑥に近以する。粗製深鉢形土器の破片で、用いられている縄文はＬＲℓである。（図版77－７・22・78－３、写真図版55－７・22・26）

⑨単軸絡条体第２類による撚糸文が施された深鉢形土器の破片。器形は、壁が底部から口縁に向かって直線的に外傾するもので、平口縁を呈する。（図版78－１・２、写真図版55－24・25）

⑩比較的簿手で⑧⑨類に類以した胎土で底部および底部付近の破片。（図版78－５・６、写真図版55－28・29）

⑪網代痕をもつ底部破片。（図版78－７・８、写真図版55－30・31）

⑫体部破版の一部に土器片製円盤様の研磨加工が施されたものであるが、欠損部が多いため全体形状が不明な土製品。（図版77－23、写真図版55－23）

(2)礫石器３点。これらは、平旦面に集中する敲打痕が凹を形成するもの（図版78－９・11）と、１面にだけ形成されたもの（図版78－10）とが存在する。これらは更に１面に擦る作用の痕跡をもつもの（図版10・11）と１側縁に荒い敲打痕が面をなすもの（図版78－７）とがある。（計測値、岩質については後項の一覧表を参照）（写真図版55－32～34）

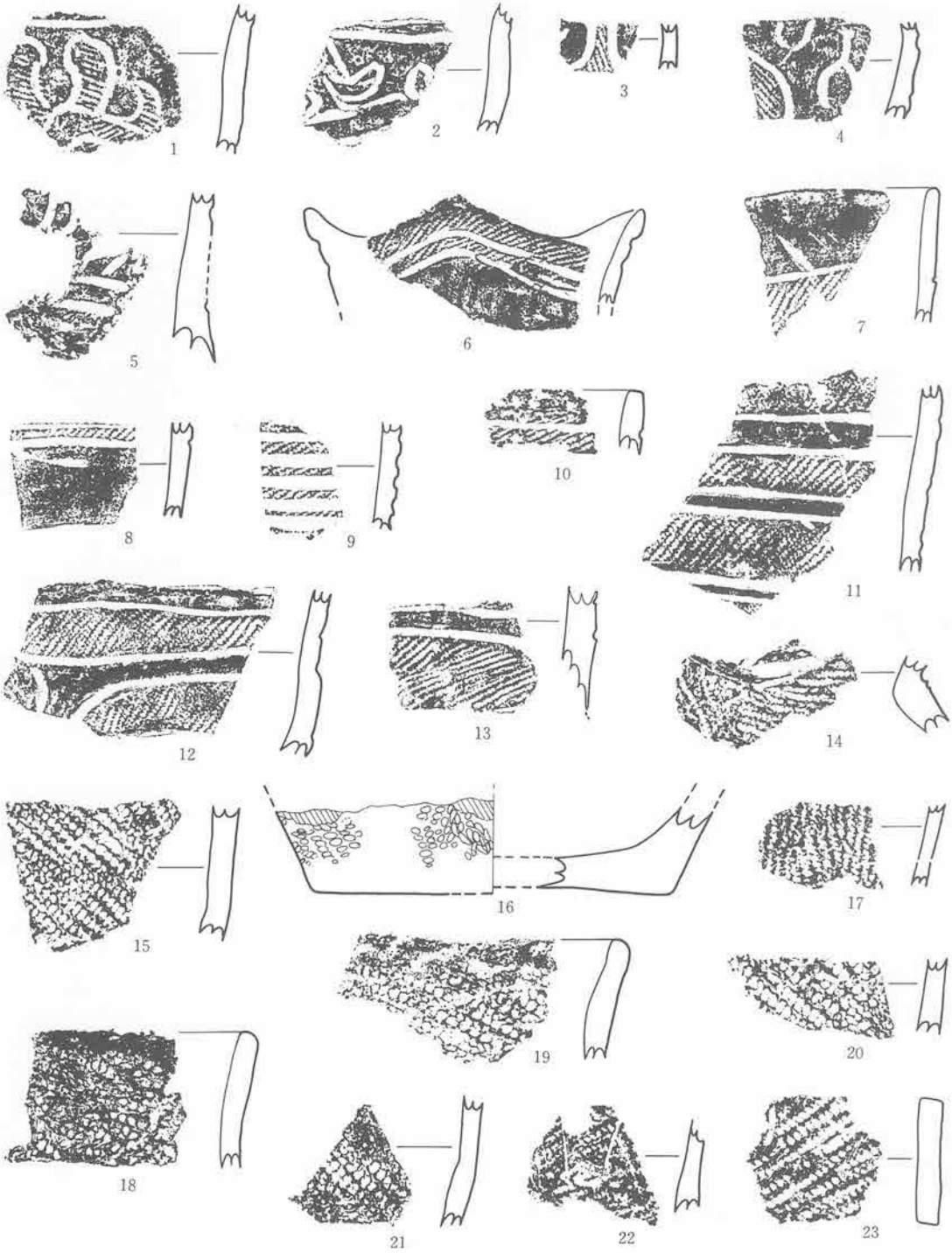
(3)金層製品３点。体積の割に軽い鉄錆に被われたもので、種類形状が不明なもの。これらのうち図版78－12では、破断面の一部に金銅様の膜部をもつがその種類は不明である。（図版78－12～14、写真図版55－35・36）

遺構外等遺物の出土区・層位

図版	写真図版	出土区・層位
77－１	55－１	ＥⅡ－03住埋
〃－２	〃－２	〃
〃－３	〃－３	ＥⅡ－Ｍ．Ｑ．Ⅱ層
〃－４	〃－４	ＢⅠ－Ｂ．Ｃ．Ⅲ層
〃－５	〃－５	ＥⅡ－03住埋
〃－６	〃－６	ＥⅡ－Ｍ．Ｑ．Ⅲ層
〃－７	〃－７	ＥⅡ－Ｃ．Ⅱ層
〃－８	〃－８	ＥⅡ－Ｍ．Ｑ．Ⅲ層
〃－９	〃－９	ＥⅡ－Ｋ．Ｌ．Ⅱ層
〃－10	〃－10	ＥⅡ－03住．To-a
〃－11	〃－14	ⅠⅠ－Ｂ．Ｃ．Ⅲ層
〃－12	〃－11	〃　〃
〃－		

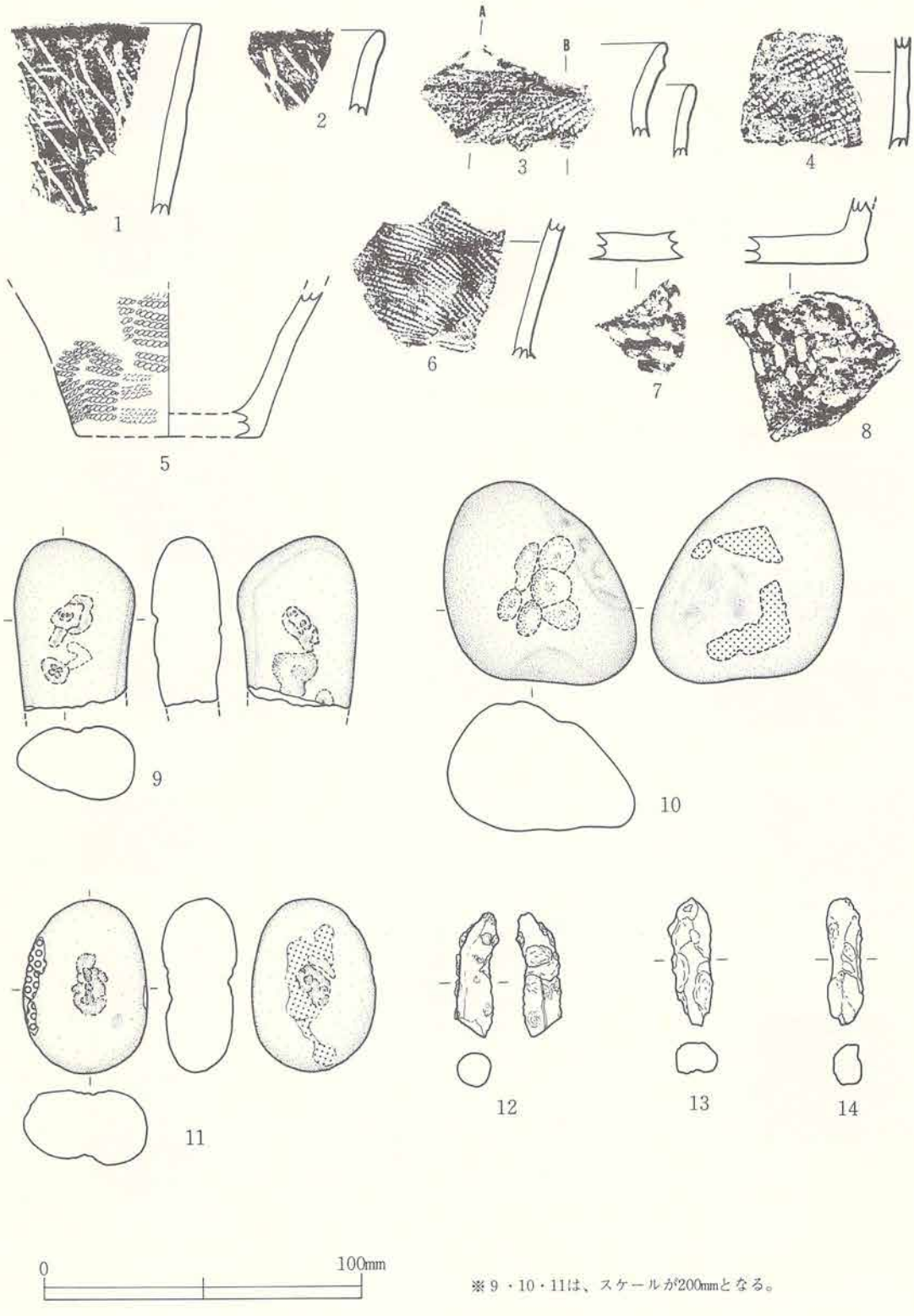
図版	写真図版	
77－13	55－12	ⅠⅠ－Ｂ．Ｃ．Ⅲ層
〃－14	〃－13	ＣⅡ－01住埋
〃－15	〃－15	ＣⅠ－03住埋
〃－16	〃－16	ＣⅠ－03住埋(0303Ｅ)
〃－17	〃－17	ＣⅠ－03住埋
〃－18	〃－18	ＣⅡ－01住埋(下部)
〃－19	〃－19	ＣⅡ－01住埋(３層)
〃－20	〃－20	〃　〃（床）
〃－21	〃－21	〃　〃
〃－22	〃－22	〃　〃　埋上
〃－23	〃－23	ＤⅡ－Ｃ．Ｄ．Ⅲ層
〃－	〃－	
〃－		

図版	写真図版	
78－１	55－24	ＥⅡ－03住
〃－２	〃－25	〃　〃
〃－３	〃－26	〃〃、ＥⅡ.Ｍ.Ｑ.Ⅲ層
〃－４	〃－27	ＥⅡ－Ｍ．Ｑ．Ⅲu層
〃－５	〃－29	ＥⅡ－03住
〃－６	〃－28	〃　〃
〃－７	〃－30	〃
〃－８	〃－31	ＧⅠ－01住 0102Ｅ)
〃－９	〃－32$^{a}_{b}$	ＥⅠ－Ｑ粗掘
〃－10	〃－33	ＧⅡ－Ｊ－Ⅳu層
〃－11	〃－34$^{a}_{b}$	
〃－12	〃－35	ＣⅠ－03住 To-a直上
〃－13	〃－36	ＦⅡ－粗－Ⅱ層



※23は、周辺を部分的に研磨した土器片製の円盤

図版77：遺構外等の遺物 (1)



※9・10・11は、スケールが200mmとなる。

図版78： 遺構外等の遺物 (2)

4．掲載石器一覧

本遺跡で出土した石器・石製品は、そのほとんどが遺構内の床および投げこみ形成による埋土中からの出土である。種類としては、磨製石斧、石鏃、石匙、石製紡錘車、砥石を含めた数種の礫石器および礫器が出土している。これらのうち石器形態・出土層位から明らかに弥生時代以前と断定できるものは、磨製石斧、石鏃、石匙、および3点の凹石（図版78－9～11）である。しかし、、他の礫石器・礫器はその出土状態や作用面（使用面）の風化状態からは、必ずしも弥生時代・縄文時代に属するものとは考えられない。

以下に各遺構から出土した石器・石製品の一覧表を掲載する。なお、遺構名の右側の数字は、当該遺構内から出土した礫を含めた数量である。

ＢＩ－01住　74点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、生成生代、産地	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0103, 0110, 0119		台石	289	180	59	4,000	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	17－28	
2	ＢＩ－0125Ｓ		磨石	(71)	(29)	26	35	白色細粒凝灰岩	17－23	
3	ＢＩ－0116Ｓ		砥石	(79)	(102)	(30)	210	――――	17－27	
4	ＢＩ－0109Ｓ		台石	144	107	76	1,420	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	17－21	
5	ＢＩ－0112Ｓ		凹石	95	(71)	27	210	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	17－26	
6	ＢＩ－0117Ｓ		擦,敲石	(136)	116	76	1,500	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	17－24	
7	ＢＩ－0108Ｓ		台石	(506)	(23)	22	24,000	――――	17－20	
8	ＢＩ－0111Ｓ		敲石	224	116	36	960	硬砂岩、中世界、北上山地	17－19	
9	ＢＩ－0102Ｓ		敲石	179	75	39	770	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	17－22	
10	ＢＩ－0114Ｓ		台石	(114)	(116)	55	840	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	17－25	

ＣＩ－02住　57点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、生成生代、産地	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0216Ｓ	1（床直上）	敲石	(138)	(75)	(51)	460	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	23－22	
2	0222Ｓ	1（床）	台石	176	161	98	3,650	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－35	
3	0219Ｓ	1（床直上）	敲石	80	78	44	520	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	23－23	
4	0230Ｓ	1ａ（焼土下）	台石	79	113	54	1,040	硬砂岩、中世界、北上山地	24－33	
5	0218Ｓ	1（床直上）	（石斧片）	(107)	(147)	51	870	郷石安山岩、新第三系中新統奥羽山地	23－20	
6	0215Ｓ	1ａ	凹石	124	(105)	57	850	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－31	
7	0225Ｓ	2	擦、敲石	113	(100)	38	560	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－28	
8	0205Ｓ	1Ｃ	敲石	(91)	(79)	42	350	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－29	
9	0212Ｓ	3	擦・敲石	137	114	49	1,080	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－25	
10	0233	1	片刃石器	105	111	48	700	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	23－17	
11	0234	3	（付着物）	71	51	26	150	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－32	
12	0207Ｓ	1（床直上）	片刃石器	(91)	100	27	340	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	23－19	
13	0223Ｓ	1層ℓ（床直上）	付着物	72	63	54	250	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	23－17	
14	0221Ｓ	3層	敲石	(80)	101	61	660	郷石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－30	

CⅠ－02住

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、生成生代、産地	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
15	0236S	2層	敲石	97	85	42	520	角礫質硬砂岩、中世界、北上山地	24－26	
16	0217S	1層（床直上）	――――	136	48	33	290	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	23－24	
17	0237S	1層	砥石	(127)	75	65	810	粘板岩、中世界、北上山地	23－21	
18	0206S	1層	磨石	126	65	51	530	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	24－27	
19	0204S	1層ℓ（床）	片刃石器	104	69	35	280	チャート、中世界、北上山地	23－18	
20	0204E	1（床直上）	紡錘車	37	38	28 40	36.5	白色細粒凝灰岩、新第三条中新統、奥羽山地	16－	

CⅠ－03住　14点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、生成生代、産地	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0303s	1a（床）	擦、敲石	120	90	41	670	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－23	
2	0301s	2層上部	変　色	53	47	40	150	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－24	
3	0305s	4ℓ	砥石、台石	222	192	88	3,280	硬砂岩、中世界、北上山地	27－21	
4	0308s	2層（床）	擦、敲石	161	93	65	1,020	硬砂岩、中世界、北上山地	27－15	
5	0302s	1b（床直上）	敲石	167	58	15	210	硬砂岩、中世界、北上山地	27－18	
6	0309s	2b（床直上）	砥石	76	48	25	80	流紋岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－22	
7	0311s	26（床直上）	擦、敲石	104	68	43	450	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－17	
8	0310s	2b（床直上）	擦、敲石	154	64	37	520	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－19	
9	0306s	2層上部	台石？	272	134	64	2,750	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－16	
10	0313s	2層下（床）	擦、敲石	(65)	66	40	200	輝石安山岩、新第三系中新統、奥羽山地	27－20	

CⅡ－01住　5点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、産地、生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	F16	4層	変色	51	48	16	50	アルコース砂岩、北上山地、中世界	31－15	
2	F17	4層	自然礫	54	56	16	80	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	31－12	
3	F18	4層	自然礫	53	51	34	120	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	31－13	
4	F19	4層	自然礫	48	48	40	130	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	31－14	
5	F20	4層	自然礫	39	44	28	75	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	31－16	

DⅠ－02住　9点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、産地、生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0207sB	2b	敲石	93	82	36	410	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	37－9	
2	0207sA	2b	擦・敲石	(75)	(68)	45	280	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	37－14	
3	0203s	2a（床直上）	凹擦	129	95	64	980	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	37－11	
4	0206s	2a（床直上）	凹敲石	153	95	43	680	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	37－11	
5	0205S	1c（床直上）	凹	81	104	(16)	170	凝灰質砂岩、奥羽山地、新第三系中新統	37－13	
6	0202s	1c（床直上）	擦・磨	135	97	68	1,100	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	37－12	

DⅡ－01住　9点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm, g）				岩質、生成生代、産地	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	――S	2b	石斧	87	32	13	60	――――――――――	41－10	
2	0101s	2c（床直上）	擦、磨	180	180	110	3,690	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	41－11	

DⅡ－2住　2点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm、g）				岩質・産地・生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0202S	2a（床直上）	敲石・（台）	129	115	46	900	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	44－8	
2	0201S	2a	擦・台	128	54	111	1,150	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	――	

EⅡ－01住　10点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm、g）				岩質、産地、生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0108S	3b	砥石	310	110	238	7,500	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	50－10	
2	0107S	5b	擦・敲石	133	83	44	560	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	50－11	
3	0105S	5b	敲石	147	66	66	720	――――――――	50－14	
4	0102S	3b（床直上）	砥石－2	(129)	95	47	690	流紋岩、奥羽山地、新第三系中新統	50－9	
5	0106S	5b	擦	145	15	64	1,940	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	50－13	
6	0104S	3b	砥・台	180	109	59	1,750	チャート質粘板岩、北上山地、中世界	50－12	
7	0101S	1a（床直上）	砥石－1	123	83	71	570	白色細粒凝灰岩・奥羽山地、新第三系中新統	50－8	

EⅡ－02住　3点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm、g）				岩質、産地、生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	――――	埋土下部	凹	82	72	25	200	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	52－7	
2	0251S	出入口部出土	擦、敲石	(122)	114	45	800	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	52－8	

EⅡ－03住　13点

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm、g）				岩質、産地、生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	0310S	2a	礫器、片刃石	95	92	60	560	チャート、北上山地、中世界	57－19	
2	0304S	5a	擦、敲石	(161)	73	47	620	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	57－25	
3	0302S	5a埋土上部	敲石、擦	128	135	58	1,450	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	57－24	
4	0309S	5a	両刃	(138)	119	57	790	――――――――	57－20	
5	――――	床上中	石匙	(65)	20	6	8.5	チャート質淡緑色凝灰岩北上山地、中世界	57－22	
6	0308S	1a	砥石	(124)	(65)	(31)	210	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	57－26	
7	0306S	床	砥石	162	67	50	280	――――――――	57－23	
8	0301S	床		64	57	49	260	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	57－21	

遺構外

通算	遺物番号	出土区層位	器種	法量（mm、g）				岩質、産地、生成生代	図版	写真図版
				長さ	幅	厚	重量			
1	JⅡ－0001S	JⅡ－C区Ⅱ	凹	109	78	46	480	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	78－11	
2	EⅠ－0001S	EⅠ-QⅡ-b混土層	凹	(108)	76	46	490	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	78－9	
3	・GⅡ－　S	GⅡ－J－Ⅳu	台石	128	120	78	1,350	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	78－10	
4	EⅡ－　S	EⅡ－K－Ⅱ	擦台	113	102	50	850	輝石安山岩、奥羽山地、新第三系中新統	――	

Ⅴ．鑑定、分析について

本遺跡の出土資料のうち焼失住居等の炭化材、火山灰、岩質について、その種類の同定分析を行っている。これらのうち炭化材の樹種同定および火山灰については、結果を各遺構の中で述べており、また岩質同定については前章の“４、掲載石器一覧”の中で記載しているので、これらは省略する。

本稿での報告は、ＣⅠ－01住居址・ＤⅡ－02住居址の床面から採取した土壌について、これに包含される種実等の篩別、種類の同定を行っている。これらの作業は、土壌試料の採取を除いてパリノ・サーヴエイ株式会社に依頼し、以下の結果を得ている。

財団法人岩手県文化振興事業団

馬場遺跡出土試料種子同定報告

１．試　料

試料は、No１～No14とNo26～No28の計17点の土壌で、No１～No14はＢＢ87－ＣⅠ－01住居址より採取、No26～No28はＢＢ87－ＤⅡ02住居址より採取されたＬ・Ｍ・Ｎである。遺構の時代は不明である。送付された試類は、No14を除きほぼ風乾状態にあった。

２．方　法

No14以外の試料は風乾状態のまま全量を節別し、１mm以上の残渣を得た。No14は、試料全量を流水中で篩別し、１mm以上の残渣を室内で自然乾燥させ、再び篩別した。いずれも実体顕微鏡下で種実を拾いだし、同定・計数した。同時に種実の拡大写真図版（写真図版56）も作成した。

３．結　果

得られた種実のほとんどは炭化していた。また、試料の中には多量の炭化機を含むものもあった。同定された種実とその主な生活形（表１）と個体数（表２）を一覧表で示した。

表1　馬場遺跡試料から同定された種実とその主な生活形

科　　名	種　　名	生活形 ※
GRAMINEAE（イネ科）	*Oryza sativa*　（イネ）	栽
	cf. *Triticum* sp.（コムギ属類似種）	（栽）
	Gramineae sp. A（スネ科の一種A）	※※
	Gramineae sp. B（スネ科の一種B）	
	Gramineae sp. C（イネ科の一種C）	
	Gramineae sp. D（イネ種の一種D）	
COMMELINACEAE（ツユクサ科）	*Commelina communis*　（ツユクサ）	1・草
JUGLANDACEAE（クルミ科）	*Juglans ailanthifolia*　（オニグルミ）	落・高
MORACEAE（クワ科）	cf. *Fagopyrum esculentum*　（ソバ類似種）	（栽）
POLYGONACEAE	*Cannabis sativa*　（アサ）	栽
CHENOPODIACEAE（アカザ科）	*Chenopodium album*　（シロザ）	1・草
LEGUMINOSAE（マメ科）	Leguminosae spp.（マメ科の一種）	
VITIDACEAE（ブドウ科）	Vitidaceae sp.　（ブドウ科の一種）	

※：栽；1年生、草；草本、落；落葉性、高；高木、
※※：イネ科の一種は4種類（A・B・C・D）に分類した。

炭化種実のため確実な同定のできなかったものや種類不明のものも多かったが、同定された種実の中にはイネ・アサなどの栽培種や、食用となるものが多く認められた。これらの種実や植物体は、当時の人々に利用されていたものと思う。

表2、馬場遺跡試料中から抽出された種実個体数（破片も1個にかぞえた）

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	26	27	28
種名／重量(g) ＊	210	230	460	580	320	450	640	340	460	380	650	930	70	2310	570	1930	720
イネ	3					1	1	1		1		1					
コムギ属 ?			1														
イネ科 A	143	251	2	14	4	10	4			4	2	9	68	138			
イネ科 B			2														
イネ科 C						1											
イネ科 D															1		
ツユクサ			4	1	1		2	2	2		10	11	1				
オニグルミ							1										
アサ			1				27	1	9		13	24	8	2309			
ソバ ?					2												
シロザ				5		1											
マメ科	43		96	1	1		42	14	5			1	2	678			
ブドウ科	1			63			1										
不明	6	2	34	84	13	9	121	5	26	8	20	92	16	176	23	10	
合計	196	253	140		21	22	198	23	42	13	45	138	95	3301	24	10	0

＊：　No14は湿重、その他は乾重（いずれも概数）。

Ⅵ. まとめ

1．地形・地質と立地について

(1) 地形面の同定については概ね松山力（1981）の堀野段丘として支障がないものと考える。大池昭二他（1966）による分類では、南部浮石層をのせることから米沢段丘の一部となるが、大池他が堀野段丘面の標式地とした堀野遺跡でも本遺跡と同様の堆積状態を示している。また、南部浮石層の有無とは別に段丘面傾斜や川床からの比高などから堀野遺跡、本遺跡、隣接する駒焼場遺跡は同一の段丘面と考えられる。本遺跡の南部浮石層は、最大層厚70cmと厚く安定した層に見えるがその上部には洪水等による浸蝕面や再堆積層が認められることから、同一段丘面でも微地形や営力の差によって浸蝕・堆積の状況に差が生じたものと考えられる。

(2) 南部浮石層（Ⅶ層）より上位のVe層までは、堆積条件・環境として洪水等によると考えられる水成作用が存在する。Ⅶa層・Ⅵℓ 層は、その性状・構成物からⅦb層の2次堆積層であり、堆積過程で幾度かの水成作用を伴っていたものと推定される。更にVℓ層とVu層との間にはシルト質～細砂質の褐色土が介在することからVℓ層堆積後に洪水等による泥水の冠水があったものと考えられる。Vu層以上には洪水現象は認められないことから、Vu層形成期から安定した土壌形成期になったものと考える。これらのことからVu層形成前は、馬淵川の氾濫原であった。

以上のことから、縄文時代前期前半頃までは恒常的な居住区域としては不適当な環境にあり、Vu層堆積後から中掫浮石堆積前の前期後半には恒常的ではないものの居住・狩猟等の活動に適した環境へと推移したものと考えられる。

(3) 発掘調査および周辺区域の地表観察や工事地点の観察から、馬場遺跡は段丘縁に沿った幅300m、段丘内へ120mの区域を中心とした遺跡である。また、段丘縁辺、特に北北西～北東縁には良好な湧水が多く認められ、遺構が北北西縁に偏って検出されたことはこれらの湧水の存在とも大きく関係していたものと考えられる。しかし、段丘内部に湧水や沼沢が認められる区域についても、住居址・土坑が散在的に分布している。

2．遺構について

(1) 調査対象区域で確認した遺構は、奈良・平安時代の住居址や土坑を中心とし、中世の住居址、縄文時代の陥し穴状遺構や墓坑・貯蔵穴と考えられる土坑である。縄文時代の住居址は確認できなかったが、墓坑や貯蔵穴と考えられる土坑が存在することから周辺区域で集落が営まれていた可能性が高く、時期は出土土器から後期・晩期と考えられる。

(2) 陥し穴状遺構は、DⅡ区の2基とPⅠ区の1基とは埋土の状態、形態の細部、配列が異なることから形成期・グループが異なるものである。PⅠ区の1基は、馬場Ⅱ遺跡の同じ形態の一群

と考えられる。

(3) 古代の住居址の時期については、土器の特徴、火山灰の堆積状態などを文献(1)、(5)、(6)、(10)～(13)の報告資料や論文と対照すると4期に細別することができる。埋土中における火山灰の堆積状況、層準による区別は必ずしも適切な方法ではないが、岩手県北部の古代住居址の時代・時期を大まかに区別する方法としては有効である。

Ⅰ期：BⅠ－01住、CⅡ－01住、DⅠ－02住、DⅡ－01住、EⅡ－01住、GⅠ－01住(7c末～8c前半)

Ⅱ期：CⅠ－02住、CⅠ－03住、EⅡ－03住（8c中葉～8c後半）

Ⅲ期：DⅡ－02住、DⅠ－01住（9c前半）、**Ⅵ期**：FⅡ－01住（10c前半）

また、住居址の規模・形態、火山灰との関係からは次のように区分できるが、DⅡ－03住居址とGⅠ－01住居址については確認範囲が極一部であることから除外した。

A－1：CⅡ－01住、DⅡ－01住、EⅡ－01住　**A－2**：DⅠ－02住

B－1：BⅠ－01住、EⅡ－03住、CⅠ－02住　**B－2**：EⅡ－02住　**E**：FⅡ－01住

C：CⅠ－03住、DⅡ－02住　**D**：DⅠ－01住　**E**：FⅡ－01住

以上の区分では、近似の住居址が必ずしも同一時期とは考えられず、規模・形態の異なる住居址が同時期あるいは近い時期に存在したと考えられる。

(4) 古代における集落構成は、各住居址の同時存在の把握が困難なことから同一時期の構成は不明である。また13棟の住居址が北東～南西幅30m、北西～南東100mの範囲に分布し、BⅡ・EⅠ・FⅠ・FⅡ区の各区域に空白域があることは、単なる偶然とは考えにくく、古代を通じて集落形成の在り方に何らかの規制が働いていたものと考えられる。

(5) 古代と考えられる方形を基調とする土坑は、焼失炭化材・獣骨片・土師器甕などが存在し、他遺跡の例から(二戸市中曽根Ⅱ遺跡・1980、一戸町田中3遺跡・1980)単なる土坑ではなく上屋をもつ貯蔵施設的な性格の遺構と考えられる。

(6) 各期の住居址に用いられていた建築材の樹種は、大別するとⅠ・Ⅱ期がクリ・コナラを主体とし一部に針葉樹が用いられており、Ⅲ期ではケヤキ属（槻）を主体とし一部にクリ・コナラが用いられている。これらの樹種同定試料は、各住居址における使用部位を判定した上での採取ではないため、部位による使いわけがどのようになっていたかは不明である。

(7) 中世とした住居址の時期は、形態および出土した炭化種子の組み合せから推定したものであり、詳細な時代・時期を判断できる陶器・貨銭等は出土していない。

3．出土遺物について

(1) 古代の住居址から出土した礫石器は、砥石・台石の一部を除けば縄文時代の礫石器と大差のない形態をもっている。また、これらの出土状態を詳細にみると全てのものが古代の遺物であるとは断言できないが、縄文時代後・晩期の遺物と比較すると作用面（使用面）の形状に若干

の差異が見られ、その風化程度は縄文時代の遺物よりも新鮮な面を呈している。

(2) その他、鉄製品の生産・流通の問題や、カマド内外で見られた獣骨片・穀物などからは、食料生産・生業などの問題が考えられる。

〈引用・参考文献〉

(1) 草間俊一（1965）　「岩手県福岡町堀野遺跡」福岡町教育委員会（現二戸市教育委員会）

(2) 大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之（1966）
「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山」『第四紀研究』第5巻1号

(3) 岩手県（1971）　土地分類基本調査『一戸』

(4) 大池昭二（1972）　「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』第11巻4号

(5) 関　豊（1078）　「中曽根遺跡発掘調査報告書」二戸市教育委員会

(6) 松山　力（1981）　「第Ⅱ章・自然的環境」『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会

(7)　（1975）　『九戸の地学』

(8) 村井貞充（1976）　「北上山系の地形」『北上山系』岩手放送

(9) 駒井　健（1978）　「奥羽山脈」『岩手百科辞典』

(10) 一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　一戸町教育委員会・昭和56年

(11) 岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第22、23、35、36、72、118集

(12) 遠藤勝博・相原康二（1983）　「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」芹沢長介先生還暦記念論文集『考古学論叢』

(13) 高橋信雄（1982）　「3 古代」岩手県立博物館『岩手の土器』

写 真 図 版

写真図版１：遺跡の位置と周辺地形（１）

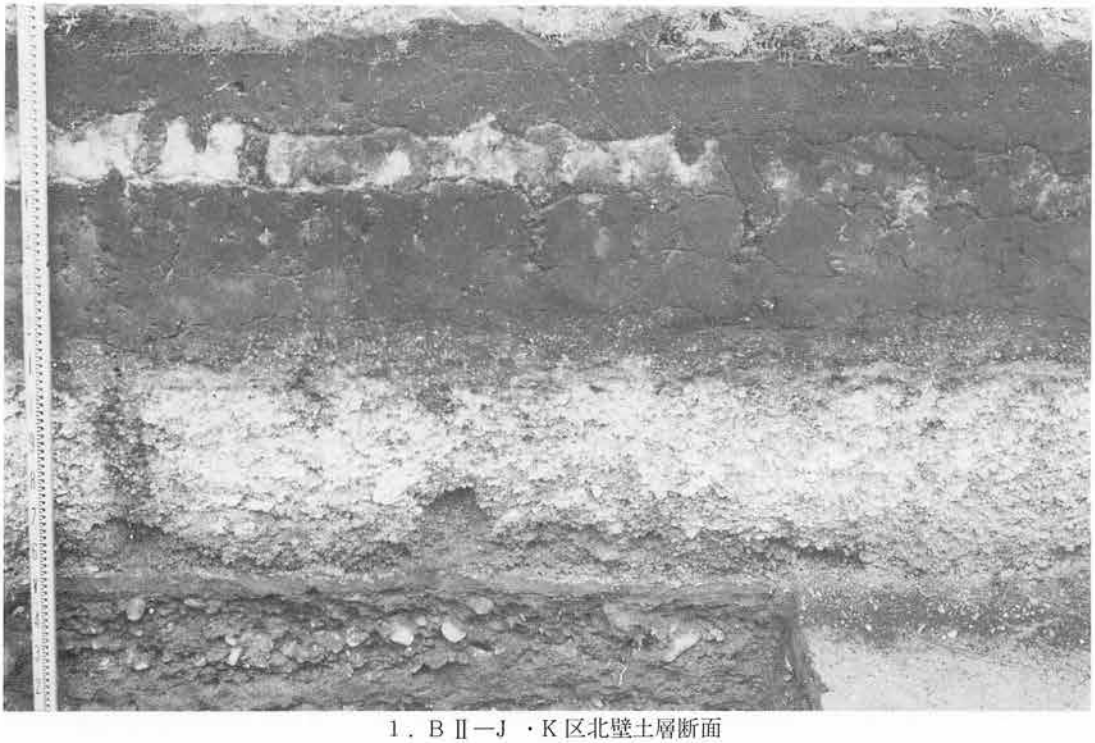
写真図版２：遺跡の位置と周辺地形（２）

1．A～C 区域の状態

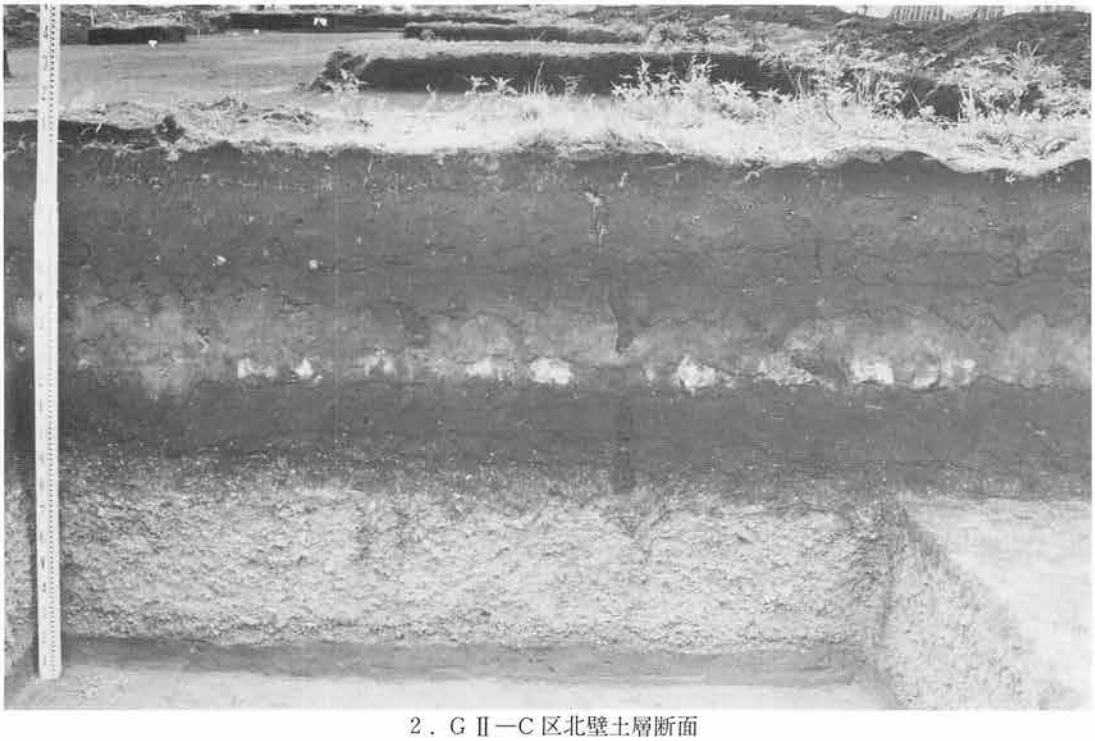
2．D～J 区域の状態

3．L～P 区域の状態

写真図版 3：調査開始時の状態

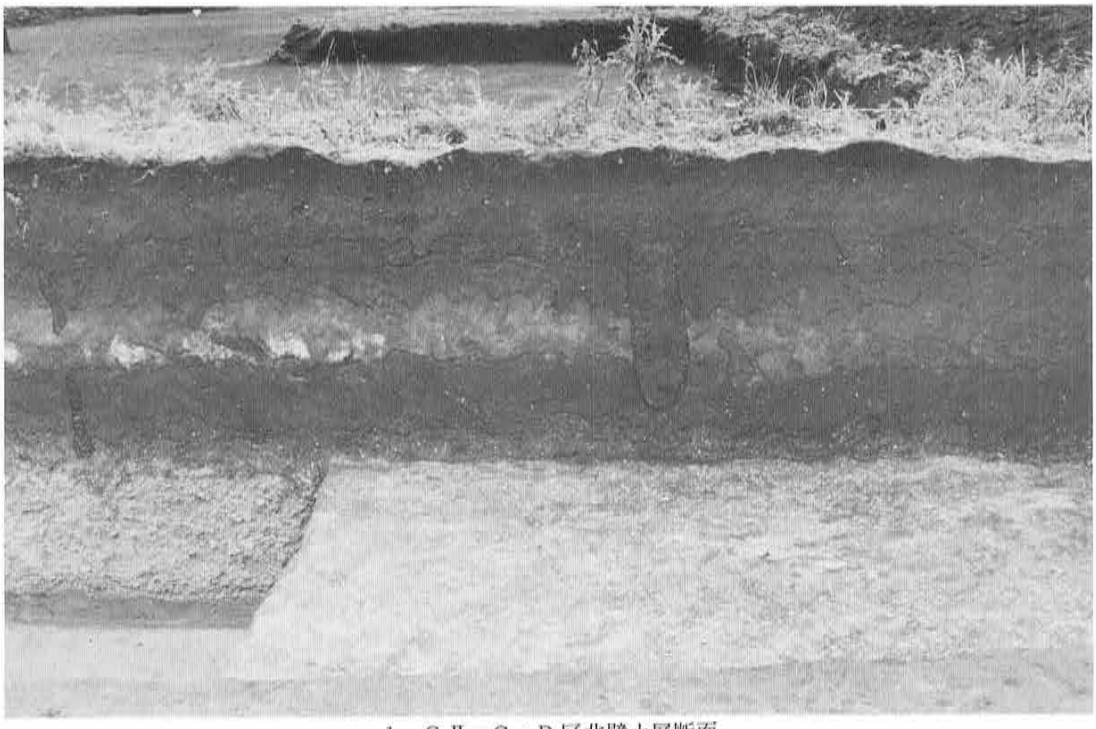


1．BⅡ—J ・K区北壁土層断面

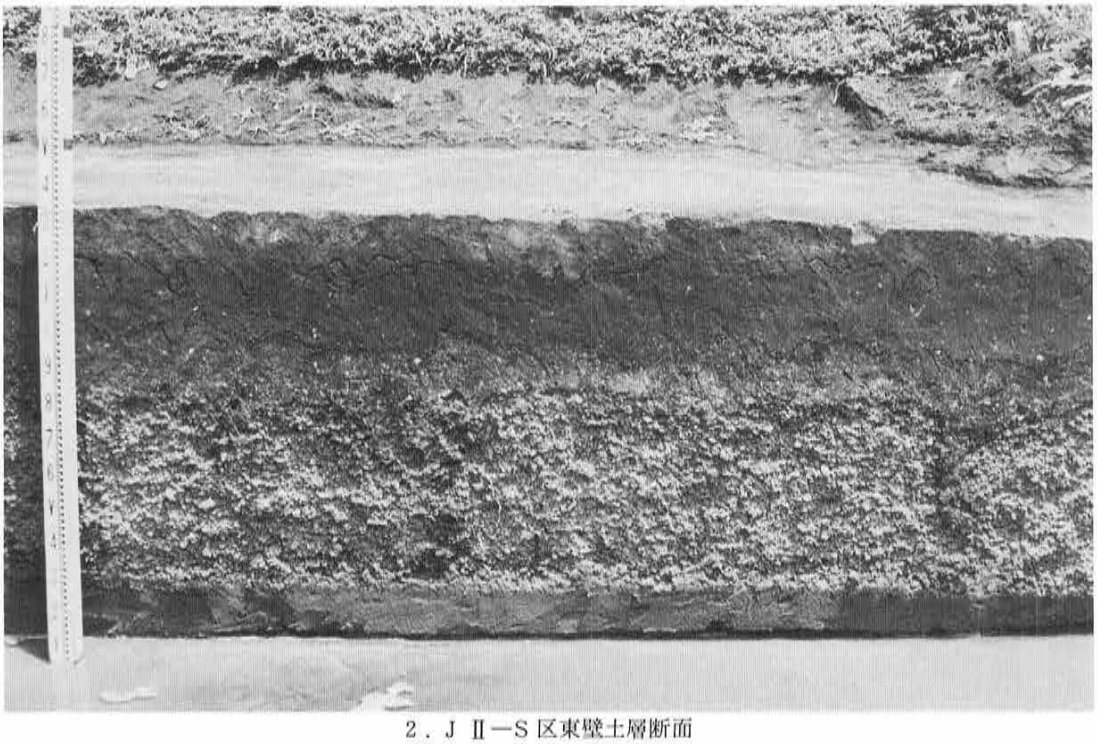


2．GⅡ—C区北壁土層断面

写真図版4：土層堆積の状態（1）

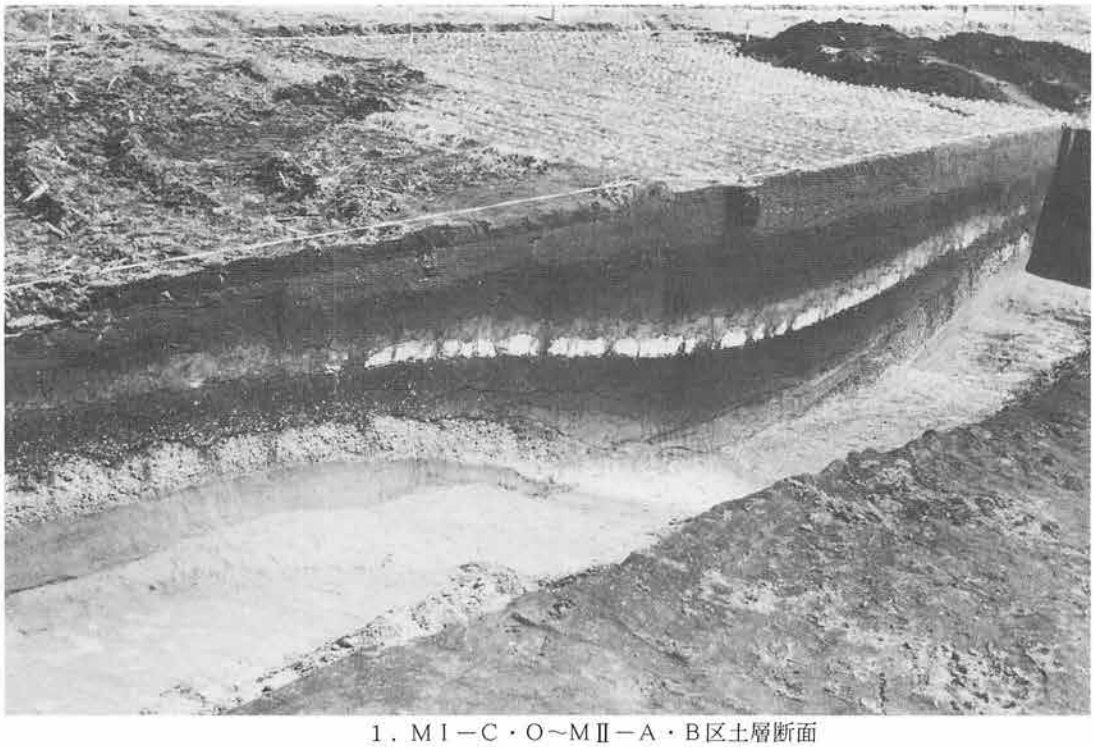


1．G Ⅱ—C ・D 区北壁土層断面



2．J Ⅱ—S 区東壁土層断面

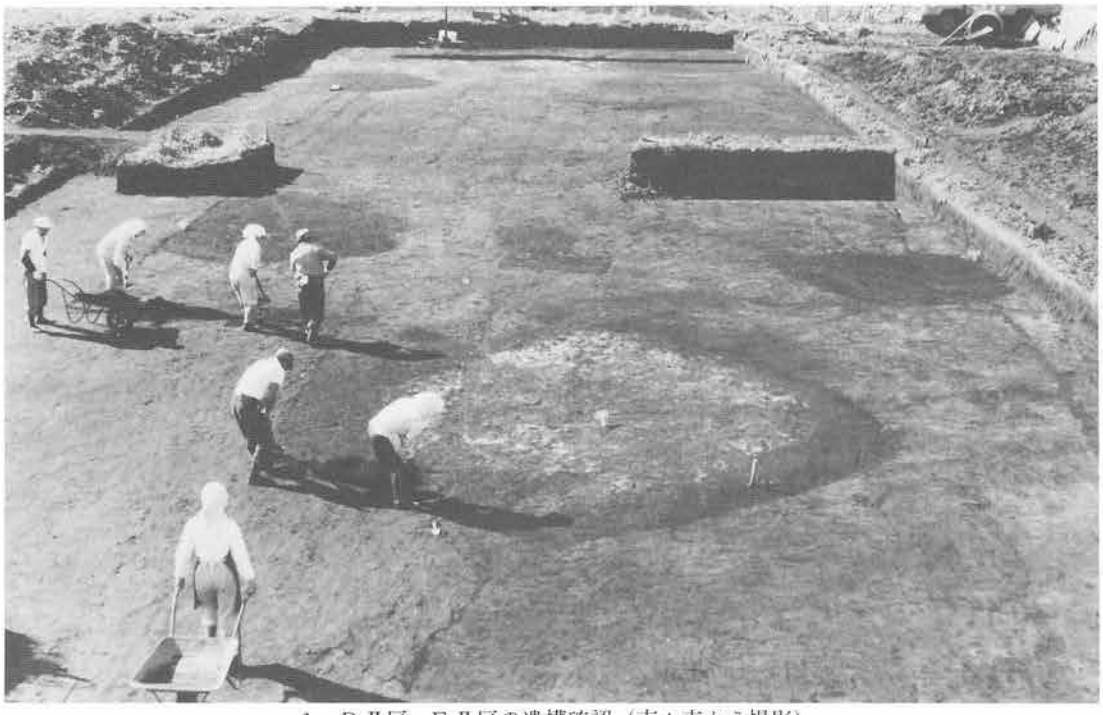
写真図版５：土層堆積の状態（２）



1．ＭＩ－Ｃ・Ｏ～ＭⅡ－Ａ・Ｂ区土層断面

2．ＯＩ－Ｔ区東壁土層断面

写真図版６：土層堆積の状態（３）



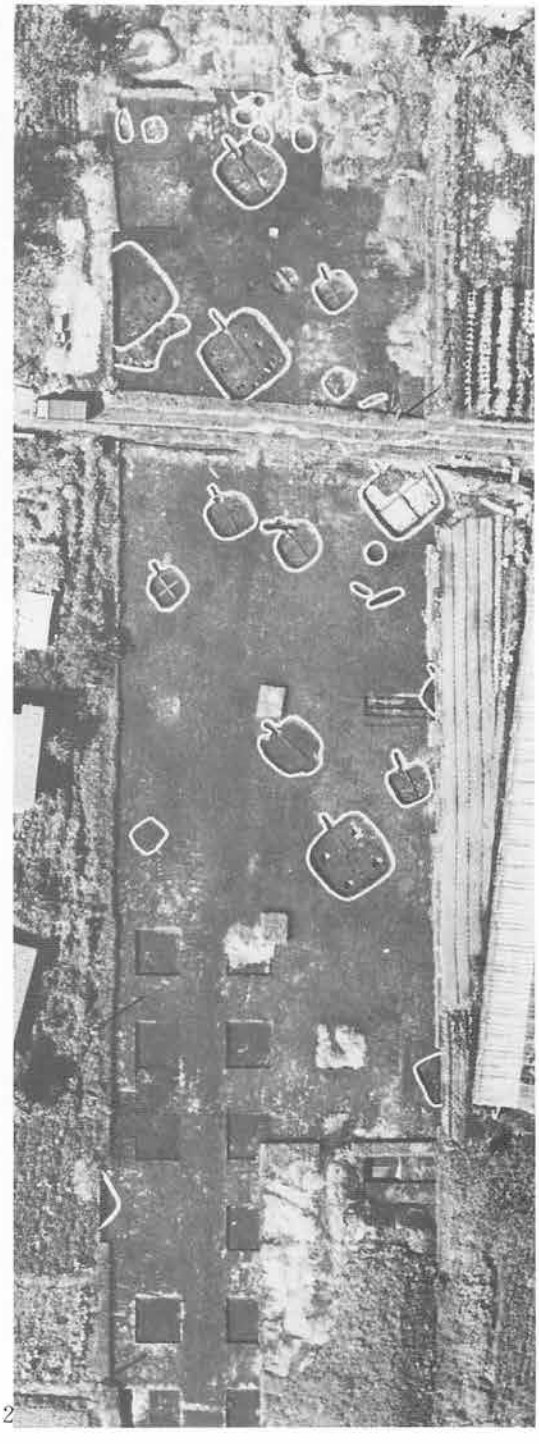
1．DⅡ区、EⅡ区の遺構確認（南々東から撮影）

2．GⅡ区からKⅡ区の遺構確認（北々西から撮影）

写真図版７：遺構確認作業

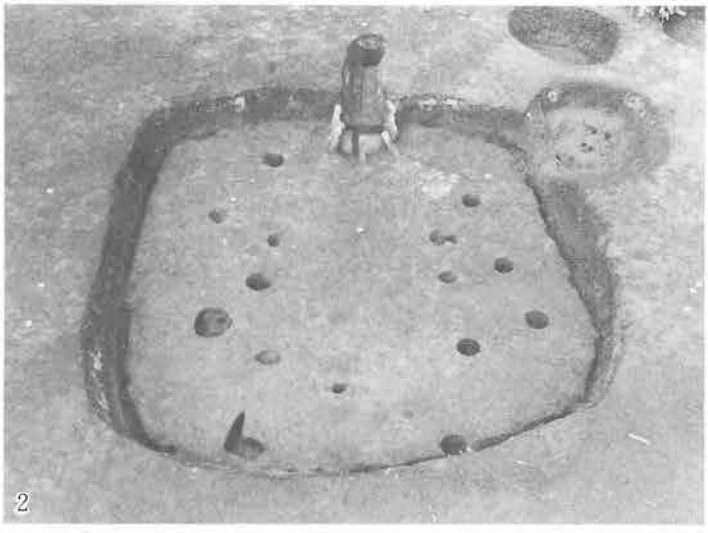
1．調査対象区域全景
2．遺構分布状態（写真１の部分拡大）

1



2

写真図版８：調査区域全景と遺構分布状態



1．遺構確認状態（南西から撮影）
2．完掘状態（南東から撮影）
3．主軸方向埋土状態
4．カマド部精査状況
5．遺物出土状態
6．　〃
7．　〃

写真図版９：ＢⅠ—01住居址

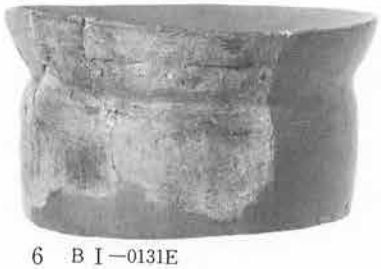
1　B Ⅰ—0101E

2　B Ⅰ—0104E

3　B Ⅰ—0122E

4　B Ⅰ—0112E

5　B Ⅰ—0114E



6　B Ⅰ—0131E

7　B Ⅰ—0102E A

8　B Ⅰ—0107E

9
B Ⅰ—0102E B

12a

10　B Ⅰ—0133E

11
B Ⅰ—0138E

12b　B Ⅰ—0134E

写真図版10：B Ⅰ—01住居址出土遺物（1）

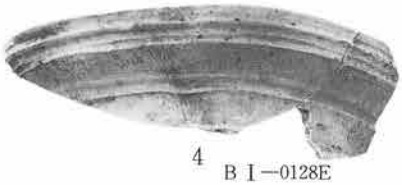
1 a

1 b

床直No 2 カマド支脚

2 B Ⅰ—0140E

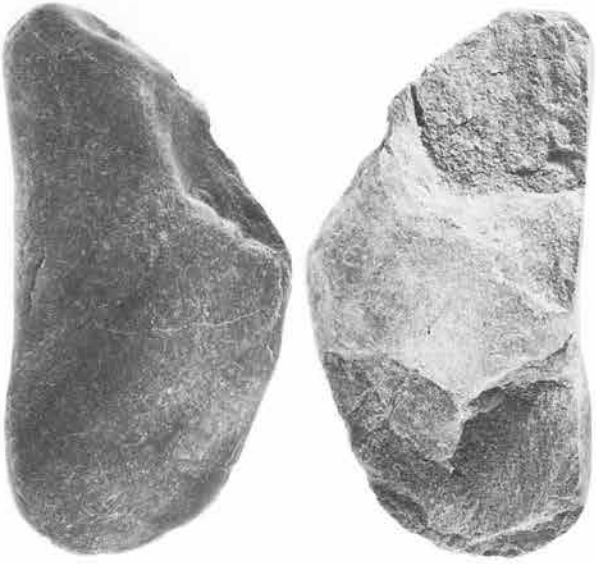
3 B Ⅰ—0105E



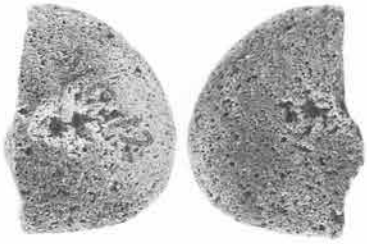
4 B Ⅰ—0128E

5 B Ⅰ—0103E

6 B Ⅰ—0125S



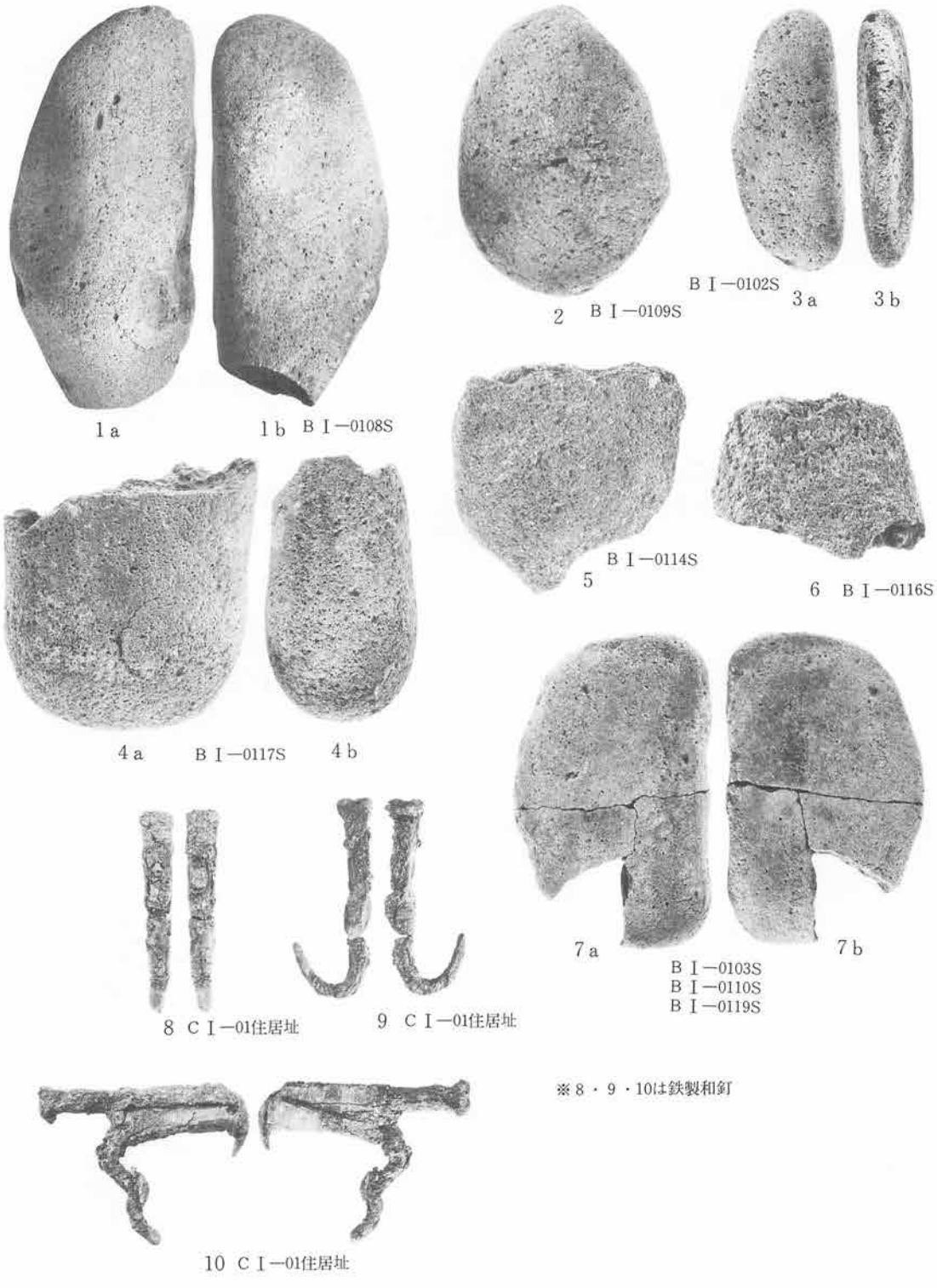
7 a B Ⅰ—0111S 7 b



8 a B Ⅰ—0112S 8 b

9

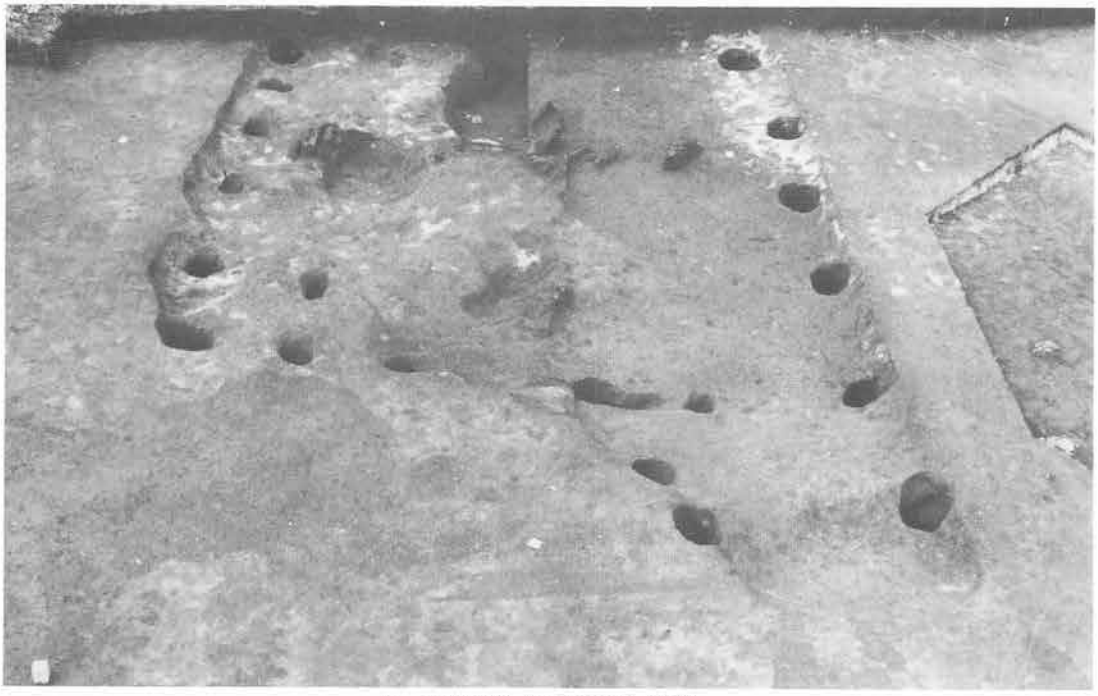
写真図版11：B Ⅰ—01住居址出土遺物（2）



※8・9・10は鉄製和釘

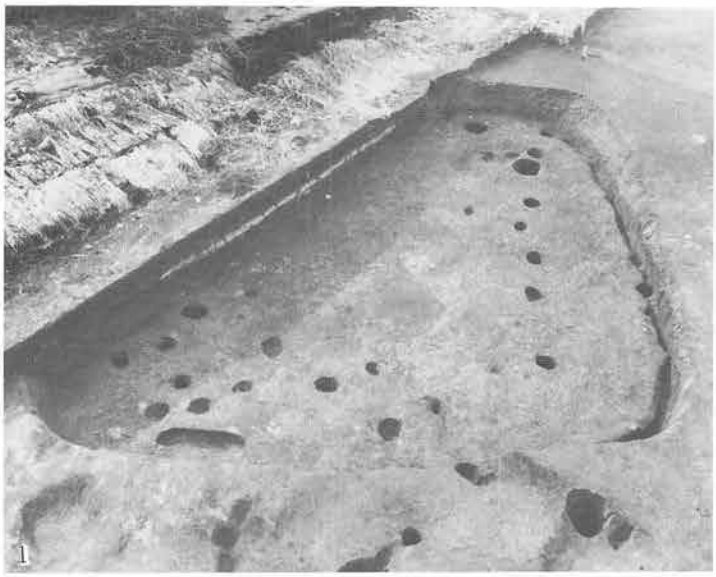
写真図版12：BⅠ—01(3)・CⅠ—01住居址出土遺物

1．炭化材・焼土等精査状況（東北東から撮影）

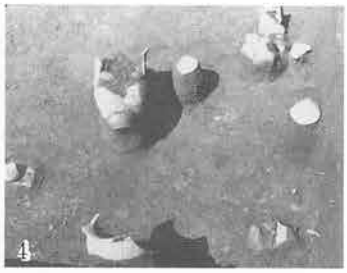


2．完掘状態（東北東から撮影）

写真図版13：ＣⅠ—01住居址

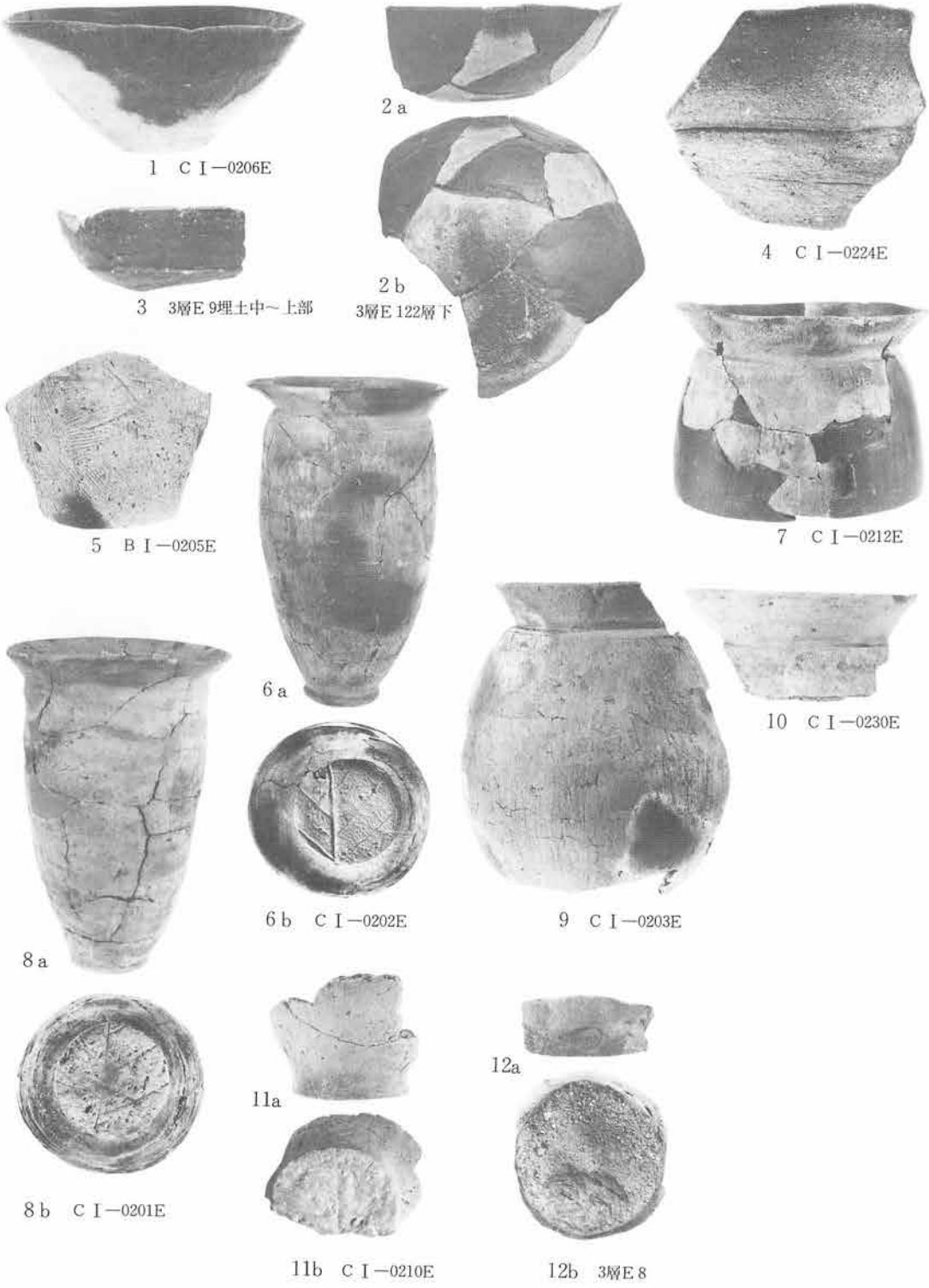


※1．2．3は南東から撮影

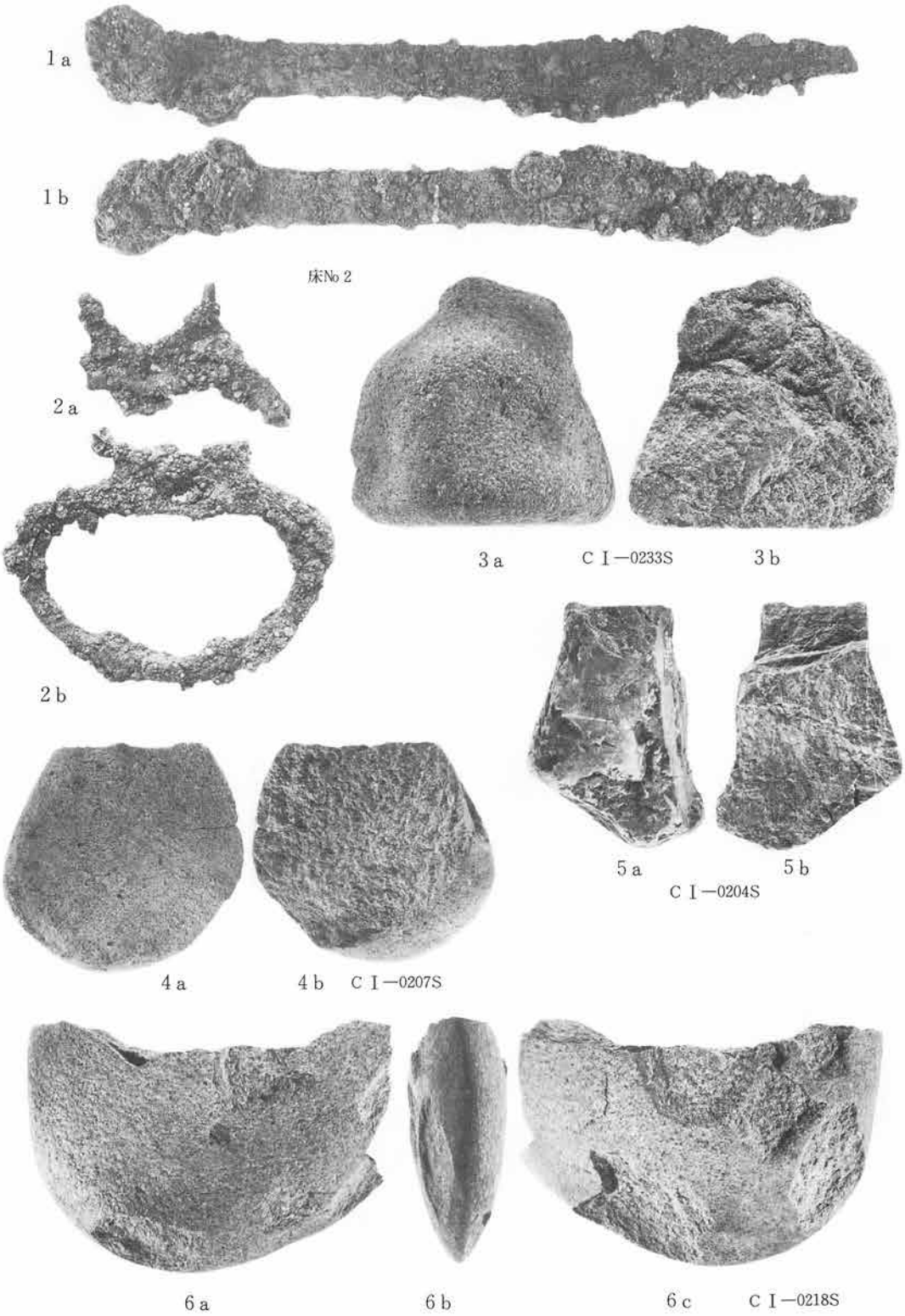


1．完掘状態
2．遺物等分布状態
3．埋土堆積状態
4．埋土出土の土器
5．床面出土の刀子
6．床面出土の石製紡錘車
7．北東隅の埋土中から検出した焼失炭化材（西から撮影）

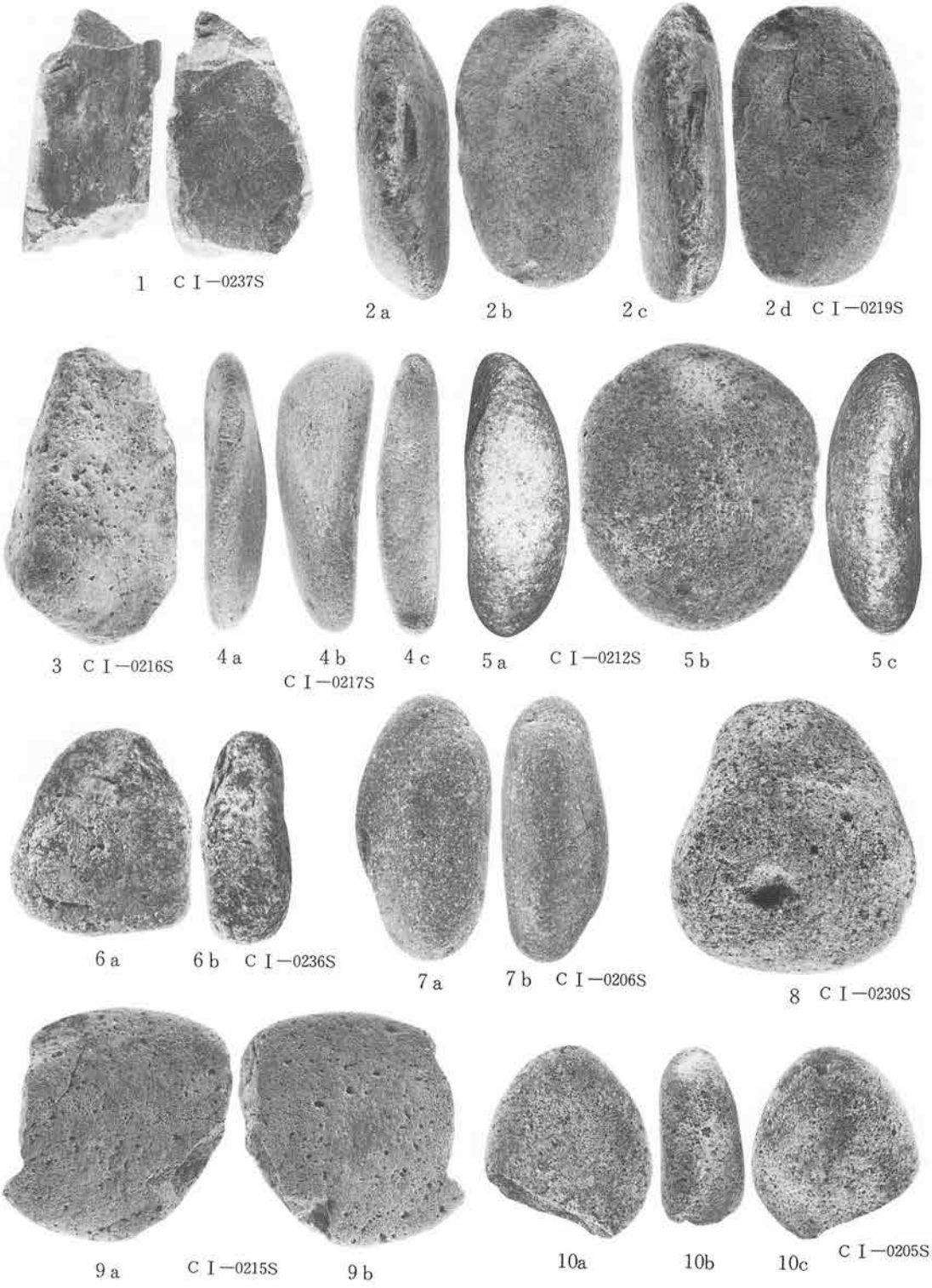
写真図版14：C Ⅰ—02住居址



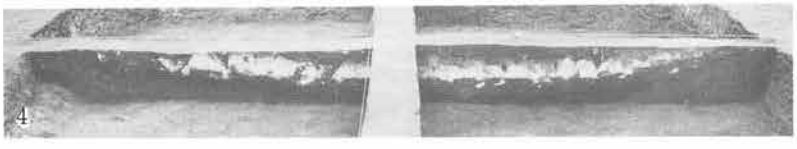
写真図版15：C Ⅰ—02住居址出土遺物（1）



写真図版16：C Ⅰ—02住居址出土遺物（2）

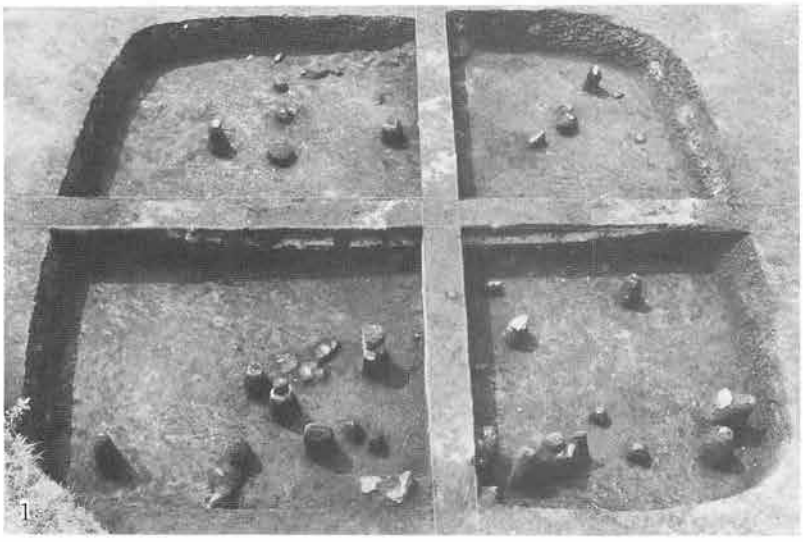


写真図版17：C Ⅰ－02住居址出土遺物（3）

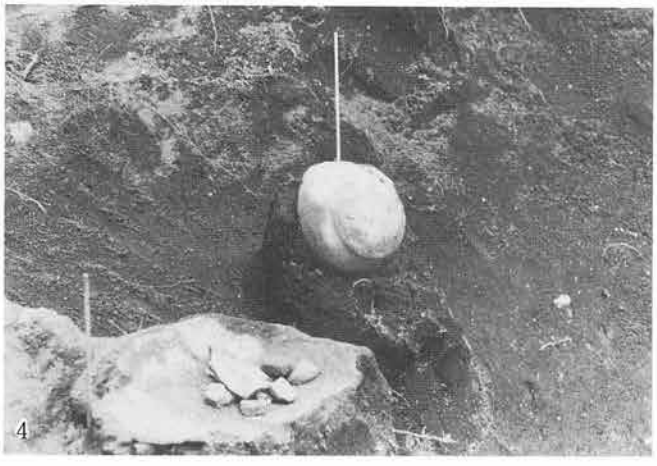


1．遺構確認状態（南西から撮影）
2．略完掘状態（南東から撮影）
3．4．埋土堆積状態
（4は主軸方向）
5．カマド精査状況
6．カマドの燃焼部

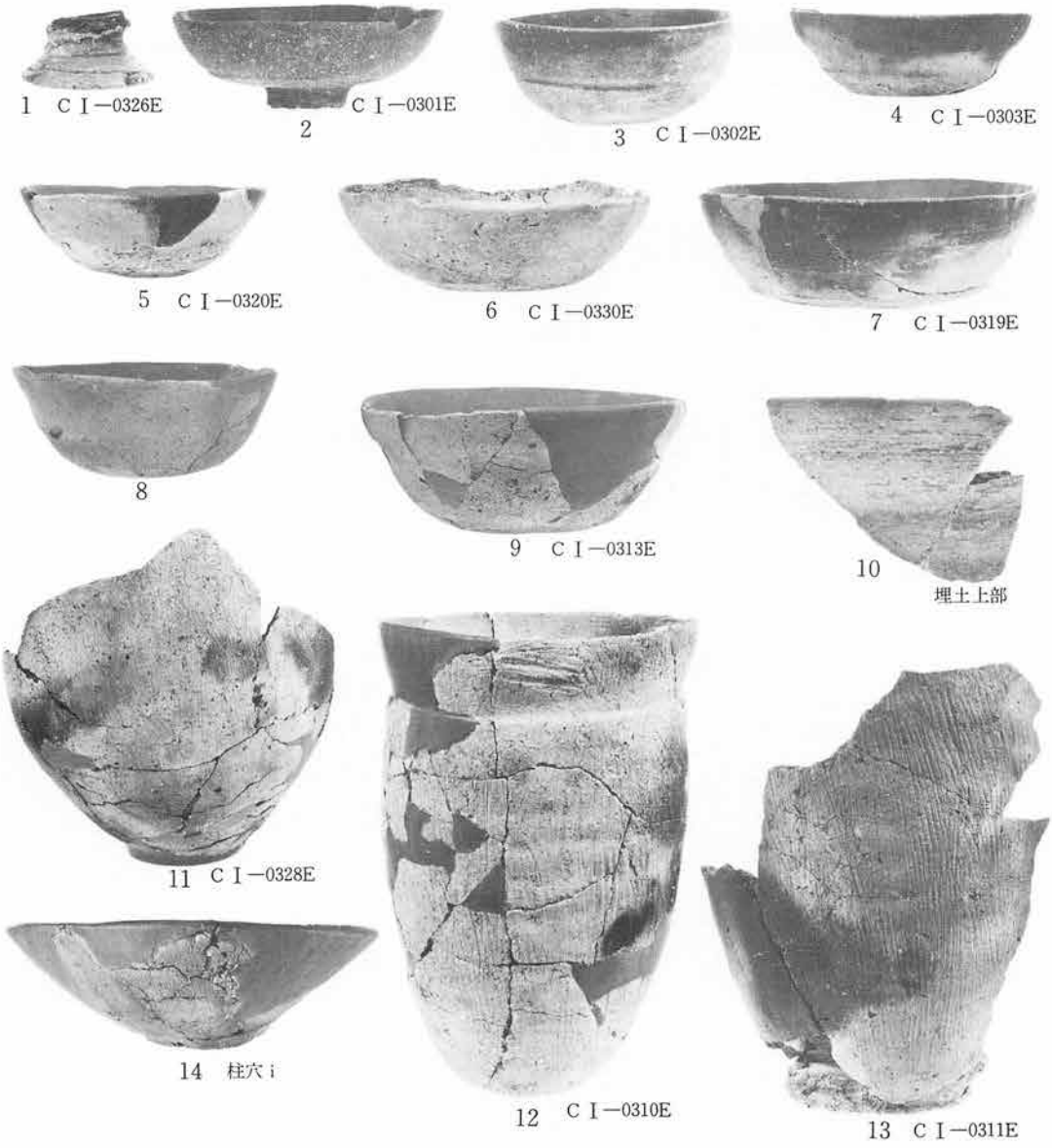
写真図版18：CⅠ—03住居址（1）



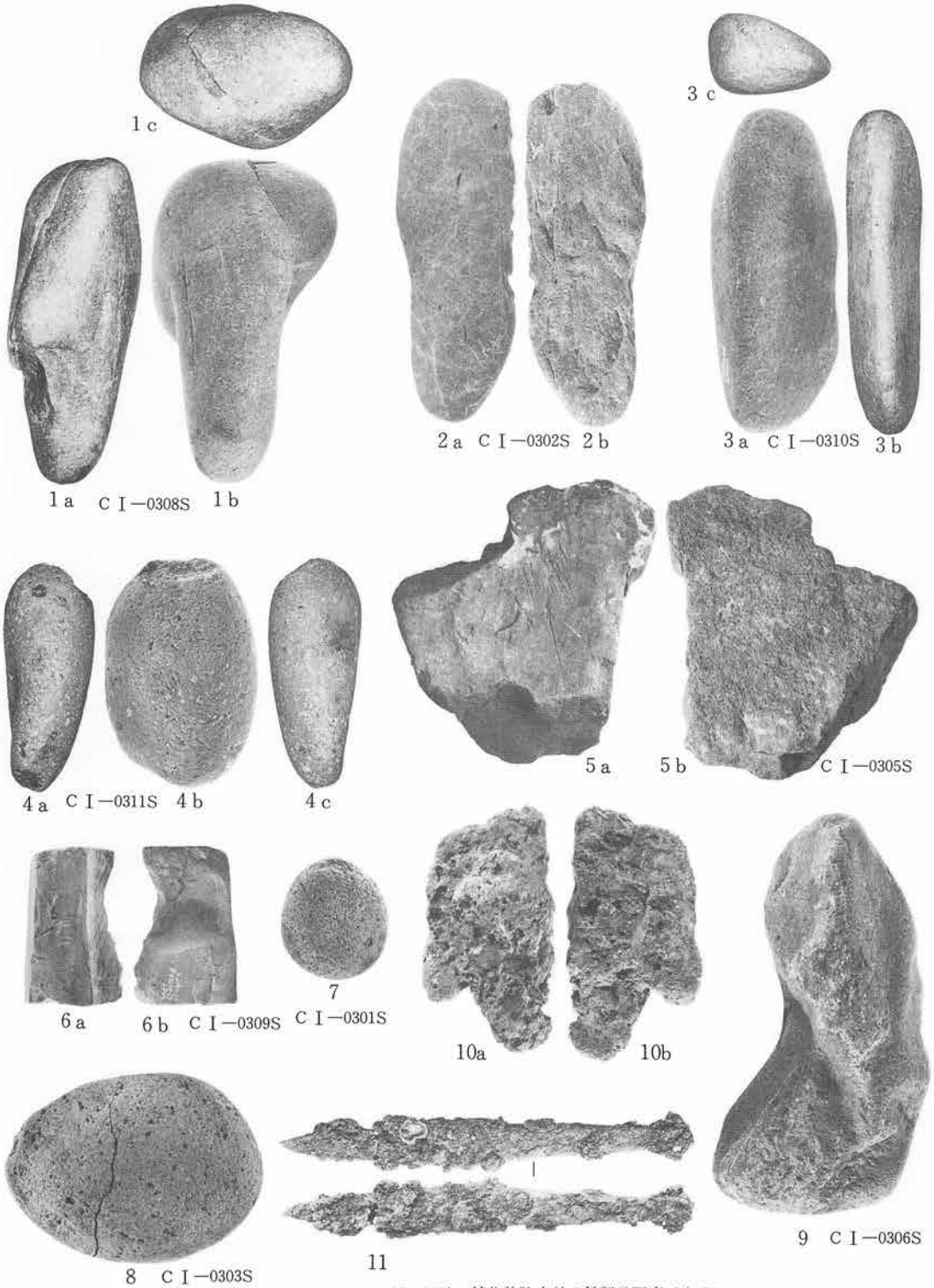
1．遺物出土状況
（南東から撮影）
2～5．個別の出土状態



写真図版19：ＣⅠ—03住居址（2）

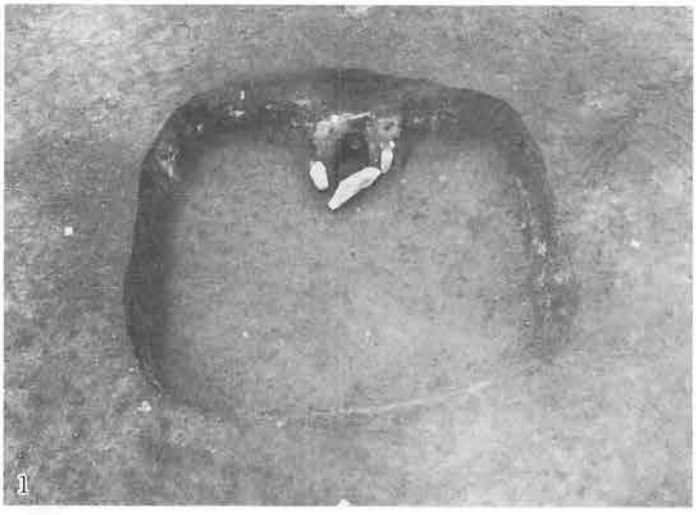


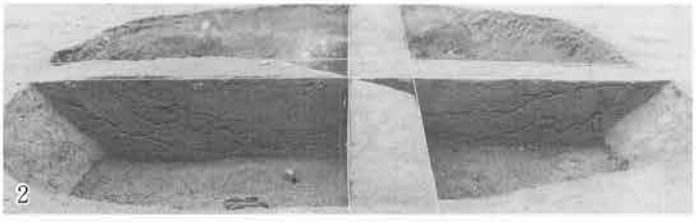
写真図版20：C Ⅰ—03住居址出土遺物（1）

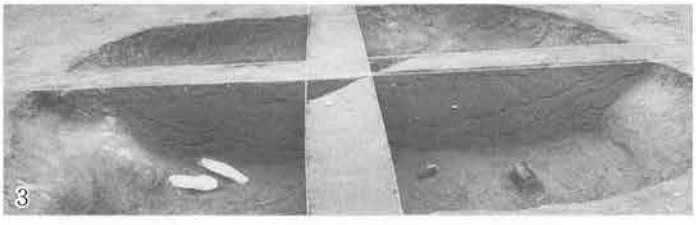


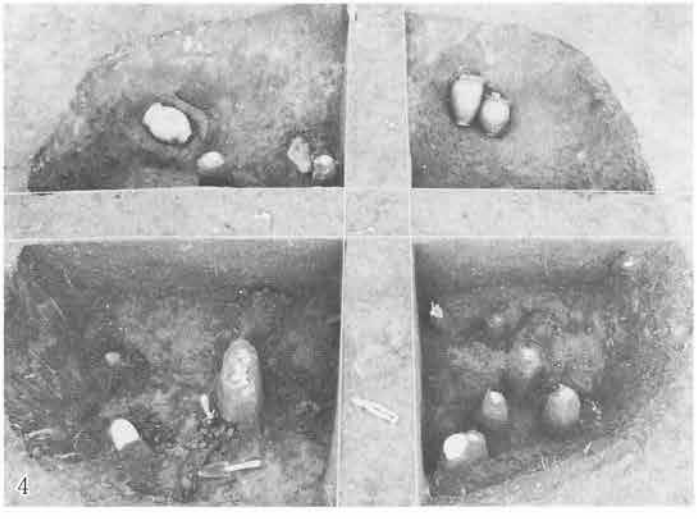
※10・11は、錆化物除去前の鉄製品写真である。

写真図版21：CⅠ—03住居址出土遺物（2）



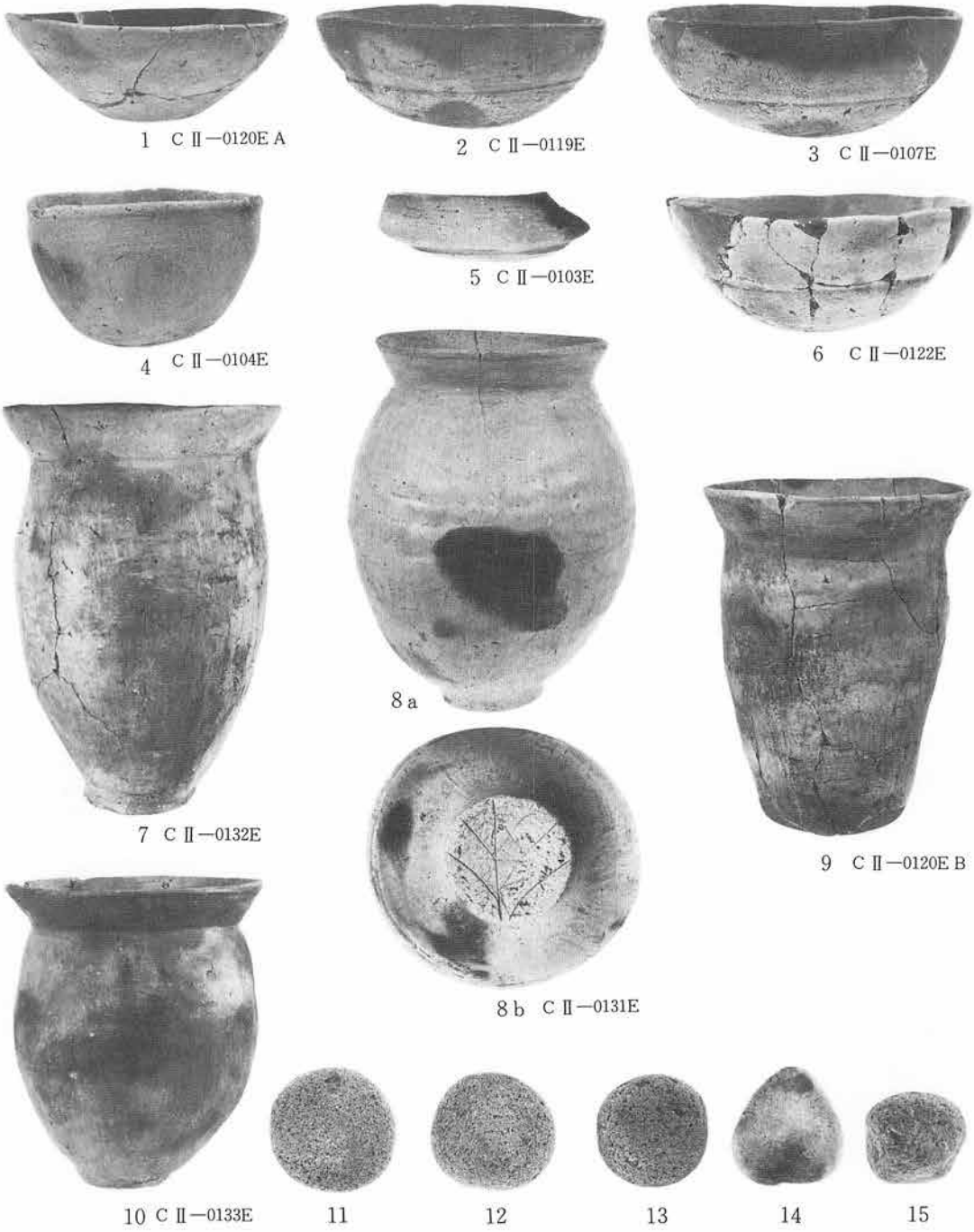




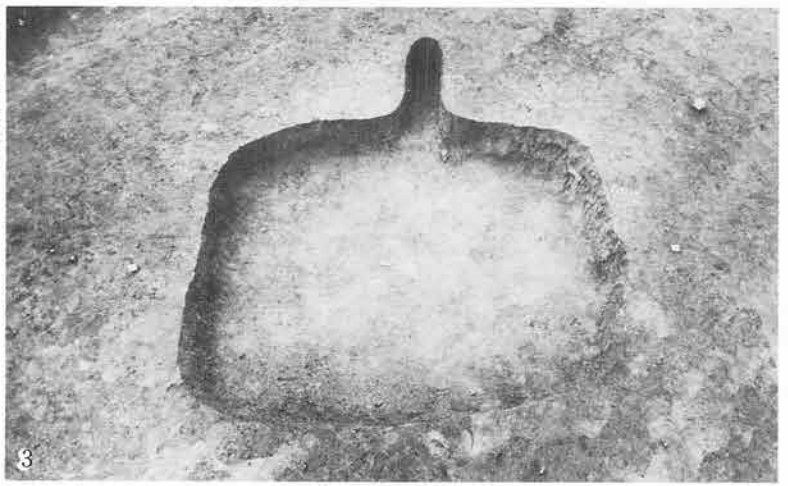


1．略完掘状態（南東から撮影）
2．直交軸方向埋土堆積状態
3．主軸方向埋土堆積状態
4．遺物出土状態（南東から撮影）
5．カマド検出状態
6．カマド精査状況
7．カメ形土器出土状態拡大

写真図版22：C Ⅱ—01住居址

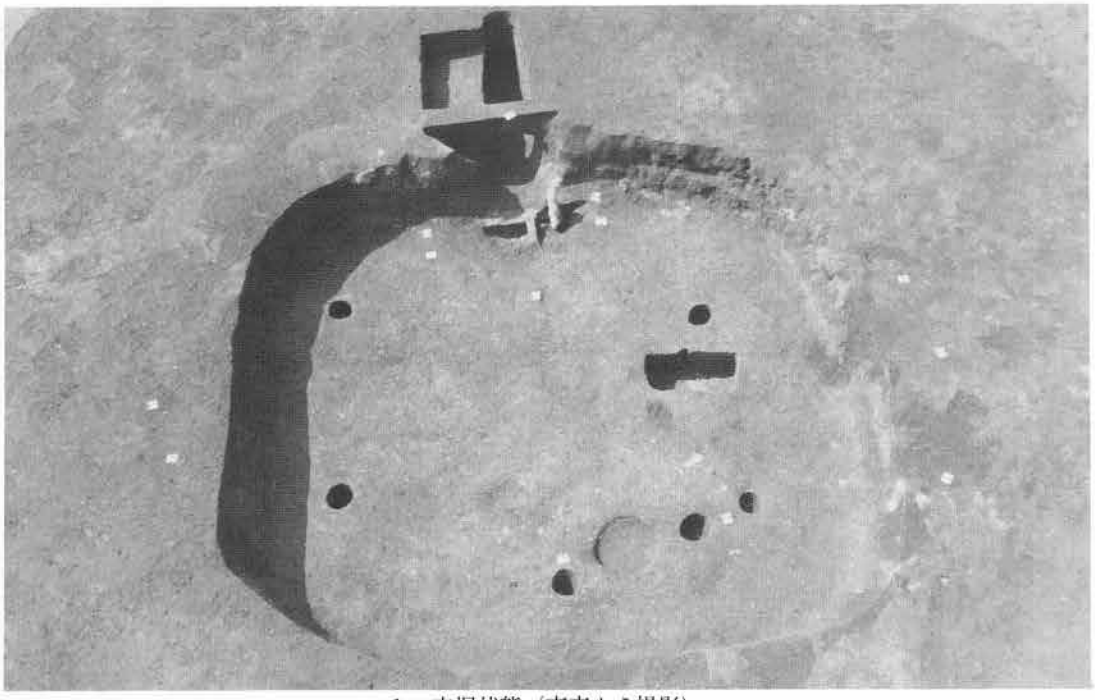


写真図版23：C Ⅱ—01住居址出土遺物

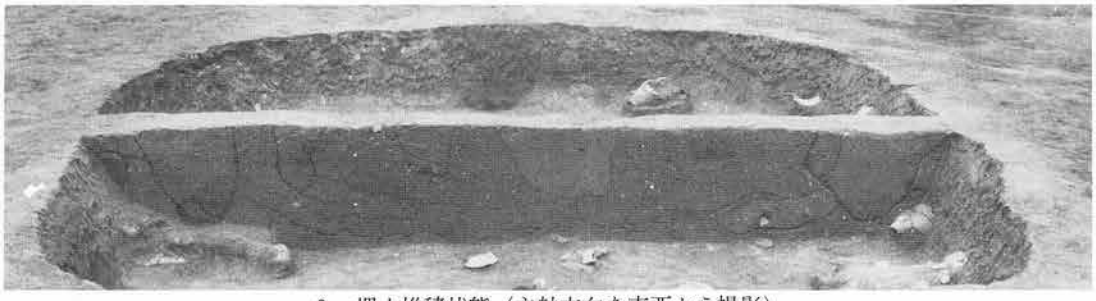


1．遺構確認状態（南東から撮影）
2．焼失炭化材・焼土検出状態（南東から撮影）
3．完掘状態（南東から撮影）
4．埋土堆積状態（南東から撮影）

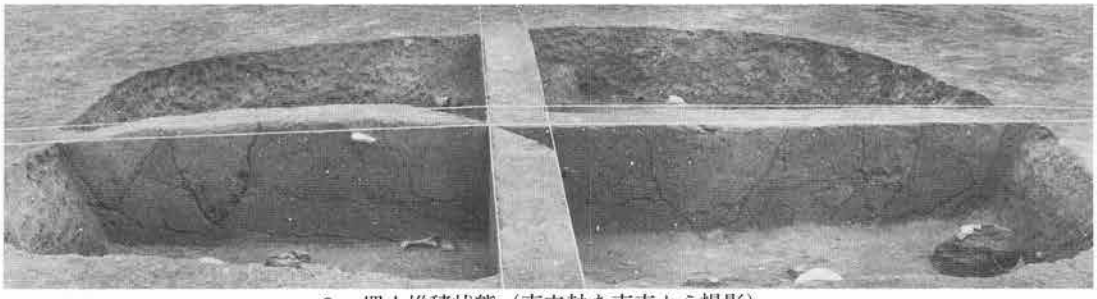
写真図版24：ＤⅠ－01住居址



1．完掘状態（南東から撮影）

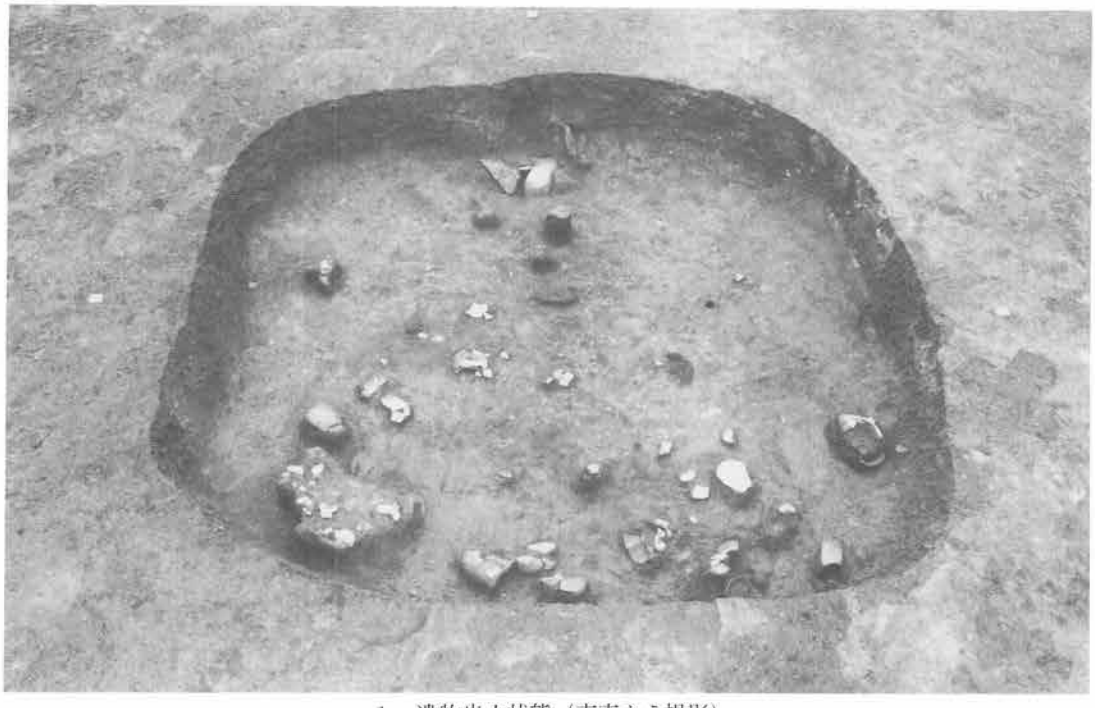


2．埋土堆積状態（主軸方向を南西から撮影）



3．埋土堆積状態（直交軸を南東から撮影）

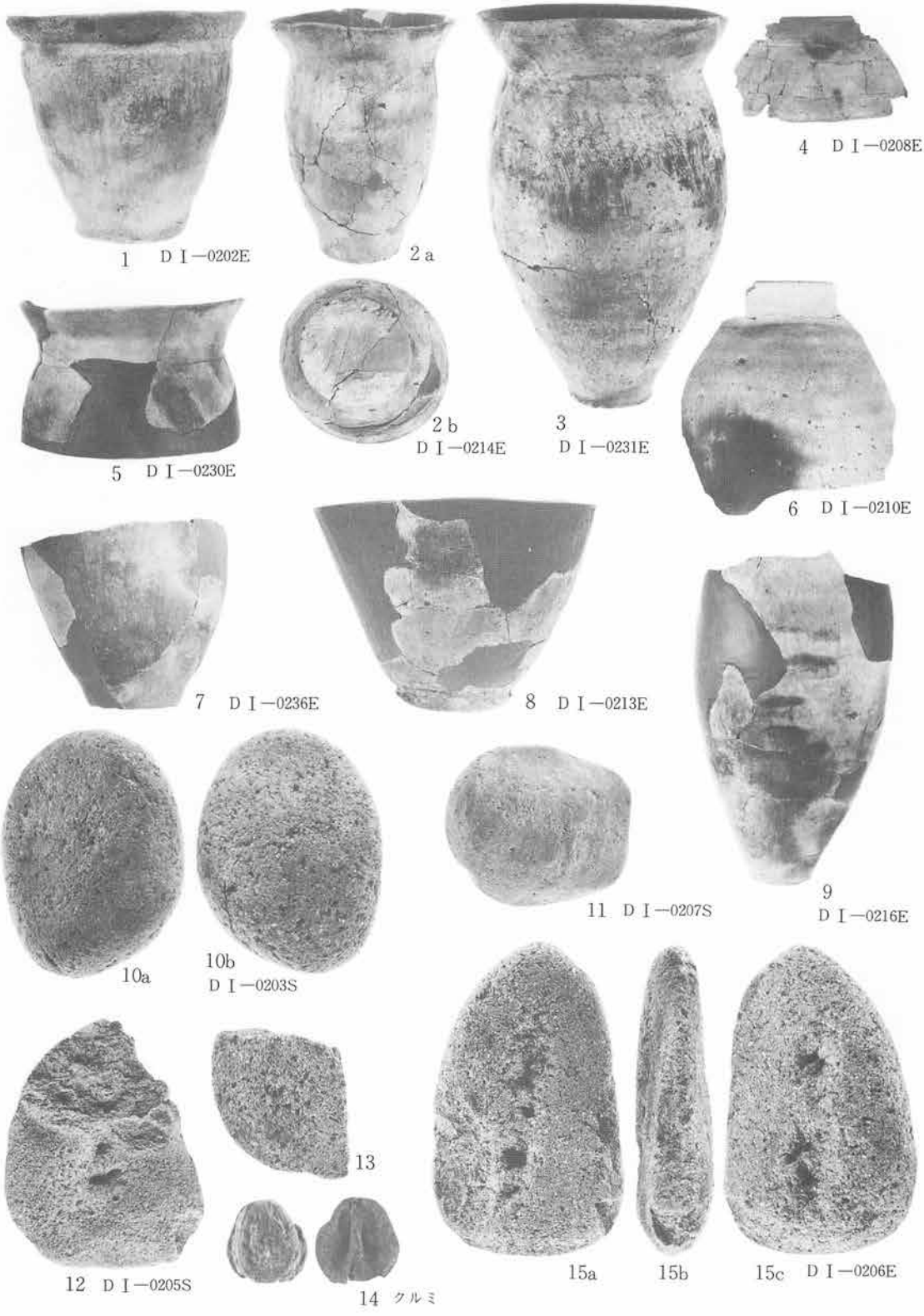
写真図版25：ＤⅠ—02住居址（1）



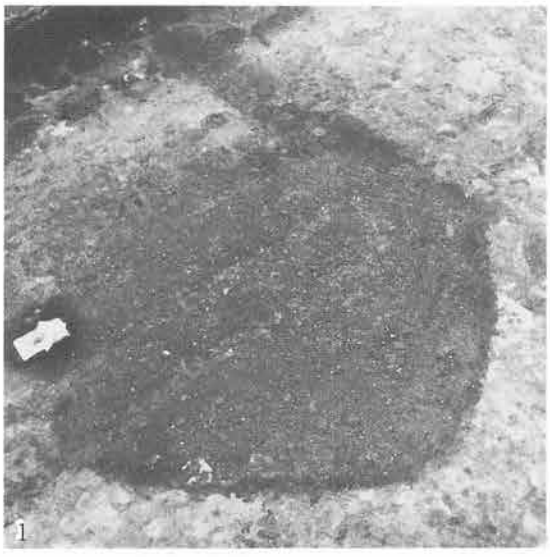
1．遺物出土状態（南東から撮影）

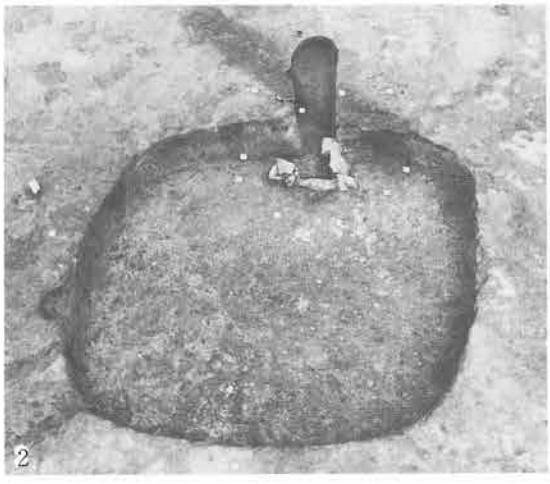
2．遺物出土状態拡大（南東から撮影）

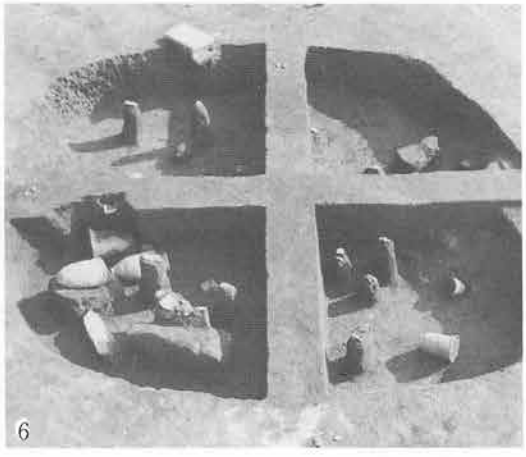
写真図版26：ＤⅠ—02住居址（2）



写真図版27：D I－02住居址出土遺物







1．遺構確認状態（南東から）
2．完掘状態（南東から撮影）
3．埋土堆積状態（直交軸を南東から撮影）
4．埋土堆積状態（主軸を南西から撮影）
5．カマド燃焼部検出
6．遺物分布状態

写真図版28：DⅡ—01住居址（1）

1．遺物出土状態

2．遺物出土状態

3．遺物出土状態

写真図版29：DⅡ—01住居址（2）

1　D Ⅱ－0101E

2 a

3　D Ⅱ－0107E

4　D Ⅱ－0105E

5　D Ⅱ－0109E

2 b

D Ⅱ－0102E

6 a

6 b

7　D Ⅱ－0106E

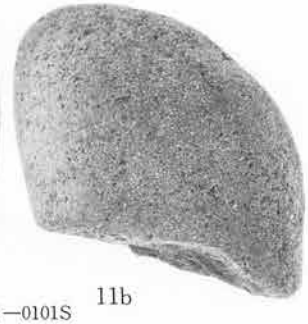
8　D Ⅱ－0121E

9 a

9 b

10a　10b　10c

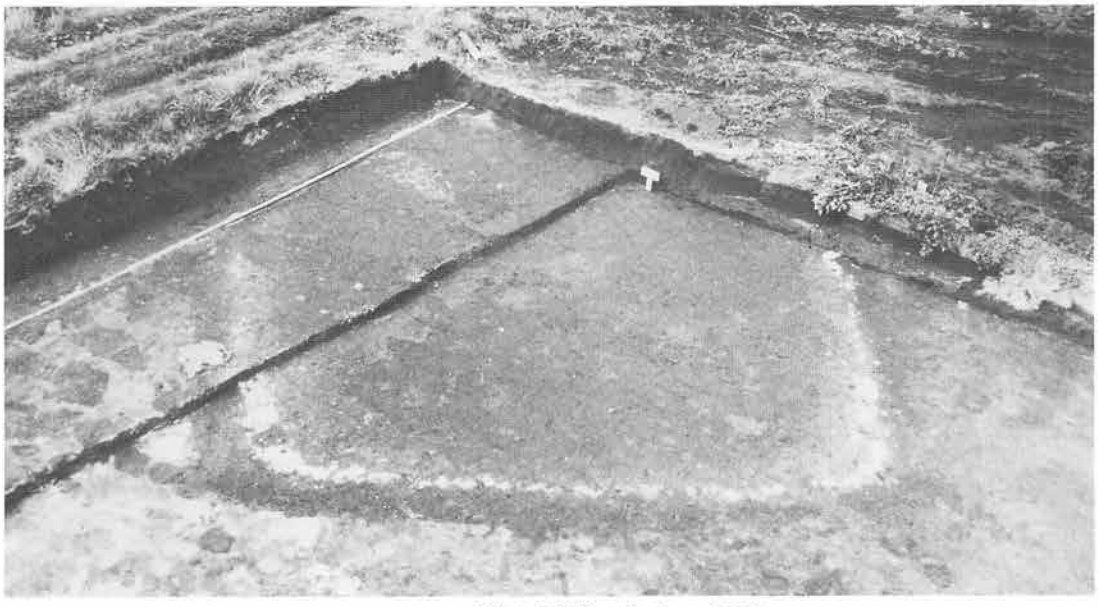
11a



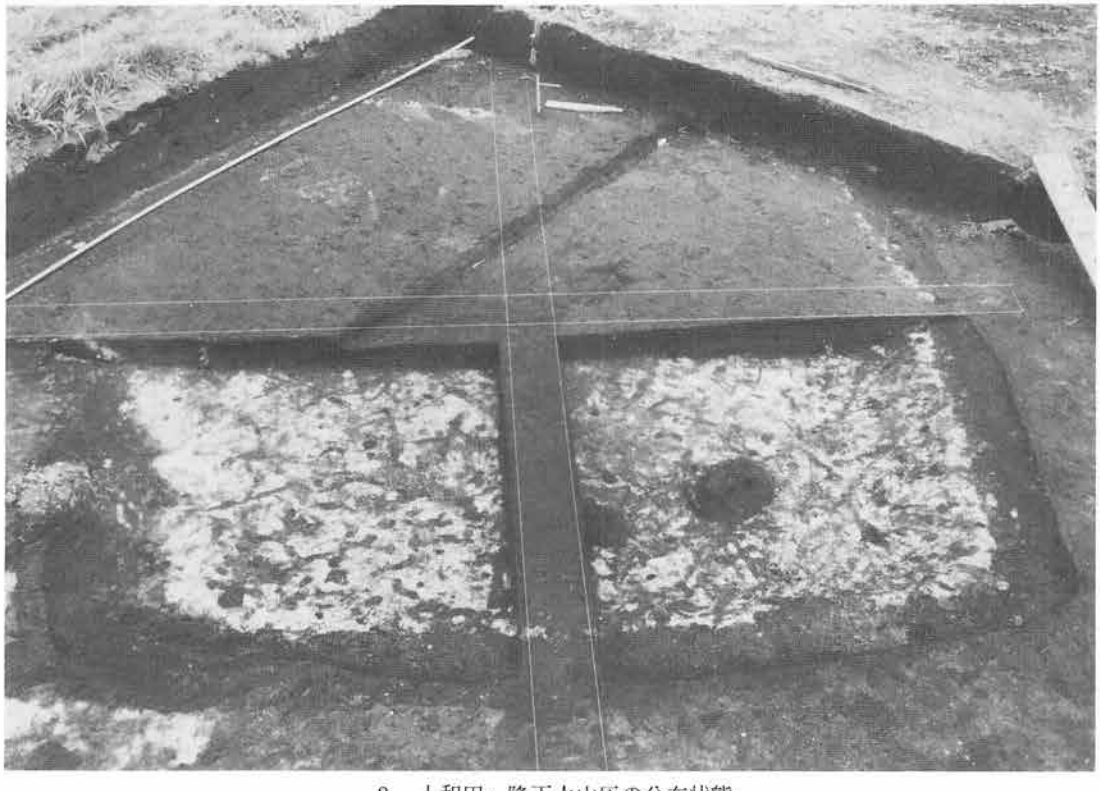
11b

D Ⅱ－0101S

写真図版30：D Ⅱ－01住居址出土遺物



1．遺構確認状態（南西から撮影）



2．十和田a 降下火山灰の分布状態

写真図版31：DⅡ—02住居址（1）

1．焼失炭化材・遺物等の検出状態（南西から撮影）
2．略完掘状態（南西から…）
3．埋土堆積状態（主軸方向を南西から撮影）
4．カマド周辺検出状態（南東から撮影）
5．燃焼部・煙道部精査状況
6．坏形土器出土状態

写真図版32：D Ⅱ—02住居址（2）

1．完掘および埋土堆積状態（西南西から撮影）
2．煙道部埋土堆積状態（西南西から撮影）
3．ＢⅠ—002土坑埋土状態（一部分を東北東から撮影）
4．ＢⅠ—002土坑完掘状態（北西～北北西から撮影）

写真図版33：ＤⅡ—03住居址とＢⅠ—002土坑

1　D Ⅱ—0202E

2 a　カマド

3 a

2 b

4　D Ⅱ—0201E

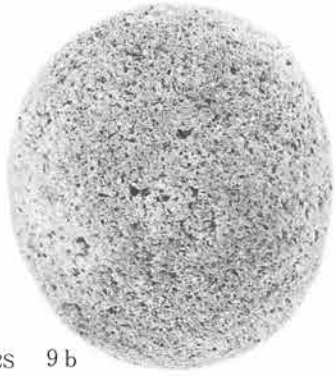
3 b　D Ⅱ—0203E

5　P床上

8

6　D Ⅱ—0205E

9 a　D Ⅱ—0202S

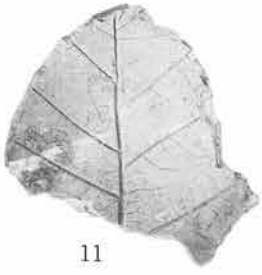


9 b

7　D Ⅱ—0204E

10a

10b

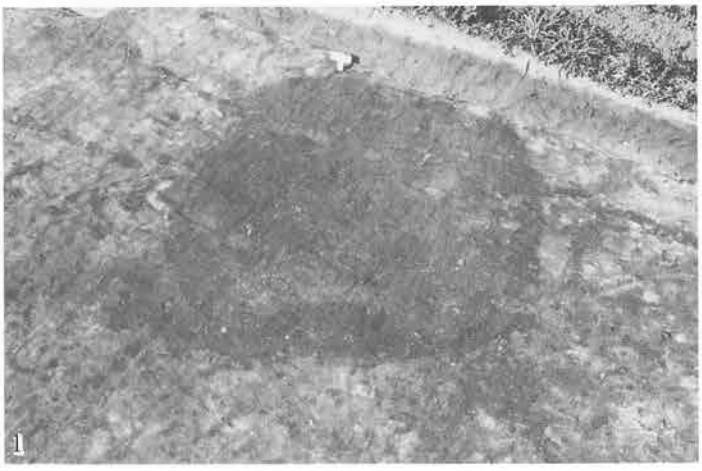


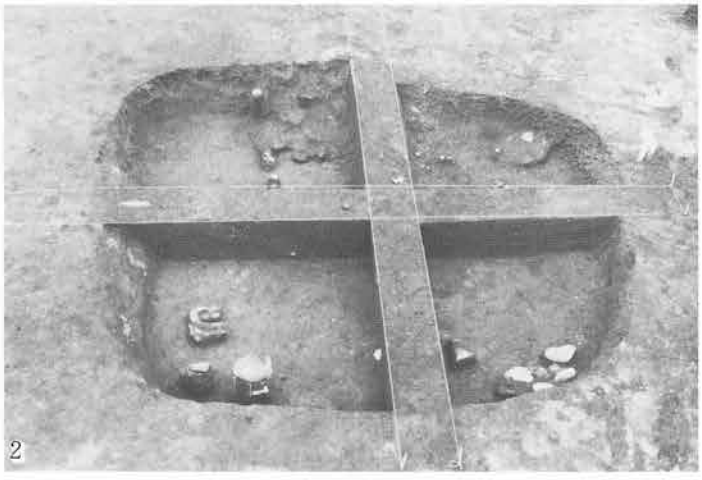
11

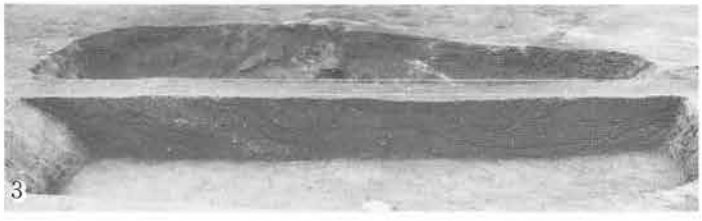
※８は、クルミ．10は鉄製品．９は礫石器である。

※１～10はD Ⅱ—02住居址の出土遺物．11はD Ⅱ—03住居址出遺物。

写真図版34：D Ⅱ—02・D Ⅱ—03住居址出土遺物

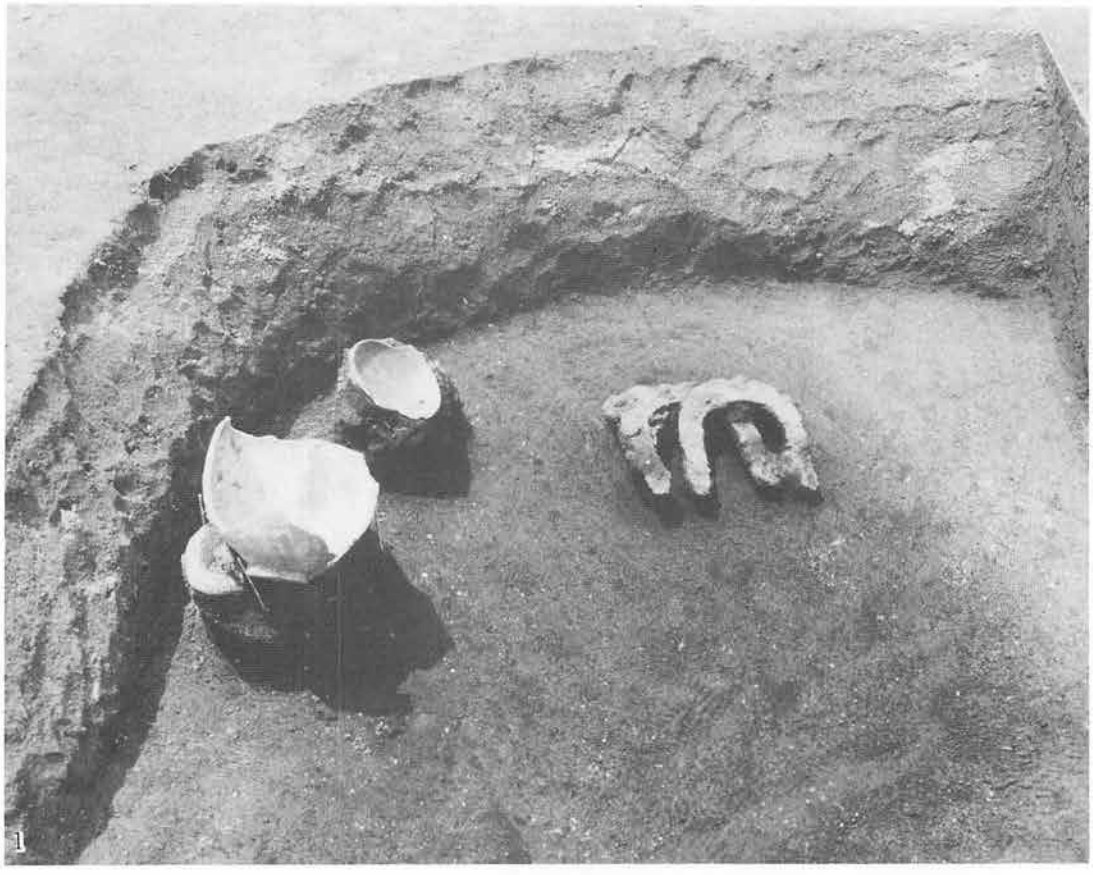






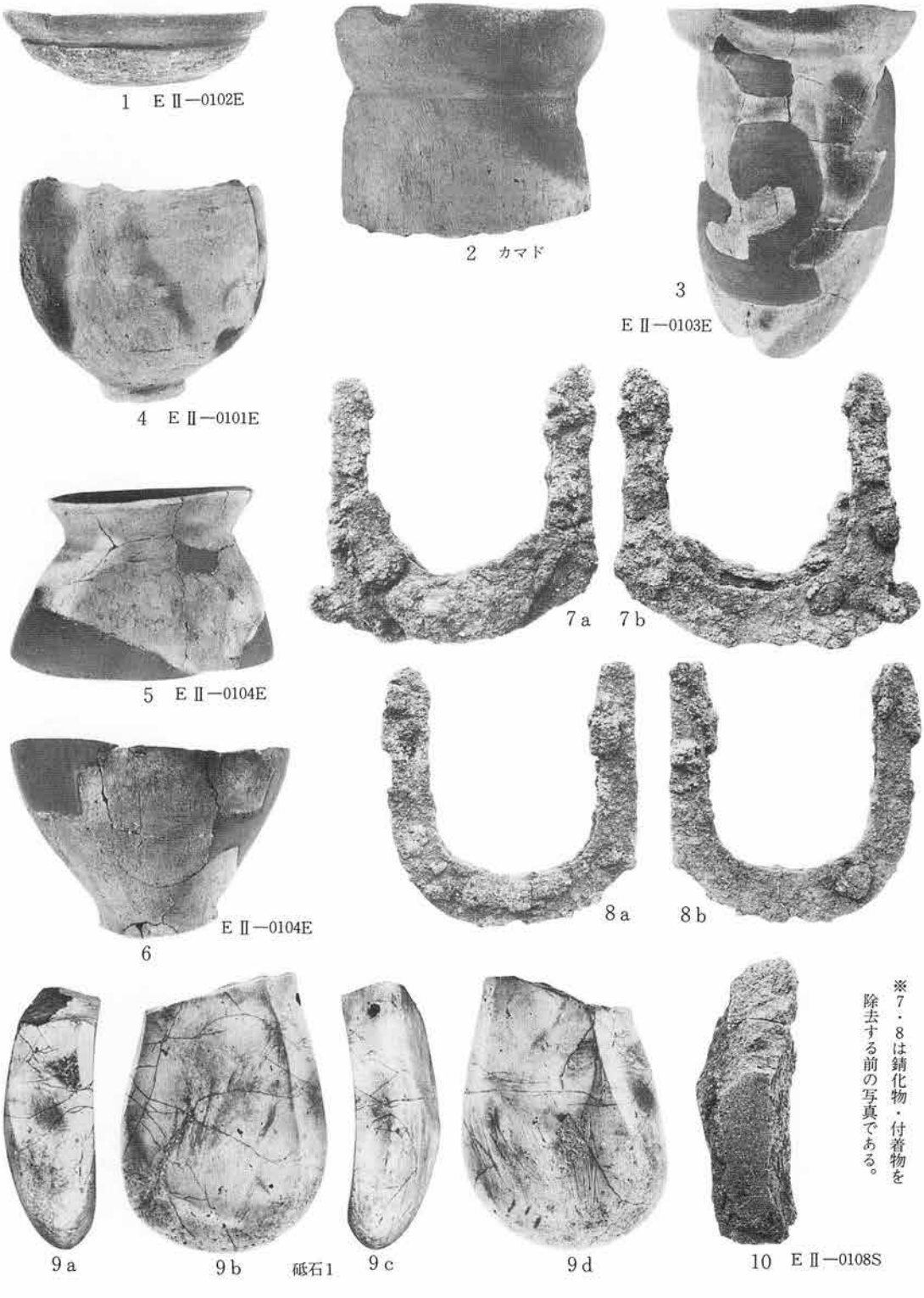
1．遺構検出状態（南西から撮影）
2．遺物出土状態（南東から撮影）
3．埋土堆積状態（直交軸方向を南東から撮影）
4．埋土堆積状態（主軸方向を南西から撮影）
5．カマド検出状態
6．カマド燃焼部精査状況

写真図版35：E Ⅱ—01住居址（1）



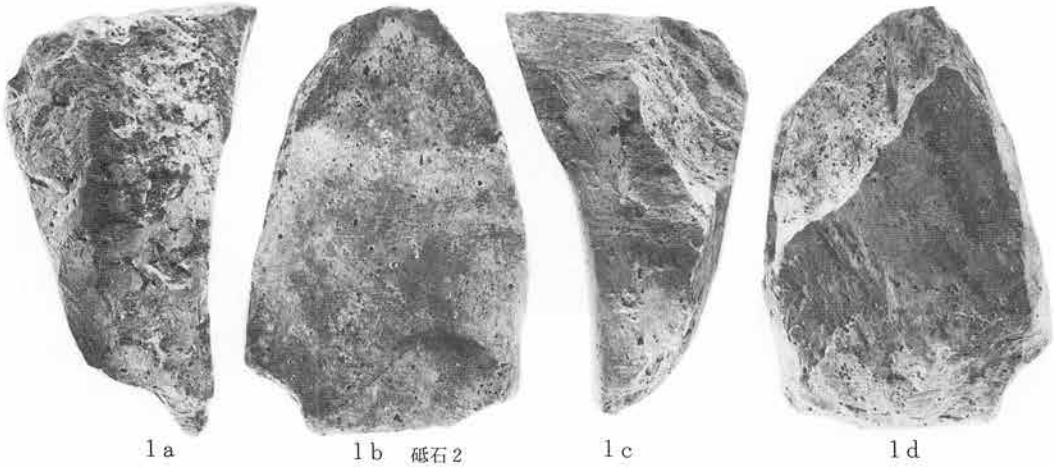
1・土器・鋤先出土状態
2・礫器・土器等出土状態

写真図版36：E Ⅱ—01住居址（2）遺物出土状態



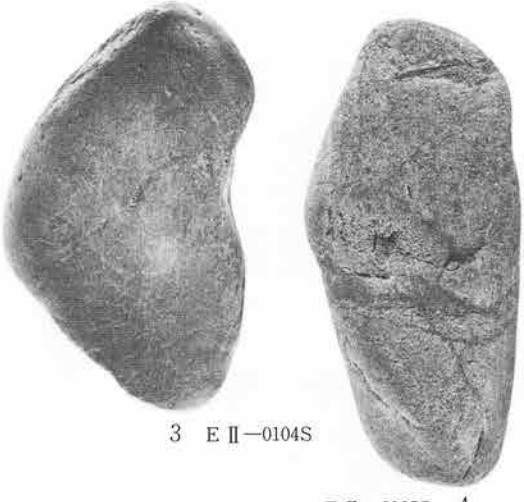
※7・8は錆化物・付着物を除去する前の写真である。

写真図版37：E Ⅱ—01住居址出土遺物（1）



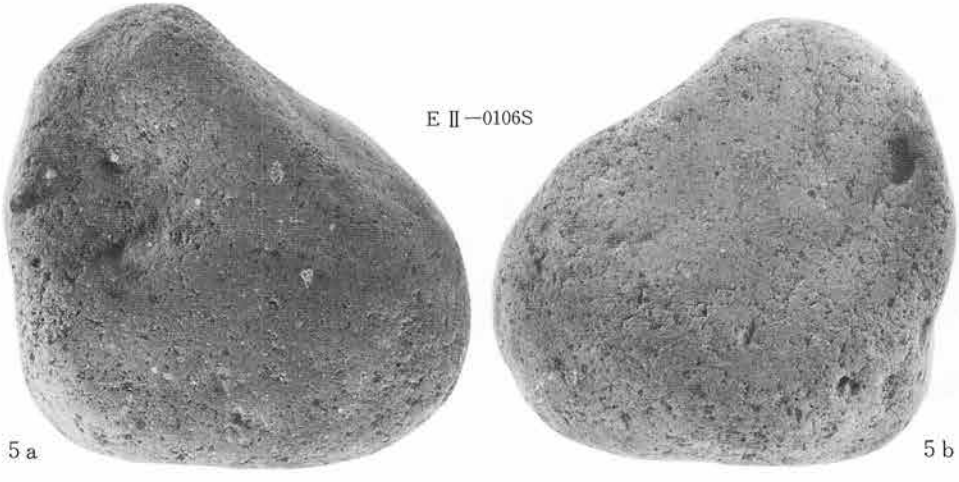
1a　1b　砥石2　1c　1d

2a　E Ⅱ—0107S　2b



3　E Ⅱ—0104S

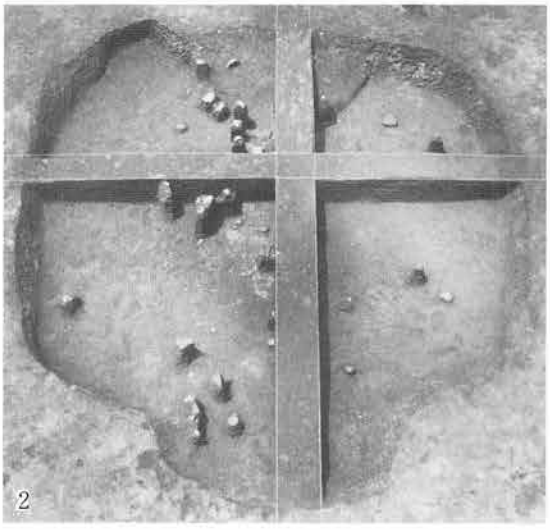
E Ⅱ—0105S　4

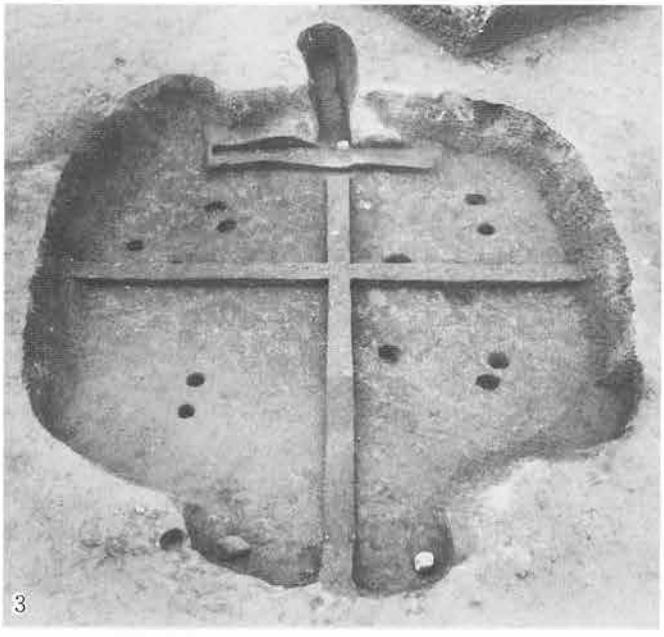


E Ⅱ—0106S

5a　5b

写真図版38：E Ⅱ—01住居址出土遺物（2）





1．遺構検出状態（南東から撮影）
2．遺物分布状態（　〃　　〃　）
3．完　掘　　（　〃　　〃　）
4．埋土堆積状態（直交軸を南東から撮影）
5・6．土器出土状態

写真図版39：E Ⅱ—02住居址

1　E Ⅱ－0253E

2　E Ⅱ－0201E

5　E Ⅱ－0212E

3　E Ⅱ－0223E

4　E Ⅱ－0256E

6 a

6 b　E Ⅱ－0251S

6 c

6 d

7 a

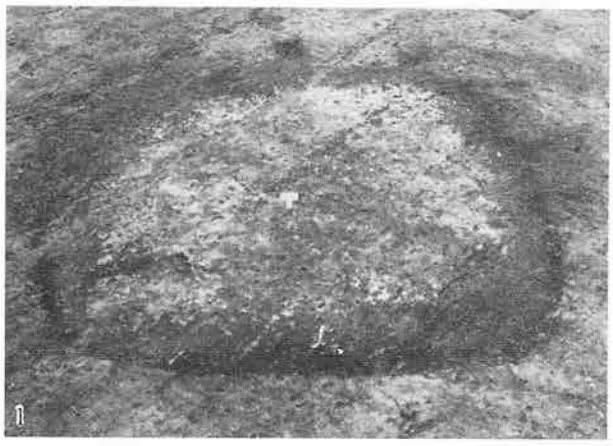
7 b

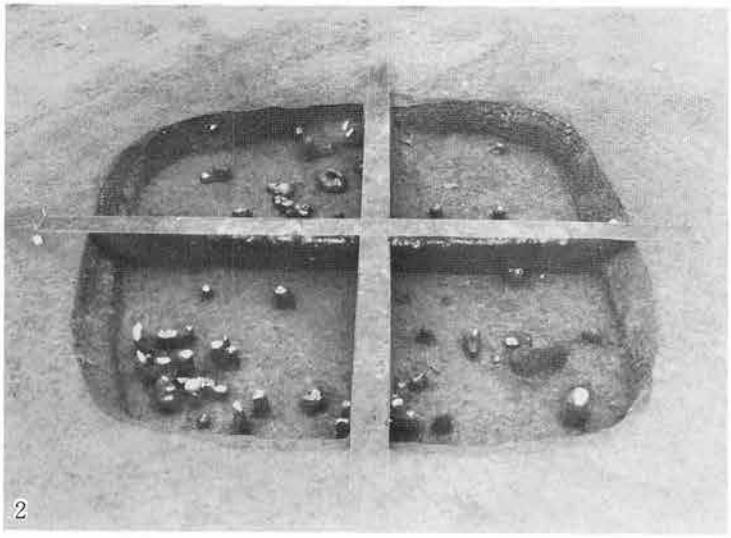
9 a

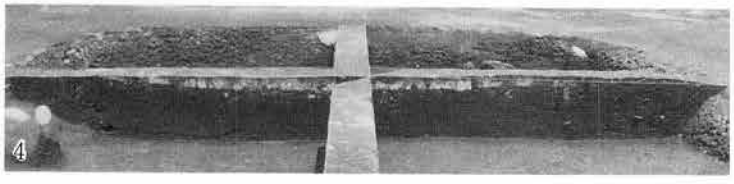
9 b

※ 9 は錆化物除去前の大刀子破片？

写真図版40：E Ⅱ－02住居址出土遺物

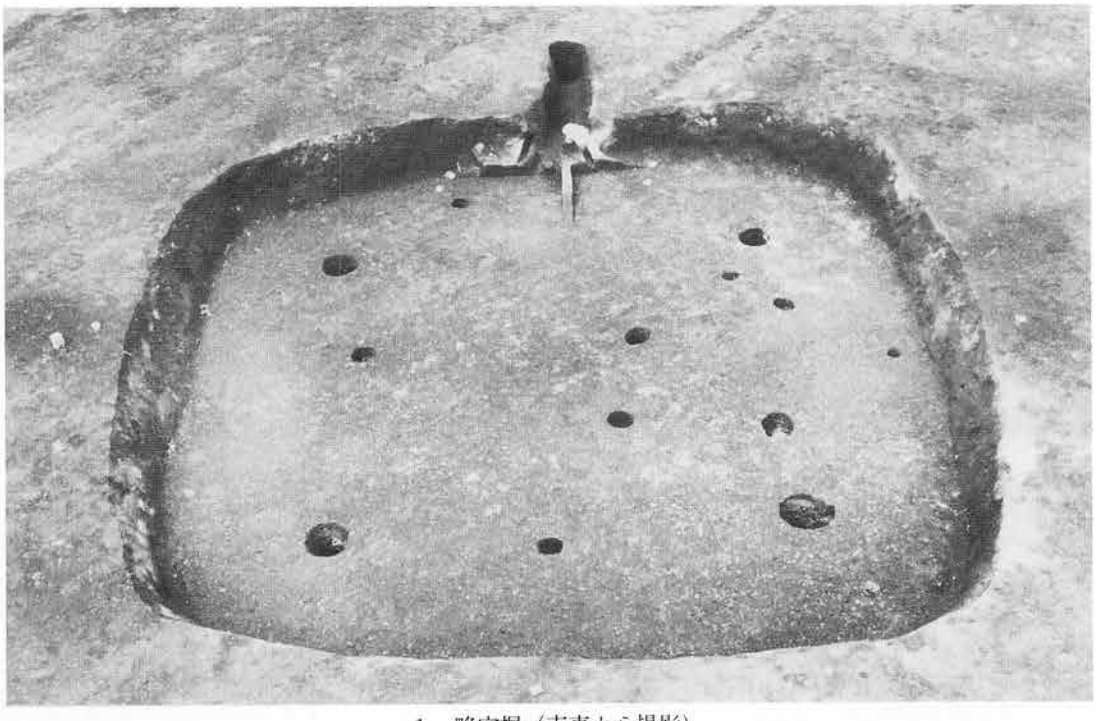




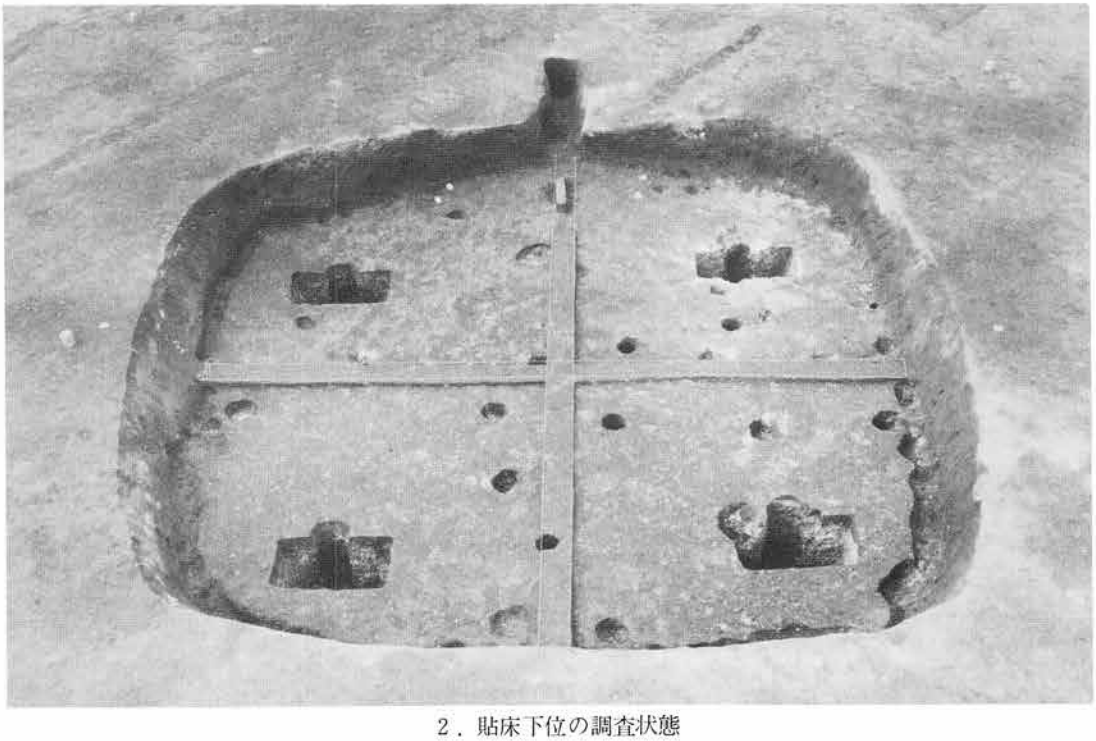


1．遺構検出状態（南東から撮影）
2．遺物分布状態（　〃　　〃　）
3．直交軸方向埋土堆積状態
（南東から撮影）
4．主軸方向埋土堆積状態
（南西から撮影）
5．カマドの精査状況
6．遺物出土状態
7．同　上

写真図版41：E Ⅱ—03住居址（1）

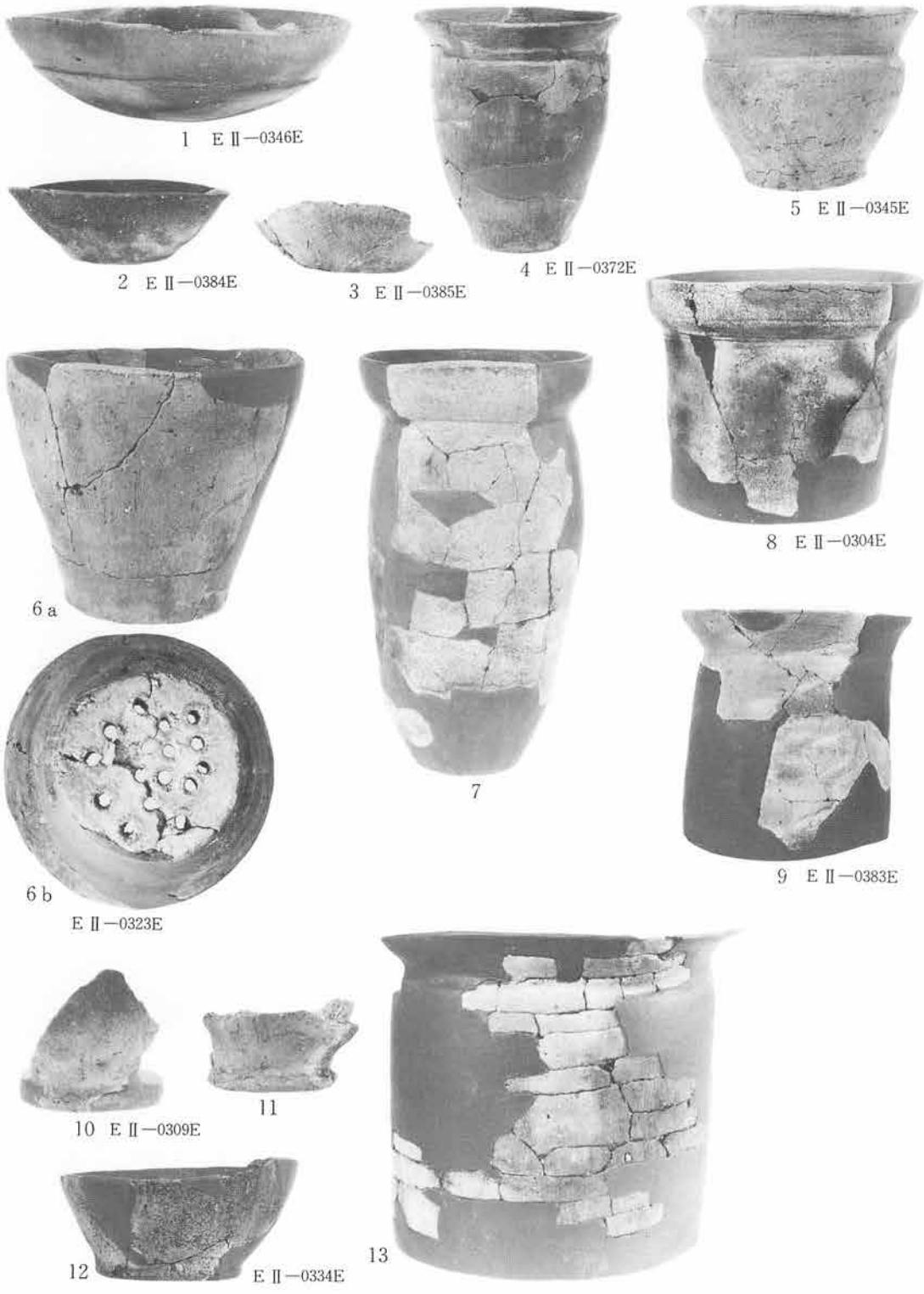


1．略完掘（南東から撮影）



2．貼床下位の調査状態

写真図版42：ＥⅡ—03住居址（2）



写真図版43：E Ⅱ—03住居址出土遺物（1）

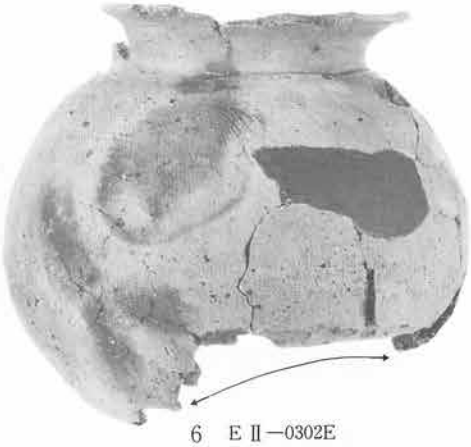
1　E Ⅱ－0301E

2　E Ⅱ－0349E

3　E Ⅱ－0347E

4　E Ⅱ－0370E

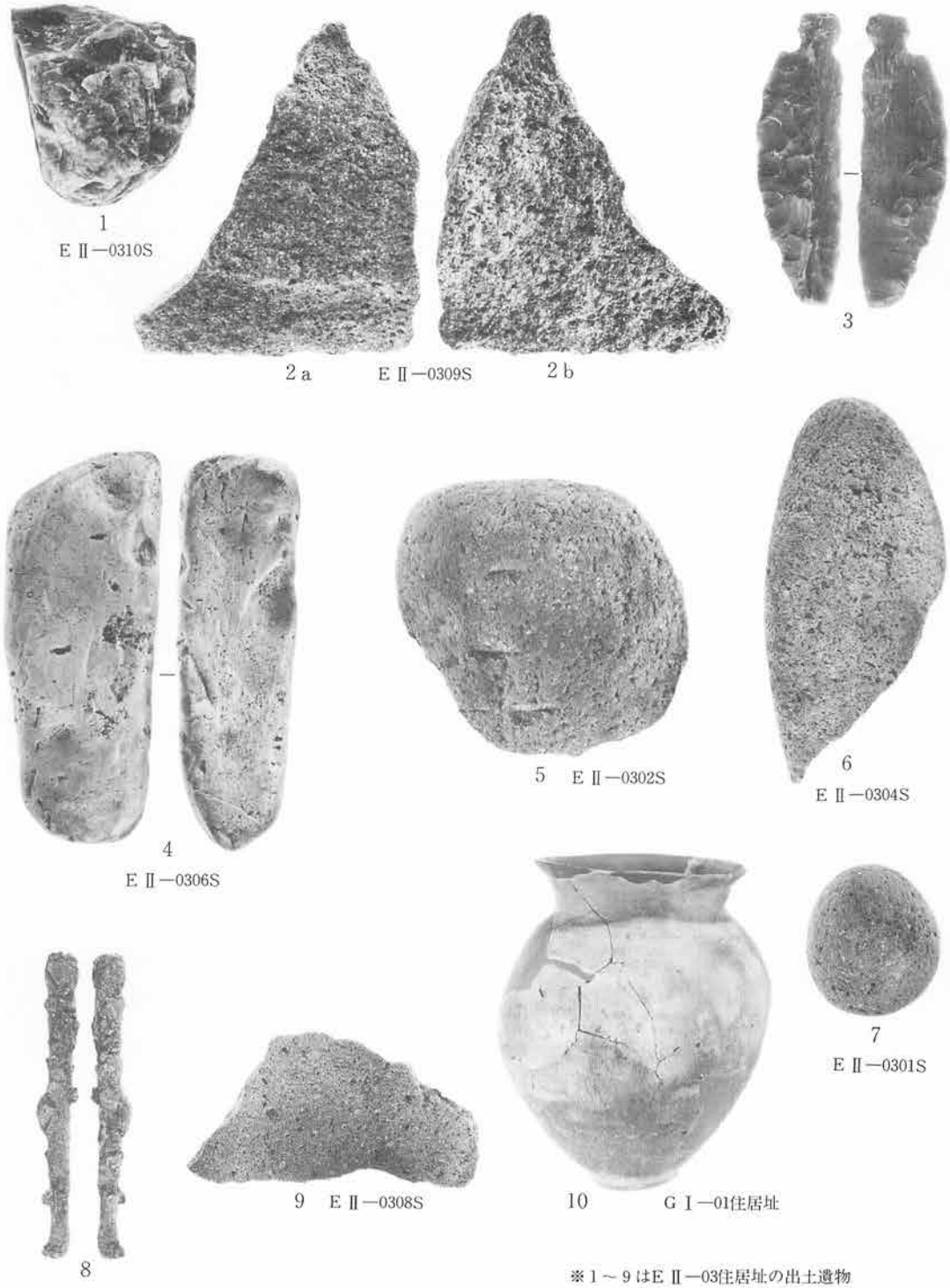
5



6　E Ⅱ－0302E

※5は6の矢印範囲を拡大

写真図版44：E Ⅱ－03住居址出土遺物（2）

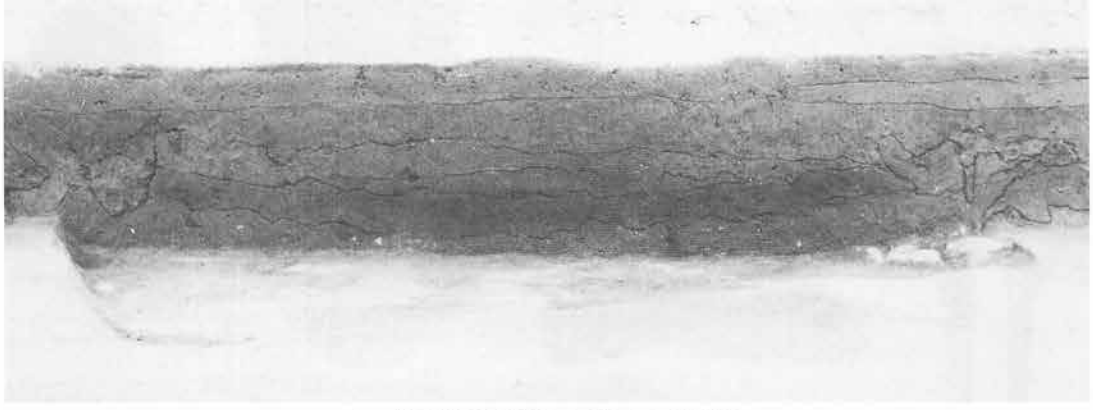


※8は錆化物除去前の鉄製品

※1～9はE Ⅱ—03住居址の出土遺物
※10はG Ⅰ—01住居址の出土遺物

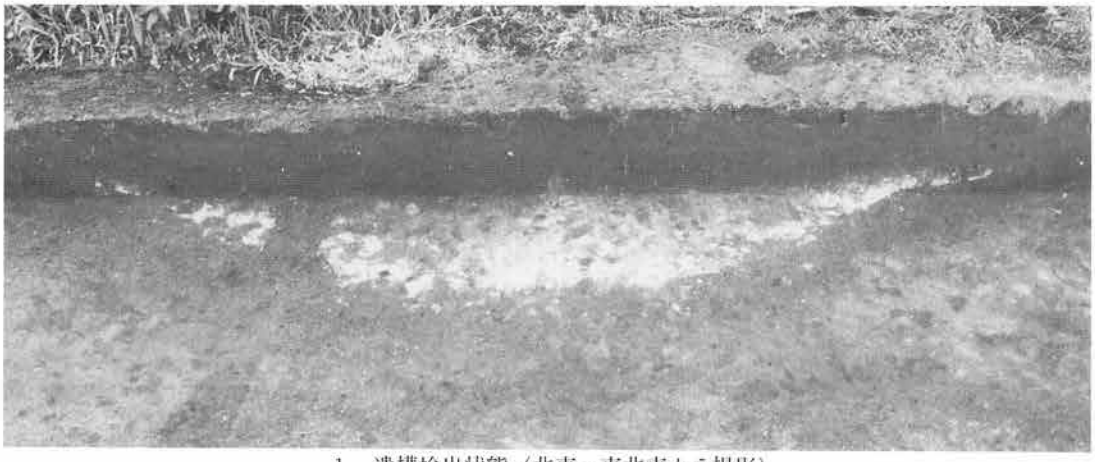
写真図版45：E Ⅱ—03(3)・G Ⅰ—01住居址出土遺物

1．略完掘状態（柱穴未検出、西南西から撮影）



2．埋土他堆積状態（西南西から撮影）

写真図版46：F Ⅱ—01住居址

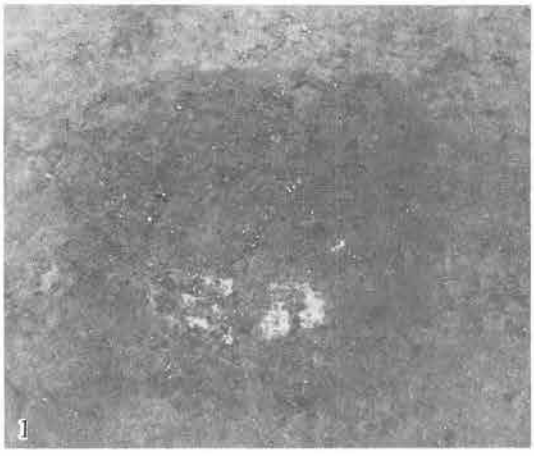


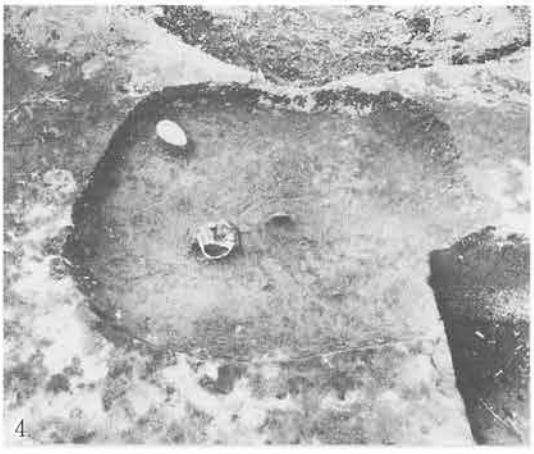
1．遺構検出状態（北東～東北東から撮影）

2．焼土・遺物等出土状態と埋土堆積状態

3．焼土除去後の炭化材・礫等検出状態

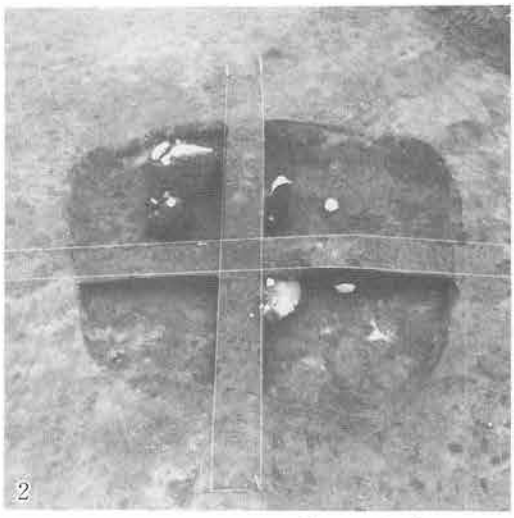
写真図版47：ＧⅠ－01住居址

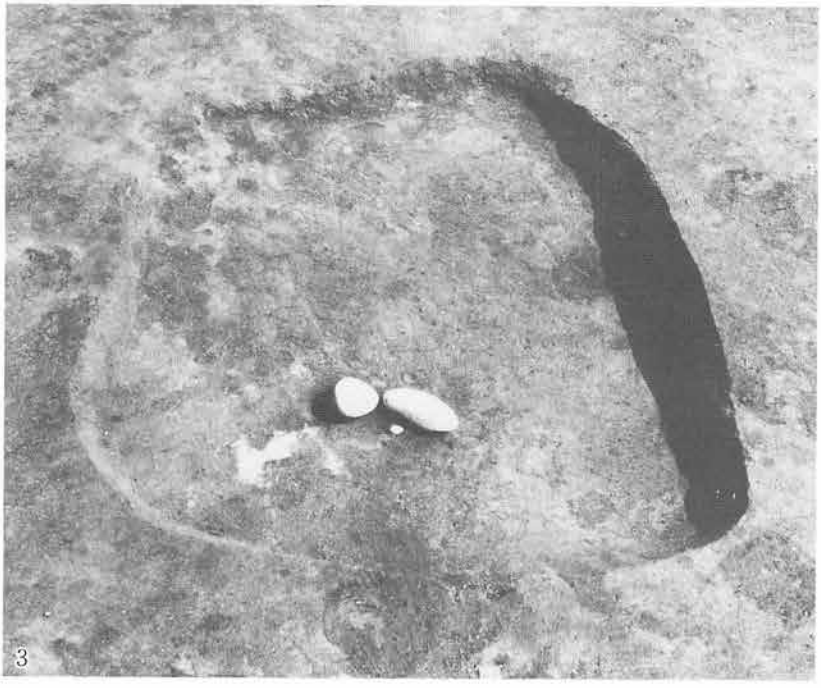




1．ＢⅠ—001土坑確認状態
2．ＢⅠ—001土坑埋土を構成する焼土の分布状態と出土遺物
3．ＢⅠ—001土坑埋土堆積状態
4．ＢⅡ—003土坑完掘全景(南々東から撮影)
5．ＢⅡ—003土坑埋土堆積状態、(南々東から撮影)
6．ＢⅡ—003土坑出土土器の状態

写真図版48：土坑写真（1）





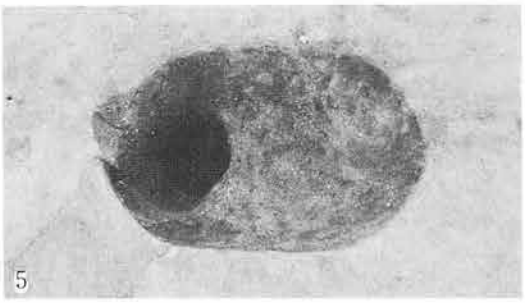
CⅡ－001土坑

1．遺構確認状態
2．遺物分布状態
3．完掘全景
4．埋土堆積状態

写真図版49：土坑写真（2）

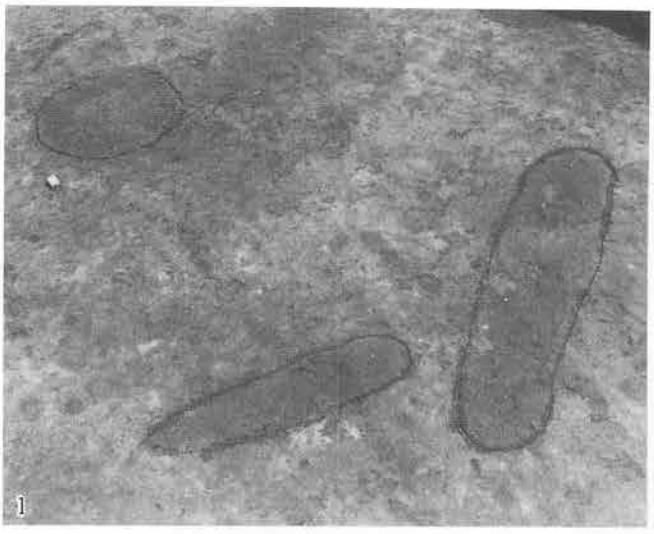
1．ＥＩ—001土坑
　　完掘全景
2．同土坑確認状態

写真図版50：土坑写真（3）

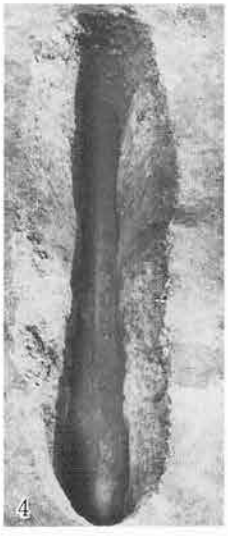


1・2．ＢⅡ—001土坑確認状態と礫配置状態
3．ＢⅡ—001土坑埋土堆積状態（北々西から撮影）
4．ＢⅠ—005土坑全景（北東から撮影）
5．ＮⅠ—001土坑全景（南から撮影）
6．ＮⅠ—001土坑埋土堆積状態
7．ＢⅠ—007土坑全景（北東から撮影）
8．ＢⅠ—006土坑全景（北東から撮影）
9．ＢⅠ—006土坑埋土堆積状態

写真図版51：土坑写真（4）

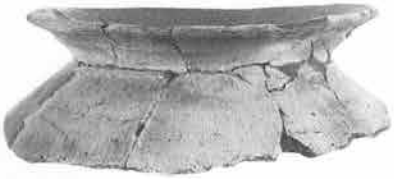


1．DⅡ—003．002．001の各遺構確認状態
2．DⅡ—003土坑と内部の土器出土状態（南から撮影）
3．DⅡ—003土坑埋土堆積状態（西から撮影）
4・5．DⅡ—001陥し穴状遺構全景と埋土堆積状態



6・7．DⅡ—004陥し穴状遺構全景と埋土堆積状態
8・9．PⅠ—001陥し穴状遺構全景と埋土堆積状態
10．CⅡ—002土坑全景
11．DⅡ—002土坑全景

写真図版52：土坑写真（5）



1　ＢⅠ—001土坑

2　ＢⅠ—002土坑

3　ＢⅠ—001土坑

4　ＢⅡ—003土坑

5　ＣⅡ—001土坑

6　ＣⅡ—001土坑

7　ＤⅡ—002土坑

8　ＣⅡ—001土坑

9　ＢⅡ—002土坑

10　ＢⅡ—001土坑

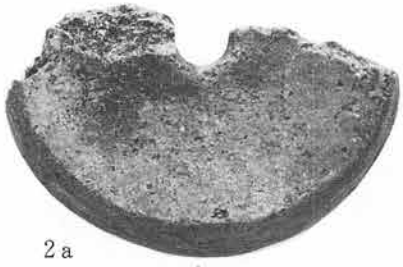
写真図版53：土坑出土遺物

1a

1b

1c

※1Cは約1.3倍となっているが、1a・1b，
2～6はほぼ実大である。



2a

2b

6a

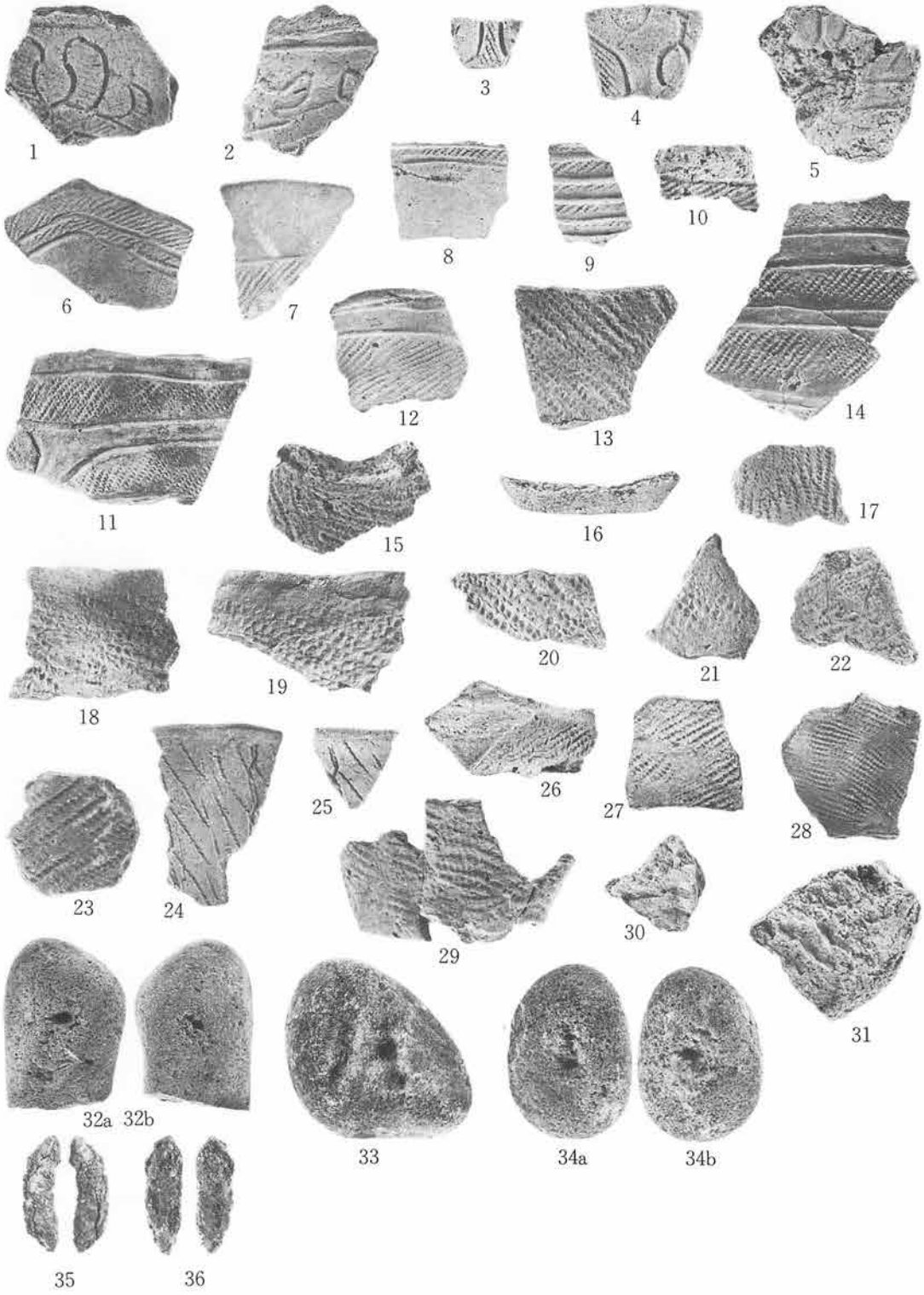
6b

3

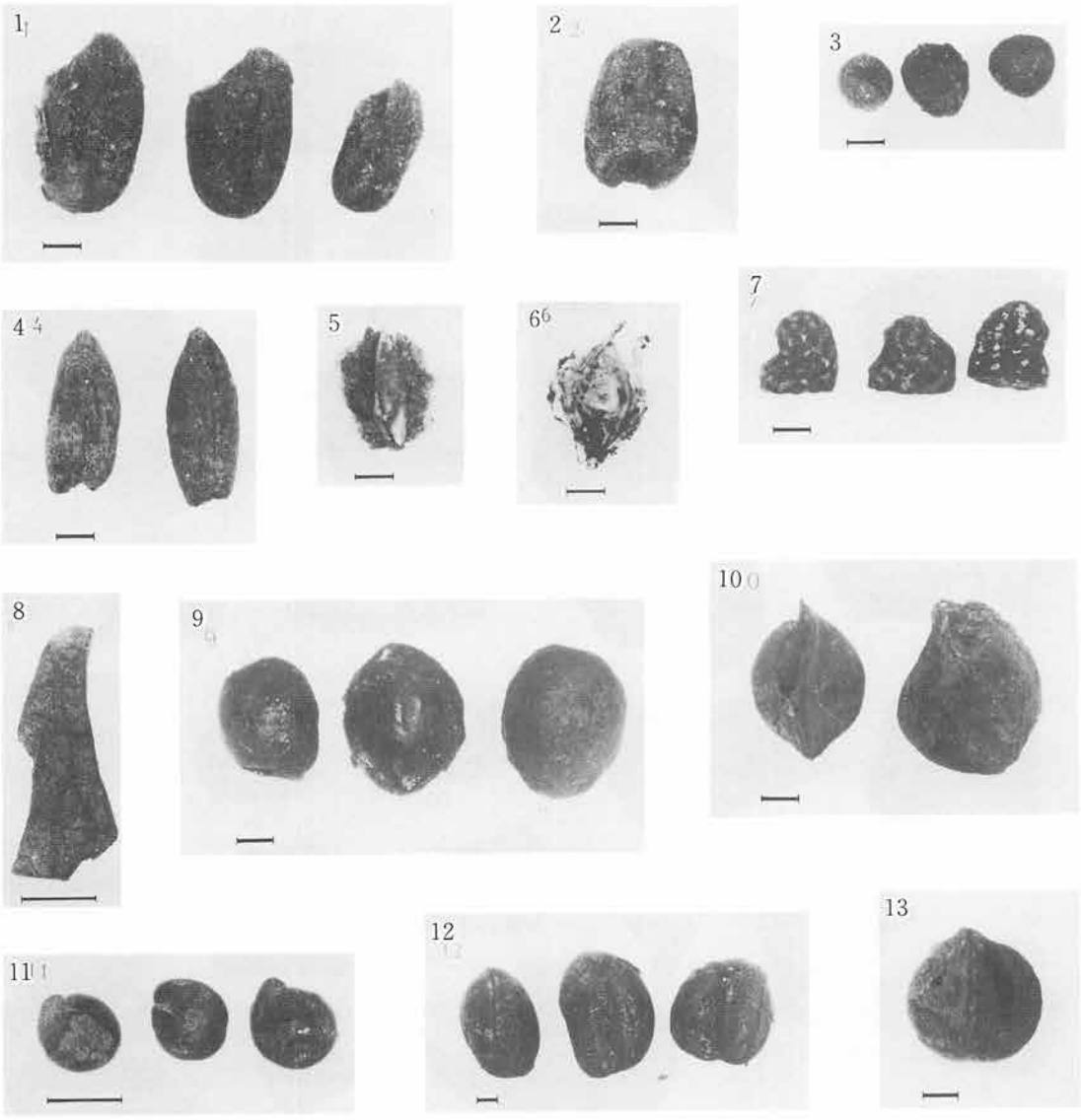
4

5

写真図版54：土製品・石製品



写真図版55：遺構外等の遺物



写真番号	1	*Oryza sativa*	(試料番号1)	写真番号	8	*Juglans ailanthifolia*	(試料番号7)
〃	2	cf. *Triticum* sp.	(試料番号3)	〃	9	*Cannabis sativa*	(試料番号14)
〃	3	Cramineae sp.A	(試料番号2)	〃	10	cf. *Fagopyrum esculentum*	(試料番号5)
〃	4	Gramineae sp B	(試料番号3)	〃	11	*Chenopodium album*	(試料番号4)
〃	5	Gramineae sp.C	(試料番号6)	〃	12	Leguminosae spp.	(試料番号14)
〃	6	Gramineae sp.D	(試料番号26)	〃	13	Vitidaceae sp.	(試料番号7)
〃	7	*Commelina communis*	(試料番号12)				

※スケール：No 8は5mm，その他は1mm。

写真図版56：種実拡大写真

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二		
副所長	鎌田良悦		
〔管理課〕			
管理課長(兼)	鎌田良悦	嘱託	吉田一男
課長補佐	伊藤吉郎	運転技士兼技能員	佐藤春男
主事	阿部隆広		
〔調査課〕			
調査課長	昆野靖		
課長補佐	佐々木嘉直		
主任文化財専門調査員	小田野哲憲	文化財専門調査員	遠藤修
〃	三浦謙一	〃	斎藤邦雄
〃	工藤利幸	〃	高橋義介
〃	高橋与右エ門	〃	佐々木信一
〃	平井進	〃	小原眞一
〃	中村良一	〃	村上修
〃	中川重紀	〃	酒井宗孝
文化財専門調査員	藤村敏男	期限付専門調査員	菊池達哉
〃	斎藤實	〃	相原伸裕
〃	光井文行	〃	及川靖世
〃	佐瀬隆	〃	女鹿文雄
〃	斎藤博司	〃	濱田宏
〃	東海林隆幹	〃	及川渉
〃	佐々木弘	〃	星雅之
〃	川村均	〃	森下宏
〃	鈴木貞行	〃	高橋堅
〔資料課〕			
資料課長	高橋薫		
主任文化財専門調査員	田鎖寿夫		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第137集

馬場遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡調査

印刷　平成2年2月28日
発行　平成2年2月28日
発　行　財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡
第11地割字高屋敷185
電　話 (0196) 88—9001・9002
印　刷　株式会社　熊　谷　印　刷
盛岡市上田一丁目6番49号

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990